

IBM Unica Marketing Platform
バージョン 8 リリース 5

管理者ガイド

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、503 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Unica Marketing Platform (製品番号 5725-D22) のバージョン 8 リリース 5 モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典: IBM Unica Marketing Platform
Version 8 Release 5
Administrator's Guide

発行: 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当: トランスレーション・サービス・センター

第 1 刷 2011.9

© Copyright IBM Corporation 1999, 2011.

目次

第 1 章 IBM Unica テクニカルサポートへ のお問い合わせ 1

第 2 章 IBM Unica Marketing Platform の概要 3

IBM Unica Marketing のセキュリティ機能について	3
構成管理について	4
IBM Unica Marketing のローカライズ	5
共通ユーザインターフェース	5
IBM Unica Marketing にログインするには	6

第 3 章 内部ユーザアカウントの管理 . . . 7

ユーザアカウントのタイプ: 内部および外部	7
内部ユーザアカウントのプロパティについて	8
新規ユーザアカウントを追加するには	9
ユーザアカウントを削除するには	9
内部ユーザのパスワード有効期限を変更するには	9
内部ユーザパスワードをリセットするには	10
内部ユーザアカウントのプロパティを変更するには	10
内部ユーザのシステムステータスを変更するには	11
内部ユーザデータソースを追加するには	11
内部ユーザデータソースのパスワードまたはログイン名を変更するには	12
内部ユーザのデータソースを削除するには	12
「ユーザ」ウィンドウのリファレンス	13
ユーザごとのロケール設定の指定	15
ユーザのロケール設定を設定するには	15
外部ユーザの同期化の強制	16
外部ユーザの強制同期化	16

第 4 章 IBM Unica Marketing でのセキ ュリティの管理 17

IBM Unica Marketing でのセキュリティ管理に関する情報の入手先	17
Marketing Platform でのセキュリティ管理について	18
Marketing Platform および Campaign での役割と権限について	19
Marketing Platform でのセキュリティ管理プロセス	19
グループのタイプ: 内部および外部	20
パーティションおよびセキュリティの管理について	20
事前構成されたユーザおよび役割	21
platform_admin アカウントの保持	23
内部グループの管理	23
新規内部グループを追加するには	23
新規サブグループを追加するには	24
グループまたはサブグループを削除するには	24
グループまたはサブグループの説明を変更するには	25
パーティションにグループを割り当てるには	25

グループまたはサブグループにユーザを追加するには	26
グループまたはサブグループからユーザを除去するには	26
「ユーザグループ」ウィンドウのリファレンス	27
ユーザの役割と権限の管理	28
役割を作成するには	28
役割の権限を変更するには	29
役割を除去するには	29
グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去を行うには	30
ユーザへの役割の割り当てまたはユーザからの役割の除去を行うには	30
リファレンス: 権限の状態の定義	31
リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限	31
リファレンス: Marketing Platform の権限	32

第 5 章 IBM Unica Campaign でのセキ ュリティの管理 35

セキュリティポリシーについて	35
グローバルセキュリティポリシー	35
Campaign での権限の評価方法	36
所有者役割およびフォルダ所有者役割の使用	37
セキュリティポリシーの設計に関するガイドライン	37
セキュリティのシナリオ	38
シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社	38
シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社	39
シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス	41
セキュリティポリシーの実装	42
セキュリティポリシーの作成	42
セキュリティポリシーの削除	43
フォルダまたはオブジェクトへのセキュリティポリシーの割り当て	43
Campaign での管理権限について	44
レポートフォルダ権限の構成	44
リファレンス: Campaign での管理権限	45
Windows の偽装の管理	49
Windows の偽装とは何か	49
Windows の偽装を使用する理由	49
Campaign ユーザと Windows ユーザの関係はどのようなものか	49
Windows の偽装グループ	50
Windows の偽装と、IBM Unica Marketing へのログイン	50
Windows の偽装の処理	50
プロキシサーバ認証サポートについて	51
proxy 名を持つ仮想データソース用の認証資格情報を設定するには	52

第 6 章 構成の管理	53
プロパティカテゴリについて	53
カテゴリタイプを識別する	53
テンプレートを 사용하여 カテゴリを複製する	54
カテゴリの削除	55
プロパティの説明について	55
画面の最新表示について	55
デフォルトのユーザロケール設定について	55
プロパティ値の編集	56
カテゴリに移動する	56
プロパティ値を編集する	56
カテゴリの複製と削除	56
テンプレートから新規カテゴリを作成する	56
カテゴリを削除する	57
第 7 章 レポートの構成	59
IBM Unica Marketing スイートのレポートについて	59
レポートおよびセキュリティについて	60
レポートスキーマについて	63
Framework Manager データモデルについて	66
Report Studio レポートについて	67
レポートスキーマのカスタマイズ	69
使用するレポートスキーマ	69
コンタクトメトリックまたはレスポンスメトリックの追加	69
カスタム属性の追加	70
レスポンスタイプの追加	71
コンタクトステータスコードの追加	71
パフォーマンスレポートのカレンダーの時間枠の指定	72
パフォーマンスレポートおよびレスポンス履歴のオーディエンスレベルの構成	72
追加のオーディエンスレベルまたはパーティションのレポートスキーマの作成	72
新規キャンペーンオファターのレスポンスの内訳スキーマの作成	73
新規キャンペーンオファターのコンタクトステータスの内訳スキーマの作成	74
新規オファター実績スキーマの作成	75
新規キャンペーン実績スキーマの作成	76
新規キャンペーンカスタム属性スキーマの作成	76
対話実績スキーマの作成	77
更新されたビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成	78
ビューまたはレポートテーブルの更新の前に	78
レポートビューまたはテーブルの更新済み SQL スクリプトの生成	78
ビューまたはレポートテーブルの更新	79
データソース別の SQL スクリプト	80
「レポート SQL ジェネレータ」ページのリファレンス	80
IBM Cognos モデルのカスタマイズ	82
例: データモデルにある既存のビューまたはテーブルへの属性の追加	82
例: IBM Cognos 8 データモデルへの新規ビューの追加	83

IBM Unica アプリケーションの Cognos レポートのカスタマイズまたは作成について	84
新しい Campaign レポートの作成に関するガイドライン	85
対話点パフォーマンスダッシュボードの構成	85
新規ダッシュボードレポートの作成に関するガイドライン	86

第 8 章 ダッシュボードの作成と管理 87

IBM Unica 事前定義ポートレットについて	87
ダッシュボードの計画	87
グローバルダッシュボードについて	88
IBM Unica 事前定義ポートレットの使用可能性	88
IBM Cognos レポートのパフォーマンスに関する考慮事項	88
ダッシュボードレポートをスケジュールに入れるには	89
事前定義ポートレットの説明	90
Marketing Operations IBM Cognos レポートポートレット	90
Marketing Operations リストポートレット	91
Campaign IBM Cognos レポートポートレット	91
Campaign リストポートレット	92
Interact IBM Cognos レポートポートレット	92
Distributed Marketing リストポートレット	93
Optimize リストポートレット	93
ダッシュボードのセットアップ	93
platform_admin ユーザは汎用ダッシュボードの管理者です	93
IBM Unica のサンプルダッシュボード	93
ダッシュボード作成プロセスの概要	97
事前定義ポートレットを有効または無効にするには	97
新規ダッシュボードを作成するには	97
ダッシュボードレイアウトを選択または変更するには	98
事前定義ポートレットをダッシュボードに追加するには	98
ポートレットをダッシュボードから削除するには	98
ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更を行うには	99
ダッシュボードユーザリストを最新表示するには	99
ポートレットの名前を変更するには	99
ダッシュボードの名前を変更するには	99
ダッシュボードを削除するには	100
ポートレットの作成と使用	100
ユーザ作成ポートレットのタイプおよび使用可能性	100
ユーザ作成のポートレットの認証に関する考慮事項	100
ポートレット作成プロセスの概要	101
オンプレミス NetInsight レポートから URL を作成するには	101
IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成するには	102

イントラネットまたはインターネットのページから URL を作成するには	103
ユーザ作成ポートレットをダッシュボードに追加するには	103
IFrame 構成ウィンドウのリファレンス	104
ダッシュボードのメンバーシップの管理	104
ダッシュボード管理タスクについて	104
ダッシュボードの表示に必要なユーザ権限	104
ダッシュボードユーザリストについて	105
ダッシュボードメンバーシップを認可または削除するには	105

第 9 章 IBM Unica Scheduler での実行のスケジューリング 107

Campaign Schedule プロセスと IBM Unica Scheduler の相違点	107
スケジューラトリガについて	108
スケジューラの制限について	109
スケジューラの繰り返しパターンについて	110
Scheduler の制限	110
フローチャートのスケジューリングに必要な権限	111
スケジューラ実行パラメータについて	111
Campaign フローチャート実行用のデフォルトパラメータのオーバーライド	111
スケジュールの作成	112
デフォルトパラメータを使用してフローチャートスケジュールを作成するには	112
デフォルトパラメータをオーバーライドしてフローチャートスケジュールを作成するには	112
制限をセットアップするには	113
「スケジュールの作成」ウィンドウまたは「スケジュールの編集」ウィンドウのリファレンス	113
「フローチャートパラメータの上書き」ウィンドウのリファレンス	115
スケジュールの管理	116
スケジューラ管理ウィンドウのリファレンス	116
Marketing Platform から別個に JMS をインストールするには	118

第 10 章 Windows Active Directory との統合 119

Active Directory 統合機能	119
Active Directory 統合の前提条件	120
IBM Unica Marketing と Windows Active Directory の統合方法	121
構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の統合)	121
必要な情報の入手	122
グループメンバーシップおよびマッピングの計画	123
Marketing Platform へのディレクトリサーバ資格情報の格納	123
IBM Unica Marketing での統合の構成	124
同期化のテスト	126
PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザのセットアップ	127

Windows 統合ログインへのセキュリティモードの設定	127
マップされたグループへの役割の割り当て	128
Web アプリケーションサーバの再起動	128
ブラウザの構成	128
Active Directory ユーザとしてのログインのテスト	128

第 11 章 LDAP サーバとの統合 129

LDAP 統合機能	129
LDAP 統合の前提条件	130
IBM Unica Marketing と LDAP サーバの統合方法	131
構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)	131
必要な情報の入手	131
グループメンバーシップおよびマッピングの計画	133
Marketing Platform へのディレクトリサーバ資格情報の格納	133
IBM Unica Marketing での統合の構成	134
同期化のテスト	136
LDAP へのセキュリティモードの設定	137
マップされたグループへの役割の割り当て	137
Web アプリケーションサーバの再起動	137
LDAP ユーザとしてのログインのテスト	137

第 12 章 Web アクセス制御プラットフォームとの統合 139

SiteMinder との統合の前提条件	141
Tivoli Access Manager との統合の前提条件	142
Web アクセス制御プラットフォームとの統合方法	143
構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御統合)	143
LDAP 統合の実行	143
IBM Unica Marketing での Web アクセス制御統合の構成	143
Web アプリケーションサーバの再起動	144
Web アクセス制御の同期化と IBM Unica Marketing ログインのテスト	144

第 13 章 IBM Unica Marketing への SSL の実装 147

SSL 証明書について	147
IBM Unica Marketing でのクライアントおよびサーバの役割	148
IBM Unica Marketing の SSL について	150
IBM Unica Marketing への SSL の実装	151
構成プロセスのチェックリスト (SSL)	151
証明書の取得または作成	151
SSL 用の Web アプリケーションサーバの構成	154
SSL 用の IBM Unica Marketing の構成	154
SSL 構成の検証	161
SSL に関する有用なリンク	161

第 14 章 データフィルタのセットアップ 163

データフィルタのセットアップについて	163
------------------------------	-----

ユーザアクセスを制限するデータフィルタの関連付け	163
データフィルタの概念	163
データフィルタの 2 つの作成方法: 自動生成と手動指定	164
手動指定によるデータフィルタのセットアップ方法	165
構成プロセスのチェックリスト (データフィルタの手動指定)	165
Marketing Platform のインストール	165
データフィルタ基準の計画 (手動生成)	165
必要な情報の入手 (手動指定)	166
データフィルタを指定する XML の作成 (手動指定)	166
データフィルタシステムテーブルへのデータの追加	166
データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て	167
データフィルタ XML のリファレンス (手動指定)	167
例: データフィルタの手動指定	171
自動生成によるデータフィルタのセットアップ方法	175
プロセスチェックリストの構成	175
Marketing Platform のインストール	175
データフィルタ基準の計画 (自動生成)	176
ご使用のデータベース用の JDBC ドライバの取得	176
必要な情報の入手 (自動生成)	177
データフィルタを指定する XML の作成 (自動生成)	177
データフィルタシステムテーブルへのデータの追加	177
データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て	178
データフィルタ XML のリファレンス (自動生成)	178
例: データフィルタのセットの自動生成	183
初期セット作成後のデータフィルタの追加方法	188

第 15 章 データフィルタの管理 189

ユーザおよびグループ割り当てによってデータアクセスを制限する	189
拡張検索について	189
データフィルタ割り当ての管理	190
割り当て済みデータフィルタを表示するには	190
データフィルタにユーザおよびグループを割り当てるには	191
データフィルタ割り当てを削除するには	191

第 16 章 IBM Unica Marketing Platform のログ 193

システムログについて	193
システムログの構成	193

第 17 章 プロセスチェックリストの構成 197

構成プロセスのチェックリスト (データフィルタの手動指定)	197
構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の統合)	198
構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)	199
構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御統合)	200
構成プロセスのチェックリスト (SSL)	200

第 18 章 IBM Unica Marketing Platform のユーティリティおよび SQL スクリプト 201

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティの実行	203
追加マシンに Marketing Platform ユーティリティをセットアップするには	203
リファレンス: Marketing Platform ユーティリティ	203
configTool ユーティリティ	204
datafilteringScriptTool ユーティリティ	207
encryptPasswords ユーティリティ	209
partitionTool ユーティリティ	210
populateDb ユーティリティ	213
restoreAccess ユーティリティ	213
Marketing Platform SQL スクリプトについて	215
リファレンス: Marketing Platform SQL スクリプト	216
全データの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql)	216
データフィルタのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)	216
システムテーブルの削除 (ManagerSchema_DropAll.sql)	217
システムテーブルの作成	217

付録 A. 「構成」 ページでのプロパティの構成 219

Marketing Platform 構成プロパティ	219
全般 ナビゲーション	219
全般 データフィルタリング	220
全般 パスワード設定	220
全般 その他	223
プラットフォーム	223
プラットフォーム スケジューラ	226
プラットフォーム スケジューラ 繰り返し定義	227
プラットフォーム スケジューラ スケジュール登録 キャンペーン [オブジェクトタイプ]	228
プラットフォーム スケジューラ スケジュール登録 キャンペーン [オブジェクトタイプ] [制限グループ]	228
プラットフォーム セキュリティ	229
プラットフォーム セキュリティ ログイン方法の詳細 Windows 統合ログイン	229
プラットフォーム セキュリティ ログイン方法の詳細 LDAP	232
プラットフォーム セキュリティ ログイン方法の詳細 Web アクセス制御	235

プラットフォーム セキュリティ ログイン方法の詳細 LDAP 同期	236	Marketing Operations umoConfiguration campaignIntegration	282
プラットフォーム セキュリティ ログイン方法の詳細 LDAP 同期 Unica ユーザ作成のための LDAP 参照 (LDAP references for Unica user creation).	245	Marketing Operations umoConfiguration reports	283
プラットフォーム セキュリティ ログイン方法の詳細 LDAP 同期 Unica グループマップの LDAP 参照	245	Marketing Operations umoConfiguration invoiceRollup	283
レポート構成プロパティ	246	Marketing Operations umoConfiguration database	284
レポート 統合 Cognos 8	246	Marketing Operations umoConfiguration listingPages	287
レポート スキーマ [製品] [スキーマ名] SQL 構成	250	Marketing Operations umoConfiguration objectCodeLocking	288
レポート スキーマ キャンペーン	251	Marketing Operations umoConfiguration thumbnailGeneration	290
レポート スキーマ キャンペーン オファー実績	251	Marketing Operations umoConfiguration notifications	291
レポート スキーマ キャンペーン [スキーマ名] カラム [コンタクトメトリック]	252	Marketing Operations umoConfiguration notifications email	292
レポート スキーマ キャンペーン [スキーマ名] カラム [レスポンスメトリック]	253	Marketing Operations umoConfiguration notifications project	294
レポート スキーマ キャンペーン パフォーマンス	255	Marketing Operations umoConfiguration notifications projectRequest	297
レポート スキーマ キャンペーン オファーレスポンス内訳	256	Marketing Operations umoConfiguration notifications program	297
レポート スキーマ キャンペーン オファーレスポンス内訳 [レスポンスタイプ]	256	Marketing Operations umoConfiguration notifications marketingObject	298
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーンオファーのコンタクトステータスの内訳	257	Marketing Operations umoConfiguration notifications approval	298
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーンオファーのコンタクトステータスの内訳 [コンタクトステータスコード]	258	Marketing Operations umoConfiguration notifications asset	299
レポート スキーマ キャンペーン カスタム属性 カラム [キャンペーンカスタムカラム]	259	Marketing Operations umoConfiguration notifications invoice	300
レポート スキーマ キャンペーン カスタム属性 カラム [オファークスタムカラム]	260	Campaign 構成プロパティ	301
レポート スキーマ キャンペーン カスタム属性 カラム [セルカスタムカラム]	260	Campaign	301
レポート スキーマ Interact	261	Campaign Collaborate	302
レポート スキーマ Interact 対話実績	262	Campaign navigation	302
レポート スキーマ eMessage	263	Campaign caching	305
Marketing Operations 構成プロパティ	263	Campaign partitions	307
Marketing Operations	264	Campaign partitions partition[n] eMessage	307
Marketing Operations Navigation	264	Campaign partitions partition[n] reports	309
Marketing Operations About	266	Campaign partition[n] validation	311
Marketing Operations umoConfiguration	267	Campaign partitions partition[n] audienceLevels audienceLevel	312
Marketing Operations umoConfiguration templates	272	Campaign partitions partition[n] audienceLevels audienceLevel field[n]	313
Marketing Operations umoConfiguration attachmentFolders	274	Campaign Partitions partition[n] dataSources	314
Marketing Operations umoConfiguration email	276	Campaign partitions partition[n] systemTableMapping	371
Marketing Operations umoConfiguration markup	277	Campaign partitions partition[n] server systemCodes	371
Marketing Operations umoConfigurations grid	279	Campaign partitions partition[n] server encoding	374
Marketing Operations umoConfiguration workflow	280	Campaign partitions partition[n] server timeout	375
Marketing Operations umoConfiguration integrationServices	282	Campaign partitions partition[n] server collaborate	376

Campaign partitions partition[n] server permissions	377
Campaign partitions partition[n] server flowchartConfig	378
Campaign partitions partition[n] server flowchartSave	380
Campaign partitions partition[n] server dataProcessing	381
Campaign partitions partition[n] server optimization	386
Campaign partitions partition[n] server logging.	388
Campaign partitions partition[n] server flowchartRun	393
Campaign partitions partition[n] server profile	394
Campaign partitions partition[n] server internal.	394
Campaign partitions partition[n] server fileDialog	396
Campaign partitions partition[n] server offerCodeGenerator	396
Campaign monitoring	398
Campaign ProductReindex	400
Campaign unicaACListener	401
Campaign server	405
Campaign logging.	405
eMessage 構成プロパティ	405
eMessage serverComponentsAndLocations hostedServices	405
eMessage partitions partition[n] hostedAccountInfo	406
eMessage partitions partition[n] dataSources systemTables	407
eMessage partitions partition[n] recipientListUploader	410
eMessage partitions partition[n] responseContactTracker.	411
Interact 構成プロパティ	412
Interact ランタイム環境構成プロパティ.	412

Interact 設計環境構成プロパティ	452
Optimize 構成プロパティ	471
Campaign unicaACListener	471
Campaign partitions partition[n] Optimize sessionRunMonitor	474
Campaign partitions partition[n] Optimize MemoryTuning	474
Campaign partitions partition[n] Optimize userTemplateTables	475
Campaign partitions partition[n] Optimize AlgorithmTuning.	475
Campaign partitions partition[n] Optimize Debug	479
Campaign partitions partition[n] Optimize logging.	479
Campaign unicaACOOptAdmin	482

付録 B. Cognos 8 BI レポートのスタイルガイド. **485**

グローバルレポートのスタイル	485
レポートのページスタイル	489
リストレポートスタイル.	489
クロス集計レポートのスタイル	491
チャートのスタイル	492
ダッシュボードレポートのスタイル.	493

付録 C. レポートおよびレポートスキーマ **495**

eMessageレポートおよびレポートスキーマ.	497
Interact レポートおよびレポートスキーマ	498

付録 D. IBM Unica フレームセットの再ブランド設定. **501**

企業テーマを準備するには.	502
企業テーマを適用するには.	502

特記事項. **503**

商標	505
--------------	-----

第 1 章 IBM Unica テクニカルサポートへのお問い合わせ

文書を参照しても問題を解決できない場合には、IBM Unica テクニカルサポートにお問い合わせください。御社指定のサポート担当者は通話を記録できます。問題を効率的に問題なく解決するために、本セクションの情報をお使いください。

御社の指定サポート担当者ではない場合は、最寄りの IBM Unica 管理者に連絡し情報を入手してください。

必要な情報

IBM Unica テクニカルサポートに連絡する前に、以下の情報をご用意ください。

- 問題の性質についての簡単な説明
- 問題の発生時に表示されるエラーメッセージの詳細
- 問題を再現するための詳細な手順
- 関連するログファイル、セッションファイル、設定ファイル、およびデータファイル
- 下記「システム情報」に記載されている、お客様の製品およびシステム環境に関する情報

システム情報

IBM Unica テクニカルサポートへお問い合わせいただく際に、お客様の環境に関する情報の提供をお願いすることがあります。

問題発生後もログインが可能な場合、お客様がインストールした IBM Unica アプリケーションに関する情報を提供する「バージョン情報」ページでこの情報の多くを確認できます。

「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択すると、「バージョン情報」ページにアクセスできます。「バージョン情報」ページにアクセスできない場合でも、各アプリケーションのインストールディレクトリに置かれている `version.txt` ファイルを表示すれば、すべての IBM Unica アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM Unica テクニカルサポートへのお問い合わせに関する情報

IBM Unica テクニカルサポートに問い合わせる方法については、IBM Unica Product Technical Support Web サイト (<http://www.unica.com/about/product-technical-support.htm>) を参照してください。

第 2 章 IBM Unica Marketing Platform の概要

IBM Unica Marketing Platformは、以下の機能を備えています。

- IBM Unica Marketing の多くの製品に関するレポート作成に対応。
- 認証および権限認可を含め、IBM アプリケーションのセキュリティに対応。
- 構成管理。これには、ユーザのロケール設定の指定、および一部の IBM Unica Marketing アプリケーションの構成プロパティを編集するためのインターフェースも含まれています。
- スケジューラ。これを使用して、定義した間隔で実行するようにプロセスを構成することができます。
- ダッシュボードページ。これを構成して、社内ですまざまな役割を担当するユーザのグループに役立つ情報を組み込むことができます。
- IBM 製品の共通ユーザインターフェース。

IBM Unica Marketing のセキュリティ機能について

Marketing Platform のセキュリティ機能は、中央リポジトリと Web ベースのインターフェースで構成され、ここで IBM Unica Marketing 内部ユーザが定義され、IBM Unica Marketing アプリケーション内の機能に対するさまざまなレベルのアクセス権限がユーザに割り当てられます。

IBM Unica Marketing アプリケーションは、Marketing Platform のセキュリティ機能を使用して、ユーザを認証し、ユーザのアプリケーションアクセス権限を検査し、ユーザのデータベース資格情報およびその他の必要な資格情報を格納します。

IBM Unica で使用されているセキュリティテクノロジー

Marketing Platform では、業界標準の暗号化方式を採用して、認証を実行し、すべての IBM Unica Marketing アプリケーションにわたってセキュリティを適用しています。ユーザおよびデータベースのパスワードは、多様な暗号化テクノロジーを使用して保護されています。

役割による権限管理

Marketing Platform では、ほとんどの IBM Unica Marketing アプリケーション内部の機能に対するユーザの基本アクセス権限を定義しています。さらに、Campaign および Marketing Platform の場合は、アプリケーション内部の機能およびオブジェクトに対するユーザのアクセス権限を制御することができます。

さまざまな権限を役割に割り当てることができます。その後は、以下のいずれかの方法で、ユーザの権限を管理することができます。

- 個別ユーザに役割を割り当てる
- グループに役割を割り当て、ユーザをそのグループのメンバーにする。

Campaign のパーティションについて

Marketing Platform は、Campaign ファミリの製品でパーティションに対するサポートを提供しています。パーティションは、異なるユーザグループに関連付けられたデータを保護する方法を提供します。Campaign または関連の IBM Unica Marketing アプリケーションをマルチパーティションを操作できるように構成すると、アプリケーションユーザにとっては、各パーティションはアプリケーションの個別インスタンスとして表示され、同じシステムに他のパーティションが存在することはまったく表示されません。

グループについて

サブグループは、その親に割り当てられたユーザメンバーと役割を継承します。IBM Unica Marketing 管理者は無限数のグループを定義でき、どのユーザも複数のグループのメンバーになることができます。これによって、役割のさまざまな組み合わせを作成しやすくなります。例えば、1 人のユーザは、eMessage 管理者であると同時に、管理権限を持たない Campaign ユーザになることができます。

1 つのグループは、1 つのパーティションのみに所属することができます。

データソース資格情報の管理

ユーザと管理者の両方が、ユーザのデータソース資格情報を事前にセットアップすることができます。そのため、データソースへのアクセスが必要な IBM Unica アプリケーションで作業する際に、データソース資格情報の入力を求めるプロンプトがユーザに表示されることはありません。

外部のユーザおよびグループ管理システムとの統合

IBM Unica Marketing は、ユーザおよびリソースを集中管理するために使用される外部システムと統合するように構成することができます。このようなシステムには、Windows Active Directory Server、サポートされる他の LDAP ディレクトリサーバ、および Netegrity SiteMinder や IBM Tivoli Access Manager などの Web アクセス制御プラットフォームがあります。これによって、エラー、サポートコスト、およびアプリケーションを実動環境に配置するために必要な時間が減少します。

データフィルタ

Marketing Platform は、IBM Unica Marketing 製品でのデータアクセス制限を指定できる、構成可能なデータフィルタをサポートしています。データフィルタを使用すると、IBM ユーザが IBM Unica アプリケーションで表示して操作できる顧客データを制限することができます。

構成管理について

「構成」ページから、IBM Unica Marketing アプリケーションの中央構成プロパティにアクセスすることができます。Marketing Platform の管理者権限を持つユーザは、「構成」ページを使用して以下のことができます。

- 構成プロパティを表示する。構成プロパティは、製品別にカテゴリおよびサブカテゴリの階層に編成されています。

- 構成プロパティの値を編集する。
- 一部のカテゴリを削除する (削除できるカテゴリは、「設定」ページの「**カテゴリの削除**」リンクに表示されます)。

Marketing Platform で提供されるユーティリティを使用して、「構成」ページで追加の変更を行うことができます。詳しくは、204 ページの『configTool ユーティリティ』を参照してください。

IBM Unica Marketing のローカライズ

Marketing Platform は、文字セットのエンコード機能を備え、管理者が個別ユーザまたは全ユーザのロケール設定を指定できるようにすることで、ローカライズに対応しています。ユーザが自分のロケール設定を指定することもできます。

管理者は、内部ユーザおよび外部ユーザの両方に対して、ユーザごとに、またはこの機能をサポートする IBM Unica アプリケーション全体にわかって、ロケール設定を指定することができます。この設定は、IBM Unica アプリケーションの言語、時刻、数値、および日付の表示に影響を及ぼします。

Marketing Platform は、デフォルトの文字セットエンコードとして UTF-8 をサポートしています。したがって、ユーザは任意の言語 (例えば中国語や日本語) でデータを入力できます。ただし、Marketing Platform での文字セットの完全サポートは、以下の構成によっても異なることに注意してください。

- Marketing Platform システムテーブルデータベース
- IBM Unica Marketing にアクセスするために使用されるクライアントマシンおよびブラウザ

共通ユーザインターフェース

Marketing Platform は、IBM Unica Marketing アプリケーション用の共通のアクセスポイントとユーザインターフェースを備えています。共通インターフェースには以下の機能があります。

- 複数の IBM Unica Marketing 製品がインストールされている場合、新規ウィンドウを起動せずに製品間で移動できます。
- 「最新」メニューを使用して、最近訪問したページのリストを表示し、それらの任意のページに移動できます。
- IBM Unica Marketing ページをホームページ (ログインしたときに最初に表示されるページ) として設定でき、「ホーム」アイコンをクリックしていつでもそのページに戻ることができます。
- 「検索」フィールドを使用して、インストール済みの各製品の検索機能にアクセスできます。この検索機能のコンテキストは表示中のページです。例えば、Campaign 内部でキャンペーンのリストを表示している場合、検索はキャンペーン全体を対象に実行されます。特定の Marketing Operations プロジェクトを検索したい場合は、Marketing Operations プロジェクトのリストを表示しているときに検索を実行すればよいことになります。

IBM Unica Marketing にログインするには

以下の要件を満たす必要があります。

- IBM Unica Marketing サーバに接続するためのイントラネット (ネットワーク) 接続
- Microsoft Internet Explorer がコンピュータにインストール済み
- IBM Unica Marketing にログインするユーザ名とパスワード
- ネットワーク上の IBM Unica Marketing にアクセスする URL

インストール時にドメインが入力されている場合、URL は以下のようになります。

`http://host.domain.com:port/unica`

ここで、

host は、Marketing Platform がインストールされているマシンです。

domain.com は、ホストマシンが常駐するドメインです。

port は、Marketing Platform アプリケーションサーバが listen しているポート番号です。

注: 以下の手順では、Marketing Platform に対する管理者権限を持つアカウントを使用してログインしているものとします。

Internet Explorer を使用して IBM Unica Marketing URL にアクセスします。

- IBM Unica Marketing が、Windows Active Directory または Web アクセス制御プラットフォームと統合するように構成されていて、そのシステムにログインしている場合は、デフォルトのダッシュボードページが表示されます。これでログインは完了です。
- ログイン画面が表示されたら、デフォルトの管理者ログインを使用してログインしてください。単一パーティション環境では、これは `asm_admin` で、パスワードは `password` です。マルチパーティション環境では、これは `platform_admin` で、パスワードは `password` です。

パスワードを変更するよう求められます。既存のパスワードを入力することもできますが、セキュリティを高めるために新規パスワードを選択してください。

- IBM Unica Marketing が SSL を使用するよう構成されている場合、初めてサインインしたときにデジタルセキュリティ証明書の受け入れを求めるプロンプトが出ることがあります。「はい」をクリックして証明書を受け入れ、次にステップに進みます。

ログインが成功すると、IBM Unica Marketing でデフォルトのダッシュボードページが表示されます。

Marketing Platform 管理者アカウントに割り当てられているデフォルトの権限では、「設定」メニューの下にリストされたオプションを使用して、ユーザアカウントとセキュリティを管理することができます。IBM Unica Marketing ダッシュボードを管理するには、**platform_admin** としてログインする必要があります。

第 3 章 内部ユーザアカウントの管理

このセクションでは、IBM Unica Marketing Platform ユーザインターフェースを使用して作成されたユーザアカウント (内部アカウントと言います) の属性を管理する方法について説明します。これは、LDAP サーバや Web アクセス制御システムなどの外部システムからインポートされた外部ユーザアカウントとは対照的なものです。Marketing Platform ユーザインターフェースを使用して内部アカウントを管理することができます。外部アカウントは外部システムで管理されます。

ユーザアカウントのタイプ: 内部および外部

IBM Unica Marketing が外部サーバ (サポートされている LDAP サーバまたは Web アクセス制御システムなど) と統合されている場合は、2 種類のユーザアカウントをサポートします。

- **内部** - セキュリティユーザインターフェースを使用して IBM Unica Marketing 内部で作成されるユーザアカウント。これらのユーザは IBM Unica Marketing によって認証されます。
- **外部** - 外部サーバとの同期化によって IBM Unica Marketing にインポートされるユーザアカウント。この同期化が行われるのは、IBM Unica Marketing が外部サーバと統合されるよう構成されている場合のみです。これらのユーザは、外部サーバによって認証されます。外部サーバの例は、LDAP サーバおよび Web アクセス制御サーバです。

ご使用の構成に応じて、内部ユーザのみ、外部ユーザのみ、または両方の組み合わせを使用することができます。IBM Unica Marketing と Windows Active Directory を統合し、Windows 統合ログインを有効にしている場合、外部ユーザのみを使用することができます。

IBM Unica Marketing と LDAP サーバまたは Windows Active Directory サーバとの統合について詳しくは、本書の関連セクションを参照してください。

外部ユーザの管理

ほとんどの場合、外部ユーザアカウントの属性は、外部システムによって管理されます。IBM Unica Marketing 内では、外部ユーザアカウントの以下の 2 つの側面のみを制御することができます。内部グループのメンバーシップ (ただし、外部グループは不可)、および IBM Unica Marketing アプリケーションのロケールに影響する設定。

IBM Unica Marketing インタフェースでの内部ユーザと外部ユーザの識別

IBM Unica Marketing のユーザセクションでは、内部ユーザと外部ユーザとは、次のように別のアイコンを使用しています。

- 内部 - 

- 外部 - 

内部ユーザアカウントのプロパティについて

このセクションでは、内部ユーザアカウントのプロパティについて詳しく説明します。

ユーザがパスワードを忘れた場合

Marketing Platform は、内部ユーザパスワードをハッシュ形式で格納しており、これらの格納済みパスワードを平文に戻すことはできません。内部アカウントを持つユーザがパスワードを忘れた場合は、新規パスワードを割り当てる必要があります。

パスワードのリセット

内部アカウントを持つユーザは、自分のパスワードを変更できます。それには、元のパスワードを入力し、新規パスワードを入力して確認します。IBM Unica Marketing 管理者も、必要な場合にはどのユーザのパスワードでもリセットすることができます。

パスワード有効期限

すべての内部ユーザに対するパスワード有効期限を「構成」ページで設定できます。内部ユーザに対して (システム全体の有効期限が「満了なし」に設定されていない場合) ユーザごとに有効期限を設定することもできます。

内部アカウントのシステムステータス

内部ユーザのシステムステータスは「アクティブ」か「無効」のいずれかです。無効なユーザは、どの IBM Unica Marketing アプリケーションにもログインできません。無効にされたユーザが以前にはアクティブで 1 つ以上のグループのメンバーシップを持っている場合、そのユーザを再びアクティブにすることができ、そのユーザのメンバーシップは保持されます。

内部アカウントの代替ログイン

任意の内部ユーザアカウントについて、代替ログインを指定することができます。これは通常、Campaign リスナが UNIX タイプのシステムの root として実行されている場合に必要です。

内部アカウントのデータソース

ユーザは、一部の IBM Unica Marketing アプリケーションで使用されるデータソースにアクセスする際には適切な資格情報が必要です。その場合、内部ユーザアカウントプロパティに資格情報を入力することができます。

Campaign などの IBM Unica Marketing アプリケーションで作業していて、データソース情報を求めるプロンプトが表示された場合、IBM Unica Marketing アプリケーションは、この情報を Marketing Platform データストアに格納します。これらのデータソースは、IBM Unica Marketing を使用して作成されていない場合でも、

Marketing Platform でユーザのデータソースリストに表示されます。

新規ユーザアカウントを追加するには

1. 「設定」 > 「ユーザ」 をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 左のペインにある「Username」リストの上の「新規ユーザ」ボタンをクリックします。

右のペインに「新規ユーザ」ページが表示されます。

3. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックします。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

4. 「OK」をクリックします。

左のペインのリストに新規ユーザ名が表示されます。

ユーザアカウントを削除するには

重要: Campaign 権限が、Campaign オブジェクトに対する所有権またはアクセス権限を単一ユーザに制限するようにセットアップされている場合、そのユーザのアカウントを削除するとオブジェクトにアクセスできなくなります。そのようなアカウントは削除するのではなく、代わりに無効に設定する必要があります。

1. 「設定」 > 「ユーザ」 をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 削除するアカウントのユーザ名をクリックします。

右のペインに、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. 右のペインのアカウント詳細の上にある「ユーザの削除 (Delete User)」ボタンをクリックします。

「このユーザを削除してもよろしいですか」というメッセージがウィンドウに表示されます。

4. 「OK」をクリックします。

ユーザアカウントが削除され、「Username」リストからユーザ名が除去されません。

内部ユーザのパスワード有効期限を変更するには

システム全体のパスワード有効期限プロパティが「満了なし」に設定されている場合は、個々のユーザのパスワードの有効期限を変更することはできません。

1. 「設定」 > 「ユーザ」 をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 目的のユーザ名をクリックします。

右のペインに、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「**プロパティの編集**」リンクをクリックします。

編集可能フィールドにユーザの詳細が表示されます。

4. 「**PW の有効期限 (PW expiration)**」フィールドの日付を変更します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

5. 「**OK**」をクリックします。

右のペインに、新しいパスワードの有効期限を含めて、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

内部ユーザパスワードをリセットするには

1. 「**設定**」>「**ユーザ**」をクリックします。

左のペインに「**Username**」リストが表示されます。

2. 変更するユーザ名をクリックします。

右のペインに、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「**パスワードのリセット**」リンクをクリックします。

右のペインにユーザの「**パスワードのリセット**」ページが表示されます。

4. 「**パスワード**」フィールドに新規パスワードを入力します。

パスワードを入力すると、実際のパスワードテキストの代わりにアスタリスクが表示されます。

5. 「**確認**」フィールドに同じパスワードを入力します。

6. 「**変更を保存**」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「パスワードが正常にリセットされました」というメッセージが表示されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

右のペインに、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

注: ユーザパスワードをリセットすると、ユーザが次回 IBM Unica Marketing アプリケーションにログインするときに、パスワードを変更するように求めるプロンプトが出されます。

内部ユーザアカウントのプロパティを変更するには

1. 「**設定**」>「**ユーザ**」をクリックします。

左のペインに「**Username**」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「**プロパティの編集**」リンクをクリックします。

右のペインに「プロパティの編集」ページが表示され、編集可能フィールドにユーザの詳細が表示されます。

4. 必要に応じてフィールドを編集します。

ユーザのパスワードをリセットするには、10 ページの『内部ユーザパスワードをリセットするには』を参照してください。

5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

6. 「OK」をクリックします。

右のペインに、新規ユーザアカウントの詳細が表示されます。

内部ユーザのシステムステータスを変更するには

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「プロパティの編集」リンクをクリックします。

右のペインに「プロパティの編集」ページが表示され、編集可能フィールドにユーザの詳細が表示されます。

4. 「ステータス」ドロップダウンリストから目的のステータスを選択します。オプションは「ACTIVE」および「DISABLED」です。

注: 「DISABLED」を選択すると、ユーザはすべての IBM Unica Marketing アプリケーションにログインできなくなります。Marketing Platform に対する管理者権限を持つユーザ自体を使用不可にすることはできません。

5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

6. 「OK」をクリックします。

右のペインに、新規ユーザアカウントの詳細が表示されます。

内部ユーザデータソースを追加するには

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「データソースの編集 (Edit Data Sources)」リンクをクリックします。

右のペインにユーザの「データソースリスト」ページが表示されます。

4. 「新規追加」をクリックします。

右のペインに「新規データソース」ページが表示されます。

5. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

6. 「OK」をクリックします。

右のペインにユーザの「データソースリスト」ページが表示され、新規データソース名およびデータソースログインがリストされます。

内部ユーザデータソースのパスワードまたはログイン名を変更するには

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「データソースの編集 (Edit Data Sources)」リンクをクリックします。

右のペインにユーザの「データソースリスト」ページが表示されます。

4. 変更する「データソース名」をクリックします。

右のペインに「データソースプロパティの編集」ページが表示され、すべての編集可能フィールドにデータが入っています。

5. 必要に応じてフィールドを編集します。詳しくは、10 ページの『内部ユーザアカウントのプロパティを変更するには』を参照してください。

新規パスワードを設定しない場合は、元のパスワードが保持されます。

6. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「OK」をクリックします。

右のペインにユーザの「データソースリスト」ページが表示され、新規ログイン名 (変更した場合) がリストされます。

内部ユーザのデータソースを削除するには

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。

左のペインに「ユーザ」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「**データソースの編集 (Edit Data Sources)**」リンクをクリックします。

ユーザのデータソースがリストされます。

4. 削除するデータソースの名前をクリックします。

データソースの詳細がリストされます。

5. 「**削除**」をクリックします。

「このデータソースを削除してもよろしいですか」というメッセージがウィンドウに表示されます。

6. 「**OK**」をクリックします。

ユーザのデータソースがリストされ、削除したデータソースが除去されています。

「ユーザ」ウィンドウのリファレンス

新規ユーザ

フィールド	説明
名	ユーザの名前。
姓	ユーザの姓。
ログイン	ユーザのログイン名。必須フィールドはこのフィールドだけです。
パスワード	ユーザのパスワード。 パスワードを作成する場合は以下の規則に従ってください。 <ul style="list-style-type: none">• パスワードには大/小文字の区別があります。例えば、password と Password は同じではありません。• IBM Unica Marketing でパスワードを作成またはリセットする場合は、任意の文字を使用することができます。 追加のパスワード要件は「構成」ページで設定します。IBM Unica Marketing のインストール先のパスワード要件を表示するには、「パスワード」フィールドの横の「パスワード規則 (Password Rules)」リンクをクリックします。
パスワードの確認	「パスワード」フィールドに入力したものと同一パスワード。
肩書き	ユーザの肩書き。
部門	ユーザの部門。
会社	ユーザの会社
国	ユーザの国
住所	ユーザの住所

フィールド	説明
電話 (会社)	ユーザの電話番号 (会社)。
携帯電話	ユーザの携帯電話番号。
電話 (自宅)	ユーザの自宅の電話番号。
E メールアドレス	ユーザの電子メールアドレス。 このフィールドは、RFC 821 で定義されている電子メールアドレスに準拠していなければなりません。詳しくは、「RFC 821」を参照してください。
代替ログイン	ユーザの UNIX ログイン名 (ある場合)。 これは通常、Campaign リスナが UNIX タイプのシステム上で root として実行している場合に必要です。
ステータス	ドロップダウンリストから「ACTIVE」または「DISABLED」を選択します。 デフォルトでは「ACTIVE」が選択されています。 無効にされたユーザは、すべての IBM Unica Marketing アプリケーションにログインできなくなります。

プロパティの編集

フィールドは、次の表に示すものを除いて、「新規ユーザ」ウィンドウのフィールドと同じです。

フィールド	説明
パスワード	このフィールドは、「プロパティの編集」ウィンドウでは使用できません。
ログイン	このフィールドは、「プロパティの編集」ウィンドウでは使用できません。
PW の有効期限	ユーザのロケールに適した形式の日付 (例えば、en_US の場合、形式は MM, dd, yyyy です)。 システム全体の有効期限が「満了なし」に設定されている場合は、ユーザの有効期限を変更することはできません。

パスワードのリセット

フィールド	説明
パスワード	新規パスワード
確認	「パスワード」フィールドに入力したものと同一パスワード。

新規データソース / データソースプロパティの編集

フィールド	説明
データソース	ユーザが IBM Unica Marketing アプリケーションからアクセスできるようにするデータソースの名前。IBM Unica Marketing の名前は、表示のためには大/小文字の区別を維持していますが、比較および作成には大/小文字を区別しない規則を使用します (つまり、customer と Customer というデータソース名を両方作成することはできません)。必須。
データソースログイン	このデータソースのログイン名。必須。
データソースパスワード	このデータソースのパスワード。データソースアカウントにパスワードが設定されていない場合には、このフィールドを空のままにできます。
パスワードの確認	パスワードの再入力 (「データソースパスワード」フィールドを空にした場合は、ここも空のままにしてください)。

ユーザごとのロケール設定の指定

内部ユーザと外部ユーザの両方について、ロケール設定をユーザごとに指定することができます。この設定は、IBM Unica Marketing アプリケーションの言語、時刻、数値、および日付の表示に影響を及ぼします。

IBM Unica Marketing 全体ですべてのユーザに適用されるデフォルトの設定もあります。詳しくは、55 ページの『デフォルトのユーザロケール設定について』を参照してください。

このプロパティを個別ユーザに設定する場合、そのユーザに適用する設定がデフォルト設定をオーバーライドします。

注: ロケールの可用性は IBM Unica Marketing アプリケーションによって異なる場合があります。必ずしもすべての IBM Unica Marketing アプリケーションがこのロケール設定をサポートしているわけではありません。IBM Unica Marketing でのロケール設定の可用性とサポートを判別するには、具体的な製品資料を参照してください。

ユーザのロケール設定を設定するには

1. 「設定」 > 「ユーザ」をクリックします。

「Username」リストが表示されます。

2. ロケール設定を設定するユーザ名をクリックします。

ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「**構成設定の編集 (Edit Configuration Preferences)**」リンクをクリックします。

ユーザの「**設定**」ページが表示されます。

4. 左のペインで「**スイート**」をクリックします。

新しいウィンドウに「**地域**」設定プロパティが表示されます。

5. ドロップダウンリストから目的のオプションを選択します。
6. 「**保存して終了する**」をクリックします。

設定が保存され、「**設定**」ページが閉じ、「**ユーザ**」ページに戻ります。

外部ユーザの同期化の強制

IBM Unica Marketing を Windows Active Directory または LDAP サーバと統合されるように構成した場合、事前定義された間隔でユーザとグループが自動的に同期化されます。この自動同期化中は、前回の同期化以降に作成または変更されたユーザおよびグループのみが IBM Unica Marketing に組み込まれます。IBM Unica Marketing の「**ユーザ**」領域で同期化機能を使用して、すべてのユーザおよびグループを強制的に同期化することができます。

外部ユーザの同期化を強制するには、このセクションの手順を使用してください。

外部ユーザの強制同期化

1. IBM Unica Marketing にログインし、「**設定**」>「**ユーザ**」をクリックします。
2. 「**同期化**」をクリックします。

ユーザおよびグループが同期化されます。

第 4 章 IBM Unica Marketing でのセキュリティの管理

IBM Unica Marketing Platform は、IBM Unica Marketing アプリケーション内のオブジェクトおよび機能へのユーザアクセスを制御するための役割および権限をサポートしています。

IBM Unica Marketing 製品のバージョン 8.0.0 では、Marketing Platform のセキュリティ機能を使用してユーザのアプリケーションアクセスを詳細に管理できるのは、Marketing Platform 自体および Campaign のみです。その他の IBM Unica Marketing 製品は、Marketing Platform によって設定される一部の基本的なアプリケーションアクセス役割を使用するだけで、詳細なセキュリティ設定はなく、設定がユーザインターフェースの Marketing Platform 領域に入ることもありません。IBM Unica Marketing 製品は、権限を以下のように管理します。

- Marketing Platform では、役割および権限は Marketing Platform 管理ページへのユーザのアクセスと、ユーザが自分のアカウント以外のユーザアカウントを変更する能力を制御します。管理者は、これらの役割を「ユーザの役割と権限」ページで管理します。

レポート機能は Marketing Platform のコンポーネントですが、この機能に「ユーザの役割と権限」ページに専用のエントリがあり、幅広い基本的な権限のみを持つデフォルト役割があります。

- Campaign では、権限はオブジェクトに対するユーザのアクセスと、オブジェクトに関する各種のアクションを実行するユーザの能力を制御します。Campaign のみ、権限をフォルダ内のすべてのオブジェクトに適用することができ、複数の役割を 1 つのポリシーにグループ化して、そのポリシーをユーザまたはユーザグループに割り当てることができます。管理者は Campaign の役割を「ユーザの役割と権限」ページで管理します。
- Marketing Operations の場合、「ユーザの役割と権限」ページでの基本的な役割のセットアップは、カスタマイズされたセキュリティスキームを開発するための出発点にすぎません。Marketing Operations には、Marketing Operations 領域のユーザインターフェースを使用して管理できる詳細なセキュリティスキームがあります。
- Distributed Marketing、eMessage、Interact、Lead Referrals、および PredictiveInsight には、アプリケーションアクセスのための幅広い基本的な権限を持つデフォルトの役割があります。これらのアプリケーションへのユーザアクセスを詳細に定義できる権限はありません。
- Optimize、CustomerInsight、および NetInsight には、Marketing Platform での役割または権限はありません。

IBM Unica Marketing でのセキュリティ管理に関する情報の入手先

IBM Unica Marketing のセキュリティ管理に関する情報を以下の方法で見つけることができます。

- **Marketing Platform** での役割および権限を持つすべての製品 - 本書では、ユーザ単位で、またはグループメンバーシップを介して行うユーザへの役割の割り当てに関する情報を示します。
- **Marketing Platform** - このセクションでは、Marketing Platform に含まれている管理機能の権限を管理するために必要な情報を示します。レポート機能については、基本的な権限はこのセクションで説明されていますが、セキュリティがレポートでどのように機能するかについての詳細は、60 ページの『レポートおよびセキュリティについて』に記載されています。
- **Campaign** - 本書の 35 ページの『第 5 章 IBM Unica Campaign でのセキュリティの管理』を参照してください。
- **Interact, eMessage, PredictiveInsight, Distributed Marketing** - 基本的な役割の説明については、31 ページの『リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限』を参照してください。
- **Marketing Operations** - 基本的な役割の説明については、31 ページの『リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限』を参照してください。セキュリティ機構のセットアップの詳細は、Marketing Operations の製品資料を参照してください。

Marketing Platform でのセキュリティ管理について

Marketing Platform 内で AdminRole または PlatformAdminRole 役割を持つユーザのみが、自分以外のユーザアカウントのセキュリティ管理機能にアクセスすることができます。マルチパーティション環境では、PlatformAdminRole 役割を持つユーザのみが、パーティションにまたがってユーザを管理することができます。AdminRole 役割を持つユーザは、自分のパーティション内のユーザのみを管理できます。

Marketing Platform 管理者は、「ユーザグループ」ページおよび「ユーザの役割と権限」ページを使用して、以下のタスクを実行します。

- 内部グループを作成し、そのメンバーシップとパーティション割り当てを管理する。
- 必要に応じて、Marketing Platform および Campaign の役割を作成し、これらの役割に権限を割り当てる。
- 個別ユーザ、内部グループ、または外部グループのいずれかまたはすべてに役割を割り当てることによって、IBM Unica Marketing アプリケーションに対するユーザアクセスを管理する。

この概説を読んで、以下の事項を理解してください。

- 内部グループと外部グループの違い
- 内部グループを作成して役割および権限を割り当てるプロセス
- 内部グループのプロパティ
- Marketing Platform 内で事前構成されているユーザアカウント、グループ、および役割

Marketing Platform および Campaign での役割と権限について

Marketing Platform および Campaign での役割は、構成可能な権限の集合です。Marketing Platform および Campaign での役割ごとに、アプリケーションへのアクセスを制御する権限を指定できます。デフォルトの役割を使用するか、新しい役割を作成することができます。使用可能な権限のセットは、システムによって定義されており、新しい権限を作成することはできません。

役割割り当てについて

一般に、ユーザに与える役割は、そのユーザが IBM Unica Marketing を使用するとき組織内で実行する機能を反映した権限を持つ役割にしてください。役割は、グループに割り当てるか、個々のユーザに割り当てることができます。グループによって役割を割り当てる利点は、役割の組み合わせをグループに割り当てることができ、後でその組み合わせを変更する場合は、複数のユーザについて何度も変更を行う必要がなく、1 個所で変更できることです。グループによって役割を割り当てる場合は、グループにユーザを追加または削除することによって、ユーザアクセスを制御します。

システムが役割を評価する方法

ユーザが複数の役割を持つ場合、システムはそれらすべての役割をまとめたものから、権限を評価します。その場合、すべての役割から集約された権限と、Campaign の場合はオブジェクトのセキュリティポリシーに基づいて、特定のオブジェクトに対して機能を実行するユーザの能力が認可されるか拒否されます。

Marketing Platform でのセキュリティ管理プロセス

Marketing Platform のセキュリティ管理機能を使用してユーザアプリケーションのアクセスを管理する操作は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、基本プロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

ユーザアプリケーションアクセスを管理するには

1. Marketing Platform および Campaign へのユーザアクセスを制御するために使用する役割を計画します。これらの役割とその権限を必要に応じて構成します。
2. セキュリティ要件の達成に必要なグループを計画します。システムをどのように構成するかに応じて、内部グループのみ、外部グループのみ、またはその両方の組み合わせが必要になります。
3. 必要な内部グループおよび外部グループを作成します。
4. グループを役割に割り当てます。
5. 内部ユーザアカウントのみを使用する場合は、必要な内部ユーザアカウントを必要に応じて作成します。
6. ユーザに許可したいアプリケーションアクセスに基づいて、ユーザをグループに割り当てるか、役割を個別ユーザに割り当てます。

グループのタイプ: 内部および外部

IBM Unica Marketing が外部サーバ (サポートされている LDAP サーバまたは Web アクセス制御システムなど) と統合されている場合は、2 種類のグループをサポートします。

- **内部** – セキュリティユーザインタフェースを使用して IBM Unica Marketing 内部で作成されるグループ。これらのユーザは IBM Unica Marketing によって認証されます。
- **外部** – 外部システムのグループにマップされる IBM Unica Marketing グループ。この同期化が行われるのは、IBM Unica Marketing が外部サーバと統合されるよう構成されている場合のみです。外部サーバの例は、LDAP サーバおよび Web アクセス制御サーバです。本書で外部グループと言われるグループは、実際には IBM Unica Marketing で作成されていて、外部システムにマップされているグループであることに注意してください。

ご使用の構成に応じて、内部グループのみ、外部グループのみ、または両方の組み合わせを使用することができます。

IBM Unica Marketing と LDAP または Windows Active Directory サーバとの統合については、本書の関連セクションを参照してください。

外部グループの管理

外部グループのメンバーシップは、外部システムで管理されます。

内部グループと同じように、マップされた外部グループに役割を割り当てることができます。

内部グループおよびサブグループの管理

管理者は、内部グループをいくつでも無制限に定義することができます。また、どの内部ユーザも外部ユーザも、複数の内部グループおよびサブグループのメンバーになることができます。

サブグループは、その親に割り当てられたユーザメンバーと役割を継承します。グループとそのサブグループは、常に 1 つのパーティションに所属します。

パーティションに割り当てることができるのは内部グループのみであり、マルチパーティション環境ですべてのパーティションにグループを作成できるのは、platform_admin ユーザのみ、または PlatformAdminRole の役割を持つ別のアカウントのみです。

パーティションおよびセキュリティの管理について

Campaign および関連製品のパーティションは、異なるユーザグループに関連付けられたデータを保護する方法を提供します。区分化を使用すると、ユーザのパーティションは別個に実行されている Campaign のインスタンスのように表示され、同じシステムで他のパーティションがまったく実行されていないように見えます。このセクションでは、マルチパーティション環境でのセキュリティ管理の特殊な考慮について説明します。

パーティションでのユーザメンバーシップ

ユーザを、そのグループメンバーシップに基づいてパーティションに割り当てることができます。パーティションへのアクセス権限をユーザに与えるには、まずグループをパーティションに割り当て、その後でユーザをグループに割り当てます。

1 つのグループまたはサブグループは、1 つのパーティションのみに割り当てることができます。サブグループのパーティション割り当てを親グループが獲得することはありません。グループをパーティションに割り当てることができるのは、`platform_admin` ユーザか、または `PlatformAdminRole` 役割を持つ別のアカウントだけです。

1 人のユーザは 1 つのパーティションのみのメンバーにする必要があります。

役割とパーティションについて

パーティションとの関連では、必ず役割が存在します。単一パーティション環境では、すべての役割がデフォルトのパーティションである `partition1` に自動的に作成されます。マルチパーティション環境では、役割は、パーティションを作成したユーザのパーティション内に作成されます。例外は `platform_admin` ユーザおよび `PlatformAdminRole` 役割を持つその他の任意のアカウントで、これらのアカウントはどのパーティションにでも役割を作成することができます。

パーティションについての詳細

このセクションでは、パーティションへのグループの割り当て、およびグループへのユーザの割り当てについて説明します。パーティションの構成については詳しくは、Campaign のインストール資料を参照してください。

事前構成されたユーザおよび役割

IBM Unica Marketing が最初にインストールされた時点では、このセクションで説明するように、3 つのユーザが事前構成され、Marketing Platform および Campaign のシステム定義の役割が割り当てられています。

これらの内部ユーザアカウントはすべて、デフォルトパスワードとして「password」を使用しています。

platform_admin ユーザアカウント

`platform_admin` ユーザアカウントは、IBM Unica Marketing 管理者が、マルチパーティション環境内のすべてのパーティションにわたって製品構成、ユーザ、およびグループを管理でき、すべての Marketing Platform 機能を (専用の役割を持つレポート機能を除き) パーティションによるフィルタリングなしに使用できるように設計されています。デフォルトでは、このアカウントは Marketing Platform 内の以下の役割を持っています。

- Marketing Platform のデフォルトパーティション `partition1` での役割
 - AdminRole
 - UserRole
 - PlatformAdminRole

これらの役割により、platform_admin ユーザは、Marketing Platform 内部でレポート機能以外のすべての管理タスクを実行することができます。追加パーティションが作成された場合、platform_admin ユーザは、追加パーティション内のユーザ、グループ、役割、および構成にアクセスして管理することができます。

PlatformAdminRole 役割は、この役割の権限を変更できるユーザはいないという点で特異であり、この役割を持つユーザのみが別のユーザに PlatformAdminRole 役割を割り当てることができます。

- Campaign のデフォルトパーティション partition1 での役割
 - グローバルポリシーの管理役割

この役割により、platform_admin ユーザは Campaign 内部のすべてのタスクを実行することができます。

デフォルトでは、このユーザには Marketing Platform および Campaign の外側の IBM Unica Marketing 製品に対するアクセス権限はありません。

asm_admin ユーザアカウント

asm_admin ユーザアカウントは、IBM Unica Marketing 管理者が、単一パーティション環境内のユーザおよびグループを管理でき、すべての Marketing Platform 機能を (専用の役割を持つレポート機能を除き) 使用できるように設計されています。このアカウントには以下の役割があります。

- Marketing Platform のデフォルトパーティション partition1 での役割
 - AdminRole
 - UserRole

以下に示す例外を除き、これらの役割により、asm_admin ユーザは、Marketing Platform 内の asm_admin が所属するパーティション (デフォルトでは partition1) の内部で、すべての管理タスクを実行することができます。

このユーザは、これらの役割により、「構成」ページを管理することができます。「構成」ページではパーティションによるユーザのフィルタリングは行われません。このため、Marketing Platform で AdminRole 役割から管理者構成ページ権限を削除して、構成タスクを platform_admin ユーザ用にとっておく必要があります。

例外は以下のとおりです。

- レポート機能にアクセスするには、Reports System 役割を付与する必要があります。
- このユーザは、PlatformAdminRole 役割をユーザまたはグループに割り当てることはできません。

デモアカウント

デモアカウントには以下の役割があります。

- Marketing Platform のデフォルトパーティション partition1 での役割
 - UserRole

この役割により、デモユーザは、「ユーザ」ページで自分のアカウント属性を表示および変更できますが、自分のアカウントの役割またはパーティションを変更したり、Marketing Platform に含まれている他の機能にアクセスしたりすることはできません。デフォルトでは、このユーザにはどの IBM Unica Marketing 製品にもアクセスする権限はありません。

- Campaign のデフォルトパーティション partition1 での役割
 - グローバルポリシーのレビュー役割

この役割により、デモユーザはブックマークを作成し、Campaign でキャンペーン、セッション、オファー、セグメント、およびレポートを表示することができます。

platform_admin アカウントの保持

マルチパーティション環境では、すべてのパーティションにわたって IBM Unica Marketing ユーザのセキュリティを管理できるようにするために、Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つユーザアカウントが少なくとも 1 つは必要です。

platform_admin アカウントは、事前に構成済みで、PlatformAdminRole 役割を備えています。platform_admin アカウントは、IBM Unica Marketing の「ユーザ」機能で削除したり無効にしたりできないスーパーユーザです。ただし、このアカウントには、他のユーザと同じパスワード制限が適用されます。例えば、誰かが platform_admin としてログインしようとして誤ったパスワードを N 回 (有効なパスワード規則に応じて異なります) 続けて入力した場合、システムで platform_admin アカウントが無効になります。このアカウントを復元するには、以下のいずれかのアクションをとる必要があります。

- Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つ別のユーザがいる場合は、そのユーザとしてログインして、platform_admin ユーザのパスワードをリセットするか、Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウントを作成します。
- Marketing Platform 内の PlatformAdminRole 役割を持つユーザが 1 人だけ (例えば、platform_admin だけ) の場合は、213 ページの『restoreAccess ユーティリティ』で説明されている方法で、新規 platform_admin を作成できます。

restoreAccess ユーティリティを使用して PlatformAdminRole アクセスを復元しなければならぬ状況を避けるために、PlatformAdminRole 特権を持つアカウントを複数作成することをお勧めします。

内部グループの管理

このセクションでは、内部グループの管理方法について説明します。

新規内部グループを追加するには

1. 「設定」 > 「ユーザグループ」をクリックします。

左のペインに「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

2. 左のペインにある「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストの上の「新規グループ」ボタンをクリックします。

「新規グループ」ページが表示されます。

3. 「グループ名」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。
4. 「変更を保存」をクリックします。

「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストに新規グループの名前が表示されます。

新規サブグループを追加するには

1. 「設定」>「ユーザグループ」をクリックします。

「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

2. サブグループを追加するグループの名前をクリックします。

グループ詳細ページが表示されます。

3. 右のペインの上部にある「新規サブグループ」ボタンをクリックします。

「新規サブグループ」ページが表示されます。

4. 「グループ名」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。
5. 「変更を保存」をクリックします。

「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストの該当のグループの下に新規サブグループが追加されます。

注: 親グループのフォルダアイコンが閉じている場合、リストを展開するには正符号 (+) をクリックします。

グループまたはサブグループを削除するには

グループまたはサブグループを削除すると、グループのメンバーはそのグループに割り当てられた役割を失うことになり、役割が明示的に親に割り当てられている場合を除き、グループの親もまた、それらの役割の割り当てを失うことを覚えておいてください。

1. 「設定」>「ユーザグループ」をクリックします。

左のペインに「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

2. 削除するグループまたはサブグループの名前をクリックします。

グループの詳細ページが表示されます。

注: 親グループのフォルダアイコンが閉じているときに、サブグループを選択するには、リストを展開する正符号 (+) をクリックします。

3. 右のペインの上部にある「グループの削除」ボタンをクリックします。

「このグループとそのすべてのサブグループを削除してもよろしいですか」というメッセージがウィンドウに表示されます。

4. 「OK」をクリックします。

グループが削除され、グループ名がそのサブグループ (ある場合) とともに、グループ階層のリストから削除されます。

グループまたはサブグループの説明を変更するには

1. 「設定」 > 「ユーザグループ」をクリックします。

左のペインに「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

2. 説明を変更するグループまたはサブグループの名前をクリックします。

グループ詳細ページが表示されます。

注: 親グループのフォルダアイコンが閉じているときに、サブグループを選択するには、リストを展開する正符号 (+) をクリックします。

3. 「プロパティの編集」をクリックします。

「プロパティの編集」ページが表示されます。

4. 必要に応じて説明を編集します。
5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

6. 「OK」をクリックします。

パーティションにグループを割り当てるには

この手順は、Campaign に複数のパーティションが構成されている場合のみ必要です。PlatformAdmin ユーザのみがこのタスクを実行できます。

1. 各パーティションに割り当てるグループを決定します。必要に応じて、グループを作成します。
2. 「設定」 > 「ユーザグループ」をクリックします。

「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

3. パーティションに割り当てるグループまたはサブグループの名前をクリックします。

グループ詳細ページが表示されます。

4. 「プロパティの編集」をクリックします。

「プロパティの編集」ページが表示されます。

5. 「パーティション ID」ドロップダウンリストから目的のパーティションを選択します。

このフィールドは、複数のパーティションが構成されている場合のみ有効になります。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「OK」をクリックします。

グループまたはサブグループにユーザを追加するには

1. 「設定」 > 「ユーザ」 をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

注: 「ユーザグループ」 ページで、グループ名をクリックして「ユーザの編集」をクリックすることで、同じタスクを実行することができます。

2. 変更するユーザ名をクリックします。

ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「グループの編集」リンクをクリックします。

ユーザの「グループの編集」ページが表示されます。

4. 「選択可能なグループ」ボックスのグループ名をクリックして選択します。

選択したグループ名が強調表示されます。

5. 「追加」ボタンをクリックします。

グループ名が「グループ」ボックスに移動します。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「OK」をクリックします。

ユーザアカウントの詳細が表示され、割り当てたグループまたはサブグループがリストされます。

グループまたはサブグループからユーザを除去するには

重要: グループまたはサブグループからユーザを除去すると、そのグループまたはサブグループに割り当てられている役割がユーザから除去されます。

1. 「設定」 > 「ユーザ」 をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するユーザ名をクリックします。

ユーザアカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「グループの編集」リンクをクリックします。

ユーザの「グループの編集」ページが表示されます。

4. 「グループ」ボックスのグループ名をクリックして選択します。

選択したグループ名が強調表示されます。

5. 「除去」ボタンをクリックします。

グループ名が「選択可能なグループ」ボックスに移動します。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「OK」をクリックします。

削除されたグループまたはサブグループのユーザアカウントの詳細が表示されます。

8. ページの下部にある「プロパティの編集」リンクをクリックします。

「プロパティの編集」ページが表示されます。

9. 必要に応じて名前または説明を変更します。

10. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

11. 「OK」をクリックします。

変更したグループの詳細が表示されます。

「ユーザグループ」ウィンドウのリファレンス 新規グループ、新規サブグループ、プロパティの編集

フィールド	説明
グループ名	<p>グループ名。上限は 64 文字です。</p> <p>グループ名を作成するときは以下の文字を使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none">• 英字の大文字および小文字 (A から Z)• 数字 (0 から 9)• 単一引用符 (')• ハイフン (-)• 単価記号 (@)• スラッシュ (/)• 小括弧• コロン (:)• セミコロン (;)• スペース (先頭文字以外) <p>IBM Unica Marketing 名は表示のためには大/小文字の区別を維持していますが、比較および作成には大/小文字を区別しない規則を使用します (つまり、Admin と admin の両方を別個のグループ名として作成することはできません)。</p> <p>サブグループを作成する場合は、親グループと関連のある名前をサブグループに付けることをお勧めします。</p> <p>必須</p>
説明	<p>グループの説明。上限は 256 文字です。</p> <p>グループまたはサブグループに付与する計画の役割を説明に含めておくと役立ちます。そうすれば、グループ詳細ページを表示したときに、役割とユーザの両方が一目でわかります。</p>

フィールド	説明
パーティション ID	複数のパーティションが構成されている場合のみ、使用可能です。 グループにパーティションを割り当てると、そのブートのメンバーはそのパーティションのメンバーになります。1 人のユーザは 1 つのパーティションのみのメンバーになることができます。

ユーザの編集、役割の編集

フィールド	説明
選択可能なグループ または選択可能な役割	ユーザが割り当てられていないグループおよびサブグループのリスト。
グループまたは役割	ユーザが割り当てられているグループとサブグループまたは役割のリスト。

ユーザの役割と権限の管理

このセクションでは、役割と権限によってユーザのアプリケーションアクセスを管理する方法について説明します。

役割を作成するには

新規役割は、Marketing Platform 自体、および Campaign でのみ作成する必要があります。レポート機能およびその他の IBM Unica Marketing 製品はすべて、利用可能な単純な権限を持つ事前定義された基本的な役割が備わっているため、これらの領域で追加の役割を作成する必要はありません。

1. 「設定」 > 「ユーザの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。

「ユーザの役割と権限」ページが表示されます。

2. 左のリストにある「キャンペーン」または「プラットフォーム」の横の正符号をクリックして、役割を作成したいパーティションの名前をクリックします。

パーティション内の既存の役割が表示されます。

3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバルポリシー」の下に作成したい場合は、「グローバルポリシー」をクリックします。

グローバルポリシー内の既存の役割が表示されます。

4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。

「プロパティ/役割」ページに既存の役割のリストが表示されます。

5. 「役割の追加」をクリックします。

新しい役割のセットのフィールドがリストに追加されます。

6. 役割の名前と説明を入力します。

7. 「変更を保存」をクリックし、役割を保存して「プロパティ/役割」ページに残るか、「権限の保存および編集」をクリックし、「権限」ページに進んでリスト内のいずれかの役割について、権限を追加または変更します。

役割の権限を変更するには

1. 「設定」 > 「ユーザの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。

「ユーザの役割と権限」ページが表示されます。

2. 左のリストにある「キャンペーン」または「プラットフォーム」の横の正符号をクリックして、役割を変更したいパーティションの名前をクリックします。

パーティション内の既存の役割が表示されます。

3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバルポリシー」またはユーザ作成のポリシーの下に作成したい場合は、該当のポリシー名をクリックします。

選択したポリシー内の既存の役割が表示されます。

4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。

「プロパティ/役割」ページに既存の役割のリストが表示されます。

5. 「権限の保存および編集」をクリックします。

「権限」ページが表示され、すべての権限のグループとすべての既存の役割がリストされます。

6. 役割グループの横にある正符号をクリックすると、それぞれの役割で選択可能なすべての権限とそれらの権限の状態が表示されます。
7. 権限を変更する役割の列で、権限の行のボックスをクリックして、状態を「認可 (Grant)」、「拒否 (Deny)」、または「不認可 (Not Granted)」に設定します。
8. 「変更を保存」をクリックして変更を保存し、「プロパティ/役割」ページに戻ります。

「前回保存時の状態に戻す」をクリックして前回の保存時以降の変更を取り消して「権限」ページに残るか、「取り消し」をクリックし、前回の保存時以降の変更を破棄してパーティションまたはポリシーのページへ進みます。

役割を除去するには

重要: 役割を除去すると、その役割が割り当てられていたすべてのユーザおよびグループから役割が除去されます。

1. 「設定」 > 「ユーザの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。

「ユーザの役割と権限」ページが表示されます。

2. 左のリストにある「キャンペーン」または「プラットフォーム」の横の正符号をクリックして、役割を作成したいパーティションの名前をクリックします。

パーティション内の既存の役割が表示されます。

3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバルポリシー」の下に作成したい場合は、「グローバルポリシー」をクリックします。

グローバルポリシー内の既存の役割が表示されます。

4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。

「プロパティ/役割」ページに既存の役割のリストが表示されます。

5. 削除する役割の「除去」リンクをクリックします。
6. 「変更を保存」をクリックします。

グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去を行うには

グループに役割を追加した場合、またはグループから役割を除去した場合は、そのグループのメンバーおよびすべての親グループのメンバーが、その役割を獲得するか、失うということに注意してください。

1. 「設定」>「ユーザグループ」をクリックします。

「ユーザグループ」ページが表示されます。

2. 操作対象のグループの名前をクリックします。

グループ詳細ページに、グループのユーザおよび役割のリストが表示されます。

3. 「役割の割り当て」をクリックします。

「役割の編集」ページが表示されます。グループに割り当てられていない役割が、左の「利用できる役割」ボックスに表示されます。現在グループに割り当てられている役割は、右の「役割」ボックスに表示されます。

4. 「利用できる役割」ボックスの役割名をクリックして選択します。

選択した役割名が強調表示されます。

5. 「追加」または「除去」をクリックして、役割名を一方のボックスからもう一方のボックスに移動します。
6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「OK」をクリックします。

グループ詳細が右のペインに表示され、「役割」リストに変更が表示されていません。

ユーザへの役割の割り当てまたはユーザからの役割の除去を行うには

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。

「ユーザ」ページが表示されます。

2. 操作対象のユーザアカウントの名前をクリックします。

ユーザ詳細ページにユーザの属性、役割、グループ、およびデータソースのリストが表示されます。

3. 「**役割の編集**」をクリックします。

「役割の編集」ページが表示されます。ユーザに割り当てられていない役割が、左の「**利用できる役割**」ボックスに表示されます。現在グループに割り当てられている役割は、右の「**役割**」ボックスに表示されます。

4. 「利用できる役割」ボックスの役割名をクリックして選択します。

選択した役割名が強調表示されます。

5. 「**追加**」または「**削除**」をクリックして、役割名を一方のボックスからもう一方のボックスに移動します。

6. 「**変更を保存**」をクリックして変更を保存します。




ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

ユーザの詳細が右のペインに表示され、「**役割**」リストに変更が表示されています。

リファレンス: 権限の状態の定義

それぞれの役割について、事前定義された権限のどれを認可するか、認可しないか、または拒否するかを指定することができます。これらの状態には以下の意味があります。

- **認可** — 緑のチェックマーク  で示されます。ユーザのその他の役割で明示的に権限が否定されない限り、この特定の機能を実行する権限が明示的に認可されます。
- **拒否** — 赤の「X」  で示されます。ユーザの他の役割で権限が認可されているかどうかに関係なく、この特定の機能を実行する権限が明示的に拒否されます。
- **不認可** — グレイの「X」  で示されます。特定の機能を実行する権限を明示的に認可または拒否しません。ユーザの役割のいずれかでこの権限が明示的に認可されていない場合、ユーザはこの機能を実行することはできません。

リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限

以下の表では、基本的な役割のみを使用する IBM 製品で利用できる役割の機能定義について説明しています。追加情報については、製品資料を参照してください。

IBM Unica アプリケーション	役割
Leads	Leads 役割は、将来の利用のために予約されています。

IBM Unica アプリケーション	役割
Reports	<ul style="list-style-type: none"> • ReportsSystem – report_system 権限を認可します。これによって、「設定」メニューの「レポート SQL ジェネレータ」オプションおよび「レポートフォルダの権限の同期」オプションにアクセスすることができます。 • ReportsUser – report_user 権限を認可します。これは、IBM Cognos 8 BI システムにインストールされた IBM Unica 認証プロバイダのみが使用します。 <p>IBM Cognos 8 BI 統合の認証オプションおよび IBM Unica 認証プロバイダがレポート権限を使用する方法については、60 ページの『レポートおよびセキュリティについて』を参照してください。</p>
eMessage	<ul style="list-style-type: none"> • eMessage_Admin – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。 • eMessage_User – 将来の利用のために予約されています。
Interact	<ul style="list-style-type: none"> • InteractAdminRole – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。
Distributed Marketing	<ul style="list-style-type: none"> • collab_admin – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。 • corporate – Campaign および Distributed Marketing を使用して再使用可能な Lists およびオンデマンドキャンペーンテンプレートを開発することができます。企業キャンペーンを作成および変更できます。 • field – 企業キャンペーンに参加でき、Distributed Marketing で Lists およびオンデマンドキャンペーンを作成および実行できます。
PredictiveInsight	<ul style="list-style-type: none"> • User – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。
Marketing Operations	<ul style="list-style-type: none"> • PlanUserRole – デフォルトでは、PlanUserRole 役割を持つユーザには Marketing Operations で有効になっている権限はほとんどありません。これらのユーザは、計画、プログラム、またはプロジェクトを作成することはできず、管理設定へのアクセス権限も限定されています。 • PlanAdminRole – デフォルトでは、PlanAdminRole 役割を持つユーザには Marketing Operations で有効にされるほとんどの権限が備わっています。これには、すべての管理設定および構成設定へのアクセス権限も含まれ、広範囲のアクセス権限が許可されます。 <p>アクセス権限は、Marketing Operations のセキュリティポリシーによってさらに詳細に定義されます。</p>

リファレンス: Marketing Platform の権限

以下の表では、Marketing Platform で役割に割り当てることができる権限について説明します。

権限	説明
「ユーザの管理」 ページ	ユーザは、自分のパーティション内のユーザアカウントに関する「ユーザ」 ページで、以下のすべてのユーザ管理タスクを実行することができます。内部ユーザアカウントの追加および削除。属性、データソース、役割の割り当ての変更。
「アクセスユーザ」 ページ	ユーザが「ユーザ」 ページを表示できるようにします。
「ユーザグループの管理」 ページ	ユーザは、グループへのパーティションの割り当て (これを実行できるのは platform_admin ユーザのみです) を除き、「ユーザグループ」 ページですべてのアクションを実行することができます。この権限を持つユーザは、グループの作成、変更、削除、グループメンバーシップの管理、グループに対する役割の割り当てを行うことができます。
「ユーザの役割の管理」 ページ	ユーザは、「ユーザの役割と権限」 ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。Marketing Platform および Campaign での役割の作成、変更、削除、およびリストされたすべての IBM Unica Marketing 製品の役割に対するユーザの割り当て。
「構成の管理」 ページ	ユーザは、「構成」 ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。プロパティ値の変更、テンプレートからの新規カテゴリの作成、「 カテゴリの削除 」リンクがあるカテゴリの削除。
「データフィルタの管理」 ページ	ユーザは、「データフィルタ」 ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。データフィルタの割り当て、および割り当ての除去。
「スケジュール済みタスクの管理」 ページ	ユーザは、「スケジュール済みタスク」 ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。スケジュール定義の表示と実行、および実行の表示。
ダッシュボードの管理	ユーザは、「ダッシュボード」 ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。ダッシュボードの作成、表示、変更、削除、ダッシュボード管理者の割り当て、ダッシュボードアクセス権限の管理。

第 5 章 IBM Unica Campaign でのセキュリティの管理

Campaign では、Marketing Platform のセキュリティ機能を使用して、Campaign のオブジェクトとフィーチャへのユーザアクセスを制御しています。管理者は Marketing Platform セキュリティインタフェースを使用して、ユーザアカウント、グループメンバーシップ、役割、およびユーザが Campaign にアクセスするために必要な権限を構成します。

Campaign のオブジェクトとフィーチャへのユーザアクセスは、セキュリティポリシーを使用して実装されます。

セキュリティポリシーについて

セキュリティポリシーは、Campaign でのセキュリティを規定する「ルールブック」であり、ユーザがアプリケーション内でアクションを実行するたびに、参考にされます。セキュリティポリシーはパーティションごとに作成されます (パーティションをまたいでセキュリティポリシーが共有されることはありません)。Campaign では、1 つのパーティションに複数のセキュリティポリシーを持たせることができます。

セキュリティポリシーは、管理者が定義する複数の役割から構成され、各役割には、ユーザが実行できるアクションとユーザがアクセスできるオブジェクトを決定する一連の権限が含まれています。管理者は、ユーザに役割を直接割り当てるか、グループに役割を割り当てることができます (それらのグループ内のユーザには、その役割が割り当てられます)。

トップレベルフォルダ内にキャンペーンまたはオファーなどのオブジェクトを作成するときは、オブジェクトにセキュリティポリシーを適用します。また、トップレベルフォルダを作成するときは、そのフォルダにセキュリティポリシーを適用し、そのフォルダ内に作成されたオブジェクトまたはサブフォルダは、フォルダに適用されたセキュリティポリシーを継承します。

オブジェクトまたはフォルダにセキュリティポリシーを適用すると、さまざまなユーザグループが使用できるよう、Campaign 内のオブジェクトを分離できます。例えば、セキュリティポリシーを構成することにより、あるポリシーに属するユーザが他のポリシーに関連付けられたオブジェクトにアクセスできないよう、さらには表示さえできないようにすることもできます。

管理者は独自のセキュリティポリシーを作成するか、Campaign に組み込まれているデフォルトのグローバルセキュリティポリシーを使用できます。

グローバルセキュリティポリシー

Campaign には、デフォルトのグローバルセキュリティポリシーが含まれており、これをそのまま使用するか、組織のニーズに適合するように変更できます。独自のセキュリティポリシーを作成しない場合、Campaign で作成するオブジェクトには、デフォルトでグローバルセキュリティポリシーが適用されます。

独自のポリシーに追加してグローバルポリシーを使用するか、独自のポリシーを排他的に使用できます。グローバルポリシーは、使用しない場合でも削除できません。

作成するすべてのセキュリティポリシーは、グローバルセキュリティポリシーの下に存在します。グローバルポリシーの下で、組織内の部門ごとに別々に従業員のセキュリティポリシーを作成できます。

グローバルセキュリティポリシーには、6つの役割が事前定義されており、必要な場合は、グローバルポリシーに役割を追加できます。事前定義された役割を削除することはできませんが、それらの役割の権限を変更できます。

事前定義された役割は、以下のとおりです。

- **フォルダ所有者** — すべての権限が使用可能
- **オブジェクト所有者** — すべての権限が使用可能
- **システム管理** — すべての権限が使用可能。デフォルトユーザ `asm_admin` には、この役割が割り当てられます。
- **実行** — すべての権限が使用可能
- **設計** — ほとんどのオブジェクトに対する読み取りおよび書き込み権限。フローチャートまたはセッションのスケジュールを設定できません。
- **レビュー** — 読み取り専用権限

グローバルセキュリティポリシーは、所有者役割およびフォルダ所有者役割を通じて、グローバルポリシー内で他の特定の役割に割り当てられていないユーザも含め、すべてのユーザに適用されます。グローバルポリシーは常に適用されるため、例えば、ある役割にグローバルにアクセス権を拒否するために使用できます。

Campaign での権限の評価方法

ユーザがタスクを実行するかオブジェクトへのアクセスを試みた場合、Campaign は以下のステップを実行します。

1. グローバルセキュリティポリシーの中で、このユーザが属するすべてのグループと役割を識別します。ユーザは、1つまたは複数の役割に属することができ、役割に属さないこともできます。オブジェクトを所有しているユーザは、所有者役割に属します。オブジェクトが存在するフォルダを所有するユーザは、フォルダ所有者 (Folder Owner) 役割に属します。ユーザがその他の役割に属するのは、特にその役割に (直接、またはその役割に割り当てられたグループに属しているために) 割り当てられた場合だけです。
2. アクセスされようとしているオブジェクトにカスタム定義ポリシーが (存在する場合) 割り当てられているかどうかを識別します。割り当てられていれば、システムはそのカスタムポリシー内でユーザが属するすべてのグループと役割を識別します。
3. ステップ 1 と 2 からの結果に基づいて、ユーザの属するすべての役割の権限を集約します。この複合役割を使用して、システムは以下のようにアクションのための権限を評価します。
 - a. このアクションについて、いずれかの役割のアクセス権が「拒否済み」の場合、ユーザはアクションの実行を許可されません。

- b. このアクションについて、どの役割のアクセス権も「拒否済み」でなければ、このアクションについて、いずれかの役割のアクセス権が「付与」であるかどうかを検査します。そうであれば、ユーザはアクションの実行を許可されます。
- c. a と b がどちらも真でない場合、ユーザはアクセス権を拒否されます。

所有者役割およびフォルダ所有者役割の使用

デフォルトでは、各セキュリティポリシーにはすべての権限を付与された所有者役割とフォルダ所有者役割が含まれています。これらの役割は、セキュリティポリシーを作成したときにデフォルトで作成されます。これらの役割は、カスタム設計のセキュリティポリシーから削除するか、権限を変更するか、デフォルト権限を使用することができます。これらの役割の権限は、グローバルセキュリティポリシー内で変更できますが、削除することはできません。

所有者役割およびフォルダ所有者役割は、すべてのユーザに適用されます。それらの役割にユーザを割り当てる必要はありません。所有者役割は、ユーザが作成した単一のオブジェクトに適用されます。フォルダ所有者役割は、ユーザが所有するフォルダ内のすべてのオブジェクトに適用されます。

これらの役割は、ユーザの所有していないオブジェクトに対するアクセスを制限するのに便利です。例えば、セキュリティポリシー内のすべてのオブジェクトに対して読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を作成することもできます。すべてのユーザに読み取り専用役割を割り当てます。他の役割で権限が明示的に拒否されない限り、各ユーザは (所有者役割の下で) 自分自身のオブジェクトと (フォルダ所有者役割の下で) 自分自身のフォルダ内のオブジェクトを編集または削除できますが、他のユーザが所有するオブジェクトおよびフォルダは (読み取り専用役割の下で) 表示することだけができます。

セキュリティポリシーの設計に関するガイドライン

セキュリティポリシーを設計するときは、以下のガイドラインに従ってください。

- **常に単純な設計を心掛けてください。** Campaign では、複数のセキュリティポリシーおよび役割を作成できますが、セキュリティ設計はできるだけ単純にしておく必要があります。できるだけ少数のポリシーと役割を使用して、セキュリティのニーズを満たしてください。例えば、最小限のレベルでは、デフォルトのグローバルセキュリティポリシーをそのまま使用し、新しい役割やポリシーを作成しないでおくこともできます。
- **セキュリティポリシー間での潜在的な競合を避けてください。** 組織で複数のセキュリティポリシーを実装する場合、ポリシーを設計するときに常に潜在的な競合に留意してください。例えば、複数のセキュリティポリシー内で移動とコピーの権限を持つユーザは、そうした権限を持つ複数のポリシーにまたがった場所に、オブジェクトやフォルダを移動またはコピーすることができます。それを実行した場合、移動したオブジェクトまたはフォルダは宛先 (別のフォルダにある場合) のセキュリティポリシーを引き継ぐので、ある部門にいる正当なユーザが、宛先のセキュリティポリシーの役割を持っていないために、移動したオブジェクトにアクセスできなくなったり、宛先のセキュリティポリシーでの役割を持っていて、それらのオブジェクトへのアクセスを意図されていなかったユーザが、オブジェクトにアクセスできるようになったりする状況が起きる可能性があります。

- ユーザにオブジェクトの変更を許可するには、表示権限を割り当ててください。
Campaign でオブジェクトを変更するには、多くの場合、オブジェクトに対する表示と変更の両方の権限がユーザに付与されている必要があります。この要件は、以下のオブジェクトに適用されます。
 - キャンペーン
 - フローチャート
 - オファー
 - オファーリスト
 - オファーテンプレート
 - セッション
 - 戦略的セグメント

セキュリティのシナリオ

このセクションではセキュリティモデルの例を示し、セキュリティポリシーを使用して、それらを Campaign に実装する方法について説明します。

- 『シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社』
- 39 ページの『シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社』
- 41 ページの『シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス』

シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社

会社のすべての従業員が、同じオブジェクト・セット (キャンペーン、オファー、テンプレートなど) を処理します。オブジェクトの共有と再利用が奨励されます。従業員のグループが、互いのオブジェクトにアクセスできないようにする必要はありません。管理者は、従業員の組織内での役割に基づいて、それらのオブジェクトに対する従業員のアクセス、変更、または使用の能力を決定する権限セットを作成する必要があります。

解決策

オブジェクトをグループまたは部門によって分離する必要がないので、単一のセキュリティポリシーだけが必要です。既存のグローバルセキュリティポリシーの中で、従業員のジョブに対応する役割を定義し、役割ごとに、各オブジェクトまたは機能に対する適切な権限を定義してください。下記の表は、マネージャ、デザイナー、およびレビュアーの 3 つの役割について、オブジェクト権限のサンプルのサブセットを示しています。例えば、マネージャはキャンペーンとオファーに対して全アクセス権限と編集能力を持ち、レビュアーはキャンペーンとオファーにアクセスできますが、それらの追加、編集、削除、または実行はできません。

オプションとして、これらの役割に一致するユーザグループを IBM Unica Marketing で作成し、それらのグループに単にユーザを追加することによって、ユーザ権限を割り当てることができます。

次の表は、このシナリオでのオブジェクト権限のサンプルのサブセットを示しています。

機能/役割	マネージャ	デザイナー	レビューア
キャンペーン	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンを追加	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンを編集	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンを削除	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンを実行	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンサマ リを表示	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
オファー	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーを追加	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーを編集	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーを削除	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーを回収	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーサマ リを表示	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社

会社に 2 つのビジネス部門 (東部と西部) があり、それらの間でデータは共有されません。各部門で、さまざまな機能を実行している社員が同じオブジェクト (キャンペーン、オファー、テンプレート) にアクセスする必要がありますが、それぞれの役割に応じて、それらのオブジェクトに対する権限が異なります。

解決策

2 つの別々なセキュリティポリシーを、それぞれに適切な役割と権限を使用して定義します。各セキュリティポリシー内の役割は、各部門のニーズに応じて、同じものか異なるものにすることができます。両方の部門にまたがって作業する必要がある個別ユーザ (例えば、管理職、部門間マネージャ、または CEO) を除いて、それぞれのユーザをただ 1 つのポリシー内の役割に割り当てます。それらのユーザには、グローバルポリシー内で役割を割り当てないでください。両方の部門にまたがって作業するユーザに対しては、グローバルポリシー内の役割を割り当て、必要な権限を付与します。

キャンペーンやオファーなどを保持するために、各ポリシーに属するトップレベルフォルダを作成します。これらのフォルダは、それぞれの部門に固有のもので、一方のポリシー内の役割を持つユーザは、他方のポリシーに属するオブジェクトを認識できません。

次の表は、Campaign で考えられるオブジェクト権限のサンプルのサブセットを示しているにすぎません。

表1. 東部部門のセキュリティポリシー

機能/役割	フォルダ所有者	オブジェクト所有者	マネージャ	デザイナー	レビュアー
キャンペーン	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンを追加	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンを編集	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンを削除	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンサマリを表示	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
オファー	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーを追加	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーを編集	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーを削除	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーサマリを表示	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

表2. 西部部門のセキュリティポリシー

機能/役割	フォルダ所有者	オブジェクト所有者	マネージャ	デザイナー	レビュアー
キャンペーン	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンを追加	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• キャンペーンを編集	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

表 2. 西部部門のセキュリティポリシー (続き)

機能/役割	フォルダ所有者	オブジェクト所有者	マネージャ	デザイナー	レビュアー
• キャンペーンを削除	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• キャンペーンサマリを表示	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
オファー	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーを追加	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• オファーを編集	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• オファーを削除	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• キャンペーンを追加	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス

会社のある部門内の従業員は、同じオブジェクト・セット (キャンペーン、オファー、テンプレートなど) に対する読み取り権限を必要としますが、自分自身が所有するオブジェクトと、自分自身が所有するフォルダ内のオブジェクトについてのみ、編集と削除を許可されます。

解決策

オブジェクトの読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を定義します。その部門のすべてのユーザをこの役割に割り当てます。デフォルトの権限を、所有者役割およびフォルダ所有者役割用に定義されたままにしておきます。

注: 単一のセキュリティポリシーだけが必要な会社では、グローバルポリシーを使用して、すべてのユーザをレビュー役割に割り当てることができます。

各ユーザは (所有者役割の下で) 自分自身のオブジェクトと (フォルダ所有者役割の下で) 自分自身のフォルダ内のオブジェクトを編集または削除できますが、他のユーザが所有するオブジェクトおよびフォルダは (読み取り専用役割の下で) 表示することだけができます。

次の表は、このシナリオでのオブジェクト権限のサンプルのサブセットを示しています。

機能/役割	フォルダ所有者	オブジェクト所有者	レビュアー
キャンペーン	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

機能/役割	フォルダ所有者	オブジェクト所有者	レビューアー
• キャンペーンを追加	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• キャンペーンを編集	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• キャンペーンを削除	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• キャンペーンサマリを表示	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
オファー	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
• オファーを追加	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• オファーを編集	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• オファーを削除	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
• オファーサマリを表示	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

セキュリティポリシーの実装

このセクションでは、Campaign でセキュリティポリシーを作成および削除する方法と、Campaign のフォルダおよびオブジェクトにセキュリティポリシーを適用する方法について説明します。

注: Campaign のセキュリティポリシーを処理するには、Marketing Platform で「ユーザの役割と権限」ページを管理する権限を割り当てられている必要があります。マルチパーティション環境では、platform_admin ユーザ、または PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウントだけが、すべてのパーティションでセキュリティポリシーを処理できます。

セキュリティポリシーの作成

1. 「設定」 > 「ユーザの役割と権限 (User Roles & Permissions)」 をクリックします。「ユーザの役割と権限」ページが表示されます。
2. 「キャンペーン」ノードの下で、セキュリティポリシーを追加するパーティションを選択します。
3. 「グローバルポリシー (Global Policy)」 をクリックします。
4. ページの右側で、「ポリシーを追加 (Add Policy)」 をクリックします。
5. 必要であれば、ポリシーの名前と説明を入力します。
6. 「変更を保存」 をクリックします。

新しいポリシーが「ユーザの役割と権限」ページの「グローバルポリシー (Global Policy)」の下にリストされます。デフォルトでは、ポリシーにはフォルダ所有者役割とオブジェクト所有者役割が含まれます。

セキュリティポリシーの削除

Campaign で、ユーザが作成し、使用されていないセキュリティポリシーを削除するには、この手順を使用します。グローバルポリシーは削除できません。

注: Campaign でオブジェクトに適用されているセキュリティポリシーは、削除しないでください。使用中のセキュリティポリシーを削除する必要がある場合は、最初に、そのセキュリティポリシーを使用しているすべてのオブジェクト/フォルダのセキュリティオブジェクトを別のポリシー (例えば、グローバルポリシー) に設定します。そのようにしないと、それらのオブジェクトがアクセス不能になる場合があります。

1. 「設定」 > 「ユーザの役割と権限 (User Roles & Permissions)」 をクリックします。

「ユーザの役割と権限」ページが表示されます。

2. 「キャンペーン」ノードの下で、セキュリティポリシーを削除するパーティションを選択します。
3. 「グローバルポリシー (Global Policy)」の横にあるプラス記号をクリックします。
4. 削除するポリシーをクリックします。
5. 「ポリシーを削除 (Delete Policy)」をクリックします。

確認のダイアログが表示されます。

6. 「OK」をクリックして、ポリシーを削除します。

フォルダまたはオブジェクトへのセキュリティポリシーの割り当て

Campaign でトップレベルのフォルダまたはオブジェクトを作成する場合、そのセキュリティポリシーを選択する必要があります。トップレベルのオブジェクトまたはフォルダに関連付けるために使用できるポリシーは、役割を割り当ててあるポリシーだけです。

デフォルトでは、Campaign のすべてのオブジェクトはグローバルポリシーに関連付けられますが、必要な場合は、オプションのカスタム定義ポリシーを割り当てることができます。

フォルダまたはオブジェクトをセキュリティポリシーに関連付ける場合は、以下の規則に留意してください。

- フォルダ内のオブジェクトにセキュリティポリシーを割り当てることはできません。オブジェクトは、そのオブジェクトが存在するフォルダのセキュリティポリシーを自動的に継承します。
- トップレベルフォルダは、セキュリティポリシーを決定します。フォルダ内のオブジェクトは、サブフォルダも含め、親フォルダのセキュリティポリシーを継承します。つまり、トップレベルフォルダのセキュリティポリシーは、その中にあ

るオブジェクトおよびサブフォルダのセキュリティポリシーを決定します。したがって、フォルダ内のオブジェクトに手動でセキュリティポリシーを割り当てることはできません。オブジェクトのセキュリティポリシーを変更するには、そのオブジェクトを、求めるセキュリティポリシーを持つフォルダ、またはトップレベルのルートフォルダに移動する必要があります。

- **セキュリティポリシーは、オブジェクトを移動またはコピーすると変更されます。** オブジェクトおよびフォルダは、セキュリティポリシーをまたいで移動またはコピーできますが、その移動やコピーを行うユーザは、そうする権限をソースと宛先の両方のポリシーで持っている必要があります。

オブジェクトまたはフォルダを、異なるセキュリティポリシーに属するフォルダまたは場所に移動またはコピーした後、下位のオブジェクトまたはサブフォルダのセキュリティポリシーは、新しいフォルダまたは場所のセキュリティポリシーに自動的に変更されます。

Campaign での管理権限について

Campaign での管理権限は、それぞれのパーティションに割り当てられます。これらの管理機能は、セキュリティポリシー（グローバルセキュリティポリシーも含む）でのオブジェクトに関連した機能のアクセス権限とは異なります。これらのアクセス権限を持つユーザは、パーティション内のオブジェクトに対して、許可されたアクションを実行できます。

各パーティションには、次の 4 つの役割が事前定義されています。

- **システム管理** — すべての権限が使用可能です。デフォルトユーザ `asm_admin` には、この役割が割り当てられます。
- **実行** — クリーンアップ操作の実行、オブジェクト/フォルダの所有権の変更、グローバル抑制の管理などの管理機能を除けば、ほとんどの権限が使用可能です。
- **設計** — 「実行」役割と同じ権限です。
- **レビュー** — すべてのオブジェクトに対する読み取り専用アクセス権限。フローチャートの場合、これらのユーザはフローチャートの編集モードにはアクセスできませんが、保存は許可されません。

上記以外にも、必要に応じてそれぞれのパーティションに管理役割を追加できます。

Campaign で管理の役割と権限を管理する手順は、Marketing Platform で役割と権限を管理する手順と同じです。

レポートフォルダ権限の構成

「分析」メニュー項目、およびオブジェクトタイプ（例えば、キャンペーンとオファーなど）の「レポート」タブへのアクセスを制御できるだけでなく、レポートが IBM Cognos システムに物理的に保管されているフォルダ構造に基づいて、レポートのグループに対する権限を構成できます。

1. **ReportSystem** 役割を持つ Campaign 管理者としてログインします。
2. 「設定」 > 「レポートフォルダの権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)」を選択します。

システムは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システム上にあるフォルダの名前を取り出します。(これは、いずれかのパーティションについてフォルダ権限を構成する場合は、すべてのパーティションについて、それを構成する必要があることを意味します。)

3. 「設定」 > 「ユーザ権限」 > 「キャンペーン」
4. 「キャンペーン」 ノードの下で、最初のパーティションを選択します。
5. 「役割の追加と権限の割り当て (Add Roles and Assign Permissions)」を選択します。
6. 「権限の保存および編集」を選択します。
7. 「権限」 フォームで、「レポート」を展開します。「レポート」項目は、初めて「レポートフォルダの権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)」オプションを実行するまで存在しないことに注意してください。
8. レポートフォルダのアクセス設定を適切に構成した後、変更を保存します。
9. 各パーティションについて、ステップ 4 から 8 を繰り返し実行します。

リファレンス: Campaign での管理権限

Campaign には、以下のカテゴリの管理権限が含まれています。

- 管理
- オーディエンスレベル
- データソース
- デイメンション階層
- 履歴
- ログ
- レポート
- システムテーブル
- ユーザテーブル
- ユーザ変数

注: カテゴリヘッダーの権限を設定することにより、そのカテゴリ内のすべての機能に対して権限を設定できます。

管理

権限	説明
Access Monitoring Area	キャンペーン監視域へのアクセスを許可します。
Perform Monitoring Tasks	キャンペーン監視域での監視タスクの実行を許可します。
Access Analysis Area	キャンペーン分析域内のレポートへのアクセスを許可します。
Access Optimizations Link	Optimize がインストールされている場合、そのアプリケーションへのアクセスを許可します。
Run svradm Command Line Tool	Campaign サーバマネージャ (unica_svradm) を使用した管理機能の実行を許可します。

権限	説明
Run genrpt Command Line Tool	Campaign レポート生成ユーティリティ (unica_acgenrpt) の実行を許可します。
Takeover Flowcharts in Edit Mode	「編集」または「実行」モードで、他のユーザからのフローチャートの制御の引き継ぎを許可します。 注: 「ロックされた」フローチャートの制御を引き継ぐと、他のユーザはロックアウトされ、最後の保存以降のフローチャート内の変更は、すべて失われます。
Connect to Running Flowcharts	実行中のフローチャートへの Campaign サーバマネージャ (unica_svradm) または Campaign ユーザインタフェースからの接続を許可します。
Terminate Server Processes	Campaign サーバマネージャ (unica_svradm) を使用した Campaign サーバ (unica_acsvr) の終了を許可します。
Terminate Campaign Listener	Campaign サーバマネージャ (unica_svradm) または svrstop ユーティリティを使用した Campaign リスナ (unica_aclsr) の終了を許可します。
Run sesutil Command Line Tool	Campaign セッションユーティリティ (unica_acsesutil) の実行を許可します。
Override Virtual Memory Settings	フローチャートの詳細設定で仮想メモリ設定のオーバーライドを許可します。
Access Custom Attributes	「キャンペーン設定」ページからのカスタム属性定義に対するアクセスおよび管理を許可します。
Cell Report Access	フローチャートの「編集」ページで、「レポート」アイコンからのセルレポートへのアクセスを許可します。明示的に認可されている場合を除き、セルコンテンツレポートへのアクセスは除外されます。
Cell Report Export	セルレポートへのアクセス権が付与されている場合、セルレポートの出力とエクスポートを許可します。
Cell Content Report Access	フローチャートの「編集」ページで、「レポート」アイコンからのセルコンテンツレポートへのアクセスを許可します。
Cell Content Report Export	セルコンテンツレポートのエクスポートが認可されている場合、セルコンテンツレポートの出力とエクスポートを許可します。
Perform Cleanup Operations	unica_acclean またはカスタムツールを使用したクリーンアップ操作の実行を許可します。
Change Object/Folder Ownership	オブジェクトまたはフォルダの所有権の変更を許可します。

オーディエンスレベル

権限	説明
Add Audience Levels	「キャンペーン設定」ページの「オーディエンスの管理」で、新しいオーディエンスレベルの作成を許可します。
Delete Audience Levels	「キャンペーン設定」ページの「オーディエンスの管理」で、既存のオーディエンスレベルの削除を許可します。
Manage Global Suppressions	Campaign でのグローバル抑制セグメントの作成と構成を許可します。

権限	説明
Disable Suppression in Flowchart	フローチャートの「詳細設定」ダイアログで、「このフローチャートのグローバル抑制を無効にする (Disable Global Suppressions for This Flowchart)」チェックボックスのクリアまたは選択を許可します。

データソース

権限	説明
Manage Datasource Access	管理域からの、またフローチャート内での、データソースログインの管理を許可します。
Set Save with DB Authentication	テーブルカタログおよびフローチャートテンプレート内で「データベース認証情報と共に保存」フラグを有効にすることを許可します。

ディメンション階層

権限	説明
Add Dimension Hierarchies	新しいディメンション階層の作成を許可します。
Edit Dimension Hierarchies	既存のディメンション階層の編集を許可します。
Delete Dimension Hierarchies	既存のディメンション階層の削除を許可します。
Refresh Dimension Hierarchies	既存のディメンション階層の最新表示を許可します。

履歴

権限	説明
Log to Contact History Tables	コンタクトプロセスを構成するとき、コンタクト履歴テーブルへのログを有効または無効にすることを許可します。
Clear Contact History	コンタクト履歴テーブルからの項目のクリアを許可します。
Log to Response History Tables	レスポンスプロセスを構成するとき、レスポンス履歴テーブルへのログを有効または無効にすることを許可します。
Clear Response History	レスポンス履歴テーブルからの項目のクリアを許可します。

ログ

権限	説明
View System and Flowchart Logs	フローチャートログおよびシステムログの表示を許可します。
Clear Flowchart Logs	フローチャートログのクリアを許可します。

権限	説明
Override Flowchart Log Options	デフォルトのフローチャートログオプションのオーバーライドを許可します。

レポート (フォルダの権限)

「レポート」ノードは、初めて「設定」メニューから「**レポートフォルダの権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)**」オプションを実行した後に、パーティションの権限ページに表示されます。同期プロセスは、IBM Cognos 8 BI システムに物理的に置かれたレポートのフォルダ構造を決定し、その後、それらのフォルダの名前をこのノードの下にリストします。

このノードの下の設定値は、リストに表示されるフォルダ内のレポートへのアクセスを認可または拒否します。

システムテーブル

権限	説明
Map System Tables	システムテーブルのマッピングを許可します。
Remap System Tables	システムテーブルの再マップを許可します。
Unmap System Tables	システムテーブルのマッピング解除を許可します。
Delete System Table Records	システムテーブルからのレコードの削除を許可します。

ユーザテーブル

権限	説明
Map Base Tables	ベーステーブルのマッピングを許可します。
Map Dimension Tables	ディメンションテーブルのマッピングを許可します。
Map General Tables	その他のテーブルのマッピングを許可します。
Map Delimited Files	区切り文字で区切られているファイルへのユーザテーブルのマッピングを許可します。
Map Fixed-Width Flat Files	固定幅のフラットファイルへのユーザテーブルのマッピングを許可します。
Map Database Tables	データベーステーブルへのユーザテーブルのマッピングを許可します。
Remap User Tables	ユーザテーブルの再マップを許可します。
Unmap User Tables	ユーザテーブルのマッピング解除を許可します。
Recompute Counts and Values	テーブルマッピング内の「 計算 (Compute) 」ボタンを使用して、テーブルのカウントと値を再計算することを許可します。
Use Raw SQL	選択プロセスクエリ、カスタムマクロ、およびディメンション階層での未加工 SQL の使用を許可します。

ユーザ変数

権限	説明
Manage User Variables	フローチャート内のユーザ変数の作成、削除、およびデフォルト値の設定を許可します。
Use User Variables	出力ファイルまたはテーブル内でのユーザ変数の使用を許可します。

Windows の偽装の管理

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『Windows の偽装とは何か』
- 『Windows の偽装を使用する理由』
- 『Campaign ユーザと Windows ユーザの関係はどのようなものか』
- 50 ページの『Windows の偽装グループ』
- 50 ページの『Windows の偽装と、IBM Unica Marketing へのログイン』

Windows の偽装とは何か

Windows の偽装とは、Campaign の管理者が Campaign ユーザを Windows ユーザに関連付けられるようにするメカニズムのことです。これにより、Campaign ユーザによって起動された Campaign プロセスを、対応する Windows ユーザの資格情報の下で実行できるようになります。

例えば、Windows の偽装が有効になっている場合、Campaign ユーザの jsmith がフローチャートを編集すると、unica_acsvr プロセスが、Marketing Platform のログイン名 jsmith に関連付けられた Windows ユーザ ID の下で開始されます。

Windows の偽装を使用する理由

Windows の偽装を使用すると、Windows レベルのセキュリティ権限をファイルアクセスに利用できます。システムが NTFS を使用するようセットアップされている場合は、ユーザおよびグループによるファイルとディレクトリへのアクセス権を制御できます。

また、Windows の偽装を使用すると、Windows システムの監視ツールを使用して、どのユーザがどの unica_acsvr プロセスをサーバ上で実行しているかを知ることができます。

Campaign ユーザと Windows ユーザの関係はどのようなものか

Windows の偽装を使用するには、Campaign ユーザと Windows ユーザの間に 1 対 1 の関係を確立する必要があります。つまり、それぞれの Campaign ユーザは、正確に同じユーザ名を持つ 1 人の Windows ユーザに対応する必要があります。

一般に、管理は Campaign を使用する既存の Windows ユーザの集合から始まります。管理者は、関連する Windows ユーザと正確に同じ名前を持つ Campaign ユーザを、Marketing Platform 内に作成する必要があります。

Windows の偽装グループ

Campaign ユーザをセットアップした各 Windows ユーザを、特別な Windows の偽装グループに配置する必要があります。次に、そのグループを特定のポリシーに割り当てる必要があります。

その後、管理用タスクを容易にするために、グループの Campaign パーティションディレクトリに読み取り/書き込み/実行権限を付与することができます。

Windows の偽装と、IBM Unica Marketing へのログイン

Windows の偽装がセットアップされている場合、ユーザが Windows にログインすると、Campaign ユーザがシングル・サインオンを使用して、IBM Unica Marketing に自動的にログインします。ユーザがブラウザを開いて IBM Unica Marketing URL に進むと、再度ログインしなくても直ちに IBM Unica Marketing の開始ページが表示されます。

Windows の偽装の処理

Windows の偽装をセットアップするには、このセクションで説明する以下の作業を行う必要があります。

- 『Windows の偽装プロパティの設定』
- 『Campaign ユーザの作成』
- 51 ページの『Windows の偽装グループの作成』
- 51 ページの『Windows の偽装グループのポリシーへの割り当て』
- 51 ページの『Windows の偽装グループへの権限の割り当て』

注: Windows の偽装を実行するには、LDAP と Active Directory が必要です。

LDAP と Active Directory のセットアップについては、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Windows の偽装プロパティの設定

「構成」ページで、Campaign > unicaACLlistener カテゴリの enableWindowsImpersonation プロパティの値を TRUE に設定します。

注: Windows ドメインコントローラのセットアップに基づいて、追加のプロパティ要件が存在する場合があります。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」のシングルサインオンのセクションを参照してください。

Campaign ユーザの作成

Marketing Platform を使用して、Campaign の内部ユーザまたは外部ユーザを作成できます。

外部ユーザを作成するには、Active Directory ユーザとグループの同期を構成します。作成する各ユーザは、そのユーザの Windows ユーザ名と同じログイン名を持っている必要があります。

Windows の偽装グループの作成

注: この作業を実行するには、Windows サーバ上で管理権限を持っている必要があります。

Campaign ユーザ用の Windows グループを特に作成します。次に、Campaign ユーザに対応する Windows ユーザをそのグループに追加します。

グループの作成については、Microsoft Windows の資料を参照してください。

Windows の偽装グループのポリシーへの割り当て

注: この作業を実行するには、Windows サーバ上で管理権限を持っている必要があります。

Campaign ユーザに対応するユーザを保管する Windows グループを作成した後、そのグループを以下のポリシーに割り当てる必要があります。

- プロセスのメモリクォータの調整
- トークンオブジェクトの作成
- プロセスレベルトークンの置き換え

ポリシーへのグループの割り当てについては、Microsoft Windows の資料を参照してください。

Windows の偽装グループへの権限の割り当て

Windows Explorer を使用して、Windows の偽装グループに Campaign インストール済み環境の `partitions/partition_name` フォルダに対する 「read/write/execute」 権限を付与します。

フォルダへの権限の割り当てについては、Microsoft Windows の資料を参照してください。

プロキシサーバ認証サポートについて

プロキシサーバを介してすべてのインターネットトラフィックを受け渡すよう Campaign を構成および実行するお客様は、プロキシサーバ認証サポートを使用できます。このフィーチャーを使用すると、Campaign の Active-X コンポーネントは、認証を必要とするプロキシサーバを介して接続し、(ユーザごとに) 保管された資格情報を自動的に受け渡すことができます。プロキシを介したアクセスは、以下の認証メカニズムを使用して構成できます。

- 基本
- ダイジェスト
- NTLM (NT LAN マネージャ)
- ネゴシエーション (Kerberos または NTLM へと解決される場合がある)

注: サポートされるメカニズムの実際のバージョンは、Internet Explorer ブラウザによって決定されます。

ブラウザでのローカルエリアネットワーク設定のサポートについて

Active-X コンポーネントは、以下のローカルエリアネットワーク (LAN) 設定の Internet Explorer (IE) オプションをサポートしています。

- 自動構成 (自動的に設定を検出し、Proxy Auto Configuration (PAC) スクリプトを自動構成スクリプトとして使用する設定を含む)。
- プロキシサーバ (プロキシサーバを LAN に使用する設定、ローカルアドレスについてプロキシサーバをバイパスする設定、および HTTP プロキシアドレスおよびポートのほか、例外についての拡張設定を含む)。

注: Active-X コンポーネントは、http または https スキームを使用するために、PAC ファイル・アドレス (提供されている場合) を必要とします (例えば、http://machine:port/proxy.pac)。IE はファイル・スキーム (例えば、file://C:/windows/proxy.pac) を認識しますが、Active-X コンポーネントは、ファイル・スキームが使用された場合、PAC ファイルを見つけることができません。また、Active-X コンポーネントは、認証が必要な場合 (例えば、PAC ファイルが認証を必要とする Web サーバによってサービスされている場合) にも、PAC ファイルを見つけることができません。

proxy 名を持つ仮想データソース用の認証資格情報を設定するには

Campaign ユーザごとに、Marketing Platform で、「proxy」という名前の仮想データソース用の認証資格情報 (ユーザ名とパスワード) を設定する必要があります。これらの資格情報は、プロキシサーバへの接続に使用されます。

1. 「設定」>「ユーザ」ページで、Campaign ユーザごとに proxy という名前のデータソースを追加します。
2. proxy データソース用のユーザ名とパスワードを、プロキシサーバのユーザ名とパスワードに設定します。

注: このデータは、Marketing Platform に保管されるときに自動的に暗号化されますが、Web サーバから Active-X の実装に渡されるときは、(暗号化されるのではなく) 単にエンコードされます。この通信に追加のセキュリティが必要な場合は、SSL を使用するように Campaign を構成する必要があります。

注: プロキシサーバ用のユーザ名またはパスワードを変更した場合、ユーザは各ユーザの「proxy」データソースの値を編集することにより、これらの認証値を更新して、一致させる必要があります。

第 6 章 構成の管理

IBM Unica Marketing を初めてインストールするときは、「構成」ページに、IBM Unica Marketing Platformの構成に使用されるプロパティといくつかのグローバル構成プロパティのみが表示されます。追加の IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールするときは、それらのアプリケーションの構成に使用されるプロパティが Marketing Platform に登録されます。その後、それらのプロパティが「構成」ページに表示され、そこで値の設定または変更ができるようになります。

アプリケーションによっては、中央リポジトリに格納されない追加構成プロパティがあることがあります。アプリケーションのすべての構成オプションについて詳しくは、アプリケーションの資料を参照してください。

プロパティカテゴリについて




Marketing Platform を最初にインストールしたときに、レポート、一般、およびプラットフォームというカテゴリが表示されます。これらのカテゴリには、スイートにインストールされるすべての IBM Unica Marketing アプリケーションに適用される、以下のプロパティが含まれています。

- デフォルトのロケール設定
- ログインモードおよびモード固有の設定を指定するプロパティが含まれた、セキュリティカテゴリおよびサブカテゴリ
- パスワード設定
- データフィルターの構成に使用されるプロパティ
- スケジュールの構成に使用されるプロパティ
- レポート機能の構成に使用されるプロパティ

インストールされる IBM Unica Marketing アプリケーションに応じて、追加カテゴリにはアプリケーション固有のカテゴリおよびサブカテゴリが含まれます。例えば、Campaign をインストールした後は、キャンペーンカテゴリに Campaign関連のプロパティおよびサブカテゴリが含まれています。

カテゴリタイプを識別する

カテゴリは 3 つのタイプのいずれかで、以下のようにそれぞれ別のアイコンによって識別されます。

カテゴリタイプ	アイコン
構成可能なプロパティが含まれていないカテゴリ	
構成可能なプロパティが含まれているカテゴリ	
新規カテゴリの作成に使用できるテンプレートカテゴリ	

テンプレートを使用してカテゴリを複製する

IBM Unica Marketing アプリケーションのプロパティは、アプリケーションのインストール時に Marketing Platform に登録されます。アプリケーションの構成にカテゴリの複製が必要な場合、カテゴリテンプレートが用意されています。新規カテゴリを作成するには、テンプレートを複製します。例えば、適切なテンプレートを複製することによって、新規のCampaignパーティションまたはデータソースを作成することができます。テンプレートから作成したカテゴリを削除することもできます。

カテゴリテンプレートを識別する

「構成」ページで、ナビゲーションツリーにカテゴリテンプレートが表示されます。ツリー内では、カテゴリテンプレートのラベルがイタリックになっていて小括弧で囲まれているので、識別することができます。

新規カテゴリに名前を付ける

新規カテゴリに名前を付ける際には、以下の制限が適用されます。

- ツリー内で兄弟関係にあるカテゴリ間で (つまり同じ親カテゴリを共有するカテゴリ間で) 固有の名前である必要があります。
- 以下の文字は、カテゴリ名には使用できません。

!	^
"	<
•	>
#	=
\$?
%	@
&	[
(]
)	{
*	}
+	\
:	/
;	
,	'
	~

また、名前をピリオドで始めることはできません。

テンプレートから作成したカテゴリを削除する

デフォルトでは、テンプレートから作成したカテゴリはすべて削除できます。

カテゴリの削除

「構成」ページには、削除できるカテゴリと削除できないカテゴリがあります。テンプレートから作成したカテゴリは、すべて削除できます。また、IBM Unica Marketing 製品が登録されている場合、そのカテゴリセットには削除可能なカテゴリが含まれている場合があります。


「構成」ベースで削除できるカテゴリには、ナビゲーションツリーで該当カテゴリを選択したときに表示される「設定」ページに「**カテゴリの削除**」リンクが表示されます。

プロパティの説明について

プロパティの説明には以下のいずれかの方法でアクセスできます。

- オンラインヘルプを起動するには、「ヘルプ」>「このページのヘルプ」をクリックします。製品をクリックし、それに続くページで構成カテゴリをクリックして、カテゴリ内のすべてのプロパティを説明するトピックに移動します。
- 「ヘルプ」>「製品資料」をクリックした際に起動されるページからは、PDF 形式のすべての製品資料にアクセスすることができます。すべてのプロパティの説明は、「*Marketing Platform Administrator's Guide*」の付録に含まれています。

画面の最新表示について

構成ナビゲーションツリーの上部にある最新表示ボタン  には、以下の機能があります。

- ツリーの内容を最新表示します。ツリーを表示している間に構成設定が更新される場合があるので、このボタンは構成設定の最新情報を取得したい場合に役立ちます (例えば、アプリケーションが登録または登録解除された可能性や、他のユーザが「構成」ページを使用して設定を更新した可能性があります)。
- 必要に応じてツリーを縮小または展開して、最後にノードを選択したときの状態にナビゲーションツリーを戻します。

重要: 編集モードになっているときに「最新表示」をクリックすると、ページは読み取りモードに戻ります。保存されていなかった変更はすべて失われます。

デフォルトのユーザロケール設定について

Marketing Platform には、これを実装するすべての IBM Unica Marketing アプリケーションに適用されるデフォルトのロケール属性があります。このデフォルトを設定するには、「スイート」カテゴリの「地域設定」プロパティの値を設定します。

このプロパティについては、「構成」領域でオンラインヘルプを参照するか、「*Marketing Platform Administrator's Guide*」を参照してください。IBM Unica Marketing アプリケーションにこの属性が実装されているかどうかを調べるには、そのアプリケーションの資料を参照してください。

ユーザのアカウントでこのプロパティの値を変更することによって、ユーザ単位でこれらのデフォルト値をオーバーライドすることができます。詳しくは、15 ページの『ユーザごとのロケール設定の指定』を参照してください。

プロパティ値の編集

このセクションでは、「構成」ページでプロパティ値を編集する方法について説明します。

カテゴリに移動する

1. IBM Unica Marketing にログインします。
2. ツールバーの「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページに構成カテゴリツリーが表示されます。
3. カテゴリの横にある正符号アイコンをクリックします。

カテゴリが開き、サブカテゴリが表示されます。カテゴリにプロパティが含まれている場合は、プロパティがその現行値と共に表示されます。

4. 編集するプロパティが表示されるまで、カテゴリとサブカテゴリを展開してください。

プロパティ値を編集する

1. 『カテゴリに移動する』に説明されている方法で、設定するプロパティが含まれているカテゴリまで移動します。

そのカテゴリの「設定」ページに、カテゴリ内のすべてのプロパティとその現行値が表示されます。

2. 「設定の編集」をクリックします。

カテゴリの「設定の編集」ページでは、プロパティ値が編集可能フィールドに表示されます。

3. 必要に応じて値を入力または編集します。

UNIX では、すべてのファイル名およびディレクトリ名で大/小文字が区別されません。入力するファイル名およびフォルダ名の大/小文字は、UNIX マシン上のファイル名またはフォルダ名の大/小文字と一致する必要があります。

4. 変更を保存するには「保存して終了する」をクリックし、保存せずにページを終了するには「キャンセル」をクリックします。

カテゴリの複写と削除

このセクションでは、「構成」ページでカテゴリを複写および削除する方法について説明します。

テンプレートから新規カテゴリを作成する

1. 「構成」ページで、複写するテンプレートカテゴリまで移動します。

他のカテゴリと異なり、テンプレートカテゴリのラベルはイタリックで、小括弧で囲まれています。

2. テンプレートカテゴリをクリックします。

「テンプレートからカテゴリの作成 (Create category from Template)」ページが表示されます。

3. 「**新規カテゴリ名**」フィールドに名前を入力します (必須)。
4. 必要な場合には、新規カテゴリのプロパティを編集します。これは後で行うこともできます。
5. 「**保存して閉じる**」をクリックして、新規構成を保存します。

新規カテゴリがナビゲーションツリーに表示されます。

カテゴリを削除する

1. 「構成」ページで、削除するカテゴリまで移動し、クリックしてそのカテゴリを選択します。

そのカテゴリの「設定」ページが表示されます。

2. 「**カテゴリの削除**」リンクをクリックします。

「*"category name"* を削除してもよろしいですか」というメッセージがウィンドウに表示されます。

3. 「**OK**」をクリックします。

そのカテゴリは、ナビゲーションツリーに表示されなくなります。

第 7 章 レポートの構成

レポート機能の場合、IBM Unica Marketing は IBM Cognos 8 BI (サードパーティのビジネスインテリジェンスアプリケーション) と統合します。レポート作成は、以下のコンポーネントに依存します。

- IBM Cognos 8 BI 8.4 のインストール
- IBM Enterprise アプリケーションと IBM Cognos 8 のインストールを統合する IBM Unica Marketing コンポーネントのセット
- いくつかの IBM Unica Marketing アプリケーションの場合、IBM Enterprise アプリケーションのシステムテーブルでレポートビューやテーブルを作成できるようにするレポートスキーマ
- IBM Cognos Report Studio で作成された IBM Unica Marketing アプリケーションのレポート例

この章では、各レポートコンポーネントについて説明し、インストール後の構成に関する情報を提供します。

IBM Unica Marketing スイートのレポートについて

IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールする場合、各アプリケーションは自己を Marketing Platform に登録します。登録処理時に、各アプリケーションは自己のエントリを「分析」メニュー項目に追加します。

アプリケーションのレポートパッケージを構成した後は、次のようになります。

- アプリケーションの「分析」メニュー項目で、クロスオブジェクトレポートへのアクセスが提供されます。
- 次に、該当するオブジェクトの「分析」タブに単一オブジェクトレポートが表示されます。
- サンプルダッシュボードにアプリケーションのダッシュボードレポートが表示され、それらを新規ダッシュボードに追加できるようになります。

通常、IBM Unica アプリケーションのインストール時に、IBM Unica 製品のレポートパッケージがインストールされます。レポートスキーマは、すべてのレポートパッケージに含まれているわけではありませんが、以下の IBM Cognos BI コンポーネントはすべてに含まれています。

- IBM Unica アプリケーションレポート用のカスタマイズ可能な IBM Cognos レポートメタデータモデル
- IBM Cognos 8 BI Report Studio で作成された、カスタマイズ可能な IBM Unica アプリケーションレポート
- レポートデータモデルおよびレポートについて説明した解説書

IBM Cognos モデルは、IBM Unica アプリケーションデータベース内のレポートビュー (またはテーブル) を参照し、また IBM Unica レポートパッケージでも配信される IBM Cognos 8 レポートで、そのデータを利用できるようにします。

インストール直後は、レポートはデフォルトの状態にあり、サンプルのレポートと見なされます。理由は次のとおりです。多くの IBM Unica アプリケーションには、追加やカスタマイズが可能なオブジェクト、属性、またはメトリックのセットがあります。例えば、Campaign では、レスポンスタイプ、カスタムキャンペーン属性、追加オーディエンスレベルなどを追加することができます。ご使用のシステムのデータ設計を実装した後で、レポートを再表示して、システムにとって重要なデータを表示するようにレポート例をカスタマイズしたり、新規レポートを作成したりすることができます。

ユーザの実装環境のデータ設計の後でレポートを構成する方法は、IBM Unica Marketing システムに組み込まれている IBM Unica アプリケーションによって異なります。

- Campaign および Interact の場合は、レポートスキーマをカスタマイズして追加属性、メトリック、レスポンスタイプなどを組み込み、その後でインストール時に作成されたビューまたはレポートテーブルを更新します。その時に、IBM Cognos レポートデータモデルと新しく更新されたレポートビューを同期化し、Cognos のコンテンツストアに改訂済みのモデルを公開します。これで、新規カスタム属性が、Report Studio で使用可能になり、それらの属性をレポート例に追加したり、属性を表示する新規レポートを作成したりすることができます。
- レポートスキーマを提供しない IBM Unica アプリケーションおよび eMessage (カスタマイズ可能なスキーマを提供) については、Cognos IBM レポートのみを構成します。

このセクションでは、セキュリティモデル、スキーマ、データモデル、およびレポートについて説明します。

レポートおよびセキュリティについて

レポート機能は、以下のアクセス制御機構によって制御されます。

- ユーザが IBM インタフェースからレポートを実行可能かどうかは、IBM Unica アプリケーションアクセス設定によって付与されている権限に応じて決まります。さらに、Campaign、eMessage、および Interact の場合、IBM Cognos システム上でのフォルダ構造に基づいて、レポートのグループへのアクセス権限を付与または否認することができます。(この機能は、その他の製品には使用できません。)
- 管理者がスキーマのカスタマイズやレポート SQL ジェネレータの実行を行えるかどうかは、Marketing Platform に構成されている権限によって決まります。
- また、IBM Cognos 8 BI システムが IBM 認証を使用するように構成し、それによって IBM Cognos システムから IBM アプリケーションデータへのアクセスを制御することもできます。

レポートフォルダ権限について

IBM Cognos システムにインストールする IBM Cognos レポートパッケージには、フォルダに編成する IBM Unica アプリケーション用のレポートの仕様が含まれています。例えば、Interact 用のフォルダには、「Interact Reports」という名前が付けられ、レポートの仕様は、IBM Cognos システム上のそのフォルダの中に物理的に配置されます。

Campaign、eMessage、および Interact の場合、レポートのグループに対する権限を、それらが IBM Cognos システム内で物理的に格納されているフォルダ構造に基づいて構成することができます。

IBM Cognos ファイルディレクトリとの同期

IBM Cognos システム上のレポートフォルダの IBM Unica システムを認識できるようにするには、IBM Unica インタフェースの「設定」メニューにある「レポートフォルダの権限の同期」オプションを実行します。このオプションは、IBM Cognos システムに接続して、どのフォルダが存在するのかを判別します。その後、Campaign パーティションのユーザ権限リストに新規エントリを作成します。「レポート」という名前のエントリが、「ログ」エントリと「システムテーブル」エントリとの間の権限リストに表示されます。これで、「レポート」エントリを展開すると、レポートフォルダ名がリストされ、権限が表示されています。

新規権限のデフォルト設定は「不認可」です。したがって、「レポートフォルダの権限の同期」オプションを実行した後で、レポートフォルダの権限を構成する必要があります。そうしないと、誰も IBM Cognos レポートにアクセスできなくなります。

パーティションとフォルダパーティション

フォルダ同期プロセスでは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システムにある全フォルダの名前を取得することに注意してください。これは、どのパーティションのレポートフォルダ権限を構成すると決めた場合でも、すべてのパーティションに対してそれを構成する必要があるということです。

IBM Cognos BI システムの保護について

ご使用の IBM システムを IBM Cognos 8 BI システムと統合した場合、2 つの方法で IBM Cognos システムから IBM アプリケーションのデータへのアクセス権限が提供されます。

- IBM アプリケーションから: 誰かが IBM インタフェースからレポートを要求した場合、IBM システムは IBM Cognos システムに接続し、レポートビューまたはテーブルに対してクエリを実行してから、IBM インタフェースに戻ってレポートを送信します。
- IBM Cognos アプリケーションから: ユーザが Framework Manager で IBM アプリケーションのデータモデルを処理する場合、または Report Studio でアプリケーションのレポートを処理する場合は、IBM アプリケーションのデータベースに接続します。

デフォルトの状態では、IBM Cognos システムは無保護です。これは、IBM Cognos アプリケーションにアクセスできるユーザなら誰でも、IBM アプリケーションのデータベースからデータへのアクセスを持っていることを意味します。

IBM Unica 認証プロバイダ

IBM Cognos が IBM 認証を使用するように構成されている場合は、Marketing Platform のセキュリティ層と通信する IBM Cognos 8 BI システムに IBM Unica 認証プロバイダをインストールして、ユーザを認証します。アクセス権限について

は、ユーザは有効な IBM ユーザでなければならず、また次の権限のいずれかを付与する役割を持っている必要があります。

- **report_system**、これは IBM インタフェースのレポート構成オプションへのアクセス権限も付与します。デフォルトの役割「**ReportsSystem**」は、この権限を付与します。
- **report_user**、これは IBM インタフェースのレポート構成オプションではなく、レポートへのアクセス権限を付与します。デフォルトの役割「**ReportsUser**」は、この権限を付与します。

「認証」と「ユーザごとに認証」の 2 つの認証オプションがあります。

モード = 認証

認証モードが「認証」に設定されている場合、IBM Unica Marketing システムと IBM Cognos システムとの間の通信は、マシンレベルで保護されています。

ユーザは単一レポートのシステムユーザを構成し、レポート構成設定でそれを識別します。レポートのシステムユーザを構成するには、以下を実行します。

- ユーザを作成し、そのユーザに、**ReportsSystem** の役割を割り当てます。**ReportsSystem** は、すべてのレポート機能へのアクセス権限をユーザに付与します。
- ユーザのデータソースに、IBM Cognos システムのログイン資格情報を格納します。
- 規則に従って名前を付けます (必須ではありません)。**cognos_admin** と名前を付ける。

IBM Unica 認証プロバイダは、次のようにしてユーザを認証します。

- IBM Unica Marketing ユーザがレポートを表示しようとするたびに、**Marketing Platform** は、IBM Cognos システムとの通信で、レポートシステムユーザのレコードに格納された資格情報を使用します。認証プロバイダは、これが有効なユーザであることを確認します。
- レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、レポートシステムユーザ (**cognos_admin**) としてログインし、認証プロバイダは、それが有効なユーザであることを確認します。

モード = ユーザごとに認証

認証モードが「ユーザごとに認証」に設定されている場合、システムはレポートシステムユーザを使用しません。代わりに、個々のユーザのユーザ資格情報を評価します。

- IBM ユーザがレポートを表示しようとするたびに、**Marketing Platform** は、そのユーザの資格情報を IBM Cognos システムとの通信に組み込みます。認証プロバイダは、これが有効なユーザであることを確認します。
- レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、自分自身の資格でログインし、認証プロバイダが資格情報を検証します。

このモードでは、すべてのユーザがレポートを参照するために **ReportsUser** または **ReportsSystem** のいずれかの役割を持っている必要があります。通常は、1 人または

2 人の管理者に ReportsSystem の役割を割り当て、IBM インタフェースでレポートを参照する必要がある IBM ユーザのユーザグループに ReportsUser の役割を割り当てます。

認証と権限

認証プロバイダでは、レポート権限を確認する以外に権限検査を行いません。IBM Cognos アプリケーションにログインするレポート作成者は、レポートフォルダ権限が IBM システム上でどのように設定されていても、IBM Cognos システム上のすべてのレポートにアクセスすることができます。

レポート権限のリファレンス

レポート構成機能にアクセスし、次の設定によってレポート自体を制御します。

ユーザインタフェース項目	アクセス制御
「設定」メニューの「構成」オプション (「構成」ページでレポートスキーマを構成します)	「設定」>「ユーザの役割と権限 (User Roles & Permissions)」>「プラットフォーム」の下にあるプラットフォーム権限「構成へのアクセス権限 (Access to Configuration)」
「設定」メニューの「レポート SQL ジェネレータ」および「レポートフォルダの権限の同期」オプション	「設定」>「ユーザの役割と権限 (User Roles & Permissions)」>「プラットフォーム」の下にあるレポート権限「report_system」 標準の ReportsSystem 役割には、この権限があります。
分析機能のメニュー	製品ごとに異なるアプリケーションのアクセス設定は、次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • Campaign、eMessage、および Interact の場合は、「設定」>「ユーザの役割と権限 (User Roles & Permissions)」のキャンペーンパーティションレベルにある「管理」>「アクセス分析セクション (Access Analysis Section)」の権限です。 • Marketing Operations および Distributed Marketing については、セキュリティポリシーの「分析」権限です。
「分析」タブ	個々のオブジェクトに関するセキュリティポリシーの分析 (または解析) 権限です。
レポートで表示されるデータ	IBM Cognos 8 BI システムの認証モードが「ユーザごとの認証」である場合、ユーザがレポート内のデータを参照するには、ReportsSystem または ReportsUser のどちらかの役割を持っている必要があります。

レポートスキーマについて

Campaign、Interact、および eMessage のレポートを実装する場合は、レポートビューおよびテーブルの作成から開始し、レポートが報告可能なデータを抽出できるようにします。これらのアプリケーションのレポートパッケージには、レポートビュー

ーまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成するためにレポート SQL ジェネレータで使用するレポートスキーマが含まれています。

Campaign および Interact の場合は、スキーマテンプレートをカスタマイズして、レポートに含める予定のすべてのデータが表示されるようにします。次に、レポート SQL ジェネレータを実行し、結果のスクリプトを取得して、アプリケーションデータベースでそのスクリプトを実行します。

eMessage レポートスキーマをカスタマイズすることはできませんが、管理者またはインストールチームは、同様にレポートビューやテーブルを作成する SQL を生成し、eMessage データベースでスクリプトを実行する必要があります。

レポートスキーマを使用すると、サードパーティのレポートツールを使用して、より簡単に IBM Unica アプリケーション・データを検査できるようになります。ただし、IBM Unica Marketing のユーザインタフェースでレポートを表示したい場合は、ご使用のシステムを IBM Cognos 8 BI と統合する必要があります。

レポート SQL ジェネレータについて

レポート SQL ジェネレータは、レポートスキーマを使用して、IBM Unica アプリケーションのデータベースからデータを抽出するために必要な分析ロジックを判別します。次に、SQL を生成します。この SQL は、分析ロジックを実装するビューまたはレポートテーブルを作成し、ビジネスインテリジェンスツールを有効にして報告可能なデータを抽出します。

インストールおよび構成時に、システム実装者が IBM Unica のアプリケーションデータベースを識別するデータソースプロパティを構成済みです。レポート SQL ジェネレータは、以下の場合にアプリケーションデータベースへの接続を使用します。

- ビューまたは実体化ビューを作成するスクリプトを検証する場合
- レポートテーブルを作成するスクリプトで使用するための正しいデータタイプを判別する場合

JNDI データソース名が正しくないか欠落している場合、レポート SQL ジェネレータは、レポートテーブルを作成するスクリプトを生成できません。

レポート配置オプションについて

レポート SQL ジェネレータツールを実行する場合は、スクリプトでビュー、実体化ビュー、またはテーブルを作成するかどうかを指定します。使用する配置オプションは、システムに含まれるデータの量によって異なります。

- 小規模な実装環境の場合は、必要に応じて、実動データを直接照会するレポートビューを効率的に実行することができます。効率がよくない場合は、実体化ビューを試してみてください。
- 中規模の実装環境の場合は、実動システムデータベースで実体化ビューを使用するか、またはレポートテーブルを別のデータベースにセットアップします。
- 大規模の実装環境の場合は、別個のレポートデータベースを構成します。

すべての実装環境で、Cognos Connection Administration を使用して、大量のデータを取得するレポートを業務外の時間帯に実行するようにスケジュールすることができます。

実体化ビューおよび MS SQL Server

レポート機能は、MS SQL Server の実体化ビューをサポートしていません。

SQL Server では、実体化ビューは「インデックスビュー」と呼ばれています。しかし、SQL Server 上のビューにインデックスを作成する定義では、特定の集計、関数、およびレポートビューが含まれているオプションを使用することができません。したがって、SQL サーバデータベースを使用している場合は、ビューまたはレポートテーブルを使用してください。

eMessage および Oracle

ご使用のシステムに eMessage があり、データベースが Oracle の場合は、実体化ビューまたはレポートテーブルを使用する必要があります。

データ同期

実体化ビューまたはレポートテーブルと共に配置する場合、データを実動システムのデータと同期する頻度を決定します。その後、データベース管理ツールを使用して、データの同期化処理をスケジュールに入れ、定期的にレポートデータを最新表示してください。

レポートの制御グループおよびターゲットグループについて

レポートのパッケージに入っているサンプルの IBM Cognos 8 BI レポートには、ターゲットグループと制御グループの両方からのデータが含まれています。これらのレポートをサポートするために、レポートスキーマには、デフォルトのコンタクトおよびレスポンス履歴メトリックとデフォルトのレスポンスタイプそれぞれについて 2 つの列が含まれています。1 つの列には、制御グループからのレスポンスが表示され、もう一方の列には、ターゲットグループからのレスポンスが表示されます。

サンプルのレポートの拡張や、独自の新規レポートの作成を行う予定の場合は、ターゲットグループと制御グループの両方からのレスポンス情報をレポートに組み込む必要があるかどうかを決定します。組み込む場合は、メトリックまたはレスポンスタイプを追加するため、レポートスキーマにターゲット用と制御用の 2 つの列を作成します。組み込まない場合は、レポートスキーマにターゲットグループの項目用の列のみを作成します。

オーディエンスレベルおよびレポートについて

デフォルトの状態では、レポートスキーマは Campaign に付属の単一の定義済みオーディエンスレベル (顧客) のシステムテーブルを参照します。これは、パフォーマンスレポートおよびレスポンス履歴が、デフォルトでは顧客オーディエンスレベルを参照することを意味します。

それらが正しいオーディエンスレベルのシステムテーブルを参照するように、パフォーマンスおよびレスポンススキーマで指定された入力テーブルを編集して、レポートスキーマのオーディエンスレベルを変更することができます。

さらに、Campaign および Interact については、追加のオーディエンスレベル用のレポートスキーマを追加することができます。Marketing Platform の中央構成ページで

テンプレートから新規レポートスキーマを作成して、IBM Cognos 8 BI のデータモデルに追加レポートビューを追加し、追加オーディエンスレベルに対応するように IBM Cognos レポートを変更します。

レポートスキーマにおけるオーディエンスキーについて

パフォーマンスレポートとレスポンス履歴のオーディエンスレベルを構成する場合、または追加オーディエンスレベル用の新規レポートスキーマを作成する場合は、オーディエンスレベルのオーディエンスキーを指定します。キーに複数のデータベースの列が含まれている場合 (マルチキーオーディエンスキーと呼ばれることがある)、列名の間にはコンマを使用してください。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

レポートスキーマの「オーディエンスキー」フィールドに入力できるストリングの最大長は、255 文字です。オーディエンスキーが 255 文字より長い場合は、生成済みの SQL でこの制限を回避することができます。「オーディエンスキー」フィールドにキーの最初の 255 文字を入力して、通常どおりに SQL スクリプトを生成します。次に、エディタで生成されたスクリプトを開き、検索と置換を使用して、切り捨てられたオーディエンスキー参照のそれぞれを完全なストリングに置換します。

パーティションおよびレポートスキーマについて

Campaign に複数のパーティションがある場合、システムの実装者が Cognos システム上でパーティションごとにレポートパッケージを構成済みです。ただし、ご使用のシステムのデータ設計が実装された後で、パーティションごとにレポートビューまたはテーブルを再表示する必要があります。

各パーティションにレポートスキーマを追加できます。新規レポートスキーマは、「スキーマの構成」ページのテンプレートから作成します。

Framework Manager データモデルについて

Cognos モデルは、物理データベースオブジェクトと、クエリサブジェクトおよびクエリ項目に対する物理データベースオブジェクトの関係を記述するレポートメタデータです。IBM Cognos8 BI Report Studio でレポートを作成する場合は、モデルに記述されたクエリサブジェクトおよび項目から作成します。

IBM Unica アプリケーションのデータモデルは、IBM Unica アプリケーションデータベース内のレポートビューを参照し、また IBM Unica レポートパッケージで配信される Cognos 8 レポートで、そのデータを利用できるようにします。

レポートビューを構成して、追加の属性、メトリック、レスポンスタイプなどを組み込んだ場合は、IBM Cognos レポートモデルとレポートビューを同期させ、IBM Cognos のコンテンツストアに改訂済みモデルを公開します。これで、新規属性が Report Studio で使用可能になり、それらの属性を IBM Unica レポートに追加することができます。

IBM Unica レポートパッケージの IBM Cognos 8 モデルでは、以下の 3 つのカテゴリ (フォルダ) で IBM Unica アプリケーションメタデータを提供しています。

- インポートビュー。このレベルでは、IBM Unica アプリケーションデータベース内のレポートスキーマからデータを表示します。データソース接続を介して、デ

ータモデルと IBM Unica データベースビュー、実体化ビュー、またはレポートテーブルを同期化するには、このビューを使用します。

- モデルビュー。これは、基本的なメタデータ変換を実行する作業域です。クエリサブジェクトによって表示されるオブジェクトエンティティ間の関係をセットアップして、ビジネスビューで使用可能なビルディングブロックを作成します。
- ビジネスビュー。このレベルでは、ビジネスオブジェクトの観点からクエリサブジェクトを編成して、レポート作成を単純化します。これは、Report Studio で IBM Unica アプリケーションのレポートを開いたときに表示される情報です。

Campaign モデルおよび eMessage モデルには、モデルビューからビジネスビューへのショートカットが含まれています。Interact モデルでは、そのクエリサブジェクトの一部が 2 つのデータソースにまたがるため、同じ方法のショートカットを使用しません。

Report Studio レポートについて

それぞれの IBM Unica レポートパッケージには、IBM Cognos 8 Report Studio で作成された、そのアプリケーション用のレポートがいくつか含まれています。それらをインストールすると、IBM Unica Marketing スイートの共通ユーザインタフェースで、以下の場所からレポート例を選択して実行することができます。

- 「分析」メニューから複数のオブジェクトレポートにアクセス可能です。
- 単一オブジェクトレポートは、キャンペーンやオファーなどの項目の「分析」タブに表示されます。
- また、Campaign、Marketing Operations、および Interact の場合、レポートパッケージに IBM Unica ダッシュボード用のレポートが含まれています。

フォルダ、サブフォルダ、およびアクセス設定について

インストール時に、システムの実装者が Cognos Connection にある IBM Unica アプリケーションのレポートのアーカイブをパブリックフォルダ領域にインポート済みです。各 IBM Unica アプリケーションのレポートはフォルダとサブフォルダに編成され、フォルダとサブフォルダには、アプリケーションとそのパブリックフォルダ領域でのレポートの目的の両方を表す名前が付いています。

また、これらのフォルダとサブフォルダは、Campaign、Interact、および eMessage のセキュリティアクセス制御モデルでも使用されます。セキュリティアクセス制御モデルには、フォルダ別のレポートのセキュリティ設定が含まれています。つまり、これらのアプリケーションのセキュリティポリシーによって、ユーザにフォルダ内のすべてのレポートに対するアクセス権限が付与されます。Marketing Operations のアクセス制御モデルはこのレベルのアクセス権限を提供しないことに注意してください。Marketing Operations では、すべてのレポートへのアクセス権限があるか、レポートへのアクセス権限がまったくないかのいずれかです。

ベスト・プラクティスとして、IBM Cognos Connection インタフェースのフォルダまたはサブフォルダを名前変更しないようにしてください。名前変更する場合は、必ず IBM Unica アプリケーションが変更済みのフォルダ名を認識するように構成してください。

- Campaign、eMessage、および Interact の場合は、「設定」>「構成」を選択し、「キャンペーン」>「パーティション」>[パーティション名]>「レポート」で、レポートフォルダのプロパティの値を編集して、フォルダの実際の名前と一致するようにしてください。
- Marketing Operationsの場合は、plan_config.xml ファイルを開き、reportsAnalysisSectionHome および reportsAnalysisTabHome 構成設定の値を編集してください。

レポートのスタイルと外観について

レポート統合コンポーネントには、グローバルスタイルシート (GlobalReportStyles.css) が含まれています。このスタイル・シートは、すべての IBM Unica アプリケーションのレポート全体にわたって共通するレポートスタイルを設定します。スタイルについて詳しくは、付録の 485 ページの『付録 B. Cognos 8 BI レポートのスタイルガイド』を参照してください。この付録では、さまざまな種類のレポートに関する以下の情報を提供します。

- GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル。
- レポートの作成時に手動で行う必要のあるスタイルの書式設定 (スタイルシートを使用して実装できない特殊なスタイルがあるため)。

IBM Unica レポートでは、ダッシュ文字 (「-」) には特殊な意味があります。これは、計算が適用されないことを示します。例えば、合計を表示する行に固有のカウントを計算できない場合は、その事実を示すために「-」が表示されます。

一部のレポートは、データがほとんどまたはまったくない場合、システムで最良の状態では表示されません。例えば、データポイントが 1 つの折れ線グラフは、線を表示することができないため、グラフが空のように見えることとなります。また、サマリデータのグラフィカル表現では、データのないデータポイントの日付や時刻はリストされません。例えば、指定した日付範囲にデータのある日が 1 日だけ含まれている場合、グラフにはその日付のみが表示されます。

レポートをカスタマイズして、ご使用のシステムからのデータに最適なチャートやグラフの種類を使用することができます。

レポート生成スケジュールのセットアップについて

IBM Cognos Connection では、レポートの自動実行をスケジュールすることができます。レポートごとに、実行頻度、フォーマットオプション、配信方法、保存場所などを選択できます。

例えば、毎週月曜日の午前 9:00 にレポートを実行し、そのレポートを、指定された受信者グループに自動生成電子メールを使用して配布するようスケジュールすることができます。

レポートのスケジュールリングと配布について詳しくは「*IBM Cognos Connection User Guide*」のスケジュールの章を参照してください。

レポートスキーマのカスタマイズ

このセクションでは、カスタムデータを組み込んでそのデータをレポートに表示できるように、レポートスキーマをカスタマイズする方法について説明します。このタスクの最初のステップは、変更する必要のあるスキーマの決定です。次に、システムのレポートの目的に応じて、このセクションの手順のステップを実行してください。

- 『使用するレポートスキーマ』
- 『コンタクトメトリックまたはレスポンスメトリックの追加』
- 70 ページの『カスタム属性の追加』
- 71 ページの『レスポンスタイプの追加』
- 71 ページの『コンタクトステータスコードの追加』
- 72 ページの『パフォーマンスレポートのカレンダーの時間枠の指定』
- 72 ページの『パフォーマンスレポートおよびレスポンス履歴のオーディエンスレベルの構成』

使用するレポートスキーマ

変更する必要があるレポートスキーマは、カスタマイズする予定のレポートに応じて決まります。付録の「製品別のレポートおよびレポートスキーマ」には、レポートパッケージで提供されているレポート例をサポートするレポートスキーマを示す表があります。カスタマイズする予定のレポートを決定してから、レポートスキーママップで適切なレポートを参照してください。

- 495 ページの『付録 C. レポートおよびレポートスキーマ』
- 498 ページの『Interact レポートおよびレポートスキーマ』
- 497 ページの『eMessage レポートおよびレポートスキーマ』

注: eMessage レポートスキーマをカスタマイズすることはできませんが、変更および新規 eMessage レポートの作成はできます。

コンタクトメトリックまたはレスポンスメトリックの追加

キャンペーン実績およびオファー実績のレポートスキーマにコンタクトメトリックまたはレスポンスメトリックを追加することができます。始める前に、以下の情報を判別してください。

- メトリックを追加したいレポートをサポートしているレポートスキーマ。詳しくは、付録の 495 ページの『付録 C. レポートおよびレポートスキーマ』を参照してください。
- ターゲットグループに加えて、制御グループのレポートスキーマに列を追加する必要があるかどうか。65 ページの『レポートの制御グループおよびターゲットグループについて』を参照してください。
- メトリックの計算方法。例えば、メトリックの合計、平均、カウントを出すことができます。

続いて、以下の手順を実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「適切なレポートスキーマの名前」を展開します。

2. 「列」ノードを展開し、「コンタクトメトリック」または「レスポンスメトリック」のいずれかを選択します。
3. 右のフォームで、「新規カテゴリ名」をクリックして、コンタクトメトリックまたはレスポンスメトリックの名前を入力します。
4. 「列名」には、レポートスキーマで使用する属性の名前を入力してください。すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。
5. 「関数 (Function)」には、メトリックの計算方法または判別方法を指定します。
6. 「入力列名」には、IBM Unica アプリケーションデータベースにある適切なテーブルから、この属性用の列の名前を入力してください。入力列名では、大文字と小文字が区別されます。
7. 「制御処理フラグ」には、数値 0 (ゼロ) を入力します。数値 0 は、レポートスキーマではこの列がターゲットグループを表すことを示します。
8. 「変更を保存」をクリックします。
9. 必要に応じてこの手順を繰り返して、レポートスキーマに制御グループ列を追加します。今度は、数値 1 を入力してください。数値 1 は、この列が制御グループを表すことを示します。

カスタム属性の追加

カスタムキャンペーン属性、オファー属性、およびセル属性をカスタムキャンペーン属性レポートスキーマに追加することができます。始める前に、以下の情報を判別してください。

- UA_CampAttribute、UA_CellAttribute、または UA_OfferAttribute のうちの適切なテーブルにある、属性の AttributeID 列の値。
- 属性のデータタイプ: スtring値、数値、または日付/時刻値

続いて、以下のステップを実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーンカスタム属性」>「列」を展開します。
2. 追加する属性のタイプに一致する列のタイプを選択します。
3. 右のフォームで、「新規カテゴリ名 (New category name)」をクリックしてカスタム属性の名前を入力します。
4. 「列名」には、レポートスキーマで使用する属性の名前を入力してください。すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。
5. 「属性 ID」には、この属性の ID を入力します。
6. 「値タイプ」には、属性のデータタイプを指定します。

注: 通貨値を保持する属性を追加する場合は、「値タイプ」フィールドに NumberValue を指定します。Campaign で、「フォーム要素タイプ」が「選択ボックス - 文字列」に設定されている属性を追加する場合は、「値タイプ」フィールドに StringValue を追加します。

7. 「変更を保存」をクリックします。

レスポンスタイプの追加

キャンペーンオファーのレスポンスの内訳スキーマにレスポンスタイプを追加することができます。始める前に、以下の情報を判別してください。

- ターゲットグループに加えて、制御グループのレポートスキーマに列を追加する必要があるかどうか。65 ページの『レポートの制御グループおよびターゲットグループについて』を参照してください。
- UA_UsrResponseType テーブルからのレスポンスタイプコード。

続いて、以下のステップを実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーンオファーのレスポンスの内訳」>「列」>「レスポンスタイプ」を展開します。
2. 右のフォームで、「**新規カテゴリ名 (New category name)**」をクリックしてレスポンスタイプの名前を入力します。
3. 「**列名**」には、レポートスキーマで使用するレスポンスタイプの名前を入力してください。
4. 「**レスポンスタイプコード**」には、このレスポンスタイプの 3 文字のコードを入力します。レスポンスタイプコードでは、大文字と小文字が区別されます。
5. 「**制御処理フラグ**」には、数値 0 (ゼロ) を入力します。数値 0 は、レポートスキーマではこの列がターゲットグループを表すことを示します。
6. 「**変更を保存**」をクリックします。
7. 必要に応じてこの手順を繰り返して、レポートスキーマに制御グループ列を追加します。今度は、数値 1 を入力してください。数値 1 は、この列が制御グループを表すことを示します。

コンタクトステータスコードの追加

キャンペーンオファーのコンタクトステータス内訳スキーマにコンタクトステータスコードを追加することができます。始める前に、UA_ContactStatus テーブルのコンタクトステータスコードを判別してください。

続いて、以下のステップを実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーンオファーのコンタクトステータスの内訳」>「列」>「コンタクトステータス」を展開します。
2. 右のフォームで、「**新規カテゴリ名 (New category name)**」をクリックしてコンタクトステータスタイプの名前を入力します。
3. 「**列名**」には、レポートスキーマで使用するコンタクトステータスタイプの名前を入力してください。
4. 「**コンタクトステータスコード**」には、このコンタクトステータスの 3 文字のコードを入力します。コンタクトステータスコードでは、大文字と小文字が区別されます。
5. 「**変更を保存**」をクリックします。

パフォーマンスレポートのカレンダーの時間枠の指定

Campaign および Interact の標準レポートには、どちらにも、カレンダーの周期でデータを要約したパフォーマンスレポートが含まれています。これらのレポートで使用されている時間枠が、デフォルトの「時間経過に伴う変動」以外のものであることを指定するには、以下の手順を実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択して「レポート」>「スキーマ」を展開し、「キャンペーン」または「対話」のいずれかを選択します。
2. 目的の実績スキーマを選択します。
3. 「設定の編集」をクリックします。
4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションリストを選択します。
5. 「変更を保存」をクリックします。

パフォーマンスレポートおよびレスポンス履歴のオーディエンスレベルの構成

開始の前に、以下の事項を決定します。

- 目的のオーディエンスレベルのコンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブルの名前。
- コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルに対するオーディエンスキー。66 ページの『レポートスキーマにおけるオーディエンスキーについて』を参照してください。

次に、それぞれの該当のレポートスキーマに対して、このセクションの手順を実行します。

- Campaign の場合: オファー実績、キャンペーン実績、キャンペーンオファーのレスポンスの内訳、キャンペーンオファーのコンタクトステータスの内訳
 - Interact の場合: 対話実績
1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「*ProductName*」>「*SchemaName*」を展開します。
 2. 右のフォームで、「設定の編集」をクリックします。
 3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンスレベルとオーディエンスキーのシステムテーブルを確認します。

注: 複数のオーディエンスキーの列名を区切るには、コンマを使用してください。詳しくは、66 ページの『レポートスキーマにおけるオーディエンスキーについて』を参照してください。

4. 「変更を保存」をクリックします。

追加のオーディエンスレベルまたはパーティションのレポートスキーマの作成

以下の理由で、追加のレポートスキーマを作成する場合があります。

- 複数のオーディエンスレベルのレポートが欲しい (複数のオーディエンスレベルのデータが存在するレポートを作成する場合、またはレポートにフィルタを追加してユーザに複数のオーディエンスレベルのいずれかを指定するよう求めるプロンプトを出す場合など) と考えていて、そのためコンタクトおよびレスポンス履歴テーブルの追加セットを指すスキーマが必要である。
- 複数のパーティションにレポートを構成しており、パーティションのシステムテーブルごとに異なるスキーマのカスタマイズを実装する必要がある。

始める前に、以下の情報を判別してください。

- 作成するレポートスキーマ。
 - Campaign の場合: キャンペーンオファーレスポンスの内訳、オファー実績、キャンペーン実績、オファーのコンタクトステータスの内訳、およびキャンペーンカスタム属性
 - Interact の場合: 対話実績
- このオーディエンスレベルに関する以下のテーブルの名前。
 - Campaign の場合: コンタクト履歴テーブル、詳細なコンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブル
 - Interact の場合: 詳細なコンタクト履歴テーブルおよびレスポンス履歴テーブル
- このオーディエンスレベルに関するオーディエンスキー列 (複数列の場合もある) の名前
- オーディエンスレベルの名前を表す 2 または 3 文字の短いコードを選びます。新規レポートスキーマのテーブル名またはビュー名を指定する場合は、このコードを使用します。

レポートの目的に応じて、次の手順のステップを実行してください。

新規キャンペーンオファーのレスポンスの内訳スキーマの作成

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーンオファーのレスポンスの内訳スタースキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリ名 (New category name)」をクリックして、オーディエンスレベルを示すレポートスキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーンオファーのレスポンス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、該当のオーディエンスレベルのレスポンス履歴テーブルの名前を入力してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できないことに注意してください。

4. 新規ノードの下で、「列」>「レスポンスタイプ」を選択し、次に該当のオーディエンスレベルのレスポンスタイプを構成します。

このステップのヘルプについては、71 ページの『レスポンスタイプの追加』の手順を参照してください。

5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーンのレスポンスの内訳」を選択して「設定の編集」をクリックします。

6. 表示されるフォームで、「**テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)**」フィールドの名前を編集して、オーディエンスレベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンスレベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_CRBO_HH_。テーブルおよびビューの命名規則については、250 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

7. 「**変更を保存**」をクリックします。
8. 新規ノードの下で、「**SQL 構成**」>「**キャンペーンオファーのレスポンスの内訳**」を選択して「**設定の編集**」をクリックします。
9. 「**テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)**」フィールドの名前を編集して、オーディエンスレベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、UARC_CORBO_HH_ と指定します。

10. 「**変更を保存**」をクリックします。

新規キャンペーンオファーのコンタクトステータスの内訳スキーマの作成

1. 「**設定**」>「**構成**」を選択し、「**レポート**」>「**スキーマ**」>「**キャンペーン**」>「**キャンペーンオファーのレスポンスの内訳スタースキーマ**」を展開します。
2. 「**新規カテゴリ名 (New category name)**」をクリックして、オーディエンスレベルを示すレポートスキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーンオファーのコンタクトステータス世帯と指定します。
3. 「**入力テーブル**」セクションで、該当のオーディエンスレベルのレスポンス履歴テーブルの名前を入力してから、「**変更を保存**」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できないことに注意してください。

4. 新規ノードの下で、「**列**」>「**コンタクトステータスコード**」を選択し、次に該当のオーディエンスレベルのコンタクトステータスを構成します。

このステップのヘルプについては、71 ページの『コンタクトステータスコードの追加』の手順を参照してください。

5. 新規ノードの下で、「**SQL 構成**」>「**キャンペーンコンタクトステータスのコンタクト履歴**」を選択して「**設定の編集**」をクリックします。
6. 表示されるフォームで、「**テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)**」フィールドの名前を編集して、オーディエンスレベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンスレベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_CCBSO_HH_。テーブルおよびビューの命名規則については、250 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

7. 「**変更を保存**」をクリックします。

8. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーンオファ어의コンタクトステータスのコンタクト」を選択して「設定の編集」をクリックします。
9. 「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィールドの名前を編集して、オーディエンスレベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、UARC_COCSBO_HH_ と指定します。
10. 「変更を保存」をクリックします。

新規オファー実績スキーマの作成

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「オファー実績スタースキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリ名 (New category name)」で、オーディエンスレベルを示すレポートスキーマの記述名を入力します。例えば、オファー実績世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンスレベルとオーディエンスキーをサポートするテーブルを確認します。
4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションを選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できないことに注意してください。

5. 構成ツリーの新規ノードの下で、「列」>「コンタクトメトリック」を選択し、次に該当のオーディエンスレベルのコンタクトメトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、69 ページの『コンタクトメトリックまたはレスポンスメトリックの追加』の手順を参照してください。

6. 新規ノードの下で、「列」>「レスポンスメトリック」を選択し、次に該当のオーディエンスレベルのレスポンスメトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、69 ページの『コンタクトメトリックまたはレスポンスメトリックの追加』の手順を参照してください。

7. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (オファ어의コンタクト履歴) を選択して「設定の編集」をクリックします。
8. 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View name)」フィールドの値を編集して、オーディエンスレベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンスレベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_OCH_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、250 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

9. 「変更を保存」をクリックします。
10. 新規レポートスキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各項目に対して、ステップ 7 から 9 を繰り返します。

新規キャンペーン実績スキーマの作成

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン実績スタースキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリ名 (New category name)」をクリックして、オーディエンスレベルを示すレポートスキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン実績世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンスレベルとオーディエンスキーをサポートするテーブルを確認します。
4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションをすべて選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できないことに注意してください。

5. 新規ノードの下で、「列」>「コンタクトメトリック」を選択し、次に該当のオーディエンスレベルのコンタクトメトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、69 ページの『コンタクトメトリックまたはレスポンスメトリックの追加』の手順を参照してください。

6. 新規ノードの下で、「列」>「レスポンスメトリック」を選択し、次に該当のオーディエンスレベルのレスポンスメトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、69 ページの『コンタクトメトリックまたはレスポンスメトリックの追加』の手順を参照してください。

7. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (キャンペーンのコンタクト履歴) を選択します。
8. 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View name)」フィールドの値を編集して、オーディエンスレベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンスレベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_CCH_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、250 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

9. 「変更を保存」をクリックします。
10. 新規レポートスキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各項目に対して、ステップ 8 と 9 を繰り返します。

新規キャンペーンカスタム属性スキーマの作成

パーティションごとに必要なキャンペーンカスタム属性スキーマは 1 つだけであることに注意してください。すべてのオーディエンスレベルに同一のスキーマが使用されます。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーンカスタム属性」を展開します。

2. 「**新規カテゴリ名 (New category name)**」で、パーティションを示すレポートスキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーンカスタム属性パーティション 2 と指定します。
3. 構成ツリーの新規ノードの下で、「**列**」を展開し、次に、レポートスキーマを作成するパーティションに必要なカスタムセル、オファー、およびキャンペーン属性を追加します。

このステップのヘルプについては、70 ページの『カスタム属性の追加』の手順を参照してください。

4. (オプション) 必要に応じてビューやテーブルの名前を編集できます。新規ノードの下で、「**SQL 構成**」を展開し、各項目を選択してビューまたはテーブル名を調べます。名前を変更することに決めた場合、名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含めてはなりません。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、250 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。
5. 「**変更を保存**」をクリックします。

対話実績スキーマの作成

1. 「**設定**」>「**構成**」を選択し、「**レポート**」>「**スキーマ**」>「**対話**」>「**対話実績スタースキーマ**」を展開します。
2. 「**新規カテゴリ名 (New category name)**」フィールドで、オーディエンスレベルを示すレポートスキーマの記述名を入力します。例えば、対話実績世帯と指定します。
3. 「**入力テーブル**」セクションで、オーディエンスレベルとオーディエンスキーをサポートするテーブルを確認します。
4. 「**スキーマ設定**」セクションで、適合する「**時間経過に伴う変動**」オプションをすべて選択してから、「**変更を保存**」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できないことに注意してください。

5. 新規ノードの下で、「**SQL 構成**」を展開し、最初の項目 (インタラクティブチャネルオファーのコンタクト履歴サマリ) を選択します。
6. 表示されるフォームで、「**テーブル/ビューの名前 (Table/View name)**」フィールドの値を編集して、オーディエンスレベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンスレベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARI_OCH_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、250 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

7. 「**変更を保存**」をクリックします。
8. 新規レポートスキーマの「**SQL 構成**」セクションの下にリストされている各項目に対して、ステップ 6 から 7 を繰り返します。

更新されたビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成

このセクションでは、Campaign、eMessage、および Interact のインストールおよび構成時に設定された、デフォルトのレポートビューまたはスキーマを更新するプロセスについて説明します。ご使用の IBM Unica システムにレポートがまだセットアップされていない場合は、このセクションの手順を使用しないでください。代わりに、ご使用の IBM Unica アプリケーションのインストールガイドに記載されている、レポートの構成に関する章を参照してください。

ビューまたはレポートテーブルの更新の前に

開始の前に、データソースのプロパティが正しく構成されていることを確認してください。

1. 80 ページの『データソース別の SQL スクリプト』の表を参照して、更新スクリプトを実行するデータベースを検証します。
2. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「**ProductName**」を展開します。
3. データソースフィールド内の値セットが適切なデータソースの実際の JNDI 名と一致していることを確認します。

レポートビューまたはテーブルの更新済み SQL スクリプトの生成

この手順では、既存のレポートビューやテーブルの更新済み SQL スクリプトを生成する方法について説明します。初めてビューまたはテーブルを構成する場合は、この手順を使用しないでください。代わりに、ご使用の IBM Unica アプリケーションに関するインストールガイドに記載されているレポートの章を参照してください。

更新済み SQL スクリプトを生成するには、以下の手順を実行します。

1. 「設定」>「レポート SQL ジェネレータ」を選択します。「SQL ジェネレータ」ページが表示されます。
2. 「製品」フィールドで、適切な IBM Unica アプリケーションを選択します。
3. 「スキーマ」フィールドで 1 つ以上のレポートスキーマを選択します。80 ページの『データソース別の SQL スクリプト』の表を使用して、適切なスキーマを判別して選択します。
4. 「データベースタイプ」を選択します。このオプションは、スクリプトを生成しているデータベースのデータベースタイプと一致している必要があります。
5. 「生成タイプ」フィールドで、適切なオプション (ビュー、実体化ビュー、またはテーブル) を選択します。

「データベースタイプ」が MS SQL Server に設定されている場合、実体化ビューというオプションはありません。

JNDI データソース名が正しくない、または構成されていない場合、SQL ジェネレータは、テーブルを作成するスクリプトを生成できません。

6. 「除去ステートメントの生成 (Generate Drop Statement)」の値を「Yes」に設定します。

7. (オプション) 生成される SQL を調べるには、「生成」をクリックします。SQL ジェネレータでスクリプトが作成され、ブラウザウィンドウにそのスクリプトが表示されます。
8. 「ダウンロード」をクリックします。

SQL ジェネレータでスクリプトが作成され、ファイルを保存する場所の指定を求めるプロンプトが出されます。単一のレポートスキーマを「スキーマ」フィールドから選択すると、スクリプト名はスキーマの名前 (eMessage_Mailing_Execution.sql など) と同じになります。複数のレポートスキーマを選択すると、スクリプト名には製品名 (Campaign.sql など) のみを使用されます。名前の詳細なリストについては、80 ページの『データソース別の SQL スクリプト』を参照してください。

9. スクリプトを保存する場所を指定します。ファイルの名前を変更する場合は、必ず、選択したスキーマを明確に示すものを使用してください。次に、「保存」をクリックします。
10. ステップ 7 から 10 を繰り返します。ただし、今度は「除去ステートメント (Drop Statement)」フィールドでは「No」を選択してください。
11. 生成する必要のある各スクリプトに、ステップ 3 から 11 を繰り返します。

注: スクリプトの妥当性検査を無効にする必要がある場合もあります。例えば、Marketing Platform で IBM Unica アプリケーションデータベースに接続できないが、どうしてもスクリプトを生成したい場合です。妥当性検査を無効にするには、レポートのデータソース構成プロパティの値を消去します。スクリプトを生成すると、レポート SQL ジェネレータは、データソースに接続できないという警告を表示しますが、引き続き SQL スクリプトを生成します。

ビューまたはレポートテーブルの更新

この手順では、既存のビューまたはレポートテーブルの更新について説明しています。初めてビューまたはレポートテーブルを作成する場合は、この手順を使用しないでください。代わりに、ご使用の IBM Unica アプリケーションに関するインストールガイドに記載されているレポートの章を参照してください。

ビューまたはテーブルを更新する SQL スクリプトの生成とダウンロードが完了した後、アプリケーションデータベースでそれらを実行します。

1. 生成して保存した SQL スクリプトを見つけます。80 ページの『データソース別の SQL スクリプト』の表を使用して、どのスクリプトをどのデータベースに対して実行するかを決定します。
2. データベース管理ツールを使用して、除去スクリプトを実行します。
3. データベース管理ツールを使用して、作成スクリプトを実行します。
4. レポートテーブルについては、データベース管理ツールを使用して、実動システムのデータベースから適切なデータを新規テーブルに設定します。
5. レポートテーブルおよび実体化ビューの場合、データベース管理ツールを使用して、IBM Unica アプリケーションの実動データベースと新規レポートテーブルまたは実体化ビューとの間のデータの同期化処理をスケジュールに入れ、定期的に行います。

注: このステップでは、お客様所有のツールを使用する必要があります。レポート SQL ジェネレータがお客様に代わってこの SQL を生成することはありません。

データソース別の SQL スクリプト

以下の表では、各データソースについて生成する必要のあるスクリプトと結果スクリプトの名前を示し、ビューまたは実体化ビューを作成する場合にどの IBM Unica アプリケーションデータベースに対してどのスクリプトを実行する必要があるかも示します。次のことに注意してください。

- この表にはデータソースおよび生成スクリプトのデフォルト名をリストしていますが、これらはお客様が変更している場合があります。
- Interact レポートスキーマは、複数のデータソースを参照します。データソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

レポートスキーマ	データソース (デフォルト名)	スクリプト名 (デフォルト名)
すべての Campaign レポートスキーマ	Campaign システムテーブル (campaignPartition1DS)	Campaign.sql (レポートスキーマごとに別のスクリプトを生成していない場合)。別のスクリプトを生成している場合、各スクリプトの名前は個々のスキーマに基づいて付けられます。
eMessage メール配信パフォーマンス	eMessage は、Campaign システムテーブルに関する表を追跡します。 (campaignPartition1DS)	eMessage_Mailing_Performance.sql
対話配置履歴、対話実績、および対話ビュー	Interact 設計時間データベース (campaignPartition1DS)	Interact.sql
対話ラーニング	Interact ラーニングテーブル (InteractLearningDS)	Interact_Learning.sql
対話ランタイム	Interact ランタイムデータベース (InteractRTDS)	Interact_Runtime.sql

「レポート SQL ジェネレータ」ページのリファレンス

レポート SQL ジェネレータは、ユーザの構成したレポートスキーマを使用して、ビューやレポートテーブルを作成する SQL を生成します。

項目	説明
製品	レポートスキーマテンプレートがインストールされている製品をリストします。

項目	説明
スキーマ	<p>ユーザが選択した製品のレポートスキーマをリストします。詳しくは、以下の説明を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 495 ページの『付録 C. レポートおよびレポートスキーマ』 497 ページの『eMessageレポートおよびレポートスキーマ』 498 ページの『Interact レポートおよびレポートスキーマ』
データベースタイプ	<p>生成されるスクリプトを実行する予定のアプリケーションデータベースのデータベースタイプを示します。</p>
生成タイプ	<p>生成するスクリプトによって、ビュー、実体化ビュー、またはレポートテーブルを生成するかどうかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> データベースタイプが MS SQL Server に設定されている場合、実体化ビューというオプションはありません。 JNDI データソース名が正しくない、または構成されていない場合、SQL ジェネレータは、テーブルを作成するスクリプトを生成できません。 4 番目のオプションの XML は、SQL スクリプトでは生成されません。代わりに、XML のスキーマの記述が作成されます。その後、必要に応じて、サードパーティの ETL またはインポートツールで XML ファイルを使用することができます。 <p>64 ページの『レポート配置オプションについて』も参照してください。</p>
Drop ステートメントを生成するかどうか	<p>生成するスクリプトが除去スクリプトであるかどうかを示します。既存のビューまたはテーブルを更新する場合は、除去スクリプトおよび作成スクリプトを生成して、新しい作成スクリプトを実行する前に除去スクリプトを実行することをお勧めします。</p> <p>フィールドで「Yes」を選択した場合、SQL ジェネレータによって、スクリプトの最後に「DROP」という単語が付加されます。</p>
生成	<p>このオプションをクリックすると、SQL ジェネレータがスクリプトを作成し、このウィンドウにスクリプトを表示します。その後は、必要に応じてそのスクリプトをコピーして貼り付けることができます。</p>
ダウンロード	<p>このオプションをクリックすると、SQL ジェネレータがスクリプトを作成し、ご使用のシステムにスクリプトを保存するように求めるプロンプトを出します。生成されたスクリプトに使用される名前については、以下を参照してください。</p> <p>80 ページの『データソース別の SQL スクリプト』</p>

IBM Cognos モデルのカスタマイズ

IBM Unica をカスタマイズして追加のメトリック、属性、またはオーディエンスレベルを組み込み、レポートビューまたはテーブルをそのスキーマに基づいて変更する場合は、IBM Cognos 8 BI モデルも編集する必要があります。IBM Cognos Framework Manager 機能を使用して、ビューまたはテーブルへのクエリを実行し、データモデル内の追加項目をインポートしてください。

IBM Cognos 8 モデルの更新方法は、IBM Unica のレポートビューまたはテーブルに加えられた変更によって異なります。

- 属性、メトリック、またはレスポンスタイプの列を追加して既存のビューを変更した場合は、関連ビューを表すクエリオブジェクトを更新することによって新規列をインポートしてください。
- パフォーマンスやランタイムレポートの時間経過に伴う変動を変更した場合、または追加オーディエンスレベル用の新規レポートスキーマを作成した場合、新規ビューが追加されています。この場合は、Framework Manager MetaData Wizard を使用して、ビューをデータモデルにインポートしてください。

このセクションでは、Cognos 8 モデルにカスタマイズを追加するためのガイドラインとして使用できる例を示します。詳しくは、「*IBM Cognos 8 BI 8.4 Framework Manager User Guide*」および Framework Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

例: データモデルにある既存のビューまたはテーブルへの属性の追加

以下の例の手順では、IBM Cognos 8 モデルにある既存のビューに項目を追加する方法を示しています。この例では、Campaign データベースにカスタムオファー属性を追加してから、レポートに含める必要があるとします。以下のタスクがすでに完了している必要があります。

- UA_OfferAttribute テーブルでオファー属性を作成する。
- オffer属性をキャンペーンカスタム属性レポートスキーマに追加する。
- レポート SQL ジェネレータを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、オfferカスタム属性レポートビュー (UARC_OFFEREXTATTR) を更新する。

ここで、Cognos 8 Campaign モデルに新規オffer属性を追加するには、以下の手順を実行します。

1. Campaign モデルのバックアップを作成します。つまり、Cognos/models ディレクトリに移動し、CampaignModel サブディレクトリをコピーします。分散 Cognos 環境では、models ディレクトリは、Content Manager を実行しているシステム上にあります。
2. Framework Manager では、Campaign.cpf ファイル (プロジェクト) を開いて、「インポートビュー」ノードを展開します。

3. 「インポートビュー」の下で、カスタムオファー属性 (インポートビュー (Import View)) > 「キャンペーンカスタム属性 (Campaign Custom Attributes) 」 > 「UARC_OFFEREXTATTR」) のレポートビューを表示するクエリオブジェクトを選択します。
4. 「ツール」 > 「オブジェクトの更新 (Update Object) 」を選択します。Cognos は、ビューのノードの下にリストされている列を最新表示して、Campaign データベース内の UARC_OFFEREXTATTR レポートビューに現在存在する列をすべて反映します。
5. 「モデルビュー」を展開し、このビュー内のカスタムオファー属性 (「モデルビュー」 > 「キャンペーンカスタム属性 (Campaign Custom Attributes) 」 > 「オファーカスタム属性 (Offer Custom Attributes) 」) を表すノードを選択します。
6. 「オファーカスタム属性 (Offer Custom Attributes) 」ノードをダブルクリックして、「クエリサブジェクト定義 (Query Subject Definition) 」ダイアログボックスを開きます。
7. 新規列を見つけて、「モデルビュー」に追加します。クエリ項目の名前を編集して、読みやすくします。例えば、Campaign データモデルの「インポートビュー」にある LASTRUNDATE という名前の列は、「モデルビュー」で「前回実行日」として表示されます。

注: 「ビジネスビュー」には、「モデルビュー」にある「オファーカスタム属性 (Offer Custom Attributes) 」ノードへのショートカットが含まれています。これは、手動で追加することなく「ビジネスビュー」で現在使用可能な新規クエリ項目です。

8. モデルを保存します。
9. パッケージを Cognos コンテンツストアに公開します。

これで、IBM Cognos Report Studio を使用して、適切なレポートに属性を追加することができます。

例: IBM Cognos 8 データモデルへの新規ビューの追加

以下の例の手順では、IBM Cognos 8 データモデルに新しいビューまたはテーブルを追加する方法を示しています。この例では、キャンペーン実績のレポートスキーマについての時間経過に伴う変動を変更し、ここで Cognos モデルの変更をインポートする必要があるとします。以下のタスクをすでに完了している必要があります。

- 「時間経過に伴う変動」オプションに四半期単位を追加して、キャンペーン実績のスキーマを変更する。
- レポート SQL ジェネレータを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。このスクリプトには、次の追加レポートビューを作成する指示が含まれています。
UARC_CCCH_QU、 UARC_CCH_QU、 UARC_CCRH_QU、 UARC_COCH_QU、
UARC_CORH_QU、および UARC_CRH_QU
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、追加レポートビューを作成する。

ここで、Cognos 8 Campaign モデルに新規レポートビューを追加するには、以下の手順を実行します。

1. Campaign モデルのバックアップを作成します。つまり、Cognos/models ディレクトリに移動し、CampaignModel サブディレクトリをコピーします。分散 Cognos 環境では、models ディレクトリは、Content Manager を実行しているシステム上にあります。
2. Framework Manager では、キャンペーンプロジェクトを開いて、「インポートビュー」ノードを展開します。
3. 「キャンペーン実績」フォルダを選択して、「メタデータウィザード (Metadata Wizard)」(マウスの右クリックメニューからアクセス) を実行します。
4. メタデータウィザードを使用して、新規ビューをインポートします。
5. 「モデルビュー」>「キャンペーン実績」ノードを展開して、「四半期別のキャンペーン実績 (Campaign Performance by Quarter)」という名前の新規項目をモデル化します。

このステップのヘルプについては、リファレンスのその他のエントリを調べてください。必ず同一の構造と、他の「時間経過に伴う変動」ノードに含まれる関係を維持してください。また、以下に関する情報については、「Cognos 8 BI 8.3 Framework Manager User Guide」を参照してください。

- 新規の名前空間の作成
 - スタースキーマグループの作成
 - 結合の追加
6. 「ビジネスビュー」を展開して、「モデルビュー」にある「四半期別のキャンペーン実績 (Campaign Performance by Quarter)」ノードへのショートカットを作成します。
 7. モデルを保存します。
 8. パッケージを Cognos コンテンツストアに公開します。
 9. Report Studio を開き、先ほど作成した「四半期別のキャンペーン実績 (Campaign Performance by Quarter)」スキーマのオブジェクトを使用して、新規レポートを作成します。

IBM Unica アプリケーションの Cognos レポートのカスタマイズまたは作成について

前にも述べたとおり、レポート例をカスタマイズしてカスタムデータを組み込んだり、新規レポートを作成したりすることができます。Cognos Connection から、レポートのオプションを構成したり、一定の時刻にレポートを実行するようにスケジュールしたり、Report Studio を起動してレポートをカスタマイズしたりすることができます。

レポートを計画して実装する場合は、以下のソースを参照してください。

- IBM Unica アプリケーションのユーザガイドには、その製品の IBM Unica レポートパッケージにあるすべてのレポートの簡略説明が記載されています。
- IBM Unica レポートパッケージには、パッケージ内の各レポートの仕様と、レポートをサポートしている Framework Manager メタデータモデルについて説明した解説書が付属しています。モデルやレポートをカスタマイズする前に、これらの資料を調べてください。必ず、レポートの構成方法について理解してから変更を行ってください。

- IBM Cognos 8 BI レポートの作成および編集に関する詳細な資料については、IBM Cognos 8 BI の資料 (特に「*IBM Cognos 8 BI Report Studio Professional Authoring User Guide*」) を参照してください。
- 使用するレポートスタイルについては、付録の 485 ページの『付録 B. Cognos 8 BI レポートのスタイルガイド』を参照してください。
- Marketing Operations レポートのカスタマイズについては、「*Marketing Operations Administration Guide*」を参照してください。

新しい Campaign レポートの作成に関するガイドライン

IBM Cognos Report Studio で Campaign の新しいレポートを作成するには、以下のガイドラインを使用してください。

- Campaign メタデータモデルとレポートパッケージからのレポート例の仕様について説明している参照資料を調べます。これは、レポートパッケージのインストールディレクトリの CampaignReportPack¥cognos8¥docs サブディレクトリにあります。
- Report Studio を使用して、新しいレポートを作成するか、既存のレポートをコピーし、変更します。詳しくは、Cognos Report Studio の資料を参照してください。
- 既存のレポートのコピー (またはレポート自体) を変更する場合は、レポートの構成をよく理解しておいてください。その後、Report Studio のツールバーと「プロパティ」ペインを使用して、カスタム属性およびメトリックを追加し、オブジェクトとクエリアイテムを適切な方法で変更することができます。Report Studio 使用方法については、Cognos Report Studio の資料を参照してください。レポート例の中のオブジェクトとクエリアイテムについては、レポートパッケージにあるリファレンス資料を参照してください。
- 「分析」タブに表示されるオブジェクト固有のレポートを得るには、オブジェクトから渡された値を受け入れるパラメータ ID を作成します。「分析」ページに表示されるシステム全体のレポートを得るには、キャンペーンまたはオファーのすべてのオブジェクト値を含んだプロンプトを作成します。詳しくは、Cognos Report Studio の資料を参照してください。
- 新しいレポートを Campaign で表示できるようにするには、「パブリックフォルダ (Public Folders)」の下の適切なフォルダにレポートを保存します。
 - 「分析」タブに表示するには、「Campaign - Object Specific Reports」フォルダに保存します。
 - 「分析」ページに表示するには、「Campaign」フォルダに保存します。
 - ダッシュボードポートレットに追加する計画の場合は、「Unica Dashboards¥Campaign」フォルダに保存します。

対話点パフォーマンスダッシュボードの構成

Interact には、1 つの IBM Cognos ダッシュボードレポートがあります。対話点別サマリです。ダッシュボードレポートは、クエリパラメータについてのプロンプトをユーザに出さないため、対話点パフォーマンスレポートのインタラクティブチャネルのチャンネル ID は静的値です。デフォルトでは、このレポートのチャンネル ID

は 1 に設定されます。チャンネル ID が実装環境に適していない場合は、レポートをカスタマイズして、レポートのフィルタ式でチャンネル ID を変更することができます。

IBM Cognos レポートをカスタマイズするには、IBM Cognos レポートのオーサリングスキルが必要です。IBM Cognos 8 BI レポートの作成と編集に関する詳しい説明については、IBM Cognos 8 BI の資料、特に「*IBM Cognos 8 BI Report Studio Professional Authoring User Guide*」を参照してください。

対話点パフォーマンスレポートのクエリおよびデータ項目については、Interact レポートパッケージに含まれている参照資料を参照してください。

複数のインタラクティブチャンネルをダッシュボードに表示する必要がある場合は、対話点パフォーマンスダッシュボードのコピーを作成してチャンネル ID を変更してください。そして、新規レポート用の新規ポートレットを作成し、それをダッシュボードに追加します。

新規ダッシュボードレポートの作成に関するガイドライン

Campaign、Interact、および Marketing Operations の IBM Unica レポートパッケージには、IBM Unica ダッシュボードで表示するための特殊な形式のレポートが含まれています。IBM Cognos Report Studio で新規ダッシュボードレポートを作成するには、次のガイドラインに従ってください。

- メタデータモデルとレポートパッケージからのレポート例の仕様について説明している参照資料を調べます。これは、レポートパッケージのインストールディレクトリの中の `ProductNameReportPack¥cognos8¥docs` サブディレクトリにあります。
- メインの **Unica Dashboards** フォルダの下にある該当のサブディレクトリに、すべてのダッシュボードレポートを保存する。
 - Campaign の場合: **Unica Dashboards¥Campaign**
 - Interact の場合: **Unica Dashboards¥Interact**
 - Marketing Operations の場合: **Unica Dashboards¥Plan**。(Plan は Marketing Operations の以前の名前です。)
- レポートの形式を設定し、ダッシュボードポートレットに適切に収まるようにサイズ調整を行う。使用する書式設定の説明については、付録の『*Style Guide for the IBM Cognos 8 BI reports*』の 493 ページの『ダッシュボードレポートのスタイル』を参照してください。
- ダッシュボードレポートにはタイトルを含めないでください。ダッシュボードレポートが表示されるポートレットによって、レポートにそのタイトルが指定されます。
- ダッシュボードレポートにはハイパーリンクを含めないでください。
- ダッシュボードレポートにはページ番号を含めないでください。

新規ダッシュボードポートレットを作成してそれにレポートを追加するには、100 ページの『ユーザ作成ポートレットのタイプおよび使用可能性』および 102 ページの『IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成するには』を参照してください。

第 8 章 ダッシュボードの作成と管理

ダッシュボードは、会社内部でさまざまな役割を果たすユーザのグループにとって役立つ情報が含まれている、構成可能なページです。管理者は、ダッシュボードを作成し、ポートレットと呼ばれるコンポーネントを追加してダッシュボードを構成します。

IBM Unica ポートレットは、IBM Unica Marketing ユーザが追跡する際に重要となり得るキー・メトリックと、IBM Unica Marketing ページにアクセスする便利な方法として使用できるリンクのリストを提供します。

ダッシュボードには、事前定義の IBM ポートレットおよびユーザ定義のポートレットを入れることができます。ユーザ作成のポートレットには、IBM Unica Marketing のページ、会社のイントラネット上のページ、またはインターネット上のページがあります。

IBM Unica 事前定義ポートレットについて

IBM Unica では、2 つのタイプの事前定義ダッシュボードポートレットがあり、作成するどのダッシュボードにでもすぐに追加することができます。

IBM Unica 事前定義ポートレットでは、Marketing Platform シングルサインオンメカニズムを使用して IBM Unica Marketing のコンテンツにアクセスします。ユーザがこれらのポートレットが含まれているダッシュボードを表示する際、資格情報を求めるプロンプトは表示されません。

- リスト: ユーザに固有の IBM Unica Marketing 項目のリストです。リストポートレットの例には、最近使ったキャンペーン (My Recent Campaigns)(Campaign)、自分のアラート (Marketing Operations)、およびコンテンツサマリレポート (NetInsight) があります。
- IBM Cognos レポート: 特殊フォーマットバージョンの IBM Unica Marketing レポート。

これらの事前定義ポートレットでは、最適なレイアウトとパフォーマンスが得られる推奨設定を IBM Unica が用意しています。

NetInsight レポートを含め、独自のダッシュボードポートレットを作成することもできます。詳しくは、100 ページの『ユーザ作成ポートレットのタイプおよび使用可能性』を参照してください。

ダッシュボードの計画

組織でダッシュボード機能をどのような方法で使用するかを計画する際は、マーケティング管理チームと一緒に作業して以下の詳細を決定する必要があります。

- ユーザに必要なダッシュボードはどれか。
- どのユーザがどのダッシュボードへのアクセス権限を持つか。
- 各ダッシュボードにどのポートレットを入れるか。

- ダッシュボードのロールアウト後に、各ダッシュボードのダッシュボード管理者として誰を任命するか。ダッシュボード管理者は、ダッシュボードへのユーザーアクセスを管理し、必要に応じて個々のダッシュボードの内容とレイアウトを変更します。

グローバルダッシュボードについて

グローバルダッシュボードは、IBM Unica Marketing にログインするすべてのユーザーが表示できる、構成可能なダッシュボードです。ユーザーは 1 つ以上のダッシュボードにアクセスできますが、グローバルダッシュボードには常にアクセスすることができます。

Marketing Platform を初めてインストールしたときは、このダッシュボードは空です。このダッシュボードには、できるだけ広範囲のユーザーの関心を引くポートレットを組み込む必要があります。例えば、Campaign をインストールした場合、事前定義の IBM ポートレットの 1 つである「最近使ったカスタムブックマーク」ポートレットを入れることができます。

IBM Unica 事前定義ポートレットの使用可能性

IBM Unica では、多くの製品で事前定義ポートレットが用意されています。IBM Unica 事前定義ポートレットが使用可能かどうかは、インストールした IBM Unica Marketing 製品によって異なります。また、IBM Cognos ポートレットは、IBM Unica Marketing のレポート機能が実装されている場合にのみ使用できます。

Marketing Platform で事前定義の IBM Unica ポートレットを有効にしてからでないと、ダッシュボードでそれらのポートレットを使用することはできません。IBM Unica ポートレットは、それが所属する製品がインストールされているかどうかに関係なく、Marketing Platform にリストされます。インストールされている製品のみに所属するポートレットを有効にすることをお勧めします。ダッシュボードに追加できるポートレットのリストには、有効になっているポートレットのみが表示されます。

IBM Cognos レポートのパフォーマンスに関する考慮事項

レポートは、視覚的要素が加わることで大量のデータがスキャンしやすくなるので、ダッシュボードに追加するには魅力的なコンポーネントです。しかし、レポートには追加の処理リソースが必要になるため、多数のレポートが含まれているダッシュボードに多数のユーザーが定期的にアクセスする場合には、パフォーマンスが問題になる可能性があります。

組織はその必要性に応じてデータを調整してさまざまな方法で使用しますが、このセクションでは、IBM Cognos レポートが含まれたダッシュボードのパフォーマンスを改善する際に役立つ一般ガイドラインを示します。これらのガイドラインはすべて、高度にリソース集約型の IBM Cognos レポートポートレットに適用されません。

IBM Cognos での実行のスケジューリング

IBM Cognos レポートは、一定間隔で実行されるようにスケジュールすることができます。レポートをスケジュールに入れると、そのレポートが含まれているダッシュボードにユーザがアクセスするたびにレポートが実行されることはなくなります。その結果、レポートが含まれているダッシュボードのパフォーマンスが向上します。

Cognos でスケジュールできるのは、ユーザ ID パラメータを含まない IBM レポートのみであることに注意してください。ID パラメータのないレポートとは、すべてのユーザが同じデータを表示できるもの、つまり、ユーザに基づいてデータがフィルタリングされることのないレポートです。以下のポートレットをスケジュールに入れることはできません。

- すべての Campaign 事前定義ポートレット
- Marketing Operations の自分のタスクサマリおよび自分の承認サマリの事前定義ポートレット

スケジューリングは、IBM Cognos で実行するタスクです。スケジューリング全般について詳しくは、Cognos の資料を参照してください。ダッシュボードポートレットの特殊なスケジューリング要件については、『ダッシュボードレポートをスケジュールに入れるには』を参照してください。

データに関する考慮事項

レポートに含まれているデータに基づいてスケジュールされた実行を計画する必要があります。例えば、「過去 7 日間のオファーレスポンス」ダッシュボードを毎晩実行して、現在日の前の 7 日間に関する情報がこのダッシュボードに入るようにすることができます。一方、「市場金融ポジション」ダッシュボードレポートでは四半期ベースの金融指標が比較されるので、このダッシュボードレポートを週 1 回実行するよう選択することもできます。

ユーザ期待値

追加のスケジュール要件は、レポートの対象ユーザがどの程度の頻度のデータ更新を期待しているかということです。これについては、スケジュールを計画するときにユーザと相談する必要があります。

ガイドライン

ここに示すのは、ダッシュボードの IBM Cognos レポートのスケジューリングを計画する際に役立つ大まかなガイドラインです。

- ロールアップ情報を含むレポートは、一般に、毎晩実行するようにスケジュールします。
- 多数の計算を含むレポートは、1 つのスケジュールにまとめます。

ダッシュボードレポートをスケジュールに入れるには

ダッシュボードレポート (事前定義ポートレットまたはユーザ作成ポートレット) をスケジュールに入れるには、まずビューを作成してそれをスケジュールに入れ、その後ここに説明する方法でポートレットを構成する必要があります。

注: ユーザ別にフィルタリングされないレポートのみをスケジュールに入れることができます。

1. Cognos でレポートをコピーし、そのコピーを新規名で保存します。
2. Cognos で、コピー後のレポートを開き、オリジナルレポートと同じ名前のビューとして保存します。 Unica Dashboard/Product フォルダに保存してください。ここで、Product は、該当の製品フォルダです。
3. Cognos で、必要に応じてビューをスケジュールに入れます。
4. IBM Unica Marketing で、レポートをダッシュボードに追加します (まだ追加していない場合)。

98 ページの『事前定義ポートレットをダッシュボードに追加するには』または 103 ページの『ユーザ作成ポートレットをダッシュボードに追加するには』を参照してください。

5. レポートが事前定義ポートレットの場合のみ、以下の操作をしてください。
 - ポートレットの省略符号ボタン (...) をクリックし、「構成」を選択します。
 - 「このレポートはスケジュール済みですか? (Has this report been scheduled?)」の下で「はい」を選択します。
 - 「保存」をクリックしてから、「フルページに戻る (Return to the Full Page)」をクリックします。

事前定義ポートレットの説明

このセクションでは、すべての IBM 事前定義ダッシュボードポートレットについて、製品別およびポートレットタイプ別に説明します。

Marketing Operations IBM Cognos レポートポートレット

このセクションでは、Marketing Operations レポートパッケージで使用できる Marketing Operations ダッシュボードポートレットについて説明します。

レポート	説明
自分のタスクのサマリ	すべての進行中プロジェクトのレポートを表示中のユーザの、すべてのアクティブタスクと完了したタスクを示す IBM Cognos レポートの例。
自分の承認のサマリ	レポートを表示中のユーザの、アクティブな承認と完了した承認のデータを示す IBM Cognos レポートの例。
マネージャ承認のサマリ	システム内のすべての進行中プロジェクトに関するアクティブな承認と完了した承認のデータを表示する IBM Cognos レポートの例。
プロジェクトタイプ別プロジェクト	システム内のすべての進行中プロジェクトをテンプレートタイプ別に示す 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
ステータス別プロジェクト	システム内のすべてのプロジェクトをステータス別 (ドラフト、進行中、保留、キャンセル、終了) に示す 3-D 棒グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
マネージャタスクのサマリ	すべての進行中プロジェクトに関するアクティブタスクと完了したタスクのデータを表示する IBM Cognos レポートの例。

レポート	説明
市場金融ポジション	現行の暦年のすべての状態のすべての計画について、予算、予測、コミット済み、および実際の金額のタイムラインを表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。
プロジェクトタイプ別の金額	現行の暦年でプロジェクトタイプ別の実際の支出金額を示す 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。
四半期別の完了プロジェクト	この四半期の早期、定時、および遅れて完了したプロジェクトの数を示す 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
要求および完了したプロジェクト	1 カ月あたりのプロジェクト要求の数と完了プロジェクトの数のタイムライングラフを表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートでは、送信済み、受け入れ済み、または差し戻しの状態のプロジェクト要求のみを数えます。
プロジェクトタイプ別の予測	現行の暦年でプロジェクトタイプあたり送信される支出の 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
プロジェクトタイプ別の予算	現行の暦年でプロジェクトタイプあたりの予算の 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。

Marketing Operations リストポートレット

このセクションでは、Marketing Operations レポートパッケージがインストールされていない場合でもダッシュボードで使用できる標準 Marketing Operations ポートレットについて説明します。

レポート	説明
自分のアクティブプロジェクト	レポートを表示するユーザのアクティブプロジェクトのリスト。
自分のアラート	レポートを表示するユーザの Marketing Operations アラートのリスト。
アクション待ちの承認	レポートを表示するユーザのアクションを待っている承認のリスト。
自分のタスク	レポートを表示するユーザが所有しているタスクのリスト。
自分の要求	レポートを表示するユーザが所有している要求のリスト。
予算超過プロジェクト	暦年の予算を超過したすべてのプロジェクトのリスト。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。

Campaign IBM Cognos レポートポートレット

このセクションでは、Campaign レポートパッケージで使用可能なダッシュボードポートレットについて説明します。

レポート	説明
Campaign 投資収益率比較	レポートを表示するユーザによって作成されるか更新されたキャンペーンについて、その ROI の概略を比較した IBM Cognos レポート。
Campaign レスポンス率比較	レポートを表示するユーザによって作成されるか更新された 1 つ以上のキャンペーンについて、それらのレスポンス率を比較した IBM Cognos レポート。
Campaign オファー別収益比較	レポートを表示するユーザによって作成されるか更新されたオファーを含んでいるキャンペーンごとに、これまでに受け取った収益を比較した IBM Cognos レポート。
過去 7 日間のオファーレスポンス	レポートを表示するユーザによって作成されるか更新された各オファーに基づいて、過去 7 日間に受け取ったレスポンスの数を比較した IBM Cognos レポート。
オファーレスポンス率比較	レポートを表示するユーザによって作成されるか更新されたオファー別に、レスポンス率を比較した IBM Cognos レポート。
オファーレスポンス内訳	レポートを表示するユーザによって作成されるか更新された各種のアクティブなオファーを、状況ごとに分けて示した IBM Cognos レポート。

Campaign リストポートレット

このセクションでは、Campaign レポートパッケージがインストールされていない場合でも、ダッシュボードで使用できる標準 Campaign ポートレットについて説明します。

レポート	説明
最近使ったカスタムブックマーク	レポートを表示するユーザによって作成された Web サイトまたはファイルへのリンクのリスト。
最近使ったキャンペーン	レポートを表示するユーザによって作成された最新のキャンペーンのリスト。
最近使ったセッション	レポートを表示するユーザによって作成された最新のセッションのリスト。
キャンペーンモニタポートレット	レポートを表示するユーザによって作成された、実行済みまたは現在実行中のキャンペーンのリスト。

Interact IBM Cognos レポートポートレット

対話点パフォーマンス - 7 日間に 1 対話点あたり受け入れたオファーの数を表示します。

このダッシュボードレポートは、ID が 1 のインタラクティブチャネルを指すように定義されています。このレポートの追加バージョンを作成する (そして追加のインタラクティブチャネルに関する報告を取得する) か、このレポートが指示するインタラクティブチャネルの ID を変更するには、85 ページの『対話点パフォーマンスダッシュボードの構成』を参照してください。

Distributed Marketing リストポートレット

このセクションでは、ダッシュボードで使用できる標準 Distributed Marketing ポートレットについて説明します。

レポート	説明
リスト管理	レポートを使用するユーザのアクティブなリストのリスト。
キャンペーン管理	レポートを表示するユーザのアクティブな企業キャンペーンおよびオンデマンドキャンペーンのリスト。
サブスクリプション管理	現行ユーザの企業キャンペーンに対するサブスクリプションのリスト。
カレンダー	アクティブな企業キャンペーンおよびオンデマンドキャンペーンのスケジュールを表示するカレンダー。

Optimize リストポートレット

このセクションでは、ダッシュボードで使用できる標準 Optimize ポートレットについて説明します。

レポート	説明
自分の最近の最適化セッション	レポートを表示するユーザが過去 30 日間に実行した最後の 10 個の Optimize セッションのリスト。
最後に成功した最適化実行インスタンス	過去 30 日間の正常に完了したレポートを表示するユーザが実行した、最後の 10 個の Optimize セッションのリスト。
最後に失敗した最適化実行インスタンス	過去 30 日間の正常に完了しなかったレポートを表示するユーザが実行した、最後の 10 個の Optimize セッションのリスト。

ダッシュボードのセットアップ

platform_admin ユーザは汎用ダッシュボードの管理者です

ダッシュボードを作成し、すべてのダッシュボードを管理できるのは、platform_admin ユーザのみです。ただし、このユーザは、任意の IBM Unica Marketing ユーザに個別ダッシュボードの管理を割り当てることができます。

platform_admin ユーザは、Marketing Platform のインストール時に存在している事前定義ユーザです。

IBM Unica のサンプルダッシュボード

事前定義の IBM Unica ポートレットには、以下のレイアウトを推奨します。

- 分散マーケティングポートレット - 1 列
- その他のすべての IBM Unica 事前定義ポートレット - 2 列 (50/50)

NetInsight ユーザ作成ポートレットの場合、最も一般的なレイアウトは 2 列 (50/50) です。

その他のユーザ作成ポートレットの場合は、最も一般的なレイアウトは 1 列またはフリーフォームです。これらのレイアウトでは、ページを最大の水平スペースで表示することができます。

このセクションの以後の部分では、IBM Unica 事前定義ポートレットまたは IBM Unica Marketing レポートを用いるユーザ作成ポートレットを使用した、サンプルダッシュボードについて説明します。

サンプル Campaign ダッシュボード

このセクションでは、Campaign の事前定義ポートレットを使用するサンプルダッシュボードについて説明します。

キャンペーン実績ダッシュボード

ユーザ: 個々のマーケティング担当者

レイアウト: 2 列 (50/50)

ポートレット

- 投資収益率の比較
- キャンペーンレスポンス率の比較
- オファー別のキャンペーン収益の比較

オファー実績ダッシュボード

ユーザ: 個々のマーケティング担当者

レイアウト: 2 列 (50/50)

ポートレット

- オファーレスポンス率の比較
- 過去 7 日間のオファーレスポンス
- オファーレスポンス内訳

キャンペーンオブジェクトダッシュボード

ユーザ: 個々のマーケティング担当者

レイアウト: 2 列 (50/50)

ポートレット

- 最近使ったキャンペーン
- 最近使ったカスタムブックマーク
- 最近使ったセッション

サンプル Distributed Marketing ダッシュボード

このセクションでは、Distributed Marketing 事前定義ポートレットを使用するサンプルダッシュボードについて説明します。

ローカルマーケティングダッシュボード

ユーザ: 個々のマーケティング担当者

レイアウト: 1 列

ポートレット

- リスト管理
- キャンペーン管理
- サブスクリプション管理
- カレンダー

サンプル Interact ダッシュボード

このセクションでは、Interact 事前定義ポートレットと、同じレポートに基づいてユーザが作成した追加のポートレットを使用するサンプルダッシュボードについて説明します。

対話ダッシュボード

ユーザ: マネージャ

レイアウト: 2 列 (50/50)

ポートレット

Interact には、事前定義の IBM Cognos ポートレットが 1 つあります。対話点パフォーマンスです。このダッシュボードレポートは、単一のインタラクティブチャンネルを指すために定義されています。

複数のインタラクティブチャンネルを追跡するには、対話点パフォーマンスレポートを必要なだけいくつでもコピーして、85 ページの『対話点パフォーマンスダッシュボードの構成』に説明されている方法でチャンネル ID を変更してください。そして、102 ページの『IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成するには』に説明されている方法で個々の新規レポート用の新規ポートレットを作成し、それらのポートレットをダッシュボードに追加します。

サンプル Marketing Operations ダッシュボード

このセクションでは、Marketing Operations の事前定義ポートレットを使用するサンプルダッシュボードについて説明します。

Marketing Operations ダッシュボード

ユーザ: 個々のマーケティング担当者

レイアウト: 2 列 (50/50)

ポートレット

- 自分のタスク
- 自分のアラート

- 自分のアクティブプロジェクト
- アクション待ちの承認
- 自分のタスク
- 自分の要求

Marketing Operations マネージャダッシュボード

ユーザ: マネージャ

レイアウト: 2 列 (50/50)

ポートレット

- プロジェクトタイプ別プロジェクト
- マネージャ承認のサマリ
- ステータス別プロジェクト
- マネージャタスクのサマリ

Marketing Operations エグゼクティブダッシュボード

ユーザ: エグゼクティブ

レイアウト: 2 列 (50/50)

ポートレット

- 四半期別の完了プロジェクト
- 市場金融ポジション
- プロジェクトタイプ別の金額
- プロジェクトタイプ別の予算
- プロジェクトタイプ別の予測
- 四半期別の完了プロジェクト
- 要求および完了したプロジェクト

サンプル NetInsight ダッシュボード

このセクションでは、NetInsight のユーザ作成ポートレットを使用するサンプルダッシュボードについて説明します。

NetInsight ダッシュボード

ユーザ: マネージャ

レイアウト: 2 列 (50/50)

ポートレット

- 大陸のサマリ
- 日付別のトラフィックサマリ
- キーワードのサマリ
- リピートビジタのサマリ

ダッシュボード作成プロセスの概要

このセクションでは、新規ダッシュボードの作成手順の概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 使用する IBM 事前定義ポートレットを使用可能にします。
2. 必要な場合には、独自のポートレットを作成してください。
3. 新規ダッシュボードを作成し、それに名前を付け、説明を入力します。
4. ダッシュボードのレイアウトを選択します。
5. 必要に応じてポートレットを追加します。
6. 1 人以上のダッシュボード管理者を割り当てます。

ダッシュボード管理者は、ダッシュボードにアクセスできるユーザのリストを維持することができます。管理者は、レイアウトおよびダッシュボードに組み込むポートレットを変更することもできます。

7. ユーザをダッシュボードメンバーシップに追加して、ダッシュボードにアクセスできるようにします。

このタスクは、すべてのダッシュボードを管理する個人、または個々のダッシュボード管理者が実行できます。

事前定義ポートレットを有効または無効にするには

ダッシュボードを作成する前に、このタスクを実行してください。すでにインストール済みの IBM 製品を参照するポートレットのみを有効にする必要があります。

1. IBM Unica Marketing にログインして、「設定」>「ダッシュボードポートレット」を選択します。
2. ポートレットの名前の横の「有効/無効」チェックボックスをクリックして、ポートレットを選択または選択解除します。
3. 「保存」をクリックします。
4. Marketing Platform が配置されている Web アプリケーションサーバーを再起動します。

選択したポートレットが有効になり、ダッシュボードへの組み込みに使用できるようになります。

新規ダッシュボードを作成するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択してから「管理」タブを選択します。

管理ダッシュボードが表示されます。

2. 「ダッシュボードの作成」ポートレットで、固有の名前 (必須) と説明 (オプション) を入力します。
3. 「保存」をクリックします。

「ダッシュボード」ページに、新規ダッシュボードがタブとして表示されます。

ダッシュボードレイアウトを選択または変更するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. 「テンプレートのレイアウト」をクリックします。

使用可能なレイアウトを示すページが表示されます。

3. レイアウトの下のラジオボタンをクリックして、レイアウトを選択します。
4. 「保存」をクリックします。

すでにポートレットが含まれているダッシュボードのレイアウトを変更する場合は、ポートレットの再配置が必要になる場合があります。

事前定義ポートレットをダッシュボードに追加するには

ユーザ作成ポートレットをダッシュボードに追加する手順については、100 ページの『ユーザ作成ポートレットのタイプおよび使用可能性』を参照してください。

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. 「ポートレットの追加」をクリックします。

「アプリケーションの追加」ダイアログボックスが表示され、有効にされたポートレットが IBM 製品別にグループ化されてリストされています。

3. 使用可能な事前定義ポートレットのリストを表示するには、製品名の横の正符号をクリックしてください。
4. ポートレットを選択して、「追加」をクリックします。

ポートレットがダッシュボードの上部に表示されます。

ポートレットをダッシュボードに追加した後は、そのポートレットはダッシュボードのポートレットのリスト内で無効になります。ポートレットは、同じダッシュボード内では複数回使用できません。

5. ポートレットヘッダーをクリックし、レイアウト内の目的の位置にドラッグします。

ポートレットは、選択されたレイアウトで許可されている領域のみに配置できません。

ポートレットをダッシュボードから削除するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. ポートレットの上部の **X** ボタンをクリックして、プロンプトが出たら「**OK**」をクリックします。

ポートレットがダッシュボードから削除されます。

注: 「アプリケーションの追加」ダイアログボックスが開いているときも、同じ操作を実行できます。

ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更を行うには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択してから「管理」タブを選択します。

管理ダッシュボードが表示されます。

2. 「代理管理 (Delegate Administration)」ポートレットで、「代理管理先 (Delegate Administration for)」ドロップダウンリストからダッシュボードを選択します。
3. 名前を選択または選択解除します。
 - 名前が選択されているユーザが、ダッシュボードの管理権限を獲得します。
 - 基本検索または拡張検索を使用して、名前を検索することができます。
4. 「関連付けの更新 (Update Associations)」をクリックします。

ダッシュボードユーザリストを最新表示するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択してから「管理」タブを選択します。

管理ダッシュボードが表示されます。

2. 「メンバーシップの編集」ポートレットで、コミュニティの割り当ての編集 (Edit Assignments for Community) ドロップダウンリストから、メンバーシップリストを最新表示するダッシュボードを選択します。
3. 「ユーザの最新表示 (Refresh Users)」をクリックします。

これで、ユーザがログインしているかどうかに関係なく、Marketing Platform にアカウントを持つすべてのユーザが表示されます。

ポートレットの名前を変更するには

1. ダッシュボードの任意の管理ビューで、ポートレット名をクリックします。

編集可能フィールドにポートレット名が表示されます。

2. 名前を編集して、フィールドの外側のどこかをクリックします。

ダッシュボードの名前を変更するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択してから「管理」タブを選択します。

管理ダッシュボードが表示されます。

2. 「ダッシュボードの編集/削除 (Edit/Delete Dashboard)」ポートレットで、ダッシュボード名の横の「編集」をクリックします。

編集可能フィールドにダッシュボード名が表示されます。

3. フィールドを編集してから、ダッシュボード名の横の「保存」をクリックします。

ダッシュボードを削除するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択してから「管理」タブを選択します。

管理ダッシュボードが表示されます。

2. 「ダッシュボードの編集/削除 (Edit/Delete Dashboard)」ポートレットで、ダッシュボード名の横のチェックボックスをクリックします。
3. 「チェック済みダッシュボードを削除する (Delete Checked Dashboards)」をクリックします。

ダッシュボードが削除されます。

ポートレットの作成と使用

ユーザ作成ポートレットのタイプおよび使用可能性

以下のタイプの IBM Unica Marketing ページからポートレットを作成できます。

- 任意の IBM Unica Marketing IBM Cognos レポート。これには、追加のインタラクティブチャンネルを指示するためにカスタマイズした Interact 対話点パフォーマンスレポートも含まれます。任意の既存のダッシュボードレポートをカスタマイズすることも、ダッシュボード以外のレポートをカスタマイズすることもできます。ダッシュボード以外の rep をカスタマイズする場合は、86 ページの『新規ダッシュボードレポートの作成に関するガイドライン』を参照してください。
- 自動更新する NetInsight または NetInsight のオンデマンドレポートまたはダッシュボード。

さらに、インターネットまたは会社のイントラネットのページからポートレットを作成することができます。

IBM の事前定義ポートレットとは異なり、自分が作成したポートレットはそれを作成したダッシュボードでしか使用できません。

ユーザ作成のポートレットの認証に関する考慮事項

ポートレットの作成を計画している場合は、認証に関する以下の考慮事項に注意する必要があります。

- ポートレットが、Marketing Platform を認証に使用するか認証を何も使用しないように構成されたオンプレミスインストールからの NetInsight レポートの場合、または Marketing Platform を認証に使用するその他の任意の IBM Unica Marketing 製品からのダッシュボードレポートの場合は、ユーザがポートレットを表示する際に資格情報を求めるプロンプトは表示されません。
- ポートレットが、認証に Marketing Platform を使用するように構成されていないオンプレミスインストールからの NetInsight レポートの場合は、ユーザはブラウザセッションごとにログイン資格情報を入力する必要があります。
- ポートレットが NetInsight オンデマンドレポート、または認証を必要とするインターネットまたはイントラネットのページの場合、そのポートレットはブラウザと同様の動作をします。ユーザは、ブラウザセッションでページを最初に表示す

るときにページのコンテンツにログイン資格情報を入力する必要があり、Cookie を使用してユーザのログイン状態が保持されます。

ポートレット作成プロセスの概要

このセクションでは、新規ポートレットの作成手順の概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. ポートレットとして使用するページの URL を作成します。

それには、該当の URL を取得し、エンコードし、変更します。

以下の手順は、各種のポートレットソースの URL の作成方法について説明しています。

- IBM Unica Marketing IBM Cognos レポート - 102 ページの『IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成するには』
 - NetInsight オンプレミスレポート - 『オンプレミス NetInsight レポートから URL を作成するには』
 - NetInsight オンデマンドレポート、およびインターネットまたは企業イントラネットのページ - 103 ページの『イントラネットまたはインターネットのページから URL を作成するには』
2. ポートレットをダッシュボードに追加します。


103 ページの『ユーザ作成ポートレットをダッシュボードに追加するには』を参照してください。

オンプレミス NetInsight レポートから URL を作成するには

この手順は、オンプレミス NetInsight インストール済み環境のレポートに使用します。

1. NetInsight で、エクスポートするレポートを表示します。

NetInsight ダッシュボードを使用している場合は、ダッシュボードの左上にあるレポートのみがエクスポートされます。

2. レポートの右上のツールバーにある「エクスポート」アイコン  をクリックします。

「エクスポートオプション」ウィンドウが開きます。

3. 以下のように、フィールドに情報を入力します。
 - 「エクスポートタイプ」ドロップダウンから「ポートレット URL」を選択します。
 - 「レポートの形式」ドロップダウンから「Web ブラウザ」を選択します。
 - レポートに組み込む値の数を指定します。
 - レポートグラフィックの幅をピクセルで指定します。パスレポートは、指定した幅に関係なくサイズを自己調整することに注意してください。積み重ね棒レポートでは、指定した幅が自動的に 30% 増加します。

- ポートレットには編集可能なタイトルがあるので、レポートヘッダーを非表示にすることを選択してください。
4. 「エクスポート」をクリックします。

レポートの URL がダイアログボックスに表示されます。

5. その URL をコピーして、テキストエディタに貼り付けます。
6. Web ツール (http://netzreport.googlepages.com/online_tool_for_url_en_decoding.html など) を使用して、URL をエンコードします。
7. URL の前に以下を付加します。 *YourIBMUnicaURL/suiteSignOn?target=*。ここで *YourIBMUnicaURL* は、IBM Unica Marketing のインストール先のログイン URL です。

例えば、以下の情報があるとします。

•

IBM Unica Marketing URL は <http://myHost.myDomain:7001/unica>

•

エンコード済みの NetInsight レポート URL は *MyEncodedReportURL*

最終 URL は以下のようになります。 <http://myHost.myDomain:7001/unica/suiteSignOn?target=MyEncodedReportURL>

IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成するには

IBM Cognos でダッシュボードレポートを作成する方法については、86 ページの『新規ダッシュボードレポートの作成に関するガイドライン』を参照してください。

IBM Cognos ダッシュボードポートレット URL の形式は以下のとおりです。

```
http(s)://HOST.DOMAIN:port/unica/reports/jsp/  
dashboard_portlet.jsp?product=Product& report=ReportName
```

ここで、

- *Product* は、IBM Cognos システムの「Unica ダッシュボード」フォルダの中にある IBM Unica アプリケーションのサブフォルダの名前です。つまり、Campaign、Interact、または Marketing Operations を表す Plan です。(Plan は Marketing Operations アプリケーションの以前の名前です。)
- *ReportName* は、ダッシュボードレポートの HTML エンコード名です。例: Campaign%20Performance%20Comparison

次に例を示します。

```
http://serverX.companyABC.com:7001/unica/reports/jsp/  
dashboard_portlet.jsp?product=Campaign&report=Campaign%20Performance  
%20Comparison
```

89 ページの『ダッシュボードレポートをスケジュールに入れるには』で説明されている方法でレポートをスケジュールに入れてある場合は、URL の末尾に以下を追加します。

`&isView=true`

注: レポートの名前をエンコードするには、http://netzreport.googlepages.com/online_tool_for_url_en_decoding.html などの Web ツールを使用します。

イントラネットまたはインターネットのページから URL を作成するには

この手順は、オンデマンドの NetInsight ページも含め、イントラネットページまたはインターネットページに使用します。

1. ブラウザに目的のページを表示し、ブラウザのアドレスフィールドから URL をコピーします。
2. Web ツール (http://netzreport.googlepages.com/online_tool_for_url_en_decoding.html など) を使用して、URL をエンコードします。

ユーザ作成ポートレットをダッシュボードに追加するには

この手順を実行する前に、本書の別の個所に示す説明に従って URL を作成する必要があります。

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. 「ポートレットの追加」をクリックします。

「アプリケーションの追加」ダイアログボックスが表示されます。

3. 作成しているポートレットのタイプに応じて、以下のいずれかの操作をします。
 - NetInsight ポートレットを作成している場合は、「NetInsight」カテゴリを展開して「追加」をクリックします。空の NetInsight テンプレートがダッシュボードに追加されます。
 - その他のタイプのポートレットを作成している場合は、「テンプレート」カテゴリを展開して「追加」をクリックします。空の IFrame がダッシュボードに追加されます。
4. IFrame または NetInsight テンプレートの省略符号ボタン (...) をクリックして、「構成」を選択します。

IFrame または NetInsight テンプレートの構成ウィンドウが開きます。

5. 作成しているポートレットのタイプに応じて、以下のいずれかの操作をします。
 - IBM Unica Marketing ポートレットを作成している場合は、作成した URL を「ポートレット URL」フィールドに貼り付けます。
 - その他のタイプのポートレットを作成している場合は、104 ページの『IFrame 構成ウィンドウのリファレンス』に説明されているフォームに入力します。

6. 「保存」をクリックしてから、「フルページに戻る (Return to the Full Page)」をクリックします。
7. 99 ページの『ポートレットの名前を変更するには』で説明されている方法で、ポートレットを名前変更します。

IFrame 構成ウィンドウのリファレンス

フィールド	説明
ソース URL	作成した URL に貼り付けます。
コンテキストパスに対して相対的	このチェックボックスはチェックマークを外したままにしてください。
認証	このチェックボックスはチェックマークを外したままにしてください。
認証タイプ	「基本」を選択します。
フォーム形式	「投稿」を選択します。
ユーザ名	このフィールドはブランクのままにします。
パスワード	このフィールドはブランクのままにします。
非表示変数	将来の利用のために予約されています。
HTML 属性	ポートレットの外観を制御する属性。これらの属性を編集する必要はありませんが、ポータルの外観を変更したい場合は編集しても構いません。必須フォーマットは、1 行につき 1 つの属性値です。

ダッシュボードのメンバーシップの管理

ダッシュボード管理タスクについて

ダッシュボード管理者に任命された場合は、そのダッシュボードのメンバーシップ、レイアウト、およびコンテンツを管理する責任があります。

ダッシュボードのレイアウトおよびコンテンツの変更に関するタスクは、「ダッシュボードのセットアップ」で説明されています。

このセクションでは、ダッシュボードのメンバーシップの管理方法について説明します。

ダッシュボードの表示に必要なユーザ権限

ダッシュボードを使用すると、IBM Unica Marketing ユーザは、各製品内部でユーザに対して構成されている権限に関係なく、複数の製品 (Marketing Operations や Campaign など) からのページを単一のページに表示することができます。

一部のダッシュボードポートレットでは、ポートレット内部のリンクをクリックして作業できるページを開くことによって、IBM Unica Marketing 製品での作業を実行することができます。ユーザにタスクを実行する権限がない場合は、ページが表示されません。

ポートレット内のコンテンツの一部はユーザ別にフィルタリングされることに注意してください。例えば、ユーザがキャンペーンを直接操作できない場合は、「最近使ったキャンペーン」ポートレットにはリンクが何も表示されない可能性があります。

ダッシュボードユーザリストについて

ユーザが初めて IBM Unica Marketing にログインしたとき、ユーザの名前が、ダッシュボードメンバーシップの割り当てに使用可能なユーザのリストに自動的に表示されます。

Marketing Platform アカウントは持っているが IBM Unica Marketing には今までログインしたことがないユーザ (例えば新しい従業員) に、IBM Unica Marketing ユーザへのダッシュボードメンバーシップを割り当てたい場合があります。このユーザの名前をダッシュボードメンバーシップ割り当てに使用可能なユーザのリストに表示するには、ユーザのリストを最新表示します。99 ページの『ダッシュボードユーザリストを最新表示するには』を参照してください。

ダッシュボードメンバーシップを認可または削除するには

1. 「管理者」タブで、「メンバーシップの編集」ポートレットを選択します。
2. ドロップダウンリストからダッシュボードを選択します。
3. 名前を選択または選択解除します。

名前が選択されているユーザは、ダッシュボードを表示して使用することができます。

ユーザを名前で検索することも、「**拡張**」を選択して他の属性で検索することもできます。

4. 「**更新**」チェックボックスを選択します。

第 9 章 IBM Unica Scheduler での実行のスケジューリング

IBM Unica Scheduler を使用すると、定義する間隔でプロセスを実行するように構成することができます。現在は、IBM Scheduler を以下のスケジュールに使用できません。

- Campaign フローチャートの実行
- Optimize 最適化セッションおよび最適化後のフローチャート実行
- eMessage メール配信
- PredictiveInsight モデル実行とスコア実行

スケジューラでは、スケジュールと実行という 2 つの基本概念を使用します。

- スケジュールとは、1 回または繰り返しベースで実行したい任意のタスクです。スケジュールを定義するときに、IBM Unica Marketing オブジェクト、タスクを実行する頻度、および開始日と終了日を指定します。
- 実行とは、スケジュールの実行インスタンスです。

2 つのタイプのスケジュールがあります。

- 時刻ベース - 実行は指定の時刻に発生します。
- トリガベース - スケジュールが指定のトリガを受け取ったとき (例えば、別のスケジュールがその実行の成功または失敗を示すトリガを送信したとき) に、実行が発生します。

いずれのタイプのスケジュールも、1 回実行、または繰り返しベースの実行に構成することができます。

Campaign Schedule プロセスと IBM Unica Scheduler の相違点

IBM Unica Marketing の 8.0 リリースから、IBM Unica Scheduler は、フローチャート全体のスケジュール実行で Campaign Schedule に代わるものとして意図されています。IBM Unica Scheduler は、フローチャートが実際に実行されていない場合、サーバシステムのリソースを一切消費しないため、より効率的です。IBM Unica Scheduler は、フローチャート内の Campaign Schedule プロセスがフローチャートの実行中のみ機能するときは、たとえフローチャートが実行されていない場合でも、フローチャートを開始します。

Campaign Schedule プロセスは、完全な後方互換性を維持するために、また、IBM Unica Scheduler で処理されないその他のユースケースに備えて、保存されています。例えば、Campaign Schedule プロセスを使用して Campaign トリガを送信したり、従属プロセスの実行を遅らせたりすることができます。

フローチャート実行を開始するトップレベルのプロセスとして Campaign Schedule プロセスを使用するフローチャートをスケジュールするときは、IBM Unica を使用しないでください。一般に、どちらか 1 つあれば十分です。ただし、IBM Unica Scheduler によって開始されるフローチャート内に Schedule プロセスがある場合、

そのプロセスは構成どおりに機能します。後続のプロセスが実行される前に、IBM Unica Scheduler と Schedule プロセスに必要な条件が満たされる必要があります。

IBM Unica Scheduler とは異なり、Campaign Schedule プロセスは外部トリガを送信して、コマンドラインスクリプトを呼び出すことができます。IBM Unica Scheduler は、それ自体のスケジュールにのみ、トリガを送信できます。

スケジューラトリガについて

スケジュールを作成または編集するときに、スケジューラトリガをセットアップすることができます。

トリガは、実行が正常に完了したとき、または実行が失敗したときに、IBM Scheduler が送信できるテキストストリングです。完了時にトリガを送信するスケジュールがある場合、そのトリガを受け取ったときに実行を開始する別のスケジュールを設定することができます。

すべてのスケジュールがすべての送信されたトリガを受け取りますが、スケジュールが実行を開始するのは、そのトリガストリングが待機しているトリガストリングに一致する場合のみです。この方法で、無限数の依存関係がスケジュール間に作成できます。

トリガを作成した後、スケジューラユーザインターフェースでそのトリガがドロップダウンリストに表示されるので、再利用がしやすくなります。

トリガの例

一組の Campaign フローチャートのすべてに同じトリガを指定することによって、それらを同時に実行するようにスケジュールすることができます。トリガを使用して、一組のフローチャートを次々に順番に実行することもできます。

以下の例では、指定順序で実行する一連のフローチャートをセットアップする方法を示します。

- フローチャート 1 は、実行が正常に完了したときに送信される「フローチャート 1 実行完了」トリガを指定してスケジュールされています。
- フローチャート 2 は、以下のようにスケジュールされます。
 - 「フローチャート 1 実行完了」トリガを受信しときに開始する。
 - 実行が正常に完了したら、「フローチャート 2 完了」トリガを送信する。
- フローチャート 3 は、「フローチャート 2 実行完了」トリガを受信したときに開始するようにスケジュールされます。

開始トリガについて

開始トリガを使用してセットアップしたスケジュールは、その開始日に関係なく、作成直後からトリガを listen し始めます。ただし、トリガが開始日をオーバーライドすることはありません。例えば、スケジュールの開始日が 2010 年 12 月 12 日の場合、2010 年 12 月 5 日に開始トリガを受け取ったとしても、2010 年 12 月 12 日になるまでは実行を開始しません。

スケジューラの制限について

多数のプロセスがシステムに大量の要求を送ると予想される場合は、制限を使用してパフォーマンスを管理します。制限は、「設定」>「構成」ページでセットアップするスケジューラグループに基づいています。グループに制限しきい値を割り当て、スケジュールをそのグループに関連付けます。

制限しきい値とは、そのグループに関連付けられた、同時実行が可能な実行の最大数です。サーバ上でのリソース消費量を削減するには、制限しきい値を小さい値に設定することができます。制限を適用できるのは、IBM Scheduler で作成されたスケジュールのみです。

デフォルトグループの無制限しきい値

すべてのスケジュールは制限グループに所属していなければなりません。あるスケジュールについて制限を有効にたくない場合は、そのスケジュールを「デフォルト」スケジューラグループ (スケジュールの作成時に「スケジューラグループ」フィールドでデフォルトで選択されているオプション) のメンバーにしてください。このグループの制限しきい値は非常に高いので、事実上は制限がないのと同じ意味になります。

制限の例外

フローチャートを Campaign 内部で、または Campaignunica_svradm ユーティリティを使用して実行する場合、これらの実行は制限しきい値にはカウントされず、即時に実行されます。

制限の例

- システムリソースが心配な場合、制限を使用してサーバへの負荷を管理することができます。例えば、多数の複雑な Campaign フローチャートを実行しなければならない場合、同時に実行できるフローチャートの数を制限する制限グループにそれらを割り当てて、Campaign サーバまたはマーケティングデータベースへの負荷を管理することができます。
- 制限を使用して、スケジュールの優先順位を設定できます。制限しきい値の大きいグループに高優先順位のスケジュールを割り当てることによって、システムリソースをできる限り効率的に使用してこれらのスケジュールが実行される状況を確保することができます。低優先順位のスケジュールは、制限しきい値の小さいグループに割り当ててください。
- 繰り返しパターンを使用してスケジュールされたフローチャートがある場合は、制限を使用して、実行が重ならず順序よく行われるようにすることができます。例えば、10 時間の間、毎時間実行されるように設定された繰り返しパターンを持つフローチャートをスケジュールに入れたとします。そのフローチャートで、1 つの実行を完了するのに 1 時間以上かかる場合、直前の実行が完了する前に次の実行が開始しようとする可能性があります。この場合、まだ実行中のフローチャートがロックされるため、次の実行は失敗する結果になります。これが起こらないようにするには、しきい値 1 の制限グループを作成し、フローチャートのスケジュールをこのグループに割り当てることができます。

スケジューラの繰り返しパターンについて

繰り返しパターンを構成することによって、繰り返し実行するスケジュールをセットアップすることができます。設定した繰り返しパターンは、指定の開始時刻後に開始されます。

いくつかの繰り返しパターンのオプションがあります。

- 事前定義 - 共通繰り返しパターンのセットで、その中から選択できます。
- cron 表現 - 6 個から 7 個のフィールドで構成され、空白文字で区切られたストリングであり、時間のセットを表します。
- 単純なカスタム繰り返しパターン - 多くの一般的な会議スケジューラに似た繰り返しパターンを作成するユーザインターフェース。

スケジューラの繰り返しパターンはすべて、cron 表現に基づいています。Scheduler では、これらの cron 表現を作成しやすいように、ユーザインターフェース内に事前定義パターンを用意しています。独自のカスタム cron 表現を書く場合は、これらの式を読むことに慣れていないユーザにもパターンが理解しやすいように、繰り返しパターンのわかりやすい説明を作成することをお勧めします。

重要: 繰り返しパターンはすべて、次の長い間隔の終わりでリセットされます。例えばカスタム週次パターンを 3 週間ごとに実行するよう設定した場合、パターンは毎月の終わりにリセットされるので、このパターンは毎月 3 週目に実行されることになります。これはすべての cron 表現の特性です。第 3 週、第 6 週、第 9 週、第 12 週というように実際に実行されるスケジュールを設定するには、目的のそれぞれの実行日について個別にスケジュールを作成する必要があります。

Scheduler の制限

IBM Unica Scheduler の以下の制限について注意してください。

- フローチャート実行を手動で開始する場合でもコマンド行からフローチャートコマンドを実行する場合でも、IBM Unica Scheduler に影響が出ることはなく、逆も同様です。ただし、1 つだけ例外があります。いずれかの方法でフローチャート実行が開始された場合、その後いずれかの方法でフローチャートを実行しようとする、直前の実行が完了していない場合にはロックエラーにより失敗します。
- Scheduler トリガは、どのような方法であっても Campaign フローチャートトリガと情報のやりとりをすることはありません。スケジュールプロセスまたは Campaign トリガユーティリティ `unica_actrg` によって送信されたトリガが IBM Unica Scheduler 内のスケジュールの実行を開始することはできず、逆も同様です。

フローチャートのスケジューリングに必要な権限

IBM Unica Scheduler を使用してフローチャートをスケジュールに入れるには、以下の権限が必要です。

権限	説明
バッチフローチャートのスケジューリング	デフォルトの実行パラメータを使用してフローチャートのスケジューリングを実行できます。
バッチフローチャートのスケジューリングのオーバーライド	フローチャートのスケジューリングのためのデフォルトの実行パラメータをオーバーライドできます。
バッチフローチャートの実行	フローチャートを実行できます (スケジュール済みフローチャートを正常に実行するために必要です)。

注: スケジュール済みフローチャートを実行する場合、フローチャートはスケジュール済みタスクを作成した Marketing Platform ユーザによって実行されます。このユーザアカウントが無効になっているか削除されていた場合、そのユーザが以前にスケジュールに入れたフローチャートはすべて実行に失敗します。このユーザアカウントを非アクティブにしたいが、以前にスケジュールに入れられたフローチャートは実行できるようにしたいという場合は、そのユーザアカウントの状態を「アクティブ」に設定したままにし、「バッチフローチャートの実行」権限のみを認可してください。

スケジュール実行パラメータについて

Campaign フローチャートをスケジュールに入れると、フローチャートは、実行パラメータが含まれたストリングを IBM Scheduler に渡すことができます。このストリングは、実行が開始されたときに Campaign に返されます。Campaign では、「フローチャートパラメータの上書き」ダイアログボックスで設定された値のすべてが単一のストリングとして Scheduler に渡されます。このストリングは、「実行パラメータ」フィールドに表示されます。

Campaign フローチャート実行用のデフォルトパラメータのオーバーライド

Campaign フローチャート実行をスケジュールに入れた場合、Scheduler は、フローチャート用に定義されているデフォルトの実行パラメータを使用します。これらのパラメーターには、以下のものがあります。

- フローチャートが使用するテーブルマッピングが含まれているテーブルカタログ。
- フローチャート内部で定義されたユーザ変数値。
- フローチャートがアクセスするデータソースのログイン情報。デフォルトは、フローチャートをスケジュールに入れるユーザです。

Campaign では、これらのデフォルト値をオーバーライドして、異なるデータソースに対して実行したり、異なる結果を得たりする、unica_svradm ユーティリティが提

供する機能に似た機能を利用できます。例えば、単一のフローチャートについて複数の実行をスケジュールに入れて、ユーザ変数の値の組み合わせをいろいろテストすることができます。実動データベースからこれらのテスト実行用のサンプルデータベースに切り替える、代替テーブルカタログを指定することもできます。組織で、テスト実行と運用実行に異なるデータベースログインが必要な場合は、適切なログイン情報を指定することができます。

スケジュールの作成

スケジュールに入れるオブジェクトを作成するときに、スケジュールを作成します。現在は、Campaign フローチャートと eMessage メール配信のみで IBM Scheduler を使用して実行をスケジュールすることができます。

デフォルトパラメータを使用してフローチャートスケジュールを作成するには

1. 「表示」モードのフローチャートタブで「実行」アイコンをクリックし、「これをスケジュール」を選択します。

「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログボックスが開きます。

2. 「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログボックスの各フィールドに入力します。

複数回の実行を選択する場合は、「繰り返しの設定」をクリックして反復パターンをセットアップします。

3. 「このスケジュールで実行」をクリックします。

重要: フローチャートをスケジュールする場合、スケジュールされたタスクはフローチャート名が基礎になります。スケジュールされたタスクの作成後にフローチャート名が変更されると、スケジュールされたタスクは失敗します。

デフォルトパラメータをオーバーライドしてフローチャートスケジュールを作成するには

1. 「表示」モードのフローチャートタブで「実行」アイコンをクリックし、「これをスケジュール - 詳細」を選択します。

「フローチャートパラメータの上書き (Override Flowchart Parameters)」ダイアログボックスが開きます。

2. ダイアログボックスの各フィールドに入力して、フローチャートパラメータを指定します。

このフィールドに入力したパラメータの構文は、チェックされません。先へ進む前に、正しい値を入力してあることを再確認してください。

3. 「実行をスケジュール」をクリックします。

「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログボックスが表示されます。

4. 「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログボックスの各フィールドに入力します。

複数回の実行を選択する場合は、「**繰り返しの設定**」をクリックして反復パターンをセットアップします。

5. 「このスケジュールで実行」をクリックします。

重要: フローチャートをスケジュールする場合、スケジュールされたタスクはフローチャート名が基礎になります。スケジュールされたタスクの作成後にフローチャート名が変更されると、スケジュールされたタスクは失敗します。

制限をセットアップするには

スケジュール対象のオブジェクトのタイプ (フローチャートまたはメール配信) に対して、制限グループを明確にセットアップする必要があります。

1. 「構成」 ページで、テンプレートの下の以下のいずれかの制限グループテンプレートに移動します。
 - 「Platform」 > 「Scheduler」 > 「スケジュール登録」 > 「Campaign」 > [オブジェクト] > 「制限グループ」 > (制限グループ)
 - 「Platform」 > 「Scheduler」 > 「スケジュール登録」 > 「PredictiveInsight」 > [オブジェクト] > 「制限グループ」 > 「制限グループ」
2. 56 ページの『テンプレートから新規カテゴリを作成する』で説明されている方法で、新規カテゴリ (制限グループ) を作成します。

「制限しきい値」プロパティに設定する数値は、そのグループに関連付ける同時実行が可能な実行の最大数です。実行に適切なスケジュールのうち、制限しきい値を超えたスケジュールは、実行待ちのキューに入れられ、入れられた順序でスケジューラは実行通知を受け取ります。

構成済みのスケジューラグループは、スケジュールの作成および編集に使用できるように、スケジューラユーザーインターフェースの「**スケジューラグループ**」ドロップダウンリストに表示されます。

この方法で実行を制御したいオブジェクトのタイプごとに、制限グループを作成する必要があります。例えば、フローチャート制限グループは、フローチャートのスケジューリングのみに使用でき、メール配信制限グループはメール配信のスケジューリングのみに使用できます。

3. 必要に応じて、1 つ以上のスケジュールをグループに割り当ててください。

「スケジュールの作成」ウィンドウまたは「スケジュールの編集」ウィンドウのリファレンス

このセクションでは、スケジュールを作成または編集する場合に使用するウィンドウについて詳しく説明します。

フィールド	説明
スケジュールされた項目タイプ	スケジュールされたオブジェクトのタイプ。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。

フィールド	説明
スケジュールされた項目名	スケジュールされたオブジェクトの名前。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
スケジュール名	スケジュールの名前を入力してください。
説明	スケジュールの説明を入力してください。
実行パラメータ	Campaign でフローチャートをスケジュールに入れる場合、「フローチャートパラメータの上書き」ダイアログで設定した値のすべてが単一ストリングとして Scheduler に渡され、「実行パラメータ」フィールドに表示されます。実行パラメータはスケジューラ自体では使用されません。スケジューラは、フローチャートの実行時に Campaign にストリングを返すだけです。
スケジューラグループ	1 つ以上の制限グループを作成してある場合、このスケジュールをグループに関連付けて、同時に実行できるこのスケジュールの実行数を制限することができます。このフィールドにオプションとして表示するためには、グループを「構成」ページのプロパティを使用して作成する必要があります。
正常完了時にトリガを送信	このスケジュールの実行が正常に完了したときに、その実行がトリガを送信するようにするには、トリガテキストをここに入力してください。その他のスケジュールがこのトリガを listen するように設定することができます。
エラーの発生時にトリガを送信	このスケジュールの実行が失敗したときにその実行がトリガを送信するようにするには、トリガテキストをここに入力してください。その他のスケジュールがこのトリガを listen するように設定することができます。

フィールド	説明
開始時期	<p>以下のオプションの 1 つを選択して、スケジュールをいつ実行するのかを指定します。開始時刻は、最初の実行のみに適用されます。これは、スケジュールが実行に最初に適格になる時刻を定義します。スケジュールがトリガを待つように構成されている場合、制限グループのメンバーである場合、または繰り返しパターンが含まれている場合は、実際の最初の実行は開始日の後になることがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定時刻に - 日時を選択してください。 トリガ発生時に - 既存のトリガを選択するか、新規トリガを入力してください。新規トリガを入力する場合は、この同じストリングを成功時または失敗時に送信するようにスケジュールを構成する必要があります。 指定日以後のトリガ発生時に - 既存のトリガを選択するか新規トリガを入力し、日時を選択してください。新規トリガを入力する場合は、この同じストリングを成功時または失敗時に送信するようにスケジュールを構成する必要があります。 <p>以下のオプションの 1 つを選択して、実行の数を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 回だけ実行 - スケジュールは 1 回実行されます。指定する開始日時に実行を開始する場合に使用できます。 n 回実行後に停止 - 指定の実行数が (成功か失敗かに関係なく) 発生した後か、または終了日に達するか、どちらか早い方の条件で実行が停止します。 指定日時に停止 - 指定の終了日時に達するまで、実行が定義された回数だけ開始されます。制限による制約によって実行が遅延した場合は、この日時の後で実行が発生することもあります。
繰り返しパターン	<p>以下のオプションから 1 つを選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 定義済みの繰り返しパターンを使用 - リストからパターンを選択してください。Marketing Platform には事前定義されたパターンのセットが用意されています。また、「構成」ページでプロパティを追加して、独自のパターンを作成することができます。 単純なカスタム繰り返しパターンを使用 - 間隔を選択してください。 cron スケジュール表現を使用 - 有効な cron 表現を入力してください。

「フローチャートパラメータの上書き」ウィンドウのリファレンス

次の表では、「フローチャートパラメータの上書き」ダイアログのフィールドについて説明します。このダイアログの編集可能フィールドはすべてオプションです。これらのフィールドに入力するパラメータの構文は、システムで検査されないことに注意してください。先に進む前に、入力した値が正しいことを念入りに確認してください。

フィールド	説明
フローチャート ID	フローチャートの固有 ID。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
キャンペーン - フローチャート名	キャンペーンの名前、キャンペーンコード、およびフローチャート名。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
スケジュールジョブ名	スケジュールされたジョブの名前。このフィールドは、デフォルトでは「キャンペーン名 - フローチャート名」ですが、任意の名前に変更することができます。
カタログファイル名	この実行に使用するテーブルカタログファイルを指定します。
データソース	これらのフィールドは、このフローチャートがアクセスするすべてのデータソースのデフォルトのログイン情報をオーバーライドするために使用します。

スケジュールの管理

アクセス可能なすべてのページから、「設定」>「スケジュール済みタスク (Scheduled Tasks)」を選択することによって、すべてのスケジュールを管理することができます。これらのページにアクセスするには、Marketing Platform でのスケジュールタスク表示権限を持っている必要があります。マルチパーティション環境では、自分が所属するパーティション内で作成されたスケジュールのみが表示されます。ただし、PlatformAdminRole 役割を持っている場合は、すべてのパーティションのすべてのスケジュールされた実行を表示することができます。

スケジュール管理ページは以下のとおりです。

- スケジュール定義 - このページでは、すべてのスケジュール定義を表示でき、リストのスケジュール名をクリックしてスケジュールを編集することができます。
- スケジュールされた実行の表示 - このページでは、各スケジュールのキューに入っている実行および完了した実行を表示でき、キューに入っている実行のキャンセルまたは実行の削除を行うことができます。

単一のフローチャートのスケジュール管理ページを表示するには、フローチャートの「実行メニュー」から「スケジュール時に表示」を選択します。

リストのスケジュール済み項目は、フローチャートに直接進むリンクになっています。

スケジュール管理ウィンドウのリファレンス

このセクションでは、「設定」>「スケジュール済みタスク (Scheduled Tasks)」を選択した場合、またはフローチャートの「実行」メニューから「スケジュール時に表示」を選択した場合にアクセスできる、スケジュール管理ウィンドウについて詳細に説明します。

スケジュールされた実行

フィールド	説明
スケジュール名	この実行がインスタンスとして含まれているスケジュール。

フィールド	説明
スケジュールされた項目	実行するオブジェクトの名前。
項目タイプ	実行するオブジェクトのタイプ。
開始	実行の開始時刻。
最新更新	フローチャートまたはメール配信プロセスの実行からの最新のステータス更新日時。
実行状態	<p>Scheduler に定義されている実行の状態で、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 予定されています - 実行は開始されていません。 • キューに登録済み - Scheduler は実行を開始しましたが、制限による制約のため、IBM Unica Marketing 製品はスケジュールされた実行の実行を開始していません。 • 実行中 - 実行が開始されました。 • 完了 - 実行は完了し、「失敗」または「成功」の状態が返されました。 • キャンセル済み - ユーザが「スケジュールされた実行」ページで「キャンセル済みにする」をクリックして実行をキャンセルしました。ユーザがキャンセル済みのマークを付けたときに実行がキューに入っていた場合、実行はされません。実行中だった場合は、キャンセル済みのマークはつきませんが、このアクションによって実行が停止することはありません。
ステータス	製品によって定義されたオブジェクトの実行のステータス。実行が「キャンセル済み」ステータスを送信するかどうか、その後その実行が再開されて何か他のステータスをスケジューラに送信するかどうか、およびステータスがこのフィールドで更新されるかどうかに注意してください。
詳細	製品によって提供される、実行に関する情報。例えばフローチャート実行の場合、ここにはフローチャートの名前と ID、エラー (実行が失敗した場合)、および経過時間 (実行が成功した場合) が含まれます。

スケジュール定義

フィールド	定義
スケジュール名	スケジュールの作成者が指定したスケジュールの名前。
スケジュールされた項目	実行するオブジェクトの名前。
項目タイプ	実行するオブジェクトのタイプ。
作成者	スケジュールを作成したユーザのログイン。
開始トリガ	このスケジュールが受け取った場合に、実行を開始するストリング。開始トリガが指定されていない場合、このフィールドは空白です。
終了	このスケジュールの最終実行の日時。
繰り返しパターン	繰り返しパターンの記述名。

フィールド	定義
成功時にトリガ	このスケジュールの実行が正常に完了したことを製品が報告する場合に送信されるストリング。成功時トリガが指定されていない場合、このフィールドはブランクです。
失敗時にトリガ	このスケジュールの実行が失敗したことを製品が報告する場合に送信されるストリング。失敗時トリガが指定されていない場合、このフィールドはブランクです。

Marketing Platform から別個に JMS をインストールするには

IBM スケジューラーは、JMS を使用します。JMS は、デフォルトでは Marketing Platform 内で有効になっています。JMS をインストールまたは構成するための要件はありません。しかし、信頼性を高めるため、Marketing Platform およびアプリケーションをインストールするマシンとは別のマシンで JMS を実行することができます。

1. IBM 製品のインストールと配置が終わったら、ActiveMQ (JMS のオープンソース実装) をダウンロードして、別のマシンにインストールします。

以下の URL からダウンロードできます。 <http://activemq.apache.org/download.html>

2. Marketing Platform の「設定」>「構成」ページで、「Unica」>「Platform」カテゴリに移動して以下のプロパティを設定します。
 - JMS サーバ - Marketing Platformをインストールしたマッチのマシン名または IP アドレスに設定します。ドメイン名も含めてください。例:
machine.domain.com
 - JMS ポート - Active MQ が listen するポートに設定します。デフォルトポートは 61616 です。

第 10 章 Windows Active Directory との統合

Marketing Platform は、LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サーバまたは Windows Active Directory サーバと統合するように構成することができます。

IBM Unica Marketing をディレクトリサーバと統合することによって、ユーザとグループを 1 つの集中化された場所に維持しておくことができます。統合は、企業の権限ポリシーを IBM Unica Marketing アプリケーションに拡張するための柔軟なモデルを提供します。これによって、エラー、サポートコスト、およびアプリケーションを実動環境に配置するために必要な時間が減少します。

サポートされるディレクトリサーバのリストについては、「*Recommended Software Environments and Minimum System Requirements*」という資料を参照してください。

Active Directory 統合機能

Marketing Platform は、Windows Active Directory との統合により、このセクションで説明する機能を提供します。

Active Directory 統合による認証

IBM Unica Marketing アプリケーションは、Marketing Platform へのクエリを実行してユーザ権限情報を取得します。Active Directory サーバ統合が実装され、Windows 統合ログインが有効になっている場合、ユーザは企業ネットワークにログインした時点ですべての IBM Unica Marketing アプリケーションに対して認証され、IBM Unica Marketing アプリケーションにログインするためのパスワードが不要になります。ユーザの認証は Windows ログインに基づいて行われ、アプリケーションのログイン画面はバイパスされます。

Windows 統合ログインが有効になっていない場合、ユーザは、各自の Windows 資格情報を使用して IBM Unica Marketing ログイン画面でログインする必要があります。

内部ユーザと外部ユーザについて

Windows 統合ログインが有効になっている場合、すべてのユーザは Active Directory サーバに維持されます (本書で内部ユーザと呼ぶ一部のユーザを Marketing Platform に作成するオプションはありません)。内部ユーザを作成する機能が必要な場合は、Windows 統合ログインを有効にしないでください。

Windows 統合ログインを有効にしない場合は、LDAP サーバとの統合についての手順に従ってください。詳しくは、131 ページの『構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)』を参照してください。

グループマッピングによる権限

IBM Unica Marketing は、ディレクトリサーバから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、ディレクトリサーバデータベースからグループとそのユ

ユーザをインポートします。IBM Unica Marketing がサーバデータベースからユーザとグループをインポートする際、グループメンバーシップは維持されます。

Active Directory グループを IBM Unica Marketing グループにマップすることによって、IBM Unica Marketing の特権を割り当てることができます。これによって、マップされる Active Directory グループに追加された新規ユーザは、対応する IBM Unica Marketing グループに設定されている特権を引き継ぐことができます。

Marketing Platform のサブグループは役割を継承しますが、その親に割り当てられている LDAP マッピングまたはユーザメンバーシップは継承しないことに注意してください。

LDAP とパーティションについて

マルチパーティション環境では、ユーザが属しているグループがパーティションに割り当てられている場合、ユーザのパーティションメンバーシップはそのグループによって決定されます。1人のユーザが所属できるのは1つのパーティションのみです。したがって、1人のユーザが複数の LDAP グループに属していて、それらのグループが別のパーティションに割り当てられた IBM Unica Marketing グループに割り当てられている場合、システムはそのユーザに対して1つのパーティションを選択する必要があります。

この状態を回避するよう努力する必要があります。しかし、万一この状態が起こってしまった場合、直前に LDAP グループにマップされた IBM Unica Marketing グループのパーティションが、ユーザの所属先になります。直前にマップされたのがどの LDAP なのか判別するには、「構成」領域に表示される LDAP グループマッピングを見てください。これらのマッピングは日時順に表示されるので、最新マッピングが最後にリストされています。

同期化

IBM Unica Marketing を Active Directory サーバと統合するように構成した場合、ユーザおよびグループは事前定義された間隔で自動的に同期化されます。この自動同期化中は、前回の同期化以降に作成または変更されたユーザおよびグループ（構成で指定されているもの）のみが IBM Unica Marketing に組み込まれます。IBM Unica Marketing の「ユーザ」領域の同期化機能を使用して、すべてのユーザおよびグループを強制的に同期化することができます。

Active Directory 統合の前提条件

Windows Active Directory 統合機能を利用するには、サポートされるオペレーティング・システムに IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールする必要があります。

さらに、Windows 統合ログオンを実装するには、IBM Unica Marketing アプリケーションにアクセスするユーザは以下のことをする必要があります。

- サポートされる Windows オペレーティングシステムを実行中のシステムを使用する。
- サポートされるブラウザを使用する。Windows 統合ログインが有効になっている場合、ブラウザは NTLM 許可をサポートしている必要があります。

- IBM Unica Marketing が認証される Windows Active Directory ドメインのメンバーとしてログインする。

IBM Unica Marketing と Windows Active Directory の統合方法

構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の統合)

Windows Active Directory との IBM Unica Marketing の統合は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 122 ページの『必要な情報の入手』

ご使用の Windows Active Directory サーバについて、IBM Unica Marketing との統合に必要な情報を入手します。

2. 123 ページの『グループメンバーシップおよびマッピングの計画』

Active Directory グループのマッピング先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 123 ページの『Marketing Platform へのディレクトリサーバ資格情報の格納』

ご使用のディレクトリサーバが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリサーバ管理者のユーザ名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザアカウントを構成してください。

4. 124 ページの『IBM Unica Marketing での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 126 ページの『同期化のテスト』

ユーザとグループが正しく同期化されていることを確認します。

6. 127 ページの『PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザのセットアップ』

Marketing Platform への管理者アクションをセットアップします。これは Windows 統合ログインを有効にする場合に必要です。

7. 127 ページの『Windows 統合ログインへのセキュリティモードの設定』

「構成」ページでセキュリティモード値を設定します。

8. 128 ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

計画したグループアプリケーションアクセスを実装します。

9. 128 ページの『Web アプリケーションサーバの再起動』

このステップは、変更をすべて確実に適用するために必要です。

10. 128 ページの『Active Directory ユーザとしてのログインのテスト』

Active Directory ユーザとして IBM Unica Marketing にログインできることを確認してください。

必要な情報の入手

統合するディレクトリサーバについて、以下の情報を入手してください。

- ディレクトリサーバに対する検索権限を持っているユーザを識別し、そのユーザについて以下の情報を収集します。
 - ログイン名
 - パスワード
 - 識別名 (DN)。追加情報については、123 ページの『識別名について』を参照してください。
- ディレクトリサーバについて、以下の情報を入手してください。
 - 完全修飾ホスト名または IP アドレス
 - サーバが listen するポート。
- ディレクトリサーバがグループオブジェクト内のユーザ属性に使用するストリングを判別します。通常、この値は LDAP サーバでは `uniquemember` で、Windows Active Directory サーバでは `member` です。これは、ご使用のディレクトリサーバで確認する必要があります。
- 以下の必須ユーザ属性を入手してください。
 - ディレクトリサーバがユーザログイン属性に使用するストリングを判別します。これは常に必須です。通常、この値は LDAP サーバでは `uid` で、Windows Active Directory では `sAMAccountName` です。これは、ご使用のディレクトリサーバで確認する必要があります。
 - ディレクトリサーバが代替ログイン属性に使用するストリングを判別します。これが必要なのは、Campaign が UNIX 環境にインストールされている場合のみです。
- ディレクトリサーバに格納されている追加 (オプションの) ユーザ属性を Marketing Platform でインポートするには、以下についてディレクトリサーバが使用するストリングを判別してください。
 - 名
 - 姓
 - ユーザの肩書き
 - 部門
 - 会社
 - 国
 - ユーザの電子メール
 - 住所 1
 - 電話 (会社)
 - 携帯電話
 - 電話 (自宅)

識別名について

ディレクトリサーバを IBM Unica Marketing に統合できるようにするには、ユーザおよびグループの識別名 (DN) を決定する必要があります。ディレクトリサーバの DN は、階層ツリー構造を経て特定のオブジェクトに至る完全なパスです。DN は以下のコンポーネントで形成されます。

- 組織単位 (OU)。この属性は、組織構造に基づいて名前空間を分割するために使用されます。OU は、一般にユーザ作成のディレクトリサーバのコンテナまたはフォルダに関連付けられます。
- 共通名 (CN)。この属性は、ディレクトリサービス内部でのオブジェクト自体を表します。
- ドメインコンポーネント (DC)。DC 属性を使用する識別名には、root 下の各ドメインレベルに 1 つの DC があります。言い換えれば、ドメインネーム内のドットで区切られた項目ごとに DC 属性があるということです。

ご使用のディレクトリサーバの管理コンソールを使用して、オブジェクトの識別名を判別してください。

グループメンバーシップおよびマッピングの計画

ディレクトリサーバグループを Marketing Platform グループにマップする方法を計画する場合は、以下のガイドラインを使用してください。

- メンバーを Marketing Platform にインポートするディレクトリサーバグループを識別または作成します。これらのグループが Marketing Platform グループにマップされると、これらのグループのメンバーは自動的に IBM Unica Marketing ユーザとして作成されます。

ディレクトリサーバのサブグループのメンバーは自動的にインポートされないことに注意してください。サブグループからユーザをインポートするには、サブグループを Marketing Platform のグループまたはサブグループにマップする必要があります。

静的ディレクトリサーバグループのみをマップする必要があります。動的グループまたは仮想グループはサポートされていません。

- ディレクトリサーバグループのマップ先となるグループを、Marketing Platform で識別または作成します。

Marketing Platform へのディレクトリサーバ資格情報の格納

ご使用のディレクトリサーバが特定アクションを許可していない場合は、以下の手順に示すように、ディレクトリのユーザ名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザアカウントを構成する必要があります。

1. 管理者権限を持つユーザとして IBM Unica Marketing にログインします。
2. Marketing Platform と同期化される LDAP サーバ内のユーザおよびグループ情報のすべてに対して読み取り権限を持つユーザのディレクトリサーバ資格情報を入れる、IBM Unica Marketing ユーザアカウントを選択または作成します。以下のガイドラインに従ってください。

- 後のステップで、「LDAP 資格情報の Unica ユーザ」構成プロパティの値をこの IBM Unica Marketing ユーザアカウントのユーザ名に設定します。このプロパティのデフォルト値は asm_admin で、個々の新規 Marketing Platform インストールに存在するユーザです。asm_admin アカウントを、ディレクトリサーバ資格情報を保持するために使用できます。
 - この IBM Unica Marketing ユーザアカウントのユーザ名は、どのディレクトリサーバユーザのユーザ名とも一致しない名前であればなりません。
3. 以下のガイドラインに従って、この IBM Unica Marketing ユーザアカウントのデータソースを追加します。

フィールド	ガイドライン
データ・ソース名	任意の名前を入力できますが、後のステップで、「LDAP 資格情報のデータソース」プロパティの値をこのデータソース名に一致させる必要があることに注意してください。このデフォルト値に一致させるには、データソースの名前を LDAPServer にします。
データソースログイン	IBM Unica Marketing と同期化されるすべてのディレクトリサーバのユーザおよびグループ情報に対して読み取り権限を持つ管理ユーザの識別名 (DN) を入力します。DN は以下のようになります。 uidcn=user1,ou=someGroup,dc=systemName,dc=com
データソースパスワード	ディレクトリサーバに対する検索権限を持つ管理ユーザのパスワードを入力します。

IBM Unica Marketing での統合の構成

122 ページの『必要な情報の入手』で収集した情報を使用して、「構成」ページでディレクトリサーバ構成プロパティを編集します。

以下の手順をすべて実行する必要があります。

接続プロパティを設定するには

1. 「設定」 > 「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリに移動します。
2. 以下の構成プロパティの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティのコンテキストヘルプを参照してください。

- LDAP サーバのホスト名
- LDAP サーバポート
- ユーザ検索フィルタ
- Unica に格納されている資格情報を使用
- LDAP 資格情報の Unica ユーザ
- LDAP 資格情報のデータソース
- ベース DN
- LDAP 接続に SSL が必要

LDAP 同期プロパティを設定するには

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | LDAP 同期」カテゴリに移動します。
2. 「LDAP プロパティ」セクションで以下の構成プロパティの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティのコンテキストヘルプを参照してください。

- LDAP 同期が有効
- LDAP 同期間隔
- LDAP 同期遅延
- LDAP 同期タイムアウト
- LDAP 同期スコープ
- LDAP プロバイダ URL
- LDAP 接続に SSL が必要
- LDAP 設定 Unica グループデリミタ
- LDAP 参照設定デリミタ
- LDAP 資格情報の Unica ユーザ
- LDAP 資格情報のデータソース
- 匿名バインドの使用
- LDAP ユーザ参照属性名

ユーザ属性マッププロパティを設定するには

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | LDAP 同期」カテゴリに移動します。
2. 「ユーザ属性マップ」セクションの値を設定して、リストされている IBM Unica Marketing ユーザ属性を目的に応じてディレクトリサーバのユーザ属性にマップします。

マップする必要のあるプロパティは「ユーザログイン」のみです。通常、この値は LDAP サーバでは uid で、Windows Active Directory では sAMAccountName です。前の「必要な情報の入手」の手順で検証した値を使用してください。

次のことに注意してください。

- ここでマップするプロパティは、Marketing Platform がディレクトリサーバと同期化するたびに、インポート済みのユーザと置き換えられます。
- Marketing Platform では、電子メールアドレスが、RFC 821 に記述された定義に準拠している必要があります。ご使用のディレクトリサーバ上の電子メールアドレスがこの標準に準拠していない場合、インポートする属性としてマップしないでください。
- ご使用のディレクトリサーバデータベースで、Marketing Platform システムテーブル内で許可されている文字より多くの文字を属性に使用できる場合は、次の表に示すように、属性値が適合するように切り捨てられます。

属性	指定できる長さ
ユーザログイン (必須)	256
名	128
姓	128
ユーザの肩書き	128
部門	128
会社	128
国	128
ユーザの電子メール	128
住所 1	128
電話 (会社)	20
携帯電話	20
電話 (自宅)	20
代替ログイン (UNIX では必須)	256

LDAP グループを IBM Unica グループにマップするには

ここでマップするディレクトリサーバグループに所属するユーザがインポートされ、ここに指定する 1 つ以上の Marketing Platform グループのメンバーになります。

注: asm_admin ユーザを持つグループをメンバーとしてマップしてはなりません。

1. 「設定」 > 「構成」 をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | Unica グループマップの LDAP 参照」カテゴリに移動します。
2. Marketing Platform グループにマップするディレクトリサーバグループごとに、(Unica グループマップの LDAP 参照) テンプレートを選択して、新規の「Unica グループの LDAP 参照」カテゴリを作成します。以下のプロパティを設定します。
 - 新規カテゴリ名
 - LDAP 参照マップ
 - Unica グループ

例えば、以下の値は、LDAP UnicaUsers グループを Marketing PlatformamUsers および campaignUsers グループにマップします (FILTER は省略されます)。

- LDAP reference: cn=UnicaUsers,cn=Users, dc=myCompany,dc=com
- Unica group: amUsers;campaignUsers

同期化のテスト

構成をテストするために、(ディレクトリサーバユーザでなく) IBM Unica Marketing ユーザとして IBM Unica Marketing にログインして、以下を確認してください。

- ユーザが予期したとおりにインポートされている。

- Marketing Platform グループのメンバーシップがディレクトリサーバグループへの予期されるマッピングに一致している。

外部ユーザの強制同期化

1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「ユーザ」をクリックします。
2. 「同期化」をクリックします。

ユーザおよびグループが同期化されます。

PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザのセットアップ

Windows 統合ログインが有効になっている場合は、platform_admin として IBM Unica Marketing にログインすることはできません。そのため、Marketing Platform に対する管理者権限を持つためには、以下の手順を実行する必要があります。

1. IBM Unica Marketing に、内部ユーザ (Active Directory からインポートされたユーザでなく、Marketing Platform 内で作成されたユーザ) としてログインします。これは、Marketing Platform 内で PlatformAdminRole 権限を持つユーザでなければなりません。
2. Marketing Platform グループを作成し、そのグループに PlatformAdminRole 役割を割り当てます。
3. 必ず、少なくとも 1 人の Active Directory ユーザがこのグループのメンバーに入るようにしてください。

Windows 統合ログインへのセキュリティモードの設定

以下の手順で説明されている方法で、セキュリティモードプロパティを設定します。これによって、Active Directory ユーザは、IBM Unica Marketing ログイン画面をバイパスして、Windows ログインに基づいて IBM Unica Marketing アプリケーションにアクセスできるようになります。

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ」に移動します。
2. 「ログイン方法」プロパティの値を「Windows 統合ログイン」に設定します。
3. 「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | Windows 統合ログイン」に移動して、以下のプロパティの値を設定します。
 - ドメイン
 - クライアントタイムアウト
 - キャッシュポリシー
 - ドメインコントローラ
 - WINS サーバの IP
 - ドメインの削除
 - 認証失敗時の再試行

マップされたグループへの役割の割り当て

IBM Unica Marketing にログインして、マップされたグループに計画に従って役割を割り当てます。

Web アプリケーションサーバの再起動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーションサーバを再起動してください。

ブラウザの構成

IBM Unica Marketing へのアクセスに使用する Internet Explorer のインスタンスごとに、このタスクを実行してください。これは、Windows 統合ログインで、ユーザーに IBM Unica Marketing ログイン画面が表示されないようにするために必要です。

Internet Explorer で、インターネットオプションを以下のように設定します。

- 「ツール」>「インターネット オプション」を選択します。
- 「セキュリティ」タブで、「レベルのカスタマイズ」をクリックします。
- 「ユーザ認証」セクションで、「現在のユーザ名とパスワードで自動的にログオンする」を選択します。

Windows 統合ログインの際のブラウザ関連のログインの問題のトラブルシューティングに役立つ追加情報については、以下のリンクを参照してください。

- <http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q258063>
- <http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q174360>
- <http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q303650>

Active Directory ユーザとしてのログインのテスト

1. Marketing Platform 内の役割を割り当てられた Marketing Platform グループにマップされた Active Directory グループのメンバーである Active Directory ユーザとして、Windows にログインします。
2. ブラウザで IBM Unica Marketing URL を指示します。

IBM Unica Marketing ログイン画面が表示されなくなり、IBM Unica Marketing ユーザーインターフェースにアクセスできるようになるはずですが、ログインできない場合は、213 ページの『restoreAccess ユーティリティ』を参照してください。

第 11 章 LDAP サーバとの統合

Marketing Platform は、LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サーバまたは Windows Active Directory サーバと統合するように構成することができます。

IBM Unica Marketing をディレクトリサーバと統合することによって、ユーザとグループを 1 つの集中化された場所に維持しておくことができます。統合は、企業の権限ポリシーを IBM Unica Marketing アプリケーションに拡張するための柔軟なモデルを提供します。これによって、エラー、サポートコスト、およびアプリケーションを実動環境に配置するために必要な時間が減少します。

サポートされるディレクトリサーバのリストについては、「*Recommended Software Environments and Minimum System Requirements*」という資料を参照してください。

LDAP 統合機能

IBM Unica Marketing は、LDAP との統合により、このセクションで攻めする機能を提供します。

LDAP 統合による認証

IBM Unica Marketing アプリケーションは、Marketing Platform へのクエリを実行してユーザ権限情報を取得します。LDAP 統合が実装されている場合、ユーザは、有効な LDAP ユーザ名およびパスワードを認証のために IBM Unica Marketing アプリケーションに入力します。

グループマッピングによる権限

Marketing Platform は、ディレクトリサーバから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、ディレクトリサーバデータベースからグループとそのユーザをインポートします。Marketing Platform がサーバデータベースからユーザとグループをインポートする際、グループメンバーシップは維持されます。

LDAP グループを IBM Unica Marketing グループにマップすることによって、IBM Unica Marketing の特権を割り当てることができます。これによって、マップされる LDAP グループに追加された新規ユーザは、対応する IBM Unica Marketing グループに指定されている特権を引き継ぐことができます。

サブグループは役割を継承しますが、その親に割り当てられている LDAP マッピングまたはユーザメンバーシップは継承しないことに注意してください。

LDAP とパーティションについて

マルチパーティション環境では、ユーザが属しているグループがパーティションに割り当てられている場合、ユーザのパーティションメンバーシップはそのグループによって決定されます。1 人のユーザが所属できるのは 1 つのパーティションのみです。したがって、1 人のユーザが複数の LDAP グループに属していて、それらの

グループが別のパーティションに割り当てられた IBM Unica Marketing グループに割り当てられている場合、システムはそのユーザに対して 1 つのパーティションを選択する必要があります。

この状態を回避するよう努力する必要があります。しかし、万一この状態が起こってしまった場合、直前に LDAP グループにマップされた IBM Unica Marketing グループのパーティションが、ユーザの所属先になります。直前にマップされたのがどの LDAP なのか判別するには、「構成」領域に表示される LDAP グループマッピングを見てください。これらのマッピングは日時順に表示されるので、最新マッピングが最後にリストされています。

内部ユーザと外部ユーザのサポート

IBM Unica Marketing は、2 つのタイプのユーザアカウントおよびグループをサポートしています。

- **内部** – IBM Unica Marketing セキュリティユーザインターフェースを使用して IBM Unica Marketing 内部で作成されるユーザアカウントおよびグループ。これらのユーザは Marketing Platform によって認証されます。
- **外部** – サポートされる LDAP サーバとの同期化によって IBM Unica Marketing にインポートされるユーザアカウントおよびグループ。この同期化が行われるのは、IBM Unica Marketing が LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみです。これらのユーザは、LDAP サーバによって認証されます。

例えば、顧客を LDAP サーバに完全な企業ユーザとして追加せずに IBM Unica Marketing アプリケーションへのアクセス権限を顧客に与えたい場合、両方のタイプのユーザおよびグループを作成することができます。

このハイブリッド認証モデルを使用する際は、純粋な LDAP 認証モデルの場合より多くのメンテナンスが必要になることに注意してください。

同期化

IBM Unica Marketing を LDAP サーバと統合するように構成した場合、ユーザおよびグループは事前定義された間隔で自動的に同期化されます。

この自動同期化中は、前回の同期化以降に作成または変更されたユーザおよびグループ (構成で指定されているもの) のみが IBM Unica Marketing に組み込まれます。IBM Unica Marketing の「ユーザ」領域の同期化機能を使用して、すべてのユーザおよびグループを強制的に同期化することができます。

LDAP 統合の前提条件

LDAP 統合機能を利用するには、サポートされるオペレーティングシステムに IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールする必要があります。

IBM Unica Marketing と LDAP サーバの統合方法

構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)

LDAP との IBM Unica Marketing 統合は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 122 ページの『必要な情報の入手』

ご使用の LDAP サーバについて、IBM Unica Marketing との統合に必要な情報を入手します。

2. 123 ページの『グループメンバーシップおよびマッピングの計画』

LDAP グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 123 ページの『Marketing Platform へのディレクトリサーバ資格情報の格納』

ご使用のディレクトリサーバが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリサーバ管理者のユーザ名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザアカウントを構成してください。

4. 124 ページの『IBM Unica Marketing での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 126 ページの『同期化のテスト』

ユーザとグループが正しく同期化されていることを確認します。

6. 137 ページの『LDAP へのセキュリティモードの設定』

「構成」ページでセキュリティモード値を設定します。

7. 137 ページの『LDAP へのセキュリティモードの設定』

計画したグループアプリケーションアクセスを実装します。

8. 128 ページの『Web アプリケーションサーバの再起動』

このステップは、変更をすべて確実に適用するために必要です。

9. 137 ページの『LDAP ユーザとしてのログインのテスト』

LDAP ユーザとして IBM Unica Marketing にログインできることを確認してください。

必要な情報の入手

統合するディレクトリサーバについて、以下の情報を入手してください。

- ディレクトリサーバに対する検索権限を持っているユーザを識別し、そのユーザについて以下の情報を収集します。
 - ログイン名
 - パスワード

- 識別名 (DN)。追加情報については、123 ページの『識別名について』を参照してください。
- ディレクトリサーバについて、以下の情報を入手してください。
 - 完全修飾ホスト名または IP アドレス
 - サーバが listen するポート。
- ディレクトリサーバがグループオブジェクト内のユーザ属性に使用するストリングを判別します。通常、この値は LDAP サーバでは `uniquemember` で、Windows Active Directory サーバでは `member` です。これは、ご使用のディレクトリサーバで確認する必要があります。
- 以下の必須ユーザ属性を入手してください。
 - ディレクトリサーバがユーザログイン属性に使用するストリングを判別します。これは常に必須です。通常、この値は LDAP サーバでは `uid` で、Windows Active Directory では `sAMAccountName` です。これは、ご使用のディレクトリサーバで確認する必要があります。
 - ディレクトリサーバが代替ログイン属性に使用するストリングを判別します。これが必要なのは、Campaign が UNIX 環境にインストールされている場合のみです。
- ディレクトリサーバに格納されている追加 (オプションの) ユーザ属性を Marketing Platform でインポートするには、以下についてディレクトリサーバが使用するストリングを判別してください。
 - 名
 - 姓
 - ユーザの肩書き
 - 部門
 - 会社
 - 国
 - ユーザの電子メール
 - 住所 1
 - 電話 (会社)
 - 携帯電話
 - 電話 (自宅)

識別名について

ディレクトリサーバを IBM Unica Marketing に統合できるようにするには、ユーザおよびグループの識別名 (DN) を決定する必要があります。ディレクトリサーバの DN は、階層ツリー構造を経て特定のオブジェクトに至る完全なパスです。DN は以下のコンポーネントで形成されます。

- 組織単位 (OU)。この属性は、組織構造に基づいて名前空間を分割するために使用されます。OU は、一般にユーザ作成のディレクトリサーバのコンテナまたはフォルダに関連付けられます。
- 共通名 (CN)。この属性は、ディレクトリサービス内部でのオブジェクト自体を表します。

- ドメインコンポーネント (DC)。DC 属性を使用する識別名には、root 下の各ドメインレベルに 1 つの DC があります。言い換えれば、ドメインネーム内のドットで区切られた項目ごとに DC 属性があるということです。

ご使用のディレクトリサーバの管理コンソールを使用して、オブジェクトの識別名を判別してください。

グループメンバーシップおよびマッピングの計画

ディレクトリサーバグループを Marketing Platform グループにマップする方法を計画する場合は、以下のガイドラインを使用してください。

- メンバーを Marketing Platform にインポートするディレクトリサーバグループを識別または作成します。これらのグループが Marketing Platform グループにマップされると、これらのグループのメンバーは自動的に IBM Unica Marketing ユーザとして作成されます。

ディレクトリサーバのサブグループのメンバーは自動的にインポートされないことに注意してください。サブグループからユーザをインポートするには、サブグループを Marketing Platform のグループまたはサブグループにマップする必要があります。

静的ディレクトリサーバグループのみをマップする必要があります。動的グループまたは仮想グループはサポートされていません。

- ディレクトリサーバグループのマップ先となるグループを、Marketing Platform で識別または作成します。

Marketing Platform へのディレクトリサーバ資格情報の格納

ご使用のディレクトリサーバが特定アクションを許可していない場合は、以下の手順に示すように、ディレクトリのユーザ名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザアカウントを構成する必要があります。

1. 管理者権限を持つユーザとして IBM Unica Marketing にログインします。
2. Marketing Platform と同期化される LDAP サーバ内のユーザおよびグループ情報のすべてに対して読み取り権限を持つユーザのディレクトリサーバ資格情報を入れる、IBM Unica Marketing ユーザアカウントを選択または作成します。以下のガイドラインに従ってください。
 - 後のステップで、「LDAP 資格情報の Unica ユーザ」構成プロパティの値をこの IBM Unica Marketing ユーザアカウントのユーザ名に設定します。このプロパティのデフォルト値は `asm_admin` で、個々の新規 Marketing Platform インストールに存在するユーザです。`asm_admin` アカウントを、ディレクトリサーバ資格情報を保持するために使用できます。
 - この IBM Unica Marketing ユーザアカウントのユーザ名は、どのディレクトリサーバユーザのユーザ名とも一致しない名前であればなりません。
3. 以下のガイドラインに従って、この IBM Unica Marketing ユーザアカウントのデータソースを追加します。

フィールド	ガイドライン
データ・ソース名	任意の名前を入力できますが、後のステップで、「LDAP 資格情報のデータソース」プロパティの値をこのデータソース名に一致させる必要があることに注意してください。このデフォルト値に一致させるには、データソースの名前を LDAPServer にします。
データソースログイン	IBM Unica Marketing と同期化されるすべてのディレクトリサーバのユーザおよびグループ情報に対して読み取り権限を持つ管理ユーザの識別名 (DN) を入力します。DN は以下のようになります。 uidcn=user1,ou=someGroup,dc=systemName,dc=com
データソースパスワード	ディレクトリサーバに対する検索権限を持つ管理ユーザのパスワードを入力します。

IBM Unica Marketing での統合の構成

122 ページの『必要な情報の入手』で収集した情報を使用して、「構成」ページでディレクトリサーバ構成プロパティを編集します。

以下の手順をすべて実行する必要があります。

接続プロパティを設定するには

1. 「設定」 > 「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリに移動します。
2. 以下の構成プロパティの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティのコンテキストヘルプを参照してください。

- LDAP サーバのホスト名
- LDAP サーバポート
- ユーザ検索フィルタ
- Unica に格納されている資格情報を使用
- LDAP 資格情報の Unica ユーザ
- LDAP 資格情報のデータソース
- ベース DN
- LDAP 接続に SSL が必要

LDAP 同期プロパティを設定するには

1. 「設定」 > 「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | LDAP 同期」カテゴリに移動します。
2. 「LDAP プロパティ」セクションで以下の構成プロパティの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティのコンテキストヘルプを参照してください。

- LDAP 同期が有効
- LDAP 同期間隔

- LDAP 同期遅延
- LDAP 同期タイムアウト
- LDAP 同期スコープ
- LDAP プロバイダ URL
- LDAP 接続に SSL が必要
- LDAP 設定 Unica グループデリミタ
- LDAP 参照設定デリミタ
- LDAP 資格情報の Unica ユーザ
- LDAP 資格情報のデータソース
- 匿名バインドの使用
- LDAP ユーザ参照属性名

ユーザ属性マッププロパティを設定するには

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | LDAP 同期」カテゴリに移動します。
2. 「ユーザ属性マップ」セクションの値を設定して、リストされている IBM Unica Marketing ユーザ属性を目的に応じてディレクトリサーバのユーザ属性にマップします。

マップする必要があるプロパティは「ユーザログイン」のみです。通常、この値は LDAP サーバでは uid で、Windows Active Directory では sAMAccountName です。前の「必要な情報の入手」の手順で検証した値を使用してください。

次のことに注意してください。

- ここでマップするプロパティは、Marketing Platform がディレクトリサーバと同期化するたびに、インポート済みのユーザと置き換えられます。
- Marketing Platform では、電子メールアドレスが、RFC 821 に記述された定義に準拠している必要があります。ご使用のディレクトリサーバ上の電子メールアドレスがこの標準に準拠していない場合、インポートする属性としてマップしないでください。
- ご使用のディレクトリサーバデータベースで、Marketing Platform システムテーブル内で許可されている文字より多くの文字を属性に使用できる場合は、次の表に示すように、属性値が適合するように切り捨てられます。

属性	指定できる長さ
ユーザログイン (必須)	256
名	128
姓	128
ユーザの肩書き	128
部門	128
会社	128
国	128
ユーザの電子メール	128
住所 1	128

属性	指定できる長さ
電話 (会社)	20
携帯電話	20
電話 (自宅)	20
代替ログイン (UNIX では必須)	256

LDAP グループを IBM Unica グループにマップするには

ここでマップするディレクトリサーバグループに所属するユーザがインポートされ、ここに指定する 1 つ以上の Marketing Platform グループのメンバーになります。

注: asm_admin ユーザを持つグループをメンバーとしてマップしてはなりません。

1. 「設定」 > 「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | Unica グループマップの LDAP 参照」カテゴリに移動します。
2. Marketing Platform グループにマップするディレクトリサーバグループごとに、(Unica グループマップの LDAP 参照) テンプレートを選択して、新規の「Unica グループの LDAP 参照」カテゴリを作成します。以下のプロパティを設定します。
 - 新規カテゴリ名
 - LDAP 参照マップ
 - Unica グループ

例えば、以下の値は、LDAP UnicaUsers グループを Marketing PlatformamUsers および campaignUsers グループにマップします (FILTER は省略されます)。

- LDAP reference: cn=UnicaUsers,cn=Users, dc=myCompany,dc=com
- Unica group: amUsers;campaignUsers

同期化のテスト

構成をテストするために、(ディレクトリサーバユーザでなく) IBM Unica Marketing ユーザとして IBM Unica Marketing にログインして、以下を確認してください。

- ユーザが予期したとおりにインポートされている。
- Marketing Platform グループのメンバーシップがディレクトリサーバグループへの予期されるマッピングに一致している。

外部ユーザの強制同期化

1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」 > 「ユーザ」をクリックします。
2. 「同期化」をクリックします。

ユーザおよびグループが同期化されます。

LDAP へのセキュリティモードの設定

以下の手順で説明されている方法で、セキュリティモードプロパティを設定します。これによって、LDAP ユーザが IBM Unica Marketing アプリケーションにログインできるようになります。

1. IBM Unica Marketing にログインして、「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ」に移動します。
2. 「ログイン方法」プロパティの値を「LDAP」に設定します。

マップされたグループへの役割の割り当て

IBM Unica Marketing にログインして、マップされたグループに計画に従って役割を割り当てます。

Web アプリケーションサーバの再起動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーションサーバを再起動してください。

LDAP ユーザとしてのログインのテスト

構成をテストするために、Marketing Platform へのアクセス権限を割り当てられた Marketing Platform グループにマップされた LDAP グループのメンバーである LDAP ユーザとして、IBM Unica Marketing にログインします。

第 12 章 Web アクセス制御プラットフォームとの統合

組織では、Web アクセス制御プラットフォームを使用してセキュリティシステムを統合し、それによって Web サイトへのユーザアクセスを調整するポータルを提供します。このセクションでは、Web アクセス制御プラットフォームとの IBM Unica Marketing 統合の概要を示します。

認証

ユーザが Web アクセス制御ポータルを介してアプリケーションにアクセスする場合、ユーザの認証は Web アクセス制御システムによって管理されます。IBM Unica Marketing と同期化された LDAP グループのメンバーでもある Web アクセス制御ユーザは、Web アクセス制御システムにログインすると、すべての IBM Unica Marketing アプリケーションに認証されます。これらのユーザには IBM Unica Marketing アプリケーションのログイン画面は表示されません。

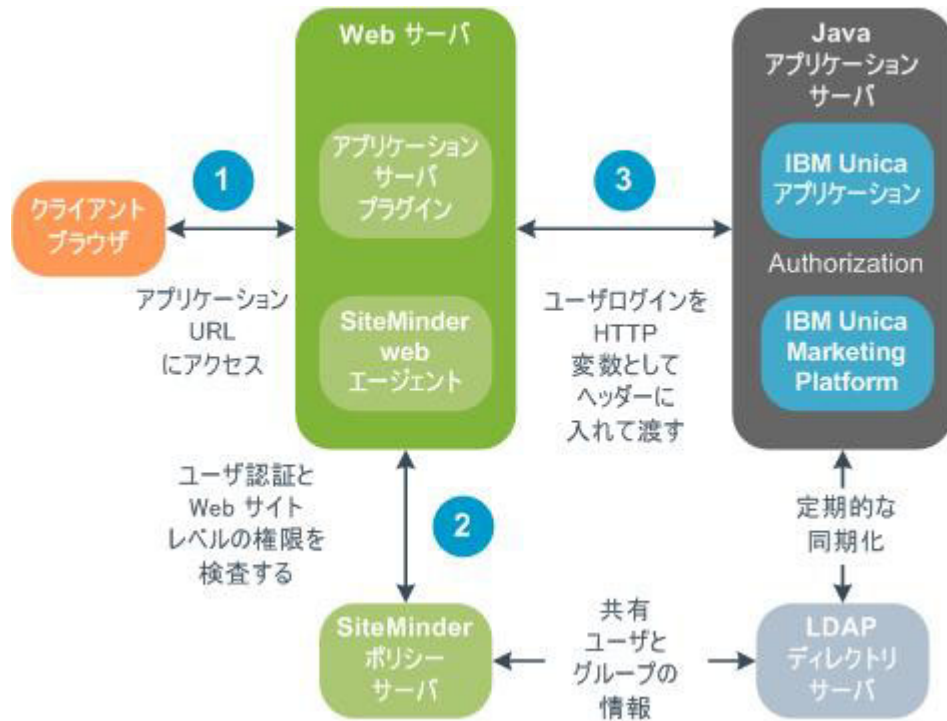
権限

IBM Unica Marketing アプリケーションは、ユーザ権限情報を得るために Marketing Platform へのクエリを実行します。Marketing Platform は、LDAP サーバから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、LDAP データベースからグループとそのユーザをインポートします。Marketing Platform が LDAP データベースからユーザとグループをインポートする際、グループメンバーシップは維持されます。これらの LDAP ユーザは Web アクセス制御システムにも公開されているため、Web アクセス制御システムおよび IBM Unica Marketing は、統合したユーザのセットを参照します。

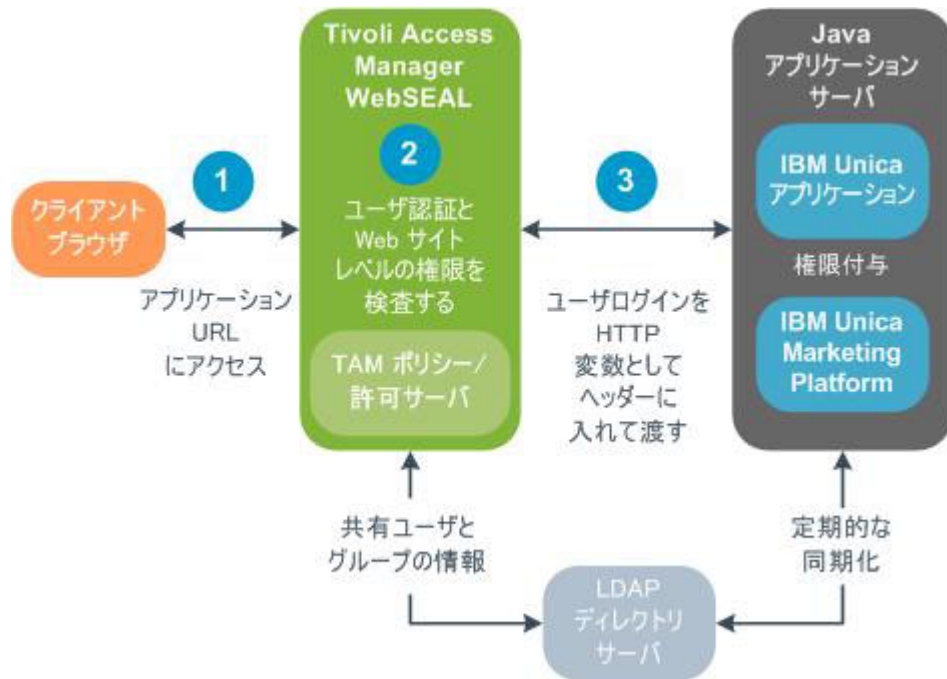
ユーザがアクセスするアプリケーション URL に対する制御を含め、追加の権限制御も、ほとんどの Web アクセス制御システムを介して利用することができます。

Web アクセス制御の統合図

次の図は、IBM Unica Marketing が SiteMinder および LDAP ディレクトリサーバと連携してユーザの認証と権限付与を行う方法を示しています。



次の図は、IBM Unica Marketing が Tivoli Access Manager および LDAP ディレクトリサーバと連携してユーザの認証と権限付与を行う方法を示しています。



SiteMinder との統合の前提条件

IBM Unica Marketing と Netegrity SiteMinder を統合するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- Web エージェントおよびポリシーサーバを使用するように、SiteMinder を構成する必要があります。
- IBM Unica Marketing アプリケーションに対する URL 要求でログイン名を HTTP 変数として渡すように、SiteMinder を構成する必要があります。また、IBM Unica Marketing の「Web アクセス制御ヘッダ変数」プロパティをこの変数の名前 (デフォルトでは `sm_user`) に設定する必要があります。
- グループメンバーとユーザプロパティを格納するためのリポジトリとして LDAP を使用するように、SiteMinder ポリシーサーバを構成する必要があります。
- SiteMinder をホストする Web サーバで提供される IBM Unica Marketing アプリケーション URL と、IBM Unica Marketing アプリケーションをホストする Java アプリケーションサーバは、同一のパスを参照していなければなりません。
- SiteMinder をホストする Web サーバの構成では、Java アプリケーションサーバの IBM Unica Marketing アプリケーション URL に要求をリダイレクトするように指定する必要があります。
- IBM Unica Marketing アプリケーションにアクセスする必要があるすべてのユーザに、SiteMinder を介した HTTP GET および POST 要求のために IBM Unica Marketing Web アプリケーションにアクセスできる権限を SiteMinder 内で付与する必要があります。

特定の機能を有効にするために必要な設定については、このセクションの残りの部分を参照してください。

シングルログアウトの有効化

ユーザが IBM Unica Marketing アプリケーションからログアウトすると同時に SiteMinder からログアウトできるようにするには、SiteMinder を次のように構成する必要があります。

1. SiteMinder の「管理ポリシーサーバ (Administer Policy Server)」領域にログインし、「`logoffUri`」プロパティを IBM Unica Marketing ログアウトページの URL に設定します。例: `/sm_realm/unica/j_spring_security_logout`。ここで `sm_realm` は、SiteMinder セキュリティレルムです。
2. SiteMinder がユーザに再度のサインインを強制してログアウトページが表示されないように、IBM Unica Marketing ログアウトページの保護を解除してください。

IBM Unica Scheduler の有効化

IBM Unica Scheduler を使用する予定の場合は、次の手順で SiteMinder を構成する必要があります。

1. SiteMinder の「管理ポリシーサーバ (Administer Policy Server)」領域にログインし、「ドメイン」をクリックします。
2. IBM Unica のインストール先に適用するレルムを選択し、「`unprotecturl`」を右クリックして「レルムのプロパティ (Properties of Realm)」を選択します。

3. 「リソースフィルタ」テキストボックスで、/unica/servlet/SchedulerAPIServlet と入力します。
4. 「デフォルトのリソース保護 (Default Resource Protection)」で「無保護」を選択します。

Tivoli Access Manager との統合の前提条件

IBM Unica Marketing と IBM Tivoli Access Manager (TAM) を統合するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- TAM WebSEAL ジャンクションを構成して、IBM Unica Marketing アプリケーションに対する URL 要求で、ユーザ名 (完全 DN ではなく短縮) を HTTP 変数として渡す必要があります。また、IBM Unica Marketing の「Web アクセス制御ヘッダ変数」プロパティをこの変数の名前 (デフォルトでは iv-user) に設定する必要があります。
- グループメンバーとユーザ属性を格納するためのリポジトリとして LDAP を使用するように、TAM ポリシーサーバを構成する必要があります。
- WebSEAL ジャンクションで定義されている IBM Unica Marketing アプリケーション URL と IBM Unica Marketing アプリケーションをホストする Java アプリケーションサーバは、同一のパスを参照しなければなりません。
- IBM Unica Marketing アプリケーションにアクセスする必要があるユーザはすべて、適切な権限でアクセス制御リスト (ACL) に追加されたグループに属している必要があります。Marketing Platform が配置されているアプリケーションサーバを指す WebSEAL ジャンクションを、この ACL に接続する必要があります。

注: ユーザが IBM Unica Marketing アプリケーションからログアウトする際、TAM から自動的にログアウトすることはありません。TAM からログアウトするには、IBM Unica Marketing アプリケーションからログアウトした後で、ブラウザを閉じる必要があります。

IBM Unica Scheduler の有効化

IBM Unica Scheduler スケジューラを使用する予定の場合は、次のようにして、Tivoli で新しいアクセス制御リスト (ACL) ポリシーを構成する必要があります。

1. Web Portal Manager を使用して、ドメイン管理者としてドメインにログインします。
2. 「ACL」>「ACL の作成」をクリックし、「名前」および「説明」フィールドに入力して、「適用」をクリックします。
3. 「ACL」>「ACL のリスト表示 (List ACL)」をクリックして、「ACL の管理 (Manage ACLs)」ページから、使用する ACL ポリシーのリンクをクリックします。
4. 「ACL プロパティ」ページで「作成」をクリックして、次のようにして ACL 用の 2 つのエントリを作成します。
 - 1 つ目のエントリについては、項目タイプを「非認証」に設定し、「Trx - 全探索、読み取り、実行 (Trx - Traverse, read, and execute)」権限を付与します。

- 2 つ目のエントリについては、項目タイプを「**その他 (Any-other)**」に設定し、「**Trx - 全探索、読み取り、実行 (Trx - Traverse, read and execute)**」権限を付与します。
5. ACL の「ACL 「ACL プロパティ」」ページの「**接続 (Attach)**」タブで、保護オブジェクトを接続します。Tivoli で完全なスケジューラサーブレットパス (WebSEAL から始まり /servlet/SchedulerAPIServlet で終わる) を使用してください。

Web アクセス制御プラットフォームとの統合方法

構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御統合)

IBM Unica Marketing と Web アクセス制御システムとの統合は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 『LDAP 統合の実行』

「同期のテスト」のステップで中断して、LDAP 統合の指示に従ってください。

2. 『IBM Unica Marketing での Web アクセス制御統合の構成』

「構成」ページで、Web アクセス制御統合のプロパティを設定します。

3. 128 ページの『Web アプリケーションサーバの再起動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

4. 144 ページの『Web アクセス制御の同期化と IBM Unica Marketing ログインのテスト』

ユーザとグループが Web アクセス制御システムで正しく同期していること、および IBM Unica Marketing にログインできることを確認してください。

LDAP 統合の実行

本書の他の個所に示されている該当項目の説明に従って、LDAP 統合に必要なすべての手順を実行してください。

IBM Unica Marketing での Web アクセス制御統合の構成

次の表で説明されている方法で、「構成」ページでプロパティの値を設定します。これらのプロパティの詳細な説明については、「構成」ページのオンライン・ヘルプを参照してください。

プロパティ	値
Unica プラットフォーム セキュリティ ログイン方法の詳細	「Web アクセス制御」を選択します。

プロパティ	値
Unica プラットフォーム セキュリティ ログイン方法の詳細 Web アクセス制御 ユーザ名パターン	Web アクセス制御ソフトウェアの HTTP ヘッダー変数からユーザログインを抽出するために使用する Java 正規表現。正規表現の中に XML 文字があれば、それを XML エスケープする必要があることに注意してください。SiteMinder および Tivoli Access Manager に推奨される値は、 <code>¥w*</code> です。
Unica プラットフォーム セキュリティ ログイン方法の詳細 Web アクセス制御 Web アクセス制御のヘッダー変数	Web アクセス制御ソフトウェアで構成されている HTTP ヘッダー変数。Web アプリケーションサーバに送信されます。デフォルトでは、SiteMinder は <code>sm_user</code> を使用し、Tivoli Access Manager (TAM) は <code>iv-user</code> を使用します。TAM の場合は、この値を、IBM HTTP ストリングでなく IBM 未加工ストリングのユーザ名コンポーネントに設定します。
Unica 全般 ナビゲーション Unica URL	<p><code>http://sm_host:sm_port/sm_realm/unica</code> に設定します。</p> <p>ここで</p> <ul style="list-style-type: none"> • <code>sm_host</code> は、SiteMinder インストールされているマシンの名前 • <code>sm_port</code> は SiteMinder のポート番号 • <code>sm_realm</code> は SiteMinder のレルム

Web アプリケーションサーバの再起動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーションサーバを再起動してください。

Web アクセス制御の同期化と IBM Unica Marketing ログインのテスト

1. Web アクセス制御システムに同期されていて Marketing Platform へのアクセス権限を持っている LDAP アカウントを使用して、Web アクセス制御システムにログインします。
2. 以下のことを確認してください。
 - ユーザが予期したとおりにインポートされている。
 - グループが予期したとおりにインポートされている
 - IBM グループのメンバーシップが、予期される LDAP グループへのマッピングと一致している。
3. ブラウザで Marketing Platform の URL にアクセスし、ログインします。

IBM Unica Marketing のログイン画面が表示されずに IBM Unica Marketing にアクセスできるはずですが、

4. Web アクセス制御ソフトウェアが Netegrity SiteMinder である場合は、以下のガイドラインに従って問題を解決してください。
- IBM Unica Marketing のログイン画面が表示される場合は、ログインに使用したユーザアカウントが SiteMinder に同期されていない可能性があります。
 - IBM Unica Marketing にアクセスできない場合は、SiteMinder の構成が正しいことを確認してください。SiteMinder TestTool を使用して、ログインに使用したユーザアカウントが SiteMinder で認可されていて IBM Unica Marketing の URL へのアクセス権限を付与されているかどうかを確認することができます。
 - IBM Unica Marketing にアクセスはできるが、ナビゲーションが正常に機能しない場合、または画像が表示されない場合は、SiteMinder をホストする Web サーバと Marketing Platform をホストする Java アプリケーションサーバが同一のパスを使用して Marketing Platform を参照しているかどうか確認してください。

第 13 章 IBM Unica Marketing への SSL の実装

ネットワークを介して接続する 2 つのアプリケーション間で保護する必要がある通信はすべて、Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルを使用して送信することができます。SSL は、次のようにしてセキュア接続を提供します。

- アプリケーションが別のアプリケーションの ID を認証できるようにする
- 秘密鍵を使用して、SSL 接続を介して転送されたデータの暗号化および暗号化解除を行う

SSL を使用して接続する URL は、HTTP ではなく HTTPS で始まります。

プロセスが相互に通信する場合、要求を出すプロセスはクライアントとして動作し、要求に応答するプロセスはサーバとして動作します。完全なセキュリティを目指すには、IBM Unica Marketing 製品とのすべての形式の通信に SSL を実装する必要があります。

SSL は、片方向または両方向に構成できます。片方向 SSL では、サーバはクライアントに対して証明書を提示する必要がありますが、クライアントはサーバに対して証明書を提示する必要はありません。SSL 接続のネゴシエーションを成功させるには、クライアントがサーバを認証する必要があります。サーバは、すべてのクライアントからの接続を受け入れます。

このセクションでは、IBM Unica Marketing における片方向 SSL について説明します。

SSL 証明書について

SSL 証明書について全般的に理解するには、このセクションを読んでください。

証明書とは

証明書は、サーバを何らかの名前付きエンティティとして識別するデジタル署名です。証明書は、サーバの ID を保証する認証局 (CA) によって署名されているか、または自己署名されています。Verisign や Thawte は CA の例です。自己署名証明書とは、証明書が識別を主張するエンティティが CS と同一である場合の証明書です。

サーバサイドの証明書

SSL 通信の提供を目的としているすべてのサーバは、アプリケーションサーバであるか Campaign リスナなどの IBM Unica Marketing アプリケーションであるかに関係なく、証明書を提供する必要があります。

クライアントサイドのトラストストア

クライアントがサーバの証明書を受け取った場合、証明書を信頼するかどうかはクライアントの判断によります。証明書がクライアントのトラストストアに存在する場合、クライアントは自動的にサーバの証明書を信頼します。トラストストアは、信頼できる証明書のデータベースです。

最近のブラウザには、CA が承認した共通の証明書がロードされているトラストストアを備えたものがあります。大手マーチャントの Web サイトで、保護されたサイトに入ったときにプロンプトが出ないのはこのためです。大手マーチャントでは、CA によって署名された証明書を使用しています。ただし、自己署名証明書を提供する IBM アプリケーションにログインした場合は、ユーザにプロンプトが表示されます。

ブラウザは、サーバのホスト名が証明書の中のサブジェクト名と一致していることを確認することに注意してください (サブジェクト名は、証明書を要求するときに提供する識別名に使用される共通名です)。この 2 つの名前が一致しない場合、ブラウザから警告が出ることがあります。

ブラウザが、認識できない証明書 (例えば、自己署名証明書) で保護された IBM アプリケーションにアクセスすると、ダイアログウィンドウが開き、ユーザに続行するかどうかを尋ねます。ユーザがローカル側のトラストストアに証明書をインストールすることを選択すると、このプロンプトは表示されなくなります。

IBM Unica Marketing でのクライアントおよびサーバの役割

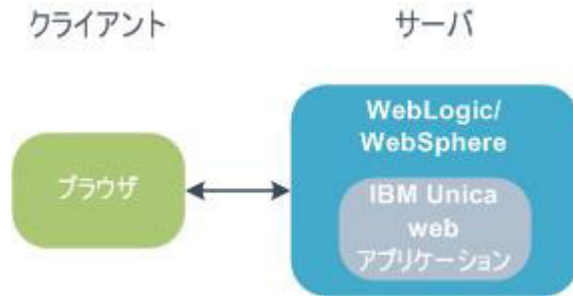
ほとんどの IBM Unica Marketing アプリケーションは、2 つの部分から成っています。

- Web アプリケーション。これは、ユーザがブラウザ経由でアクセスするコンポーネントです。
- サーバ (Campaign リスナおよび Marketing Platform API サーバなど)。このコンポーネントにはプログラムでアクセスします。

これらのアプリケーションコンポーネントは、状況に応じて、通信時にクライアントまたはサーバのどちらかとして動作することができます。次の例と図では、IBM コンポーネントが各種の通信で果たす役割を示しています。

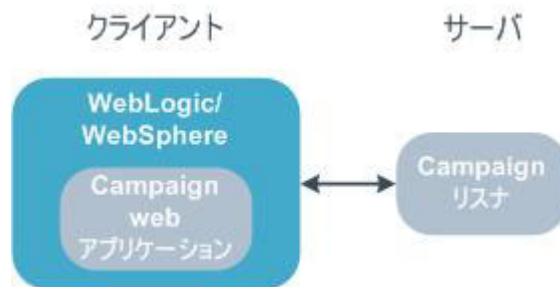
例 1 - ブラウザと IBM Unica Marketing Web アプリケーションの通信

ユーザがブラウザを介して IBM Unica Web アプリケーションと通信する場合、ブラウザはクライアントで、IBM Unica Web アプリケーションはサーバです。



例 2 - 1 つの IBM Unica Marketing アプリケーションのコンポーネント間の通信

単一の IBM Unica アプリケーションの 2 つのコンポーネントも、プログラムで相互に通信することがあります。例えば、Campaign Web アプリケーションが Campaign リスナに要求を送信する場合、Campaign Web アプリケーションはクライアントで、リスナはサーバです。



例 3 - 両方の役割を果たす IBM Unica コンポーネント

IBM Unica アプリケーションコンポーネントは、一部の交換ではクライアントとして、別の交換にはサーバとして通信することがあります。これらの関係の例を以下に示します。



IBM Unica Marketing の SSL について

これまで見てきたように、多くの IBM Unica アプリケーションコンポーネントは、通常の操作時にはサーバとしてもクライアントとしても動作することができます。また、一部の IBM Unica コンポーネントは Java で書かれ、一部は C++ で書かれています。これらの事項が、使用する証明書の形式を決定します。CA から 1 回限り購入の自己署名証明書を購入して作成する場合は、形式を指定します。

IBM Unica アプリケーションは、IBM Unica サーバコンポーネントへの片方向 SSL の要求を行うクライアントとして機能する場合は、トラストストアを必要としないことに注意してください。

サーバとして動作する Java コンポーネント

JSSE SSL の実装を使用して Java で作成され、アプリケーションサーバに配置された IBM Unica アプリケーションの場合は、ご使用の証明書を使用するようにアプリケーションサーバを構成する必要があります。証明書は JKS 形式で格納する必要があります。

アプリケーションサーバは、追加構成を必要としないデフォルトの証明書を提供しています。アプリケーションサーバのデフォルトの証明書は、単にアプリケーションサーバで SSL ポートを有効にするだけで、アプリケーションサーバの何らかの追加設定を実行しない場合に使用されるものです。

アプリケーションサーバによって提供されているデフォルトの証明書以外の証明書を使用する場合は、追加構成が必要です。これについては、154 ページの『SSL 用の Web アプリケーションサーバの構成』で説明しています。

サーバとして動作する C++ コンポーネント

Campaign リスナ、Optimize サーバコンポーネント、および PredictiveInsight サーバコンポーネントは、C++ で書かれており、PEM 形式で格納されている証明書を必要とします。

クライアントとして動作する Java コンポーネント

Java で書かれており、アプリケーションサーバに配置されている IBM Unica アプリケーションについては、トラストストアは必要ありません。構成を簡単にするために、クライアントとして動作する IBM Unica Java アプリケーションは、片方向 SSL 通信時にサーバを認証しません。ただし、暗号化は行われます。

クライアントとして動作する C/C++ コンポーネント

C/C++ で書かれており、OpenSSL の実装を使用しているアプリケーションについては、トラストストアは必要ありません。Campaign リスナ、Optimize サーバコンポーネント、PredictiveInsight サーバコンポーネント、および NetInsight は、このカテゴリに該当します。

証明書の数

サーバとして動作している IBM Unica コンポーネントをホストするマシンごとに、別の証明書を使用するのが理想です。

複数の証明書を使用したくない場合、正しい形式 (Java コンポーネントには JKS、C++ コンポーネントには PEM) であれば、サーバとして動作するすべての IBM Unica コンポーネントに対して同じ証明書を使用することができます。すべてのアプリケーションに対して一つの証明書を使用する場合、ユーザが初めて IBM Unica アプリケーションにアクセスするときに、ブラウザによって証明書を受け入れるかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

本章の例は、Java および C++ IBM Unica コンポーネントで使用する自己署名証明書ファイルの作成方法を示しています。

IBM Unica Marketing への SSL の実装

構成プロセスのチェックリスト (SSL)

IBM Unica Marketing での SSL の構成は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本章の別の個所に記載されています。

1. 『証明書の取得または作成』

IBM Unica およびご使用のアプリケーションサーバで提供されるデフォルトの証明書を使用したくない場合は、証明書を取得または作成します。

2. 154 ページの『SSL 用の Web アプリケーションサーバの構成』

IBM Unica アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーションサーバで SSL ポートを有効にします。アプリケーションサーバのデフォルトの証明書を使用しない場合は、独自の証明書を使用するように構成します。

3. 154 ページの『SSL 用の IBM Unica Marketing の構成』

IBM Unica Marketing で構成プロパティを設定します。

4. 161 ページの『SSL 構成の検証』

ご使用のそれぞれの IBM Unica Marketing アプリケーションにログインします。

証明書の取得または作成

証明書を取得または作成するには、いくつかの方法があります。

- アプリケーションサーバが提供するデフォルトの証明書を使用する。
- このセクションで説明されている方法で、自己署名証明書を作成する。
- このセクションで説明されている方法で、認証局 (CA) から証明書を取得する。

自己署名証明書の作成方法

IBM Unica Marketing で使用する自己署名証明書ファイルを作成するには、このセクションの手順を実行してください。

- 152 ページの『C++ IBM Unica Marketing コンポーネントの証明書を作成するには』

- 153 ページの『Java IBM Unica Marketing コンポーネントの証明書を作成するには』

C++ IBM Unica Marketing コンポーネントの証明書を作成するには:

Campaign リスナは、OpenSSL ライブラリーを使用して SSL を実装します。OpenSSL ディストリビューションには、証明書ファイルを作成できる `openssl` と呼ばれるコマンド行プログラムが組み込まれています。このプログラムの使用方法の詳細については、OpenSSL の資料を参照するか、プログラムの実行時に `-help` と入力してヘルプにアクセスしてください。

C++ IBM Unica Marketing コンポーネントを SSL 用に設定するときを使用できる自己署名証明書を作成するには、次の手順を使用してください。

1. コマンド行で `openssl` を実行します。

このプログラムと関連の構成ファイル `openssl.cnf` は、Campaign のインストール先の `bin` ディレクトリにあります。これは、OpenSSL ディストリビューションでも使用できます。

2. 鍵を生成します。以下のコマンド例では、`key.pem` という名前の鍵を作成します。

```
genrsa -out key.pem 1024
```

3. 要求を生成します。

以下のコマンド例では、`request.pem` という名前の要求を作成します。

```
req -new -key key.pem -out request.pem
```

ツールを使用すると一連の質問が表示されます。ピリオド (.) を入力すると、フィールドはブランクのままになります。自己署名証明書については、少なくとも共通名を入力する必要があります。

Campaign/bin ディレクトリから `openssl` ツールを使用している場合は、同じディレクトリの `openssl.cnf` ファイルを指す値の `-config` パラメータを追加します。次に例を示します。

```
req -config openssl.cnf -new -key key.pem -out request.pem
```

4. 証明書を生成します。

以下のコマンド例では、`request.pem` および `key.pem` ファイルを使用して、`certificate.pem` という名前の証明書を、作成日から 10,000 日を有効期限に指定して作成します。

```
req -x509 -key key.pem -in request.pem -days 10000 -out certificate.pem
```

Campaign/bin ディレクトリから `openssl` ツールを使用している場合は、同じディレクトリの `openssl.cnf` ファイルを指す値の `-config` パラメータを追加します。次に例を示します。

```
req -config openssl.cnf -x509 -key key.pem -in request.pem -days 10000  
-out certificate.pem
```


5. テキストエディタを使用して、鍵および証明書のコンテンツを、拡張子 `.pem` の新規ファイルにコピーします。

Java IBM Unica Marketing コンポーネントの証明書を作成するには:

Java で書かれた IBM Unica Marketing Web アプリケーションコンポーネントは、JSSE ライブラリーを使用します。Sun JDK には、証明書ファイルを作成できる `keytool` と呼ばれるプログラムが組み込まれています。このプログラムの使用方法の詳細については、Java の資料を参照するか、プログラムの実行時に `-help` と入力してヘルプにアクセスしてください。

SSL 用の Java IBM Unica Marketing コンポーネントを設定するときに使用できる自己署名証明書を作成するには、次の手順を使用してください。

1. コマンド行で `keytool` を実行します。

このプログラムは、Sun Java JDK の `bin` ディレクトリに入っています。

2. ID 鍵ストアを生成します。

以下のコマンド例では、`UnicaClientIdentity.jks` という名前の鍵ストアを作成します。

```
keytool -genkey -alias UnicaClientIdentity -keyalg RSA -keystore
UnicaClientIdentity.jks -keypass clientPwd -validity 1000 -dname
"CN=hostName, O=myCompany" -storepass clientPwd
```

次のことに注意してください。

- `-storepass` の値 (例では `clientPwd`) をメモします。これは、アプリケーションサーバの構成時に必要になります。
 - `-alias` の値 (例では `UnicaClientIdentity`) をメモします。これは、残りの手順で必要になります。
 - 識別名の共通名 (CN) は、IBM Unica Marketing へのアクセスに使用するホスト名と同じでなければなりません。例えば、IBM Unica Marketing の URL が `https://hostName.companyDomain.com:7002/unica/jsp` の場合、CN は `hostName.companyDomain.com` です。識別名の CN 部分が唯一の必須部分です。組織 (O) および組織単位 (OU) は必須ではありません。
 - WebSphere 6.0 の場合は、鍵ストアパスワードと鍵パスワードは同じでなければなりません。
3. 作成したばかりの ID 鍵ストアに基づいて、証明書を生成します。

以下のコマンド例では、`UnicaCertificate.cer` という名前の証明書を作成します。

```
keytool-export -keystore UnicaClientIdentity.jks -storepass clientPwd
-alias UnicaClientIdentity -file UnicaCertificate.cer
```

`-alias` の値は、ID 鍵ストア (例では `UnicaClientIdentity`) に設定する別名です。

4. 作成したばかりの証明書に基づいて、トラステッド鍵ストアを生成します。

以下のコマンド例では、UnicaTrust.jks という名前のトラステッド鍵ストアを作成します。

```
keytool -import -alias UnicaClientIdentity -file UnicaCertificate.cer  
-keystore UnicaTrust.jks -storepass trustPwd
```

次のことに注意してください。

- プロンプトが出たら Y と入力して、証明書を承認します。
- -alias の値は、ID 鍵ストア (例では UnicaClientIdentity) に設定する別名であることに注意してください。
- -storepass の値 (例では trustPwd) をメモします。これは、アプリケーションサーバの構成時に必要になります。

署名証明書の取得方法

OpenSSL および keytool プログラムを使用して要求を作成し、その要求を CA に送信して署名付き証明書を作成することができます。または、CA が全面的に提供する署名付き証明書を取得することができます。次のことに注意してください。

- IBM Unica Marketing アプリケーションが C++ で作成されている場合は、PEM 形式の証明書を取得する。
- その他の IBM Unica Marketing アプリケーションについてはすべて、JKS 形式の証明書を取得する。

署名付き証明書の取得方法に関する手順については、認証局の資料を参照してください。

SSL 用の Web アプリケーションサーバの構成

IBM Unica Marketing アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーションサーバで、採用を決定した証明書を使用するように Web アプリケーションサーバを構成します。これらの手順の実行について詳しくは、アプリケーションサーバの資料を参照してください。

SSL 用の IBM Unica Marketing の構成

SSL を使用するように IBM Unica Marketing アプリケーションを構成するには、いくつかの構成プロパティを設定する必要があります。このセクションに示す手順から、お客様のインストール環境に適した IBM Unica Marketing 製品と SSL を使用して保護したい通信を選んで使用してください。

セキュア接続で IBM Unica Marketing インストールにアクセスする場合、また次の手順で説明されている方法でアプリケーション用のナビゲーションプロパティを設定する場合は、URL に https およびセキュアポート番号を使用する必要があります。デフォルトの SSL ポートは、WebLogic の場合は 7002、WebSphere の場合は 8002 です。

- 155 ページの『Marketing Platform で SSL を構成するには』
- 155 ページの『LDAP 統合を備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』

- 156 ページの『データフィルタを備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』
- 157 ページの『Marketing Operations で SSL を構成するには』
- 158 ページの『Campaign で SSL を構成するには』
- 158 ページの『Optimize で SSL を構成するには』
- 159 ページの『Interact で SSL を構成するには』
- 160 ページの『Distributed Marketing で SSL を構成するには』
- 160 ページの『レポートで SSL を構成するには』
- 160 ページの『PredictiveInsight で SSL を構成するには』
- 160 ページの『NetInsight で SSL を構成するには』

Marketing Platform で SSL を構成するには

1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

2. 「全般 | ナビゲーション | Unica URL」プロパティの値を Marketing Platform URL に設定します。

例: `https://host.domain:SSL_port/unica`

ここで、

- *host* は Marketing Platform がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *domain* は IBM Unica Marketing 製品がインストールされているお客様の企業ドメインです。
- *SSL_port* は Marketing Platform が配置されているアプリケーションサーバの SSL ポートです。

URL が `https` で始まることに注意してください。

3. HTTP ポートおよび HTTPS ポートを設定するインストール済みの IBM 製品ごとに、「ナビゲーション」カテゴリでプロパティを見つけます。プロパティの名前は製品によって異なる場合がありますが、その目的は明確なはずで、各製品について、製品が配置されているアプリケーションサーバの HTTP ポートおよび HTTPS ポートにこれらの値を設定します。
4. LDAP 統合を実装してある場合は、『LDAP 統合を備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行してください。
5. データフィルタ機能を使用する予定の場合は、156 ページの『データフィルタを備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行してください。

LDAP 統合を備えた Marketing Platform で SSL を構成するには

1. 『Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行します (まだ実行していない場合)。
2. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

3. 「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリに移動し、「LDAP 接続に SSL が必要」プロパティの値を true に設定します。

これにより、Marketing Platform は、ユーザのログイン時に SSL を使用して LDAP サーバに接続することが必要になります。

4. 「Unica | プラットフォーム | セキュリティ | LDAP 同期」カテゴリに移動し、以下の値を設定します。
 - 「LDAP プロバイダ URL」プロパティの値を `ldaps://host.domain:SSL_Port` に設定します。

ここで、

- `host` は、LDAP サーバの名前または IP アドレスです。
- `domain` は、LDAP サーバのドメインです。
- `SSL_Port` は、LDAP サーバの SSL ポートです。

例: `ldaps://LDAPMachine.myCompany.com:636`

URL が `ldaps` で始まることに注意してください。

LDAP サーバのデフォルトの SSL ポートは、636 です。

- 「LDAP 接続に SSL が必要」プロパティの値を true に設定します。

これにより、Marketing Platform は、LDAP サーバと同期する際に SSL を使用して LDAP サーバに接続することが必要になります。

データフィルタを備えた Marketing Platform で SSL を構成するには

Marketing Platform が SSL で配置されており、データフィルタ機能を使用する予定の場合は、この手順を実行して、ハンドシェイクを実行する SSL オプションを追加する必要があります。

1. 155 ページの『Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行します (まだ実行していない場合)。
2. テキストエディタで `datafilteringScriptTool.bat` ファイルを開きます。

このファイルは、Marketing Platform のインストール先の `tools/bin` ディレクトリにあります。

3. 以下の太字で示されている変更を追加します。

印刷用に改行が使用されていることに注意してください。

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"  
-Djavax.net.ssl.trustStore="path_to_your_jks_file"  
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=your_trust_store_password
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" %SSL_OPTIONS%  
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

path_to_your_jks_file および *your_trust_store_password* を、お客様が使用する値に置き換えてください。この例では印刷用に改行が追加されています。

4. ファイルを保存して閉じます。

Marketing Operations で SSL を構成するには

1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

2. 「Marketing Operations | ナビゲーション | serverURL」プロパティの値を Marketing Operations Web アプリケーションの URL に設定します。

例: serverURL=https://host:SSL_port/plan

ここで、

- *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_port* は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

3. テキストエディタまたは XML エディタで plan_config.xml ファイルを開きます。

plan_config.xml ファイルは、Marketing Operations のインストール先の conf ディレクトリにあります。

4. 「UAPInitParam notifyPlanBaseURL」プロパティを SSL 接続用に設定します。

例: <UAPInitParam notifyPlanBaseURL="https://host:SSL_Port/plan/affiniumplan.jsp"/>

ここで、

- *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

5. Adobe Acrobat Online Markup 機能を使用可能にして、HTTPS を介して Marketing Operations で作動させるには、「markupServerURL」プロパティを SSL 接続用に設定します。

例: <UAPInitParam markupServerURL="https://host:SSLport/plan/services/collabService?WSDL">

ここで、

- *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

6. plan_config.xml ファイルを保存して閉じます。

Campaign で SSL を構成するには

1. テキストエディタまたは XML エディタで config.xml ファイルを開きます。

config.xml ファイルは、Campaign のインストール先の conf ディレクトリにあります。

2. unicaServerSSLFile の値を、使用する PEM ファイルの絶対パスに設定します。(IBM Unica が提供するファイル unicaclient.pem は、security ディレクトリにあります。次に例を示します。

```
unicaServerSSLFile=C:/Unica/security/certificateFile.pem
```

3. config.xml ファイルを保存して閉じます。
4. Marketing Platform にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

5. 「キャンペーン | unicaACListener | useSSL」プロパティの値を yes に設定します。
6. Web アプリケーションを SSL ポートに配置した場合は、「キャンペーン | ナビゲーション | serverURL」プロパティの値を Web アプリケーション URL に設定します。例えば、次のようになります。

```
serverURL=https://host:SSL_port/Campaign
```

ここで、

- host は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- SSL_Port は、Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

7. 操作モニタを使用している場合は、「キャンペーン | モニタ | serverURL」プロパティの値を、HTTPS を使用するように設定して、SSL 用に構成してください。次に例を示します。

```
serverURL=https://host:SSL_port/Campaign/OperationMonitor
```

ここで、

- host は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- SSL_Port は、Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

Optimize で SSL を構成するには

1. Optimize インストールディレクトリの conf ディレクトリから検出される config.xml ファイルを、テキストエディタまたは XML エディタで開きます。

2. unicaServerSSLFile の値を、使用する PEM ファイルの絶対パスに設定します。(IBM が提供しているファイル unicaclient.pem は、Optimize のインストール先の security ディレクトリにあります。)
3. config.xml ファイルを保存して閉じます。
4. 「キャンペーン | unicaACOListener | useSSL」構成プロパティの値を yes に設定します。
5. Optimize コマンド行ツール AC00ptAdmin を使用している場合は、AC00ptAdmin.bat ファイルまたは AC00ptAdmin.sh ファイルを編集して、以下の太字のテキストを追加して SSL 証明書を認識させる必要があります。

印刷用に改行が使用されていることに注意してください。

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
-Djavax.net.ssl.trustStore=
"path_to_your_jks_file/name_of_your_jks_file"
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=password_in_your_jks_file

"$JAVA_HOME/bin/java" %SSL_OPTIONS%
com.unicacorp.Campaign.optimize.tools.optadmin.OptAdmin "$@"*
```

インストール先の unicaClientIdentity.jks への正しいパスと、jks 証明書の正しい名前およびパスワードを使用してください。-D オプションはスペースの後に入力します。

Interact で SSL を構成するには

重要: Interact のいずれかの部分を SSL を使用して通信するように構成すると、パフォーマンスコストが発生します。IBM では、Interact で SSL を使用するように構成しないことをお勧めします。

Interact 用の SSL 通信を構成するには、最大で 3 つの方法があります。

•

設計環境をクライアントにし、ランタイム環境をサーバにする。

Interact ランタイムサーバを参照する URL で https を使用します。例えば、「キャンペーン | パーティション | partition[n] | Interact | ServerGroups | [serverGroup] | instanceURLs | [instanceURL] | instanceURL」を https://myserver.domain.com:7007/interact に設定します。

•

ランタイム環境をクライアントにし、Marketing Platform をサーバにする。

詳しくは、155 ページの『Marketing Platform で SSL を構成するには』を参照してください。

•

顧客接点をクライアントにし、ランタイム環境をサーバにする。

getInstance メソッドを使用して HTTPS URL を指定します。ロードバランサを使用している場合は、ロードバランサも同様に SSL 用に構成することが必要な場合があります。

Distributed Marketing で SSL を構成するには

SSL を使用するように Campaign を構成した後は、Distributed Marketing を SSL 用に構成するための追加構成は必要ありません。

レポートで SSL を構成するには

1. Cognos の資料で説明されている方法で、SSL を指定して Cognos を構成します。
2. Apache の資料で説明されている方法で、SSL を指定して Apache を構成します。
3. Cognos の資料で説明されている方法で、IBM Unica Marketing を指定して Cognos の証明書を登録します。
4. Cognos の資料で説明されている方法で、Cognos を指定して IBM Unica Marketing 証明書を登録します。

PredictiveInsight で SSL を構成するには

1. Enterprise バージョンの PredictiveInsight があり、PredictiveInsight リスナが SSL を使用して通信するようにしたい場合は、次のようにします。
 - a. PredictiveInsight がインストール済みの環境で、テキストエディタまたは XML エディタを使用して Unica/config.xml ファイルを開きます。
 - b. unicaServerSSLFile の値を、使用する PEM ファイルの絶対パスに設定します。例: unicaServerSSLFile=C:/Unica/certificateFile.pem。ここで、certificateFile.pem は、PredictiveInsight リスナに使用させたい証明書を収容しているファイルの名前です。
 - c. config.xml ファイルを保存して閉じます。
2. テキストエディタで model_server.conf ファイルを開きます。

このファイルは、PredictiveInsight のインストール先の config ディレクトリにあります。

3. 以下の値を設定します。
 - Server.UseSSL=Yes
 - Server.SSLURL=https://host:SSL_Port/context-root。ここで、
 - host は、PredictiveInsight Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
 - SSL_Port は、PredictiveInsight Web アプリケーションの SSL ポートです。
 - context-root は、PredictiveInsight Web アプリケーションの SSL コンテキストルートです。

URL が https で始まることに注意してください。

NetInsight で SSL を構成するには

NetInsight は、要求を一切受け入れません。これは常に、HTTP および HTTPS 通信でクライアントとして機能し、分析される Web サイトのページタイトルを解決します。SSL を使用しているサイトのページタイトルを解決する必要がある場合、確認する必要があるのは、分析対象の Web サイトまたはクラスタサーバ (またはその

両方) のプロファイルオプションに入力された URL が正しいこと、および URL に HTTPS プロトコルが含まれていることです。

NetInsight は、Marketing Platform と通信しません。

SSL 構成の検証

1. 個々の IBM Unica Marketing アプリケーションを開始します。
2. IBM Unica Marketing にログインして、インストール済みの個々の IBM Unica Marketing Web アプリケーションにアクセスします。
3. Interact ランタイムサーバの場合のみ、URL `https://host:port/interact/jsp/admin.jsp` を使用して接続をテストします。
4. 自己署名証明書を使用している場合は、ブラウザで 各 IBM Unica Marketing サーバコンポーネントを指示して、受信した証明書の情報が期待どおりのものであることを確認します。

例えば、Campaign リスナが `campaignHost` という名前のホストのポート 4664 で実行中の場合は、ブラウザで `https://campaignHost:4664` にアクセスします。

ご使用のブラウザによって、証明書を受け入れるかどうかを尋ねるウィンドウが開きます。また、証明書の詳細を表示することができます。

SSL に関する有用なリンク

- OpenSSL の資料 - <http://www.openssl.org/docs/>
- keytool の資料 - <http://java.sun.com/j2se/1.4.2/docs/tooldocs/windows/keytool.html>
- 認証局のリスト - http://www.dmoz.org/Computers/Security/Public_Key_Infrastructure/PKIX/Tools_and_Services/Third_Party_Certificate_Authorities/

第 14 章 データフィルタのセットアップ

データフィルタは、各種の IBM Unica Marketing アプリケーションでさまざまな方法で使用できます。特定の製品がデータフィルタリングを使用するかどうか、および使用する場合に製品内部でのデータフィルタリングの機能の詳細を判別するには、その製品の資料を参照してください。

一般に、IBM Unica アプリケーションがデータフィルタリングを使用する場合、IBM Unica 管理者は、構成可能なデータフィルタに基づいて IBM Unica 製品のデータアクセス制限を指定することができます。データフィルタを使用すると、IBM Unica ユーザが IBM Unica アプリケーションで表示して操作できる顧客データを制限することができます。データフィルタで保護するデータは、指定する顧客テーブル内のフィールドで定義されるデータセットと考えることができます。

データフィルタのセットアップについて

Marketing Platform には、IBM Unica Marketing 管理者がデータフィルタをセットアップする際に使用できる以下の機能があります。

- データフィルタを定義するユーティリティ
- ユーザおよびグループをデータフィルタに割り当て、割り当て済みのデータフィルタを表示するユーザインターフェース

ユーザアクセスを制限するデータフィルタの関連付け

個別ユーザまたはユーザグループのデータアクセスを制限するには、それらのユーザまたはユーザグループをデータフィルタに割り当てます。すべての IBM Unica Marketing ユーザおよびグループは、データフィルタへの割り当てに使用可能です。複数のユーザおよびグループを単一のデータフィルタに割り当てることも、1 つのユーザまたはユーザグループを複数のデータフィルタに割り当てることもできます。

注: グループが、そのサブグループのデータフィルタ割り当てを獲得することはありません。

複数のデータフィルタに割り当てられたユーザは、それらのデータフィルタのすべてで許可されるレコードをすべて表示することができます。

データフィルタの概念

データフィルタの設定方法を理解するには、データフィルタ機能、データベース一般、そして (Campaign ファミリのアプリケーションで使用するデータフィルタをセットアップする場合は) 特に Campaign で使用されるある程度の概念について知っておく必要があります。

- **データ構成** – データ構成により一連のデータフィルタをグループ化します。関連したデータを保護するすべてのデータフィルタは、同じデータ構成に関連付けられます。

- **オーディエンス** - オーディエンスレベルとして Campaign に指定された顧客テーブルの中の 1 つ以上のフィールド。代表的なオーディエンスレベルは、世帯および個人です。
- **物理フィールド名** - データベーステーブルのフィールドの物理名は、データベースクライアントでそのテーブルを直接表示したときに表示される名前です。データフィルタを使用中の場合、顧客データベースのクエリ時に物理名が使用されます。
- **論理フィールド名** - データフィルタを定義する際に、物理フィールドへの論理名を割り当てます。Campaign ファミリのアプリケーションに使用されるデータフィルタをセットアップする場合は、これらの論理名は Campaign のフィールドに割り当てられた名前と同じものでなければなりません。この名前は、ユーティリティがデータフィルタを生成するときに使用します。

データフィルタの 2 つの作成方法: 自動生成と手動指定

IBM Unica Marketing 提供のユーティリティ `datafilteringScriptTool` は、XML を処理して、Marketing Platform システムテーブルにデータフィルタを作成します。このユーティリティは、XML の書き方に応じて、自動生成と手動指定の 2 つの方法で使用することができます。

自動生成

`datafilteringScriptTool` ユーティリティでは、JDBC を使用してアクセスできるデータベーステーブルまたはビューから、データフィルタを自動的に生成することができます。このユーティリティは、XML に指定したフィールド内の値の固有の組み合わせに基づき、データフィルタ (固有の組み合わせごとに 1 つのデータフィルタ) を自動的に作成します。

この方式については、175 ページの『プロセスチェックリストの構成』で説明します。

大量のデータフィルタを作成する必要がある場合は、この方式を使用すると便利です。

手動指定

`datafilteringScriptTool` ユーティリティでは、指定するフィールド値に基づき、データフィルタを 1 つずつ作成することができます。

この方式については、165 ページの『構成プロセスのチェックリスト (データフィルタの手動指定)』で説明します。

フィールド値の固有の組み合わせをすべて組み込むわけではないデータフィルタのセットを作成する場合は、この方式を使用すると便利です。

手動指定によるデータフィルタのセットアップ方法

構成プロセスのチェックリスト (データフィルタの手動指定)

手動指定メソッドを使用したデータフィルタの構成は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 『データフィルタ基準の計画 (手動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 166 ページの『必要な情報の入手 (手動指定)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリのアプリケーションでデータフィルタを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集してください。

3. 177 ページの『データフィルタを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データフィルタで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。

4. 166 ページの『データフィルタシステムテーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML ファイルを使用して、データフィルタに使用される Marketing Platform システムテーブルにデータを設定します。

5. 167 ページの『データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て』

IBM Unica Marketing データフィルタユーザインターフェースを使用して、ユーザ、グループ、およびデータフィルタの検索を実行し、その後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

Marketing Platform のインストール

Marketing Platform をインストールします。インストール・ガイドに記述されている必須手順をすべて実行してください。

データフィルタ基準の計画 (手動生成)

データフィルタ基準は、ご使用の顧客データに基づくものです。データフィルタを定義する前に、保護する顧客データを決定する必要があります。

例えば、IBM Unica Marketing ユーザが割り当てられている地理的な販売テリトリに基づいて、顧客データへのアクセスを制限したい場合があります。顧客データベースの「地域」フィールドが販売テリトリに関連付けられている場合、このフィールドをベースにしてデータフィルタのグループを設定するという選択ができます。

フィールド制約という概念に注意する必要があります。手動指定を使用してデータフィルタを作成する方法を計画する際は、この概念を理解しておく必要があります。フィールド制約は、データフィルタを指定するために使用されるフィールド/値のペアです。顧客レコードのクエリを実行する際に、この値が WHERE 節で使用さ

れます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対してフィールド制約を定義する必要があります。

この例では、「地域」フィールドに入る可能性があるのは以下の値です。アジア、ヨーロッパ、中東、北アメリカ、および南アメリカ。データフィルタのフィールド制約を使用するときに、これらの値を使用します。顧客テーブルの「地域」フィールドの値をフィールド制約として使用して、販売テリトリのそれぞれについて異なるデータフィルタをセットアップできます。

1 つ以上のデータフィルタに割り当てられた IBM Unica Marketing ユーザは、割り当てられたデータフィルタによって表示される販売テリトリー内に入る顧客に属しているデータのみを表示して処理することができます。

必要な情報の入手 (手動指定)

製品の Campaign ファミリのメンバーであるアプリケーションで使用するデータフィルタを定義している場合は、データフィルタを定義する XML に指定するフィールドの論理名が、Campaign の対応フィールドに指定されている名前と一致する必要があります。

以下の情報を入手してください。

- 使用するフィールドが含まれているテーブルの物理名。
- フィールド制約に使用するフィールド内の有限のデータセット。
- Campaign ファミリのメンバーであるアプリケーションでデータフィルタを使用する予定の場合は、Campaign で以下のフィールドに割り当てられている名前を入手してください。
 - オーディエンスフィールド
 - フィールド制約に使用する予定のフィールド。

データフィルタを指定する XML の作成 (手動指定)

各データフィルタで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。次のステップで、システムテーブルにこれらの指定を取り込むユーティリティを実行します。

データフィルタシステムテーブルへのデータの追加

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML を使用してデータフィルタシステムテーブルにデータを追加します。

このユーティリティの使用について詳しくは、207 ページの『datafilteringScriptTool ユーティリティ』を参照してください。

注: データフィルタを削除する必要がある場合は、216 ページの『データフィルタのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)』で説明されている方法で、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトを実行します。

データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て

IBM Unica Marketing データフィルタユーザインターフェースを使用して、ユーザ、グループ、およびデータフィルタの検索を実行し、検索結果から項目を選択してそれらを割り当てます。検索を実行して、ユーザおよびグループにすでに割り当てられているデータフィルタを表示することもできます。

データフィルタ XML のリファレンス (手動指定)

このセクションでは、`datafilteringScriptTool` を使用してデータフィルタを手動で指定して生成する場合に、値を提供することが必要になる XML 要素について説明します。

XML の ID について

オブジェクトの中には、ID を必要とするものがあります。例えば、データ構成、論理フィールド、データテーブルなどはすべて、管理者が ID を指定する必要があります。指定する ID は、オブジェクトのカテゴリ内で固有のものでなければなりません。

一部のオブジェクトは、ID を使用して他のオブジェクトを参照します。例えば、テーブルは論理フィールドを参照します。別のオブジェクトを参照する必要がある場合は、そのオブジェクトに対して指定した ID を使用してください。

XML では、ID 要素名に以下の規則を使用します。この規則は、固有の ID を作成する必要がある場合、および XML 内の別の ID を参照する必要がある場合を理解する上で役立ちます。

- 固有の ID を作成する必要がある場合、要素の名前は `id` です。
- 別のオブジェクト ID を参照する必要がある場合、要素の名前はそのオブジェクトから取られます。例えば、論理フィールドを参照する ID 要素の名前は `logicalFieldId` です。

管理者がオブジェクトに割り当てる ID は、Marketing Platform がそのオブジェクトに割り当てる ID とは異なることに注意してください。管理者が割り当てる ID は、XML 内部でそのオブジェクトを参照するためにのみ使用されます。

AddDataConfiguration | dataConfiguration

この要素グループを使用して、関連するデータフィルタをグループ化するために使用するデータ構成を定義します。関連データフィルタのセットごとに、データ構成を作成する必要があります。

要素	説明	システムテーブル
<code>id</code>	このデータ構成に割り当てる固有 ID。	該当なし
<code>name</code>	このデータフィルタグループに割り当てる名前。	テーブル: <code>df_config</code> フィールド: <code>config_name</code>

AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField

この要素グループを使用して、データフィルタを定義するために使用する顧客テーブルのフィールドに対応する論理フィールドを定義します。フィールド制約を作成するフィールドごとに 1 つの論理フィールドを作成し、オーディエンスごとに 1 つの論理フィールドを作成してください。

要素	説明	システムテーブル
id	この論理フィールドに割り当てる固有 ID。	該当なし
name	このフィールドまたはオーディエンスの論理名。Campaign ファミリのアプリケーションで使用する場合は、Campaign で使用されているフィールド名またはオーディエンス名と同じでなければなりません。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
type	顧客テーブル内のこのフィールドのデータタイプ。指定可能な値は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">• java.lang.String• java.lang.Long• java.lang.Double• java.lang.Boolean• java.lang.Date (日付形式は「月/日/年」で、月、日、年はすべて数字で表記します。)	テーブル: df_logical_field フィールド: type

AddDataTable | dataTable

この要素グループを使用して、顧客テーブルに ID を割り当てます。

要素	説明	システムテーブル
id	このテーブルに割り当てる固有 ID。	該当なし
name	保護する顧客テーブルの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name

AddDataTable | dataTable | fields | TableField

この要素グループを使用して、顧客テーブルの物理フィールドを定義した論理フィールドにマップします。

要素	説明	システムテーブル
name	顧客テーブルのフィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table_field フィールド: physical_name
logicalFieldId	AddLogicalFields logicalFields LogicalField カテゴリ内の論理フィールドの ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter

この要素グループを使用して、データフィルタを作成します。

要素	説明	システムテーブル
configId	このフィルタを関連付ける AddDataConfiguration dataConfiguration カテゴリ内のデータ構成の ID。	該当なし
id	割り当てる固有 ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter | fieldConstraints | FieldConstraint

この要素グループを使用して、データフィルタを定義するために使用するフィールドのデータを指定します。

要素	説明	システムテーブル
logicalFieldId	AddLogicalFields logicalFields LogicalField カテゴリ内の論理フィールドの ID。	該当なし
expression	このフィルタに割り当てられるユーザのデータを取り出すときに WHERE 節で使用されるフィールド内のデータの 1 項目。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_field_constraint フィールド: expression

AddAudience | audience

この要素グループを使用して、Campaign ファミリの製品で使用されるオーディエンスレベルに Campaign で割り当てる名前を指定します。

要素	説明	システムテーブル
id	このオーディエンスに割り当てる固有 ID。	該当なし

要素	説明	システムテーブル
name	Campaign で指定されているオーディエンスの名前。	テーブル: df_audience フィールド: audience_name

AddAudience | audience | fields | AudienceField

この要素グループを使用して、オーディエンスフィールドとして使用される顧客テーブルのフィールド (1 つ以上) を指定します。

要素	説明	システムテーブル
logicalFieldId	AddLogicalFields logicalFields LogicalField カテゴリ内の論理フィールドの ID。Campaign ファミリのアプリケーションを使用している場合は、Campaign で使用されているものと同じ論理名でなければなりません。	該当なし
fieldOrder	将来使用される予定です。値を 0 に設定してください。	該当なし

addAudienceTableAssociations | addAudienceTableAssociation | audienceTableAssociation

この要素グループを使用して、オーディエンスフィールドとテーブルのペアをデータ構成と関連付けます。オーディエンスフィールドごとに関連付けを作成します。

要素	説明	システムテーブル
audienceId	この関連付けで使用されるオーディエンスの ID。AddAudience audience カテゴリ内の ID 値でなければなりません。	該当なし
tableId	この関連付けで使用されるテーブルの ID。AddDataTable dataTable カテゴリ内の ID 値でなければなりません。テーブルは、audienceID 要素に指定されたオーディエンスに含まれているものでなければなりません。オーディエンスが複数のテーブルに含まれている場合は、複数の関連付けを作成してください。	該当なし
configId	この関連付けで使用されるデータ構成の ID。AddDataConfiguration dataConfiguration カテゴリ内の ID 値でなければなりません。	該当なし

例: データフィルタの手動指定

Jim は、販売区域に基づくデータフィルタのセットを作成する必要があります。

Campaign では、すでに顧客テーブルがマップされ、オーディエンスレベルが定義されています。

情報の入手

そこで、データフィルタ用のフィールド制限を指定するために必要なフィールドをテリトリテーブルに入れることにしました。

以下の表は、顧客のフィールドについて Jim が入手する情報と、その Campaign マッピングを示します。

表 3. テリトリテーブルのフィールド

フィールド (物理名)	フィールド (Campaign での名前)	データ	データタイプ
cust_region	CustomerRegion	<ul style="list-style-type: none">• アフリカ• アフリカ• アジア• ヨーロッパ• 中東• 北米	java.lang.String
hh_id	HouseholdID	該当なし	java.lang.Long
indiv_id	IndividualID	該当なし	java.lang.Long

Jim は、Campaign で使用されているオーディエンス名が、世帯 (household) と個人 (individual) であることを知ります。彼は、テリトリテーブルに 2 つのオーディエンスフィールドが含まれることをメモに記録します。hh_id フィールドは世帯オーディエンスに対応します。テリトリテーブルの indiv_id フィールドは、個人オーディエンスに対応します。

各オーディエンスに 1 つずつ、およびフィールド制限フィールドに 1 つの論理フィールドを作成する筆があるので、Jim には合計 3 つの論理フィールドが必要であることがわかります。

また、データフィルタをデータ構成にグループ化しなければならないことも知っています。彼は、データ構成に Territory という名前を付けることにしました。

これで Jim が XML を作成する準備ができました。

XML の作成

Jim が作成する XML は以下のとおりです。彼が入手した情報に基づく値は、太字で示されています。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<ExecuteBatch>
<name>SeedData</name>
<operations>
```

```

<!-- 関連データフィルタをグループ化するデータ構成を作成する -->
<ExecuteBatch>
<name>DataFilters</name>
<operations>
<AddDataConfiguration>
<dataConfiguration>
<id>1</id>
<name>Territory</name>
</dataConfiguration>
</AddDataConfiguration>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- データフィルタを定義するために使用する論理フィールドを追加する>
<AddLogicalFields>
<logicalFields>
<LogicalField>
<id>1</id>
<name>CustomerRegion</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>2</id>
<name>HouseholdID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>3</id>
<name>IndividualID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
</logicalFields>
</AddLogicalFields>

<!-- テリトリフィールドの制限を追加する -->
<AddDataFilters>
<dataFilters>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>1</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Africa</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>2</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Asia</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>3</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Europe</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
</DataFilter>

```

```

<configId>1</configId>
<id>4</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Middle East</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>5</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>North America</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
</dataFilters>
</AddDataFilters>

<!-- 物理フィールドを論理フィールドにマップする -->
<ExecuteBatch>
<name>addTables</name>
<operations>
<AddDataTable>
<dataTable>
<id>1</id>
<name>Territory</name>
<fields>
<TableField>
<name>cust_region</name>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>hh_id</name>
<logicalFieldId>2</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>indiv_id</name>
<logicalFieldId>3</logicalFieldId>
</TableField>
</fields>
</dataTable>
</AddDataTable>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- オーディエンスを追加する -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudiences</name>
<operations>
<AddAudience>
<audience>
<id>1</id>
<name>household</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>2</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
<AddAudience>
<audience>
<id>2</id>

```

```

<name>individual</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>3</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- テーブルとオーディエンスのペアをデータ構成に関連付ける -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudienceTableAssociations</name>
<operations>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>1</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>2</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
</operations>
</ExecuteBatch>
</operations>
</ExecuteBatch>

```

システムテーブルへのデータの追加

Jim は、データフィルタ XML ファイルに `regionDataFilters.xml` という名前を付け、自分の Marketing Platform インストール環境の `tools/bin` ディレクトリに保存します。そして、コマンド・プロンプトを開き、`datafilteringScriptTool` ユーティリティを使用してデータフィルタシステムテーブルにデータを追加します。

データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て

最後に、Jim は Marketing Platform.での管理者権限を持つアカウントを使用して IBM Unica Marketing にログインします。

グループがすでに IBM Unica Marketing にセットアップされ、地域別にユーザが割り当てられていることはわかっています。

そこで、「データフィルタ」セクションに進み、自分のデータフィルタからのフィールド制限がデータフィルタの拡張データで使用可能であることを確認します。そして、Africa を検索基準として使用して、データフィルタの検索を実行します。彼が Africa 地域にセットアップしたデータフィルタが検索結果に表示されます。

次に、Jim は Africa ユーザグループの検索を実行します。このグループは、Africa の顧客のマーケティングを担当するすべての現場マーケティング担当者を入れるために、IBM Unica Marketing にセットアップ済みです。Africa グループが検索結果に表示されます。

次に、検索結果のグループとデータフィルタを選択し、「割り当て」ボタンをクリックして、グループをデータフィルタに割り当てます。

こうして、すべての割り当てが完了するまで、データフィルタとグループの検索を続行します。

自動生成によるデータフィルタのセットアップ方法

プロセスチェックリストの構成

自動生成メソッドを使用したデータフィルタの構成は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 176 ページの『データフィルタ基準の計画 (自動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 176 ページの『ご使用のデータベース用の JDBC ドライバの取得』

タイプ 4 の JDBC ドライバを入手します。このドライバを使用して、データフィルタのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を提供します。

3. 177 ページの『必要な情報の入手 (自動生成)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリのアプリケーションでデータフィルタを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集してください。

4. 177 ページの『データフィルタを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データフィルタで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。

5. 166 ページの『データフィルタシステムテーブルへのデータの追加』

`datafilteringScriptTool` ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML ファイルを使用して、データフィルタに使用される Marketing Platform システムテーブルにデータを設定します。

6. 167 ページの『データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て』

IBM Unica Marketing データフィルタユーザインターフェースを使用して、ユーザ、グループ、およびデータフィルタの検索を実行し、その後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

Marketing Platform のインストール

Marketing Platform をインストールします。インストール・ガイドに記述されている必須手順をすべて実行してください。

データフィルタ基準の計画 (自動生成)

データフィルタ基準は、ご使用の顧客データに基づくものです。データフィルタを定義する前に、保護する顧客データを決定する必要があります。

例えば、顧客が住んでいる国、都市、および州に基づいて、顧客データへのアクセスを制限したい場合があります。顧客データベースに国、都市、および州の各フィールドがある場合、これらのフィールドをベースにしてデータフィルタのグループを設定するという選択ができます。そして、データフィルタを指定するときこれらの値を使用します。

自動生成を使用してデータフィルタを作成する場合は、以下の概念に注意する必要があります。

- **プロファイルフィールド** – データフィルタ生成ユーティリティが値の固有の組み合わせを探すときに考慮に入れる値を持つフィールド。ユーティリティは、値の固有の組み合わせごとにデータフィルタを作成します。データフィルタが IBM Unica アプリケーションで有効になっている場合は、顧客レコードのクエリを実行する際に、この値が WHERE 節で使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対してプロファイルフィールドを定義する必要があります。
- **固定フィールド** – データフィルタ生成ユーティリティがプロファイルフィールド値の固有の組み合わせのクエリを実行する際に、検索対象になるレコードを制限するオプションフィールド。指定する値は、生成された各データフィルタにも組み込まれます。データフィルタが IBM Unica アプリケーションで有効になっている場合、顧客レコードのクエリの実行時には WHERE 節でこの値が使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対して固定フィールドを定義する必要があります。

この例では、国について固定フィールドを作成し、都市と州についてプロファイルフィールドを作成することになるでしょう。データフィルタ生成ユーティリティは、これらのフィールドで検出した値の固有の組み合わせごとに、データフィルタを作成します。

1 つ以上のデータフィルタに割り当てられた IBM Unica ユーザは、割り当てられたデータフィルタによって表示される国、都市、および州に住む顧客に属しているデータのみを表示して処理することができます。

お使いの顧客テーブルに、データフィルタを作成したいと思う値がすべては含まれていないこともあります。例えば、すべての国と州に顧客がいるとは限らないが、将来に備えてすべての国と州に対してデータフィルタを作成しておきたいという場合があります。その場合、すべての国と州を組み込むテーブルを参照し、XML 仕様の `GenerateDataFilters` セクションでそのテーブルを使用します。ユーティリティを使用してデータフィルタを作成し終わったら、この「ダミー」テーブルを破棄することができます。

ご使用のデータベース用の JDBC ドライバの取得

データフィルタ生成ユーティリティ (`datafilteringScriptTool`) を使用してデータフィルタを自動的に生成する場合は、JDBC ドライバが必要です。

1. タイプ 4 の JDBC ドライバを入手します。このドライバを使用して、データフィルタのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を提供します。
2. Marketing Platform がインストールされているマシンにドライバを配置します。
3. クラス名とパスをメモしておいてください。

必要な情報の入手 (自動生成)

注: 製品の Campaign ファミリのメンバーであるアプリケーションで使用するデータフィルタを定義している場合は、データフィルタを定義する XML に指定するフィールドの論理名が、Campaign の対応フィールドに指定されている名前と一致する必要があります。

以下の情報を入手してください。

- データフィルタを定義する際に使用するテーブルが含まれているデータベースについて、データベースのタイプ、名前または IP アドレス、およびポート。
- データベースへの接続に使用できるデータベース資格情報 (ユーザ名およびパスワード)。
- 使用するフィールドが含まれているテーブルの物理名。
- プロファイルフィールドおよび固定フィールドに使用するフィールドの物理名 (固定フィールドはオプションです)。
- Campaign ファミリのメンバーであるアプリケーションでデータフィルタを使用する予定の場合は、Campaign で以下のフィールドに割り当てられている名前を入力してください。
 - オーディエンスフィールド。
 - 固定フィールドおよびプロファイルフィールドに使用する予定のフィールド。

データフィルタを指定する XML の作成 (自動生成)

各データフィルタで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。次のステップで、システムテーブルにこれらの指定を取り込むユーティリティを実行します。

データフィルタシステムテーブルへのデータの追加

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML を使用してデータフィルタシステムテーブルにデータを追加します。

このユーティリティの使用について詳しくは、207 ページの『datafilteringScriptTool ユーティリティ』を参照してください。

注: データフィルタを削除する必要がある場合は、216 ページの『データフィルタのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)』で説明されている方法で、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトを実行します。

データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て

IBM Unica Marketing データフィルタユーザインターフェースを使用して、ユーザ、グループ、およびデータフィルタの検索を実行し、検索結果から項目を選択してそれらを割り当てます。検索を実行して、ユーザおよびグループにすでに割り当てられているデータフィルタを表示することもできます。

データフィルタ XML のリファレンス (自動生成)

このセクションでは、`datafilteringScriptTool` を使用してデータフィルタを自動的に生成する場合に、値を提供することが必要になる XML 要素について説明します。

XML の ID について

オブジェクトの中には、ID を必要とするものがあります。例えば、データ構成、論理フィールド、データテーブルなどはすべて、管理者が ID を指定する必要があります。指定する ID は、オブジェクトのカテゴリ内で固有のものでなければなりません。

一部のオブジェクトは、ID を使用して他のオブジェクトを参照します。例えば、テーブルは論理フィールドを参照します。別のオブジェクトを参照する必要がある場合は、そのオブジェクトに対して指定した ID を使用してください。

XML では、ID 要素名に以下の規則を使用します。この規則は、固有の ID を作成する必要がある場合、および XML 内の別の ID を参照する必要がある場合を理解する上で役立ちます。

- 固有の ID を作成する必要がある場合、要素の名前は `id` です。
- 別のオブジェクト ID を参照する必要がある場合、要素の名前はそのオブジェクトから取られます。例えば、論理フィールドを参照する ID 要素の名前は `logicalFieldId` です。

管理者がオブジェクトに割り当てる ID は、Marketing Platform がそのオブジェクトに割り当てる ID とは異なることに注意してください。管理者が割り当てる ID は、XML 内部でそのオブジェクトを参照するためにのみ使用されます。

AddDataConfiguration | dataConfiguration

この要素グループを使用して、関連するデータフィルタをグループ化するために使用するデータ構成を定義します。関連データフィルタのセットごとに、データ構成を作成する必要があります。

要素	説明	システムテーブル
<code>id</code>	このデータ構成に割り当てる固有 ID。	該当なし
<code>name</code>	このデータフィルタグループに割り当てる名前。	テーブル: <code>df_config</code> フィールド: <code>config_name</code>

AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField

この要素グループを使用して、データフィルタを定義するために使用する顧客テーブルのフィールドに対応する論理フィールドを定義します。フィールド制約を作成するフィールドごとに 1 つの論理フィールドを作成し、オーディエンスごとに 1 つの論理フィールドを作成してください。

要素	説明	システムテーブル
id	この論理フィールドに割り当てる固有 ID。	該当なし
name	このフィールドまたはオーディエンスの論理名。Campaign ファミリのアプリケーションで使用する場合は、Campaign で使用されているフィールド名またはオーディエンス名と同じでなければなりません。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
type	顧客テーブル内のこのフィールドのデータタイプ。指定可能な値は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">• java.lang.String• java.lang.Long• java.lang.Double• java.lang.Boolean• java.lang.Date (日付形式は「月/日/年」で、月、日、年はすべて数字で表記します。)	テーブル: df_logical_field フィールド: type

GenerateDataFilters

この要素グループを使用して、データフィルタを生成します。

要素	説明	システムテーブル
tableName	データフィルタを生成する元となるテーブルの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name
configurationName	このデータフィルタのセットを関連付ける AddDataConfiguration dataConfiguration カテゴリ内のデータ構成の名前。	該当なし
jdbcUrl	データフィルタのベースとなるテーブルが含まれている顧客データベースに対する URL 参照。	該当なし

要素	説明	システムテーブル
jdbcUser	顧客データベースへのアクセス権限を持つアカウントのユーザ名。	該当なし
jdbcPassword	顧客データベースへのアクセス権限を持つアカウントのパスワード。	該当なし
jdbcDriverClass	顧客データベースへの接続を提供する JDBC ドライバの名前。	該当なし
jdbcDriverClassPath string	JDBC ドライバのパス。	該当なし

GenerateDataFilters | fixedFields | FixedField

この要素グループを使用して、データフィルタ生成ユーティリティでデータフィルタのセットを定義する値の固有の組み合わせを探す際に対象レコードを制限する、オプションのフィールドおよび値を指定します。

要素	説明	システムテーブル
expression	データフィルタを作成してこのフィルタに割り当てられたデータを取り出すときに WHERE 節で使用されるフィールド内のデータの 1 項目。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_field_constraint フィールド: expression
logicalFieldName	AddLogicalFields logicalFields LogicalField カテゴリの中の論理フィールドの名前。この名前は、Marketing Platform のデータフィルタユーザインターフェースの拡張検索フィールドにラベルとして表示されます。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
physicalFieldName	フィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	該当なし

GenerateDataFilters | profileField | ProfileField

この要素グループを使用して、データフィルタのセットを定義するために使用する値の固有の組み合わせが入っているフィールドを指定します。

要素	説明	システムテーブル
logicalFieldName	AddLogicalFields logicalFields LogicalField カテゴリ内の論理フィールドの名前。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
physicalFieldName	フィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	該当なし

AddDataTable | dataTable

この要素グループを使用して、顧客テーブルに ID を割り当てます。

要素	説明	システムテーブル
id	このテーブルに割り当てる固有 ID。	該当なし
name	保護する顧客テーブルの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name

AddDataTable | dataTable | fields | TableField

この要素グループを使用して、顧客テーブルの物理フィールドを定義した論理フィールドにマップします。

要素	説明	システムテーブル
name	顧客テーブルのフィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table_field フィールド: physical_name
logicalFieldId	AddLogicalFields logicalFields LogicalField カテゴリ内の論理フィールドの ID。	該当なし

AddAudience | audience

この要素グループを使用して、Campaign ファミリの製品で使用されるオーディエンスレベルに Campaign で割り当てる名前を指定します。

要素	説明	システムテーブル
id	このオーディエンスに割り当てる固有 ID。	該当なし

要素	説明	システムテーブル
name	Campaign で指定されているオーディエンスの名前。	テーブル: df_audience フィールド: audience_name

AddAudience | audience | fields | AudienceField

この要素グループを使用して、オーディエンスフィールドとして使用される顧客テーブルのフィールド (1 つ以上) を指定します。

要素	説明	システムテーブル
logicalFieldId	AddLogicalFields logicalFields LogicalField カテゴリ内の論理フィールドの ID。Campaign ファミリのアプリケーションを使用している場合は、Campaign で使用されているものと同じ論理名でなければなりません。	該当なし
fieldOrder	将来使用される予定です。値を 0 に設定してください。	該当なし

addAudienceTableAssociations | addAudienceTableAssociation | audienceTableAssociation

この要素グループを使用して、オーディエンスフィールドとテーブルのペアをデータ構成と関連付けます。オーディエンスフィールドごとに関連付けを作成します。

要素	説明	システムテーブル
audienceId	この関連付けで使用されるオーディエンスの ID。AddAudience audience カテゴリ内の ID 値でなければなりません。	該当なし
tableId	この関連付けで使用されるテーブルの ID。AddDataTable dataTable カテゴリ内の ID 値でなければなりません。テーブルは、audienceID 要素に指定されたオーディエンスに含まれているものでなければなりません。オーディエンスが複数のテーブルに含まれている場合は、複数の関連付けを作成してください。	該当なし
configId	この関連付けで使用されるデータ構成の ID。AddDataConfiguration dataConfiguration カテゴリ内の ID 値でなければなりません。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter

この要素グループを使用して、データフィルタを作成します。

要素	説明	システムテーブル
configId	このフィルタを関連付ける AddDataConfiguration dataConfiguration カテゴリ内のデータ構成の ID。	該当なし
id	割り当てる固有 ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter | fieldConstraints | FieldConstraint

この要素グループを使用して、データフィルタを定義するために使用するフィールドのデータを指定します。

要素	説明	システムテーブル
logicalFieldId	AddLogicalFields logicalFields LogicalField カテゴリ内の論理フィールドの ID。	該当なし
expression	このフィルタに割り当てられるユーザのデータを取り出すときに WHERE 節で使用されるフィールド内のデータの 1 項目。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_field_constraint フィールド: expression

例: データフィルタのセットの自動生成

Jim は、国、都市、および州に基づくデータフィルタのセットを作成する必要があります。

Campaign では、すでに顧客テーブルがマップされ、オーディエンスレベルが定義されています。

JDBC ドライバの入手

Jim は、会社の顧客データベースが Microsoft SQL サーバであることを知っています。彼は、適切なタイプ 4 のドライバをダウンロードして、サーバがインストールされているマシンに配置し、ドライバの名前とパスをメモに記録します。

- JDBC ドライバのクラス名 - com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver
- JDBC ドライバのパス - C:%tools%Java%MsJdbc%sqljdbc.jar

情報の入手

Jim は、顧客データベースの名前、ホスト、およびポートの情報と、そのデータベースに接続するために必要な資格情報を入手します。

- データベース名 - Customers
- データベースホスト名 - companyHost
- データベースポート - 1433
- ユーザ名 - sa
- パスワード - myPassword

Jim が会社の顧客データベースのデータを調べたところ、データフィルタを作成したいすべての国、都市、および州に顧客が存在していることがわかりました。そこで、データフィルタ用の固定フィールドおよびプロファイルフィールドを指定するために必要なフィールドを地理テーブルに入れることにしました。

以下の表は、顧客のフィールドについて Jim が入手する情報と、その Campaign マッピングを示します。

表 4. 地理テーブルのフィールド

フィールド (物理名)	フィールド (Campaign での名前)	データ	データタイプ
country	Country	<ul style="list-style-type: none"> • USA • France • Britain 	java.lang.String
city	City	個別の都市の有限セット	java.lang.String
state	State	個別の州 (または国に応じて他の方法で名前が付けられた地域) の有限セット	java.lang.String
hh_id	HouseholdID	該当なし	java.lang.Long
indiv_id	IndividualID	該当なし	java.lang.Long

Jim は、Campaign で使用されているオーディエンス名が、世帯 (household) と個人 (individual) であることを知ります。彼は、地理テーブルに 2 つのオーディエンスフィールドが含まれることをメモに記録します。

- hh_id フィールド は、世帯オーディエンスに対応します。
- 地理テーブルの indiv_id フィールドは、個人オーディエンスに対応します。

各オーディエンスに 1 つずつ、およびそれぞれの固定フィールドとプロファイルフィールドに 1 つずつの論理フィールドを作成する必要があるため、Jim には合計 5 つの論理フィールドが必要なことがわかります。

また、データフィルタをデータ構成にグループ化しなければならないことも知っています。彼は、データ構成に Geographic という名前を付けることにしました。

これで Jim が XML を作成する準備ができました。

XML の作成

Jim が作成する XML は以下のとおりです。彼が入手した情報または使用を決定した情報に基づく値は、**太字**で示されています。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<ExecuteBatch>
<name>SeedData</name>
<operations>

<!-- 関連データフィルタをグループ化するデータ構成を作成する -->
<ExecuteBatch>
<name>DataFilters</name>
<operations>
<AddDataConfiguration>
<dataConfiguration>
<id>1</id>
<name>Geographic</name>
</dataConfiguration>
</AddDataConfiguration>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- データフィルタを定義するために使用する論理フィールドを追加する>
<AddLogicalFields>
<logicalFields>
<LogicalField>
<id>1</id>
<name>Country</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>2</id>
<name>City</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>3</id>
<name>State</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>4</id>
<name>HouseholdID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>5</id>
<name>IndividualID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
</logicalFields>
</AddLogicalFields>

<!-- データフィルタの生成に必要な情報を提供する -->
<GenerateDataFilters>
<!-- データフィルタの定義の元となる値の組み合わせが固有かどうか調べるために
テーブルのスキャンを指定する-->
<tableName>Geographic</tableName>
<!-- 生成されたデータフィルタを関連付けるデータ構成を識別する -->
<configurationName>Geographic</configurationName>
<!-- データソース接続情報を指定する-->
<jdbcUrl>jdbc:sqlserver://localhost:1433;databaseName=Customers</jdbcUrl>
<jdbcUser>sa</jdbcUser>
<jdbcPassword>myPassword</jdbcPassword>
<jdbcDriverClass>
```

```

com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver</jdbcDriverClass>
<jdbcDriverClassPath>
<string>C:%tools%Java%MsJdbc%sqljdbc.jar</string>
</jdbcDriverClassPath>

<!-- 固定フィールドを指定する -->
<fixedFields>
<FixedField>
<expression>USA</expression>
<logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
<physicalFieldName>country</physicalFieldName>
</FixedField>
</fixedFields>
<fixedFields>
<FixedField>
<expression>France</expression>
<logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
<physicalFieldName>country</physicalFieldName>
</FixedField>
</fixedFields>
<fixedFields>
<FixedField>
<expression>Britain</expression>
<logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
<physicalFieldName>country</physicalFieldName>
</FixedField>
</fixedFields>

<!-- プロファイルフィールドを指定する -->
<profileFields>
<ProfileField>
<logicalFieldName>State</logicalFieldName>
<physicalFieldName>state</physicalFieldName>
</ProfileField>
<ProfileField>
<logicalFieldName>City</logicalFieldName>
<physicalFieldName>city</physicalFieldName>
</ProfileField>
</profileFields>
</GenerateDataFilters>

<!-- 物理フィールドを論理フィールドにマップする -->
<ExecuteBatch>
<name>addTables</name>
<operations>
<AddDataTable>
<dataTable>
<id>1</id>
<name>Geographic</name>
<fields>
<TableField>
<name>country</name>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>city</name>
<logicalFieldId>2</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>state</name>
<logicalFieldId>3</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>hh_id</name>
<logicalFieldId>4</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>indiv_id</name>

```

```

</logicalFieldId>5</logicalFieldId>
</TableField>
</fields>
</dataTable>
</AddDataTable>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- オーディエンスを追加する -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudiences</name>
<operations>
<AddAudience>
<audience>
<id>1</id>
<name>household</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>4</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
<AddAudience>
<audience>
<id>2</id>
<name>individual</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>5</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- テーブルとオーディエンスのペアをデータ構成に関連付ける -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudienceTableAssociations</name>
<operations>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>1</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>2</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
</operations>
</ExecuteBatch>
</operations>
</ExecuteBatch>

```

システムテーブルへのデータの追加

Jim は、データフィルタ XML ファイルに `geographicDataFilters.xml` という名前を付け、自分の Marketing Platform インストール環境の `tools/bin` ディレクトリに

保存します。そして、コマンドプロンプトを開き、`datafilteringScriptTool` ユーティリティを使用してデータフィルタシステムテーブルにデータを追加します。

このユーティリティは、大量のデータフィルタを作成します。各データフィルタで基準となるのは、ユーティリティが固定フィールド地を含むレコードをデータベースにクエリして取得する国 (固定フィールド)、および都市と州の固有の組み合わせです。固定フィールドとして指定された国ごとに、都市と州の固有の組み合わせがすべて使用されます。

データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て

最後に、Jim は Marketing Platform での管理者権限を持つアカウントを使用して Marketing Platform にログインします。

グループがすでに Marketing Platform に設定され、都市別にユーザが割り当てられていることはわかっています。

そこで、「データフィルタ」セクションに進み、自分のデータフィルタの国、都市、州の値がデータフィルタの拡張検索で使用可能であることを確認します。そして、合衆国の都市の 1 つ Boston を検索基準として使用して、データフィルタの検索を実行します。Boston のデータフィルタが検索結果に表示されます。

次に、Jim は Boston ユーザグループの検索を実行します。このグループは、Boston の顧客のマーケティングを担当するすべての現場マーケティング担当者を入れるために、Marketing Platform にセットアップ済みです。Boston グループが検索結果に表示されます。

次に、検索結果のグループとデータフィルタを選択し、「割り当て」ボタンをクリックして、グループをデータフィルタに割り当てます。

こうして、すべての割り当てが完了するまで、データフィルタとグループの検索を続行します。

初期セット作成後のデータフィルタの追加方法

初期セットを作成した後で、データフィルタの追加を続けることができます。例えば、国とその都市/州の組み合わせに基づくデータフィルタのセットを作成し、後になって郵便番号に基づく別のセットを作成する場合があります。

追加のデータフィルタの XML は、以下のいずれかの方法で取得できます。

- 元の XML ファイルを変更して新規フィルタを追加する。
`dataFilteringScriptTool` ユーティリティを使用してデータベースにデータを入れた場合、Marketing Platform では新規データフィルタのみが作成されます。
- 新規 XML ファイルを作成して新規データフィルタを指定する。
`dataFilteringScriptTool` ユーティリティを使用してデータベースにデータを入れた場合、既存のデータフィルタは削除されません。

XML を作成したら、データフィルタテーブルにデータを追加して、本書の説明に従ってユーザおよびグループを割り当ててください。

第 15 章 データフィルタの管理

IBM Unica Marketing 管理者は、構成可能なデータフィルタに基づいて IBM Unica 製品のデータアクセス制限を指定することができます。データフィルタを使用すると、IBM Unica ユーザが IBM Unica アプリケーションで表示して操作できる顧客データを制限することができます。

「設定」>「データフィルタ」 ページでフィルタを処理するには、以下に該当していなければなりません。

- データフィルタは、163 ページの『第 14 章 データフィルタのセットアップ』で説明されている方法で、Marketing Platform システムテーブルにセットアップする必要があります。
- 「データフィルタの管理 (Administer Data Filters)」ページの権限を持つユーザとしてログインする必要があります。デフォルトでは、「AdminRole」役割がこの権限を持っています。

ユーザおよびグループ割り当てによってデータアクセスを制限する

個別ユーザまたはユーザグループのデータアクセスを制限するには、それらのユーザまたはユーザグループをデータフィルタに割り当てます。IBM Unica Marketing に存在しているすべてのユーザおよびグループは、データフィルタへの割り当てに使用できます。複数のユーザおよびグループを単一のデータフィルタに割り当てることも、1 つのユーザまたはグループを複数のデータフィルタに割り当てることもできます。

注: グループが、その親グループのデータフィルタ割り当てを獲得することはありません。

拡張検索について

IBM Unica Marketing には、ユーザおよびグループをデータフィルタに割り当てるためのユーザインターフェースがあります。このユーザインターフェースは、拡張検索機能を使用してユーザ、グループ、およびデータフィルタのリストを取得します。これらのリストからユーザおよびグループを選択し、選択したデータフィルタをそれらのユーザやグループに割り当てることができます。

データフィルタ検索

データフィルタの検索機能は、データフィルタがセットアップされたときに指定された基準と同じ検索基準を提供します。例えば、販売区域に関する以下のデータが含まれているフィールドに基づく一連のデータフィルタがあるとします。

- アフリカ
- アジア
- ヨーロッパ
- 中東

- 北米

データフィルタ拡張検索では、このデータがドロップダウンリストに表示されるので、ユーザはデータフィルタの検索時にそのリンクから選択することができます。

ユーザおよびグループ検索

ユーザおよびグループの拡張検索機能にはテキストフィールドがあり、そこにテキストを入力して一致するものを検索することができます。

ユーザおよびグループ拡張検索を含むタブが初めてロードされたときは、「ユーザ」と「グループ」の両方のテキストフィールドにワイルドカード (*) が表示されています。このワイルドカードを使用して検索を実行すると、すべてのレコードが返されます。

ワイルドカードを削除し、他のテキストを入力せずにフィールドを空白のままにすると、レコードは何も返されません。例えば、「ユーザ」テキストフィールドを空白にし、「グループ」テキストフィールドにアスタリスクを入れて検索を実行すると、その結果としてグループのみがリストされます。

「ビューの割り当て (View Assignments)」タブで、「ユーザ」と「グループ」の両テキストフィールドを空白のままにすると、選択されているデータフィルタ基準に関係なく、レコードは何も返されません。

フィールドにテキストを入力すると、テキストフィールドに入力した文字に入力した順序で一致する検索が実行されます。例えば、「North America」という名前のグループを検索するには、この名前に出てくる文字または文字グループを (出てくる順序で) 入力します。「north」または「h」を入力した場合は「North America」を取得できる可能性がありますが、「htron」と入力した場合は取得できません。

この検索では大/小文字を区別しません。つまり、「North」は「north」と同じです。

データフィルタ割り当ての管理

このセクションでは、データフィルタを構成する方法、およびデータフィルタ割り当てを管理する方法について説明します。

割り当て済みデータフィルタを表示するには

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザとして Marketing Platform にログインし、「データのフィルタリング (Data Filtering)」をクリックします。

「データフィルタ」ページが表示されます。

2. 「割り当て済みデータフィルタの表示 (View Assigned Data Filters)」をクリックします。
3. 割り当て済みデータフィルタの拡張検索を実行して、検索結果を取得します。

基準を満たすデータフィルタのリストが表示されます。

データフィルタにユーザおよびグループを割り当てるには

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザとして Marketing Platform にログインし、「設定」>「データフィルタ」をクリックします。

「データフィルタ」ページが表示されます。

2. 「ユーザまたはグループの割り当て」をクリックします。
3. データフィルタの拡張検索を実行して、データフィルタのリストを取得します。
4. ユーザまたはグループ (またはその両方) の拡張検索を実行して、ユーザまたはグループ (またはその両方) のリストを取得します。
5. 検索結果のリストからデータフィルタと、それに割り当てるユーザおよびグループを選択します。
6. 「割り当て」をクリックします。

選択したユーザまたはグループ (またはその両方) が、選択したデータフィルタに割り当てられます。

データフィルタ割り当てを削除するには

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザとして Marketing Platform にログインし、「設定」>「データフィルタ」をクリックします。

「データフィルタ」ページが表示されます。

2. 「割り当て済みデータフィルタの表示 (View Assigned Data Filters)」をクリックします。
3. 割り当て済みデータフィルタの拡張検索を実行して、選択に使用できる検索結果を取得します。
4. 検索結果のリストから、割り当てを削除するデータフィルタを選択します。
5. 「割り当て解除」をクリックします。

選択した割り当てが削除されます。データフィルタ自体は削除されないことに注意してください。

第 16 章 IBM Unica Marketing Platform のログ

システムログを使用して、使用状況を追跡し、発生する可能性のあるセキュリティ上の問題を検出することができます。システムログは、エラー動作や悪意のある振る舞いが発生したときに検出するのに役立ちます。

システムログについて

Marketing Platform アプリケーションが誤動作をした場合、または進入が発生したかまたはその試みがあったと考えられる場合は、まずシステムログを確認する必要があります。

システムログには、以下の情報が入っています。

- Marketing Platform の構成情報およびすべてのエラー情報とデバッグ情報
- Marketing Platform サーバで発生した重要イベント (要求、権限認可、取り消し、および失敗) の記録

システムログに表示される構成設定について

システムログの最初の部分には、起動時に `uasm.conf` からシステムに読み込まれた構成設定が表示されます。ログファイル内の構成設定を表示するのは、IBM Unica Marketing のパスワード、Marketing Platform の認証データストア、Marketing Platform の Web サーバルート、システムログ、およびシステムの監査証跡のプロパティをセグメントする設定を確認する簡単な方法です。

注: システムは、システムログファイルに書き込もうとした際に問題が発生すると、ファイルの代わりに標準出力 (コマンド行) に書き込みます。

システムログ項目の形式

システムログ項目の形式は以下のとおりです。

タイムスタンプ | イベント重大度レベル | メッセージ

- **タイムスタンプ** – イベントが発生した時刻。
- **イベント重大度レベル**– イベントのロギングレベル。
- **メッセージ** – イベントの説明。項目がサーバに対する要求の場合、メッセージには一般に、その要求によって呼び出される機能が含まれています。レスポンスエントリには要求の結果が記録されます。

システムログの構成

システムログを構成するには `log4j.properties` ファイルを使用します。デフォルトでは、このファイルは、Marketing Platform のインストール先の下位の `conf` ディレクトリに入っています。このファイルに対する変更は、ファイルの格納後 30 秒以内に有効になります。

デフォルトのシステムログ設定

デフォルトでは、システムログは以下のように構成されます。

- ログファイル名: platform.log
- ログディレクトリ: Unica/Platform/logs
- ログレベル: WARN
- バックアップの数: 1
- ログファイルの最大サイズ: 10MB

次のことに注意してください。

- バックアップの数またはログファイルのサイズを大きくする場合は、ログの格納先のマシンに十分なメモリがあることを確認してください。
- ロギングレベルをデフォルト値より高くすると、パフォーマンスに影響が出る可能性があります。

システムログのロギングレベルについて

システムログで使用可能なロギングレベルは、以下のとおりです (昇順に示してあります)。

- ERROR
- WARN
- INFO
- DEBUG
- TRACE

高位のレベルには、低位のレベルの情報がすべて含まれています。例えば、レベルを DEBUG に設定すると、DEBUG、INFO、WARN、および ERROR トレースが含まれます。

ロギングレベルを DEBUG に設定した場合、応答メッセージには、Marketing Platform データストアに対して実行されたすべての SQL クエリが含まれます。

Marketing Platform システム全体のロギングレベルの設定

ファイルの「Examples」セクションの目的の行をアンコメントすることによって、Marketing Platform のすべてのコンポーネントのロギングレベルを変更することができます。行をアンコメントするには、その行の先頭にある # 文字を削除します。この変更を行う場合は、以前のロギングレベルを指定した行の先頭に、必ず # 記号を追加してください。

Marketing Platform コンポーネントのロギングレベルの設定

Marketing Platform の特定のコンポーネントのシステムログで、ロギングレベルを設定することができます。これらのコンポーネントには以下のものがあります。

- ローカライズ
- ユーザおよびグループ処理
- データマイグレーション

- LDAP 統合
- 認証 (サーバサイド処理)
- 「構成」 ページ
- データベースアクセス
- 各種のサードパーティライブラリ (例: ibatis)

デフォルトでは、コンポーネントレベルのロギングはオフになっています。特定のモジュールをデバッグするには、`log4j.properties` ファイルで、そのモジュールの各行の先頭にある `#` 文字を削除します。

log4j に関する詳細の参照先

log4j に関する追加情報は以下の方法で見つけることができます。

- `log4j.properties` ファイルの中のコメントを参照する。
- <http://logging.apache.org/log4j/docs/documentation.html> を参照する。

第 17 章 プロセスチェックリストの構成

自動生成メソッドを使用したデータフィルタの構成は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 176 ページの『データフィルタ基準の計画 (自動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 176 ページの『ご使用のデータベース用の JDBC ドライバの取得』

タイプ 4 の JDBC ドライバを入手します。このドライバを使用して、データフィルタのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を提供します。

3. 177 ページの『必要な情報の入手 (自動生成)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリのアプリケーションでデータフィルタを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集してください。

4. 177 ページの『データフィルタを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データフィルタで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。

5. 166 ページの『データフィルタシステムテーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML ファイルを使用して、データフィルタに使用される Marketing Platform システムテーブルにデータを設定します。

6. 167 ページの『データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て』

IBM Unica Marketing データフィルタユーザインターフェースを使用して、ユーザ、グループ、およびデータフィルタの検索を実行し、その後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

構成プロセスのチェックリスト (データフィルタの手動指定)

手動指定メソッドを使用したデータフィルタの構成は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 165 ページの『データフィルタ基準の計画 (手動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 166 ページの『必要な情報の入手 (手動指定)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリのアプリケーションでデータフィルタを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集してください。

3. 177 ページの『データフィルタを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データフィルタで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。

4. 166 ページの『データフィルタシステムテーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML ファイルを使用して、データフィルタに使用される Marketing Platform システムテーブルにデータを設定します。

5. 167 ページの『データフィルタへのユーザおよびグループの割り当て』

IBM Unica Marketing データフィルタユーザインターフェースを使用して、ユーザ、グループ、およびデータフィルタの検索を実行し、その後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の統合)

Windows Active Directory との IBM Unica Marketing の統合は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 122 ページの『必要な情報の入手』

ご使用の Windows Active Directory サーバについて、IBM Unica Marketing との統合に必要な情報を入手します。

2. 123 ページの『グループメンバーシップおよびマッピングの計画』

Active Directory グループのマッピング先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 123 ページの『Marketing Platform へのディレクトリサーバ資格情報の格納』

ご使用のディレクトリサーバが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリサーバ管理者のユーザ名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザアカウントを構成してください。

4. 124 ページの『IBM Unica Marketing での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 126 ページの『同期化のテスト』

ユーザとグループが正しく同期化されていることを確認します。

6. 127 ページの『PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザのセットアップ』

Marketing Platform への管理者アクションをセットアップします。これは Windows 統合ログインを有効にする場合に必要です。

7. 127 ページの『Windows 統合ログインへのセキュリティモードの設定』

「構成」ページでセキュリティモード値を設定します。

8. 128 ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

計画したグループアプリケーションアクセスを実装します。

9. 128 ページの『Web アプリケーションサーバの再起動』

このステップは、変更をすべて確実に適用するために必要です。

10. 128 ページの『Active Directory ユーザとしてのログインのテスト』

Active Directory ユーザとして IBM Unica Marketing にログインできることを確認してください。

構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)

LDAP との IBM Unica Marketing 統合は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 122 ページの『必要な情報の入手』

ご使用の LDAP サーバについて、IBM Unica Marketing との統合に必要な情報を入手します。

2. 123 ページの『グループメンバーシップおよびマッピングの計画』

LDAP グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 123 ページの『Marketing Platform へのディレクトリサーバ資格情報の格納』

ご使用のディレクトリサーバが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリサーバ管理者のユーザ名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザアカウントを構成してください。

4. 124 ページの『IBM Unica Marketing での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 126 ページの『同期化のテスト』

ユーザとグループが正しく同期化されていることを確認します。

6. 137 ページの『LDAP へのセキュリティモードの設定』

「構成」ページでセキュリティモード値を設定します。

7. 137 ページの『LDAP へのセキュリティモードの設定』

計画したグループアプリケーションアクセスを実装します。

8. 128 ページの『Web アプリケーションサーバの再起動』

このステップは、変更をすべて確実に適用するために必要です。

9. 137 ページの『LDAP ユーザとしてのログインのテスト』

LDAP ユーザとして IBM Unica Marketing にログインできることを確認してください。

構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御統合)

IBM Unica Marketing と Web アクセス制御システムとの統合は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 143 ページの『LDAP 統合の実行』

「同期のテスト」のステップで中断して、LDAP 統合の指示に従ってください。

2. 143 ページの『IBM Unica Marketing での Web アクセス制御統合の構成』

「構成」ページで、Web アクセス制御統合のプロパティを設定します。

3. 128 ページの『Web アプリケーションサーバの再起動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

4. 144 ページの『Web アクセス制御の同期化と IBM Unica Marketing ログインのテスト』

ユーザとグループが Web アクセス制御システムで正しく同期していること、および IBM Unica Marketing にログインできることを確認してください。

構成プロセスのチェックリスト (SSL)

IBM Unica Marketing での SSL の構成は、マルチステッププロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本章の別の個所に記載されています。

1. 151 ページの『証明書の取得または作成』

IBM Unica およびご使用のアプリケーションサーバで提供されるデフォルトの証明書を使用したくない場合は、証明書を取得または作成します。

2. 154 ページの『SSL 用の Web アプリケーションサーバの構成』

IBM Unica アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーションサーバで SSL ポートを有効にします。アプリケーションサーバのデフォルトの証明書を使用しない場合は、独自の証明書を使用するように構成します。

3. 154 ページの『SSL 用の IBM Unica Marketing の構成』

IBM Unica Marketing で構成プロパティを設定します。

4. 161 ページの『SSL 構成の検証』

ご使用のそれぞれの IBM Unica Marketing アプリケーションにログインします。

第 18 章 IBM Unica Marketing Platform のユーティリティおよび SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティの概要を説明します。ここでは、すべてのユーティリティに適用され、個別のユーティリティの説明には含まれていない詳細事項もいくつか含まれています。

ユーティリティがある場所

Marketing Platform ユーティリティは、Marketing Platform のインストール先の `tools/bin` ディレクトリにあります。

ユーティリティのリストと説明

Marketing Platform は、以下のユーティリティを備えています。

- 204 ページの『`configTool` ユーティリティ』 - 製品登録を含む構成設定のインポート、エクスポート、および削除を行います。
- 207 ページの『`datafilteringScriptTool` ユーティリティ』 - データフィルタを作成します。
- 209 ページの『`encryptPasswords` ユーティリティ』 - パスワードの暗号化と格納を行います。
- 210 ページの『`partitionTool` ユーティリティ』 - パーティションのデータベース項目を作成します。
- 213 ページの『`populateDb` ユーティリティ』 - Marketing Platform データベースにデータを設定します。
- 213 ページの『`restoreAccess` ユーティリティ』 - `platformAdminRole` の役割を持つユーザを復元します。

Marketing Platform ユーティリティの実行の前提条件

以下は、すべての Marketing Platform ユーティリティを実行する際の前提条件です。

- すべてのユーティリティは、ユーティリティがあるディレクトリ (デフォルトでは、Marketing Platform のインストール先の `tools/bin` ディレクトリ) から実行してください。
- UNIX では、Marketing Platform が配置されているアプリケーションサーバを実行するユーザアカウントと同じアカウントで、ユーティリティを実行することをお勧めします。別のユーザアカウントを使用してユーティリティを実行する場合は、そのユーザアカウントで `platform.log` ファイルに書き込めるように、このファイルのファイルのアクセス許可を調整してください。そうしないと、ユーティリティはログファイルに書き込むことができず、ツールが正常に機能していても、何らかのエラーメッセージが表示される場合があります。

ユーティリティがデータベース接続情報を取得する場所

encryptPasswords 以外のすべての Marketing Platform ユーティリティは、Marketing Platform システムテーブルと対話します。これらのユーティリティは、システムテーブルのデータベースに接続するために、Marketing Platform のインストール時に提供された情報を使用してインストーラが設定する、以下の接続情報を使用します。この情報は、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリにある jdbc.properties ファイルに格納されています。

- JDBC ドライバ名
- JDBC の接続 URL (ホスト、ポート、およびデータベース名を含む)
- データソースログイン
- データソースパスワード (暗号化済み)

さらに、これらのユーティリティは、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリにある setenv スクリプトまたはコマンド行で設定された、JAVA_HOME 環境変数に依存しています。Marketing Platform インストーラは、setenv スクリプトに自動的にこの環境変数を設定しているはずですが、ユーティリティの実行に問題がある場合は、この環境変数を確認することをお勧めします。JDK は、Sun バージョンでなければなりません (WebLogic で利用可能な JRockit JDK などは使用できません)。

特殊文字

オペレーティングシステムで予約文字として指定されている文字はエスケープする必要があります。ご使用のオペレーティングシステムの予約文字のリストと、それらをエスケープする方法に関する資料を参照してください。

Marketing Platform ユーティリティの標準オプション

以下のオプションは、すべての Marketing Platform ユーティリティで使用可能です。

-l logLevel

コンソールで表示するログ情報のレベルを設定します。オプションは、high、medium、および low です。デフォルトは low です。

-L

コンソールメッセージのロケールを設定します。デフォルトのロケールは en_US です。使用可能なオプション値は、Marketing Platform が翻訳されている言語によって決まります。ISO 639-1 および ISO 3166 に従って、ICU ロケール ID を使用してロケールを指定してください。

-h

簡潔な使用状況メッセージをコンソールに表示します。

-m

このユーティリティのマニュアルページをコンソールに表示します。

より詳細な実行情報をコンソールに表示します。

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティの実行

Marketing Platform がインストールされているマシンでは、追加構成をせずに Marketing Platform ユーティリティを実行することができます。しかし、ネットワーク上の別のマシンからユーティリティを実行したい場合があります。この手順では、これを行う場合に必要なステップを説明します。

追加マシンに Marketing Platform ユーティリティをセットアップするには

1. この手順を実行するマシンが、次の前提条件を満たしていることを確認してください。
 - 正しい JDBC ドライバがマシン上に存在しているか、またはマシンからアクセス可能でなければなりません。
 - マシンは、Marketing Platform システムテーブルへのネットワークアクセス権限を持っている必要があります。
 - Java ランタイム環境がマシンにインストールされているか、またはマシンからアクセス可能でなければなりません。
2. Marketing Platform システムテーブルに関する以下の情報を収集します。
 - システム上の 1 つ以上の JDBC ドライバファイルの完全修飾パス。
 - Java ランタイム環境のインストール先への完全修飾パス。

インストーラでのデフォルト値は、インストーラが IBM Unica インストールディレクトリ下に置いたバージョン 1.5 の JRE へのパスです。このデフォルトを受け入れることも、別のパスを指定することもできます。

- データベースタイプ
 - データベースホスト
 - データベースポート
 - データベース名/システム ID
 - データベースユーザ名
 - データベースパスワード
3. IBM インストーラを実行して、Marketing Platform をインストールします。

Marketing Platform システムテーブルに関して収集したデータベース接続情報を入力します。IBM インストーラの使用経験があまりない場合は、Campaign または Marketing Operations のインストール・ガイドを参照してください。

Marketing Platform Web アプリケーションを配置する必要はありません。

リファレンス: Marketing Platform ユーティリティ

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティについて、機能の詳細、構文、および例とともに説明します。

configTool ユーティリティ

「構成」ページのプロパティと値は、Marketing Platform システムテーブルに格納されます。configTool ユーティリティは、IBM Unica Marketing Platform システムテーブルとの間で構成設定をインポートおよびエクスポートします。

configTool を使用する状況

以下の理由がある場合に、configTool を使用すると便利です。

- Campaign で提供されるパーティションおよびデータソーステンプレートをインポートする場合。これは、その後「構成」ページを使用して変更または複製（またはその両方を）することができます。
- 製品インストーラで自動的にデータベースにプロパティを追加できないときに、IBM Unica Marketing 製品を登録する（製品の構成プロパティをインポートする）場合。
- XML バージョンの構成設定をバックアップのためにエクスポートする場合、または IBM Unica Marketing の別のインストール先にインポートする場合。
- 「**カテゴリの削除**」リンクのないカテゴリを削除する場合。これを行うには、configTool を使用して構成をエクスポートし、そのカテゴリを作成する XML を手動で削除した後、configTool を使用して、編集済みの XML をインポートします。

重要: このユーティリティは、設定プロパティとその値が含まれている、Marketing Platform システムテーブルデータベースにある `usm_configuration` テーブルと `usm_configuration_values` テーブルを変更します。最良の結果を得るために、これらのテーブルのバックアップコピーを作成するか、または configTool を使用して既存の構成をエクスポートし、その結果ファイルをバックアップしてください。そうしておけば、configTool を使用してインポートする際にエラーが発生した場合でも、構成を復元する方法が得られます。

有効な製品名

このセクションで後述するように、configTool ユーティリティでは、製品を登録および登録抹消するコマンドのパラメータとして製品名を使用します。IBM Unica Marketing のリリース 8.0.0 では、多くの製品名が変更されています。ただし、configTool で認識される名前は変更されていません。configTool で使用する場合に有効な製品名を、製品の現在名と共に以下のリストに示します。

製品名	configTool で使用する名前
Marketing Platform	Manager
Campaign	Campaign
Distributed Marketing	Collaborate
eMessage	emessage
Interact	interact
Optimize	Optimize
Marketing Operations	Plan
CustomerInsight	Insight

製品名	configTool で使用する名前
NetInsight	NetInsight
PredictiveInsight	Model
Leads	Leads

構文

```
configTool -d -p "elementPath" [-o]
```

```
configTool -i -p "parent ElementPath" -f importFile [-o]
```

```
configTool -x -p "elementPath" -f exportFile
```

```
configTool -r productName -f registrationFile [-o]
```

```
configTool -u productName
```

コマンド

-d -p "elementPath"

構成プロパティ階層のパスを指定して、構成プロパティとその設定を削除します。

要素パスでは、カテゴリとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらの内部名を調べるには、「構成」ページに進み、目的のカテゴリまたはプロパティを選択して、右ペインで括弧に入れて表示されるパスを見てください。構成プロパティ階層内のパスは | 文字を使用して区切り、パス全体を二重引用符で囲みます。

次のことに注意してください。

- このコマンドを使用することで、アプリケーション全体ではなく、アプリケーション内のカテゴリおよびプロパティのみを削除することができます。アプリケーション全体を登録抹消するには、-u コマンドを使用します。
- 「構成」ページに「**カテゴリの削除**」リンクのないカテゴリを削除するには、-o オプションを使用します。

-i -p "parentElementPath" -f importFile

指定された XML ファイルから構成プロパティとその設定をインポートします。

インポートするには、カテゴリのインポート先の親要素へのパスを指定します。configTool ユーティリティは、パスで指定したカテゴリの下に、プロパティをインポートします。

カテゴリは、最上位より下の任意のレベルに追加できますが、トップカテゴリと同じレベルにカテゴリを追加することはできません。

親要素パスでは、カテゴリとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらの内部名を調べるには、「構成」ページに進み、目的のカテゴリまたはプロパティを選択して、右ペインで括弧に入れて表示されるパスを見てください。構成プロパティ階層内のパスは | 文字を使用して区切り、パス全体を二重引用符で囲みます。

tools/bin ディレクトリに対するインポートファイルの相対位置を指定するか、ディレクトリの絶対パスを指定することができます。相対パスを指定するか、または何もパスを指定しないと、configTool はまず tools/bin ディレクトリに対して相対的なファイルを探します。

デフォルトでは、このコマンドは既存のカテゴリを上書きしませんが、-o オプションを使用して、上書きを強制することができます。

-x -p "elementPath" -f exportFile

指定の名前の XML ファイルに構成プロパティとその設定をエクスポートします。

すべての構成プロパティをエクスポートするか、または構成プロパティ階層内のパスを指定して特定のカテゴリにエクスポートを限定することができます。

要素パスでは、カテゴリとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらの内部名を調べるには、「構成」ページに進み、目的のカテゴリまたはプロパティを選択して、右ペインで括弧に入れて表示されるパスを見てください。構成プロパティ階層内のパスは | 文字を使用して区切り、パス全体を二重引用符で囲みます。

現行ディレクトリに対するエクスポートファイルの相対位置を指定するか、ディレクトリの絶対パスを指定することができます。ファイル指定に区切り文字 (Unix では \, Windows では / または ¥) が含まれていない場合、configTool は、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリにファイルを書き込みます。xml 拡張子を指定していない場合、configTool によってその拡張子が追加されます。

-r productName -f registrationFile

アプリケーションを登録します。登録ファイルの位置は、tools/bin ディレクトリからの相対パス、または絶対パスで指定できます。デフォルトでは、このコマンドは既存の構成を上書きしませんが、-o オプションを使用して、上書きを強制することができます。productName パラメータは、上記にリストされているうちのいずれかでなければなりません。

-u productName

productName で指定されているアプリケーションを登録抹消します。製品カテゴリへのパスを含める必要はありません。製品名で十分です。productName パラメータは、上記にリストされているうちのいずれかでなければなりません。これは、製品のすべてのプロパティおよび構成設定を削除します。

オプション

-o

-i または -r と共に使用すると、既存のカテゴリまたは製品登録 (ノード) を上書きします。

-d と共に使用すると、「構成」ページに「**カテゴリの削除**」リンクのないカテゴリ (ノード) を削除することができます。

例

- Marketing Platform のインストール先の conf ディレクトリにある Product_config.xml という名前のファイルから構成設定をインポートします。

```
configTool -i -p "Affinium" -f Product_config.xml
```

- 提供されている Campaign データソーステンプレートのいずれかを、デフォルトの Campaign パーティション (partition1) にインポートします。この例では、Oracle データソーステンプレート (OracleTemplate.xml) が、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリにあることを前提にしています。

```
configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f OracleTemplate.xml
```

- すべての構成設定を、D:¥backups ディレクトリにある myConfig.xml という名前のファイルにエクスポートします。

```
configTool -x -f D:¥backups¥myConfig.xml
```

- Marketing Platform のインストール先の既存の Campaign パーティション (データソースエントリを含む全体) をエクスポートし、partitionTemplate.xml という名前のファイルに保存して、デフォルトの tools/bin ディレクトリに格納します。

```
configTool -x -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1" -f partitionTemplate.xml
```

- Marketing Platform のインストール先のデフォルトの tools/bin ディレクトリにある app_config.xml という名前のファイルを使用して、手動で productName というアプリケーションを登録し、このアプリケーションの既存の登録を上書きするように強制します。

```
configTool -r product Name -f app_config.xml -o
```

- productName という名前のアプリケーションを登録抹消します。

```
configTool -u productName
```

datafilteringScriptTool ユーティリティ

datafilteringScriptTool ユーティリティは、XML ファイルを読み取って、Marketing Platform システムテーブルのデータベースにあるデータフィルタテーブルにデータを設定します。

このユーティリティは、XML の作成方法に応じて、2 つの方法で使用することができます。

- 1 セットの XML 要素を使用して、フィールド値の固有の組み合わせに基づいてデータフィルタを自動生成することができます (固有の組み合わせごとに 1 つのデータフィルタ)。
- やや異なる XML 要素セットを使用して、ユーティリティで作成する各データフィルタを指定することができます。

XML の作成について詳しくは、175 ページの『プロセスチェックリストの構成』および 165 ページの『構成プロセスのチェックリスト (データフィルタの手動指定)』を参照してください。

datafilteringScriptTool を使用する状況

新規データフィルタを作成する場合は、datafilteringScriptTool を使用する必要があります。

前提条件

Marketing Platform が実装され、稼働している必要があります。

SSL での datafilteringScriptTool の使用

Marketing Platform が片方向 SSL を使用して実装されている場合は、datafilteringScriptTool スクリプトを変更して、ハンドシェークを実行する SSL オプションを追加しなければなりません。このためには、以下の情報が必要です。

- トラストストアのファイル名とパス
- トラストストアのパスワード

テキストエディタで、datafilteringScriptTool スクリプト (.bat または .sh) を開き、次のような行を見つけます (例は Windows 版)。

```
:callexec
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

これらの行を、次のように編集します (新しいテキストは太字です)。

myTrustStore.jks および myPassword の代わりに、トラストストアのパスおよびファイル名と、トラストストアのパスワードを使用します。

```
:callexec
```

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStore="C:\security\myTrustStore.jks"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=myPassword
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"  
%SSL_OPTIONS%
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

構文

```
datafilteringScriptTool -r pathfile
```

コマンド

```
-r path_file
```


データフィルタ仕様を指定の XML ファイルからインポートします。ファイルがインストール先の `tools/bin` ディレクトリにない場合は、パスを指定し、`path_file` パラメータを二重引用符で囲みます。

例

- `C:\unica\xml` ディレクトリにある `collaborateDataFilters.xml` という名前のファイルを使用して、データフィルタのシステムテーブルにデータを設定します。

```
datafilteringScriptTool -r "C:\unica\xml\collaborateDataFilters.xml"
```

encryptPasswords ユーティリティ

`encryptPasswords` ユーティリティは、以下のように、Marketing Platform が使用する 2 つのパスワードのいずれかを暗号化して格納するために使用されます。

- Marketing Platform がそのシステムテーブルにアクセスするために使用するパスワード。ユーティリティは、既存の暗号化パスワード (Marketing Platform のインストール先の `tools\bin` ディレクトリにある `jdbc.properties` ファイルに格納されている) を、新規パスワードと差し替えます。
- Marketing Platform または Web アプリケーションサーバが提供するデフォルトの証明書以外の証明書で SSL を使用するよう構成されている場合に、Marketing Platform が使用する鍵ストアのパスワード。これは、自己署名証明書か認証局からの証明書のいずれかです。

encryptPasswords を使用する状況

以下の理由がある場合に、`encryptPasswords` を使用します。

- Marketing Platform システムテーブルのデータベースにアクセスするために使用するアカウントのパスワードを変更する場合。
- 自己署名証明書を作成してあるか、または認証局から証明書を取得済みの場合。

前提条件

- `encryptPasswords` を実行して新規データベースパスワードの暗号化と格納をする前に、Marketing Platform のインストール先の `tools/bin` ディレクトリにある `jdbc.properties` ファイルのバックアップコピーを作成します。
- `encryptPasswords` を実行して鍵ストアパスワードの暗号化と格納をする前に、デジタル証明書を作成または取得して、鍵ストアパスワードを確認しておく必要があります。

追加の前提条件については、201 ページの『第 18 章 IBM Unica Marketing Platform のユーティリティおよび SQL スクリプト』を参照してください。

構文

```
encryptPasswords -d databasePassword
```

```
encryptPasswords -k keystorePassword
```

コマンド

-d databasePassword

データベースパスワードを暗号化します。

-k keystorePassword

鍵ストアパスワードを暗号化して、pfile という名前のファイルに格納します。

例

- Marketing Platform のインストール時に、システムテーブルのデータベースアカウントのログインを myLogin に設定しました。現在、インストールからしばらく経ったので、このアカウントのパスワードを newPassword に変更しました。次のようにして、encryptPasswords を実行し、データベースパスワードを暗号化して格納します。

```
encryptPasswords -d newPassword
```

- SSL を使用するように IBM Unica Marketing アプリケーションを構成している最中で、デジタル証明書を作成済みまたは取得済みです。次のようにして、encryptPasswords を実行し、鍵ストアパスワードを暗号化して格納します。

```
encryptPasswords -k myPassword
```

partitionTool ユーティリティ

パーティションは、Campaign ポリシーおよび役割に関連付けられます。これらのポリシーと役割、またそのパーティションとの関連付けは、Marketing Platform システムテーブルに格納されます。partitionTool ユーティリティは、パーティションの基本ポリシー情報と役割情報を使用して、Marketing Platform システムテーブルにシードを設定します。

partitionTool を使用する状況

作成するパーティションごとに、partitionTool を使用して、基本ポリシー情報と役割情報を用いて Marketing Platform システムテーブルにシードを設定します。

Campaign での複数のパーティションのセットアップに関する説明について詳しくは、ご使用のバージョンの Campaign に対応するインストールガイドを参照してください。

特殊文字とスペース

スペースを含むパーティション記述、ユーザ名、グループ名、またはパーティション名は、すべて二重引用符で囲む必要があります。

追加の制約事項については、201 ページの『第 18 章 IBM Unica Marketing Platform のユーティリティおよび SQL スクリプト』を参照してください。

構文

```
partitionTool -c -s sourcePartition -n newPartitionName [-u  
admin_user_name] [-d partitionDescription] [-g groupName]
```

コマンド

partitionTool ユーティリティでは、以下のコマンドを使用することができます。

-c

-s オプションを使用して指定された既存のパーティションのポリシーと役割の複製 (クローン) を作成し、-n オプションを使用して指定された名前を使用します。これらのオプションは両方とも、c で必須です。このコマンドは以下を実行します。

- Campaign の管理役割ポリシーとグローバルポリシーの両方に、管理者役割を持つ新規 IBM Unica Marketing ユーザを作成する。指定したパーティション名は、自動的にこのユーザのパスワードとして設定されます。
- 新規 Marketing Platform グループを作成し、新規管理ユーザをそのグループのメンバーにする。
- 新規パーティションオブジェクトを作成する。
- ソースパーティションに関連付けられているすべてのポリシーを複製して、新規パーティションに関連付ける。
- 複製するポリシーごとに、そのポリシーに関連付けられているすべての役割を複製する。
- 複製する役割ごとに、すべての機能を、ソースの役割にマップされていたのと同じ方法でマップする。
- 役割の複製時に作成された最新のシステム定義の管理者役割に、新規Marketing Platform グループを割り当てる。デフォルトパーティション (partition1) のクローン作成を行う場合、これはデフォルトの管理役割 (管理者) になります。

オプション

-d *partitionDescription*

オプション。-c のみと一緒に使用されます。-list コマンドからの出力に表示する説明を指定します。256 文字以内でなければなりません。説明にスペースが含まれる場合は、全体を二重引用符で囲みます。

-g *groupName*

オプション。-c と共にのみ使用します。ユーティリティで作成する Marketing Platform 管理グループの名前を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンス内で固有の名前でなければなりません。

名前が定義されていない場合、デフォルトで `partition_nameAdminGroup` が使用されます。

-n *partitionName*

-list ではオプション、-c では必須。32 文字以内でなければなりません。

-list と共に使用する場合は、情報をリストする元のパーティションを指定します。

-c と共に使用する場合は、新規パーティションの名前を指定します。指定したパーティション名は、管理ユーザのパスワードとして使用されます。パーティション名は、「構成」ページでパーティションのテンプレートを使用して) そのパーティションを構成したときにパーティションに指定した名前と一致する必要があります。

-s sourcePartition

必須。-c と共にのみ使用します。複製するソースパーティションの名前です。

-u adminUserName

オプション。-c と共にのみ使用します。複製元のパーティションの管理ユーザのユーザ名を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンスの中で固有の名前でなければなりません。

名前が定義されていない場合、デフォルトで *partitionNameAdminUser* が使用されます。

パーティション名は、自動的にこのユーザのパスワードとして設定されます。

例

- 以下の特性を持つ新規パーティションを作成します。

- partition1 からの複製
- パーティション名は myPartition
- デフォルトのユーザ名 (myPartitionAdminUser) およびパスワード (myPartition) を使用
- デフォルトのグループ名 (myPartitionAdminGroup) を使用
- 説明は「ClonedFromPartition1」

```
partitionTool -c -s partition1 -n myPartition -d "ClonedFromPartition1"
```

•

- 以下の特性を持つ新規パーティションを作成します。

- partition1 からの複製
- パーティション名は partition2
- customerA のユーザ名を指定し、自動的に割り当てられるパスワード partition2 を使用
- customerAGroup のグループ名を指定
- 説明は「PartitionForCustomerAGroup」

```
partitionTool -c -s partition1 -n partition2 -u customerA -g customerAGroup -d "PartitionForCustomerAGroup"
```

populateDb ユーティリティ

populateDb ユーティリティは、Marketing Platform システムテーブルにデフォルト (シード) データを挿入します。現在、このユーティリティは、Marketing Platform および Campaign に対してこのタスクを実行します。

IBM インストーラは、Marketing Platform および Campaign のデフォルトデータを使用して、Marketing Platform システムテーブルにデータを設定することができます。ただし、会社の方針によってこれが許可されていない場合、またはインストーラが Marketing Platform システムテーブルに接続できない場合は、このユーティリティを使用して Marketing Platform システムテーブルにデフォルトのデータを挿入する必要があります。

Campaign の場合、このデータに、デフォルトのパーティション用のセキュリティの役割と権限が含まれています。Marketing Platform の場合、このデータに、構成プロパティ、デフォルトのユーザとグループ、およびデフォルトのパーティション用のセキュリティの役割と権限が含まれています。

構文

```
populateDb -n productName
```

コマンド

```
-n productName
```

デフォルトデータを Marketing Platform システムテーブルに挿入します。有効な製品名は、Manager (Marketing Platform の場合) と Campaign (Campaign の場合) です。

例

- Marketing Platform のデフォルトデータを手動で挿入します。

```
populateDb -n Manager
```

- Campaign のデフォルトデータを手動で挿入します。

```
populateDb -n Campaign
```

restoreAccess ユーティリティ

PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザが手違いでロックアウトされた場合、または Marketing Platform にログインするためのすべての機能が失われた場合は、restoreAccess ユーティリティを使用して Marketing Platform へのアクセスを復元することができます。

restoreAccess を使用する状況

このセクションで説明する 2 つの状況下では、restoreAccess を使用することができます。

PlatformAdminRole ユーザが無効になっている

Marketing Platform で PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザが、システムで無効になってしまう場合があります。以下の例に、platform_admin ユーザアカウントが無効になる仕組みを示します。PlatformAdminRole 権限を持つユーザ (platform_admin ユーザ) が 1 人しかいないとします。「構成」ページの「全般」パスワード設定」カテゴリにある「許容されるログインの試行の最大失敗回数」プロパティが 3 に設定されているものとします。そして、誰かが platform_admin としてログインしようとし、間違ったパスワードを続けて 3 回入力したとします。この結果、システムで platform_admin アカウントが無効になります。

この場合、restoreAccess を使用することで、Web インタフェースにアクセスせずに、PlatformAdminRole 権限を持つユーザを Marketing Platform システムテーブルに追加することができます。

この方法で restoreAccess を実行すると、ユーティリティは、ユーザ指定のログイン名とパスワードで PlatformAdminRole 権限を持つ新規ユーザを作成します。

指定のユーザログイン名が内部ユーザとしてすでに Marketing Platform に存在している場合は、そのユーザのパスワードが変更されます。

PlatformAdmin のログイン名と PlatformAdminRole 権限を持つユーザのみが、すべてのダッシュボードを一元管理できることに注意してください。そのため、platform_admin ユーザが無効な状態で、restoreAccess を使用して新規ユーザを作成した場合、platform_admin のログインを持つ新規ユーザを作成する必要があります。

Active Directory 統合の構成が不適切

Windows Active Directory 統合を不適切な構成で実装し、すでにログインできない状態の場合は、restoreAccess を使用してログインする機能を復元してください。

この方法で restoreAccess を実行すると、ユーティリティによって「プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法」プロパティの値が「Windows 統合ログイン」から Marketing Platform に変更されます。これで、ロックアウトされる前に存在していた任意のユーザアカウントでログインできるようになります。必要に応じて、新しいログイン名とパスワードも指定できます。この方法で restoreAccess ユーティリティを使用する場合、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーションサーバを再起動する必要があることに注意してください。

パスワードに関する考慮事項

restoreAccess を使用する場合は、パスワードに関して以下の点に注意してください。

- restoreAccess ユーティリティでは空白のパスワードをサポートしていません。またパスワード規則を適用しません。
- 使用中のユーザ名を指定した場合、そのユーザのパスワードはユーティリティでリセットされます。

構文

```
restoreAccess -u loginName -p password
```

```
restoreAccess -r
```

コマンド

-r

-u *loginName* オプションを指定せずに使用した場合は、「Unica | セキュリティ | ログイン方法」プロパティの値を Marketing Platform にリセットします。有効にするには、Web アプリケーションサーバを再起動する必要があります。

-u *loginName* オプションを指定して使用した場合は、新規 PlatformAdminRole ユーザを作成します。

オプション

-u *loginName*

指定したログイン名で PlatformAdminRole 権限を持つユーザを作成します。-p オプションと共に使用する必要があります。

-p *password*

作成するユーザのパスワードを指定します。-u を指定する場合は必須です。

例

- PlatformAdminRole 権限を持つユーザを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

```
restoreAccess -u tempUser -p tempPassword
```

- ログイン方法の値を Unica Marketing Platform に変更し、PlatformAdminRole 権限を持つユーザを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

```
restoreAccess -r -u tempUser -p tempPassword
```

Marketing Platform SQL スクリプトについて

このセクションでは、Marketing Platform で提供されている、Marketing Platform システムテーブルに関連するさまざまなタスクを実行するための SQL スクリプトについて説明します。これらは、Marketing Platform システムテーブルに対して実行するように設計されています。

Marketing Platform SQL スクリプトは、Marketing Platform のインストール先の db ディレクトリにあります。

Marketing Platform システムテーブルに対して SQL を実行するには、データベースクライアントを使用する必要があります。

リファレンス: Marketing Platform SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform SQL スクリプトについて説明します。

全データの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql)

Manager_Schema_DeleteAll.sql スクリプトは、テーブル自体を削除せずに、すべてのデータを Marketing Platform システムテーブルから削除します。このスクリプトは、すべてのユーザ、グループ、セキュリティ資格情報、データフィルタ、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用する状況

破損したデータがあるために Marketing Platform のインスタンスが使用できなくなった場合、ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用することができます。

追加要件

ManagerSchema_DeleteAll.sql を実行した後で Marketing Platform を作動可能にするためには、以下のステップを実行する必要があります。

- 213 ページの『populateDb ユーティリティ』で説明されている方法で、populateDB ユーティリティを実行します。これによって、デフォルトの構成プロパティ、ユーザ、役割、およびグループは復元されますが、初期インストール後にユーザが作成またはインポートしたユーザ、役割、およびグループは復元されません。
- 204 ページの『configTool ユーティリティ』で説明されている方法で、config_navigation.xml ファイルを指定して configTool ユーティリティを実行し、メニュー項目をインポートしてください。
- データのフィルタの作成または LDAP サーバや Web アクセス制御プラットフォームとの統合などの、インストール後の構成を実行していた場合、再度これらの構成を実行する必要があります。
- 以前に存在していたデータフィルタを復元したい場合は、それらのデータフィルタを指定するために作成された元の XML を使用して、datafilteringScriptTool ユーティリティを実行してください。

データフィルタのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトは、データフィルタテーブル自体を削除せずに、すべてのデータフィルタリングデータを Marketing Platform システムテーブルから削除します。このスクリプトは、Marketing Platform からすべてのデータフィルタ、データフィルタ構成、オーディエンス、およびデータフィルタ割り当てを除去します。

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用する状況

Marketing Platform システムテーブルのすべてのデータフィルタを削除する必要があるが、その他のデータは削除したくないという場合、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用することができます。

重要: ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトは、2 つのデータフィルタプロパティ (デフォルトのテーブル名とデフォルトのオーディエンス名) の値をリセットしません。これらの値が、使用するデータフィルタにとってもう無効になるという場合は、「構成」ページでこれらの値を手動で設定する必要があります。

システムテーブルの削除 (ManagerSchema_DropAll.sql)

ManagerSchema_DropAll.sql スクリプトは、すべての Marketing Platform システムテーブルをデータベースから削除します。このスクリプトは、すべてのテーブル、ユーザ、グループ、セキュリティ資格情報、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

注: このスクリプトを旧バージョンの Marketing Platform システムテーブルを含むデータベースに対して実行する場合、データベースクライアントで、制約が存在しないことを示すエラーメッセージが表示されることがあります。これらのメッセージは無視して構いません。

ManagerSchema_DropAll.sql を使用する状況

Marketing Platform のインスタンスをアンインストールしたが、そのプラットフォームのシステムテーブルが入っているデータベースにはまだ引き続き使用したい他のテーブルが含まれているという場合、ManagerSchema_DropAll.sql を使用することができます。

追加要件

このスクリプトを実行した後で Marketing Platform を作動可能にするためには、以下のステップを実行する必要があります。

- 『システムテーブルの作成』で説明されている方法で、適切な SQL スクリプトを実行してシステムテーブルを再作成します。
- 213 ページの『populateDb ユーティリティ』で説明されている方法で、populateDB ユーティリティを実行します。これによって、デフォルトの構成プロパティ、ユーザ、役割、およびグループは復元されますが、初期インストール後にユーザが作成またはインポートしたユーザ、役割、およびグループは復元されません。
- 204 ページの『configTool ユーティリティ』で説明されている方法で、config_navigation.xml ファイルを指定して configTool ユーティリティを実行し、メニュー項目をインポートしてください。
- データのフィルタの作成または LDAP サーバや Web アクセス制御プラットフォームとの統合などの、インストール後の構成を実行していた場合、再度これらの構成を実行する必要があります。

システムテーブルの作成

会社のポリシーによって、インストーラを使用して自動的に Marketing Platform システムテーブルを作成することが許されていない場合は、次の表で説明する方法でスクリプトを使用して手動で作成してください。スクリプトは、実行しなければならない順序で示されています。

データソースタイプ	スクリプト名
IBM DB2	<ul style="list-style-type: none"> • ManagerSchema_DB2.sql • ManagerSchema__DB2_CeateFKConstraints.sql <p>マルチバイト文字 (中国語、日本語、韓国語など) をサポートする予定の場合、ManagerSchema_DB2_unicode.sql スクリプトを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active_portlets.sql
Microsoft SQL Server	<ul style="list-style-type: none"> • ManagerSchema_SqlServer.sql • ManagerSchema__SqlServer_CeateFKConstraints.sql • active_portlets.sql
Oracle	<ul style="list-style-type: none"> • ManagerSchema_Oracle.sql • ManagerSchema__Oracle_CeateFKConstraints.sql • active_portlets.sql

スケジューラ機能を使用すると、事前定義された間隔でフローチャートを実行するように構成することができます。これを使用する場合、次の表の説明に従って適切なスクリプトを実行して、この機能をサポートするテーブルも作成する必要があります。

データソースタイプ	スクリプト名
IBM DB2	quartz_db2.sql
Microsoft SQL Server	quartz_sqlServer.sql
Oracle	quartz_oracle.sql

システムテーブル作成スクリプトを使用する状況

インストーラにシステムテーブルの自動作成を許可しなかった場合、または ManagerSchema_DropAll.sql を使用してデータベースからすべての Marketing Platform システムテーブルを削除した場合は、Marketing Platform のインストールまたはアップグレード時に、これらのスクリプトを使用する必要があります。

付録 A. 「構成」 ページでのプロパティの構成

このセクションでは、「構成」 ページにある構成プロパティについて説明します。

Marketing Platform 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」 ページの Marketing Platform 構成プロパティについて説明します。

全般 | ナビゲーション

セキュア接続の TCP ポート

説明

Marketing Platform が配置されている Web アプリケーションサーバ内の SSL ポートを指定します。このプロパティは、内部で IBM 製品間の通信に使用されます。

デフォルト値

7001

標準接続の TCP ポート

説明

Marketing Platform が配置されている Web アプリケーションサーバ内の HTTP ポートを指定します。このプロパティは、内部で IBM 製品間の通信に使用されます。

デフォルト値

7001

Unica URL

説明

IBM Unica Marketing に使用する URL を指定します。これはインストール時に設定されます。通常は、変更しないでください。URL には、次の例に示すように、ドメイン名が含まれることに注意してください。

```
protocol://machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/  
context-root
```

マシン名を localhost としないでください。

デフォルト値

未定義

例

SSL 用に構成された環境では、URL は以下のようになります。

```
https://machineName.companyDomain.com:8080/customer/unica
```

全般 | データフィルタリング

デフォルトテーブル名

説明

デフォルトオーディエンス名と一緒に、IBM Unica Marketing 内のデータフィルタユーザインタフェースがフィルタと割り当てを読み取るデータフィルタセット (つまり、データ構成) を決定します。

デフォルト値

未定義

有効な値

データフィルタ基準として使用されるフィールドを含んでいる顧客テーブルの物理名。最大 50 文字の varchar 型の文字。

デフォルトオーディエンス名

説明

デフォルトテーブル名と一緒に、IBM Unica Marketing 内のデータフィルタユーザインタフェースがフィルタと割り当てを読み取るデータフィルタセット (つまり、データ構成) を決定します。

デフォルト値

未定義

有効な値

Distributed Marketing 用にデータフィルタを構成する場合、この名前は Campaign でオーディエンスレベルに与えられた名前と同じものでなければなりません。最大 50 文字の varchar 型の文字。

全般 | パスワード設定

このカテゴリのプロパティは、IBM Unica Marketing パスワードに適用するポリシーを指定します。これらのパスワードオプションの大部分は、(Marketing Platform 内で作成された) 内部ユーザのパスワードにのみ適用され、(外部システムからインポートされた) 外部ユーザには適用されません。例外は、「ログインの失敗時に許可する最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed)」プロパティで、これは内部ユーザと外部ユーザの両方に適用されます。また、このプロパティは外部システム内で設定された類似の制約事項をオーバーライドしないことにも注意してください。

ログインの失敗時に許可する最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed)

説明

ユーザの 1 回のログインにつき、無効なパスワードの入力が許される最大回数を指定します。この最大値に到達した場合、そのユーザは IBM Unica Marketing システム内で無効となり、そのユーザとして誰もログインできなくなります。

ゼロ以下に設定した場合、システムは連続した失敗を何回でも許可します。

デフォルト値

3

有効な値

任意の整数

パスワード履歴数 (Password history count)

説明

あるユーザについて、システムが保存する古いパスワードの数を指定します。そのユーザは、この古いパスワードのリスト内にあるパスワードの再利用を許可されません。値をゼロ以下に設定した場合、履歴は保存されず、ユーザは同じパスワードを繰り返し再利用できます。このパスワード履歴数には、ユーザアカウントの作成時に初期値として割り当てられたパスワードは含まれません。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

有効期間 (日数) (Validity (in days))

説明

ユーザのパスワードが失効するまでの日数を指定します。

値がゼロ以下の場合、パスワードの有効期限はありません。

値がゼロより大きい場合、ユーザは最初にログインしたときにパスワードの変更を求められ、その最初のログインの日付から有効期限がカウントされます。

ユーザとパスワードが作成された後に、この値を変更すると、既存のユーザに対する新しい有効期限は、既存のユーザが次回にパスワードを変更したときに有効になります。

デフォルト値

30

有効な値

任意の整数

空白のパスワードを許可 (Blank passwords allowed)

説明

空白のパスワードを許可するかどうかを指定します。これを true に設定した場合は、最小文字長 (Minimum character length)=0 も設定してください。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

同一のユーザ名とパスワードを許可 (Allow identical user name and password)

説明

ユーザのパスワードをユーザのログイン名と同じものにするのを許可するかどうかを指定します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

最小英字数 (Minimum number of letter characters)

説明

パスワード内に必要な英字の最小数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はありません。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

数字の最小数

説明

パスワード内に必要な数字の最小数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はありません。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

最小文字長 (Minimum character length)

説明

パスワードの最小の長さを指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はありません。値を 0 より大きく設定した場合は、空白のパスワードを許可 (Blank passwords allowed)=false も設定してください。

デフォルト値

4

有効な値

任意の整数

全般 | その他

このカテゴリのプロパティは、内部で 사용되는値、およびロケール用に設定することが必要な場合がある値を指定します。

TokenLifetime

説明

Marketing Platform によって生成されたトークンが有効である期間を秒単位で指定します。これは、スイートのサインオン実装の一部です。この値は変更しないでください。

デフォルト値

15

有効な値

任意の正の整数

デフォルトの地域

説明

Marketing Platform のデフォルトのロケールを指定します。Campaign のインストールを計画している場合は、この値を、Campaign の defaultLocale プロパティで Campaign 用に設定したロケールに一致するように設定してください。

デフォルト値

en_US

有効な値

サポートされるロケール

トラステッドアプリケーションが有効 (Trusted application enabled)

説明

この値を True に設定した場合は、Marketing Platform を SSL ポートがある環境に配置し、「全般」>「ナビゲーション」カテゴリ内の Unica URL プロパティを、https を使用するように設定する必要があります。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

プラットフォーム

地域設定

説明

IBM Unica Marketing ユーザのロケール設定を指定します。このプロパティを「構成」ページで設定すると、適用した設定が全ユーザに対するIBM Unica Marketing 全体のデフォルト設定になります。ただし、Marketing Platform の「ユーザ」ページで個別にロケール設定を行ったユーザは除きます。個別のユーザにこのプロパティを設定すると、そのユーザに適用した設定によって、デフォルト設定がオーバーライドされます。

この設定は、IBM Unica Marketing アプリケーションでの言語、時刻、数値、および日付の表示に影響を及ぼします。

ロケールの可用性は、IBM Unica Marketing アプリケーションによって異なる場合があります。必ずしもすべての IBM Unica アプリケーションが、このロケール設定を Marketing Platform でサポートしているわけではありません。「地域設定」プロパティの可用性とサポートを判別するには、具体的な製品資料を参照してください。

デフォルト値

英語 (米国)

ヘルプサーバ

説明

IBM Unica ホステッドオンラインヘルプがインストールされているサーバの URL。IBM Unica Marketing ユーザがインターネットにアクセスできる場合は、デフォルト値を変更しないでください。デフォルト値は、IBM Unica によって保守および更新されるオンラインヘルプサーバを指しています。

デフォルト値

ホステッドヘルプサーバの URL。

有効な値

IBM Unica ホステッドヘルプがインストールされている任意のサーバ。

Unica Marketing Operations - Campaign の統合

説明

Marketing Operations と Campaign を一緒にインストールし、統合するかどうかを示すフラグ。この統合の構成について詳しくは、Marketing Operations の資料を参照してください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Unica Marketing Operations - オファー統合

説明

バージョン 8.5.0 で導入された新しいマーケティングオブジェクトのオファーを使用する場合は、このプロパティを True に設定します。古い方式のオファー統合を使用するには、デフォルト値の False を保存します。「IBM

Unica Marketing Operations - Campaign の統合」プロパティが True に設定されている場合にのみ、適用されます。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

JMS サーバ

説明

IBM Unica スケジューラは、JMS を使用します。JMS は、Marketing Platform ではデフォルトで有効になります。JMS をインストールまたは構成するための要件はありません。ただし、信頼性を高めるために、Marketing Platform および IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールしたマシンとは異なるマシンで JMS を実行することもできます。そのようにする場合は、このプロパティと「JMS ポート」を設定して、Active MQ をインストールしたサーバを指し示す必要があります。

デフォルト値

localhost

有効な値

Active MQ がインストールされている任意のサーバの、マシン名または IP アドレスとドメイン。ドメイン名を含めてください。例えば、myMachine.myDomain.com のようにします。

JMS ポート

説明

IBM Unica スケジューラは、JMS を使用します。JMS は、Marketing Platform ではデフォルトで有効になります。JMS をインストールまたは構成するための要件はありません。ただし、信頼性を高めるために、Marketing Platform および IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールしたマシンとは異なるマシンで JMS を実行することもできます。そのようにする場合は、このプロパティと「JMS サーバ」を設定して、Active MQ をインストールしたサーバを指し示す必要があります。

デフォルト値

61616

有効な値

Active MQ がインストールされているポート。ドメイン名を含めてください。デフォルトのポートは、61616 です。

開始ページ

説明

ユーザが IBM Unica Marketing にログインしたときに表示されるページの URL。デフォルトは、デフォルトのダッシュボードです。

デフォルト値

デフォルトのダッシュボード。

有効な値

フォーム送信ページ、編集ページ、および検索結果ページを除いた、任意の IBM Unica Marketing URL。

ドメイン名

説明

IBM Unica Marketing がインストールされているドメインの名前。この値は、インストール時に設定されます。ドメイン名を変更した場合以外、これは変更しないでください。

デフォルト値

未定義

ページのタグを無効にする (Disable Page Tagging)

説明

デフォルト値の False に設定した場合、IBM Unica は Marketing Platform のインストール時に入力されたサイト ID コードを使用して、IBM Unica 製品の開発と改善のために、全体的な製品の使用動向を追跡した基本的な統計を収集します。そのような情報を収集しない場合は、このプロパティを True に設定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

プラットフォーム | スケジューラ クライアントポーリング間隔

説明

Campaign は、この値によってミリ秒単位で指定された定期的な間隔で、ジョブの有無を IBM スケジューラにポーリングします。デフォルト値は 60 秒です。このプロパティを 10000 (10 秒) 未満の値に設定しないでください。キャンペーンのパフォーマンスが低下する可能性があるためです。

デフォルト値

60000

クライアント初期化遅延

説明

Campaign が最初に起動されたときに、Campaign スケジューラスレッドが IBM スケジューラに対してジョブの有無をポーリングするまでの待ち時間をミリ秒単位で表したものです。この値は、少なくとも Campaign がシステム上で完全に起動するまでに要する長さには設定してください。デフォルト値は 5 分です。

デフォルト値

300000

有効な値

任意の整数

プラットフォーム | スケジューラ | 繰り返し定義

このカテゴリのプロパティは、IBM スケジューラの繰り返しパターンを設定します。これらは、スケジュールを作成するときに繰り返しパターンを設定した場合に、使用するダイアログボックスに表示されます。「繰り返し」テンプレートを使用すると、任意の有効な cron 表現を使用して、独自の繰り返しパターンを作成できます。

毎時

説明

ジョブは 1 時間ごとにトリガされます。

デフォルト値

0 0 0/1 * * ?

毎日

説明

ジョブは、24 時間ごとにトリガされます。

デフォルト値

0 0 0 * * ?

毎 [曜日] 午前 12 時 00 分

説明

デフォルト値

毎月の [初日|末日] 午前 12 時 00 分

説明

デフォルト値

毎四半期の [初日|末日] 午前 12 時 00 分

説明

デフォルト値

毎年の [初日|末日] 午前 12 時 00 分

説明

デフォルト値

毎 [月] 午前 12 時 00 分

説明

デフォルト値

プラットフォーム | スケジューラ | スケジュール登録 | キャンペーン | [オブジェクトタイプ]

IBM スケジューラでスケジュールできる 2 つのオブジェクトタイプ (フローチャートとメール配信) のそれぞれに、異なるカテゴリが存在します。これらのカテゴリのプロパティは、通常では変更しないでください。

Executor クラス名

説明

IBM スケジューラが、フローチャートまたはメール配信の実行をトリガするために使用するクラス。

デフォルト値

ステータスポーリング間隔

説明

IBM スケジューラは、ステータスを報告していないスケジュールされたオブジェクト (フローチャートまたはメール配信) の実行ステータスについて、定期的な間隔で Campaign に対してポーリングを行います。ここでは、その間隔をミリ秒単位で指定します。デフォルト値は 10 分です。ポーリング間隔を、より高い頻度 (より小さな値) に設定すると、システムのパフォーマンスに影響が出ます。ポーリング間隔を、より低い頻度 (より大きい値) に設定すると、システムに対する負荷が減るため、完了までに 10 分を超える時間を要するフローチャートの数が多い場合は、そうすることをお勧めします。

デフォルト値

600000

プラットフォーム | スケジューラ | スケジュール登録 | キャンペーン | [オブジェクトタイプ] | [制限グループ]

スケジューラのフローチャートとメール配信でスケジュールできる 2 つのオブジェクトタイプのそれぞれに、デフォルトの制限グループが存在します。「制限グループ」テンプレートを使用して、追加グループを作成できます。

制限しきい値

説明

同時に実行できる、このグループに関連付けられているスケジュールの最大数。構成されたスケジューラグループは、スケジュールを作成および編集するためのスケジューラユーザインタフェース内で、「スケジューラグループ」ドロップダウンリストに表示されます。デフォルトの制限グループは、事実上無制限の 999 に設定されます。すべてのスケジュールが 1 つの制限

グループに属している必要があるため、この値は変更せずに残し、制限したくないスケジュールをこのグループに割り当てることができるようにしてください。

デフォルト値

有効な値

任意の正の整数。

プラットフォーム | セキュリティ

ログイン方法

説明

インストールされて連動するように構成された、すべての IBM Unica Marketing 製品の認証モードを指定します。

- 値を「Windows 統合ログイン」に設定した場合、IBM Unica Marketing 製品は、認証に Windows Active Directory を使用します。
- 値を「Unica Marketing Platform」に設定した場合、IBM Unica Marketing 製品は、認証と許可に Marketing Platform を使用します。
- 値を LDAP に設定した場合、IBM Unica Marketing 製品は、認証に LDAP サーバを使用します。
- 値を「Web アクセス制御」に設定した場合、IBM Unica Marketing 製品は、認証に Web アクセス制御ソフトウェアを使用します。

デフォルト値

Unica Marketing Platform

有効な値

Windows 統合ログイン | Unica Marketing Platform | LDAP | Web アクセス制御

プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 |

Windows 統合ログイン

ドメイン

説明

JCIFS SMB クライアントライブラリプロパティ `jcifs.smb.client.Domain` の値を設定します。SMB URL でドメインが指定されていない場合に使用するドメインを指定します。この値は、Windows ドメイン名に設定してください。ほとんどの環境では、このプロパティまたは「ドメインコントローラ」プロパティを設定します。

デフォルト値

未定義。

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーに統合されるよう構成されており、Windows 統合ログインが使用可能な場合のみ使用されます。

クライアントタイムアウト

説明

JCIFS SMB クライアントライブラリプロパティ `jcifs.smb.client.soTimeout` の値を設定します。クライアントとサーバの間にアクティビティがない場合に、ソケットがクローズされるまでの時間をミリ秒単位で指定します。この数値は、なるべく小さくする必要がありますが、プロトコルのハンドシェイクが完了するのに十分な長さにしてください。それは、ネットワークの特性によって異なります。

デフォルト値

1000

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーに統合されるよう構成されており、Windows 統合ログインが使用可能な場合のみ使用されます。

キャッシュポリシー

説明

JCIFS SMB クライアントライブラリプロパティ `jcifs.netbios.cachePolicy` の値を設定します。冗長な名前のクエリを削減するために、NetBIOS 名をキャッシュに入れる時間を秒単位で指定します。値を 0 に設定すると、キャッシュ操作は行われません。値を -1 に設定すると、キャッシュは決してクリアされません。このプロパティは、SMB 署名が有効で、Windows 2003 ドメインで必須の場合に使用されます。

デフォルト値

0

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーに統合されるよう構成されており、Windows 統合ログインが使用可能な場合のみ使用されます。

ドメインコントローラ

説明

JCIFS SMB クライアントライブラリプロパティ `jcifs.http.domainController` の値を設定します。(NtlmHttpFilter および NetworkExplorer によって使用される) HTTP クライアントの認証に使用するサーバの IP アドレスを指定します。「ドメイン」プロパティで指定したドメイン内の、ワークステーションの IP アドレスを使用できます。ほとんどの環境では、このプロパティまたは「ドメイン」プロパティを設定します。

デフォルト値

未定義。

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーに統合されるよう構成されており、Windows 統合ログインが使用可能な場合のみ使用されます。

WINS サーバの IP

説明

JCIFS SMB クライアントライブラリプロパティ `jcifs.netbios.wins` の値を設定します。WINS サーバの IP アドレスを指定します。複数の IP アドレスをコンマで区切って入力できます (例えば、`192.168.100.30, 192.168.100.31`)。「ドメイン」プロパティで指定したドメインをドメインコントローラの IP アドレスに解決するために、WINS サーバに対するクエリが行われます。このプロパティは、異なるサブネット上のホストに (たとえばドメインコントローラなどに名前) アクセスするときに必要で、WINS サーバが使用可能な場合は強く推奨されます。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーに統合されるよう構成されており、Windows 統合ログインが使用可能な場合のみ使用されます。

ドメインの除去 (Strip Domain)

説明

ユーザが IBM Unica Marketing にアクセスするときに、Marketing Platform でユーザのログイン名からドメインを除去するかどうかを指定します。ログイン時にユーザのログイン名にドメインを含める必要がある Windows 構成の場合は、この値を `False` に設定します。

デフォルト値

`True`

有効な値

`True` | `False`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーに統合されるよう構成されており、Windows 統合ログインが使用可能な場合のみ使用されます。

認証失敗時の再試行

説明

この値を `True` に設定すると、ユーザログインが失敗した場合でも、再度ログインを試みることができます。複数回のログインの試行を許可しない場合は、`False` に設定します。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーに統合されるよう構成されており、Windows 統合ログインが使用可能の場合のみ使用されます。

プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP LDAP サーバホスト名

説明

LDAP サーバの名前または IP アドレスを指定します。この値は、LDAP サーバのマシン名または IP アドレスに設定してください。例えば、`machineName.companyDomain.com` のようにします。

Windows Active Directory と統合する場合は、DNS 名の代わりにサーバ名を使用します。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP サーバポート

説明

LDAP サーバがリスンするポートを指定します。この値は、適切なポート番号に設定してください。一般に、ポート番号は 389 (SSL を使用する場合は 636) です。

デフォルト値

389

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

ユーザ検索フィルタ

説明

ユーザを検索するために使用するフィルタを指定します。有効な値は、任意の有効な LDAP 検索フィルタです (RFC 2254 を参照)。この値の中に XML 文字があれば、それを XML エスケープする必要があることに注意してください。

一般に、ユーザログイン属性の値は、LDAP サーバでは uid であり、Windows Active Directory サーバでは sAMAccountName です。これは、LDAP サーバまたは Active Directory サーバ上で確認する必要があります。LDAP サーバが Windows Active Directory である場合は、このプロパティのデフォルト値を変更し、uid でなく sAMAccountName を使用してください。次に例を示します。

```
(&( |(objectClass=user)(objectClass=person))(sAMAccountName={0}))
```

デフォルト値

```
(&( |(objectClass=user)(objectClass=person))(uid={0}))
```

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

Unica に格納されている資格情報を使用

説明

Marketing Platform が (ログイン時の) ユーザ認証で、LDAP サーバまたは Windows Active Directory サーバを検索するときに、Marketing Platform データベースからの資格情報を使用するかどうかを指定します。

この値が true の場合、Marketing Platform は Marketing Platform データベースからの資格情報を使用するので、このカテゴリの「LDAP 資格情報の Unica ユーザ」プロパティと「LDAP 資格情報のデータソース」プロパティに適切な値を設定する必要があります。

LDAP サーバまたは Windows Active Directory サーバが匿名アクセスを許可しない場合は、この値を true に設定します。

この値が false の場合、Marketing Platform は匿名で LDAP サーバまたは Windows Active Directory サーバと接続します。LDAP サーバまたは Windows Active Directory サーバが匿名アクセスを許可する場合は、この値を false に設定できます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 資格情報の Unica ユーザ

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報を与えられている IBM Unica Marketing ユーザの名前を指定します。このカテゴリの「Unica に格納されている資格情報を使用」プロパティを true に設定した場合は、この値を設定します。

このプロパティの値は、LDAP 統合を構成したときに、IBM Unica Marketing ユーザ用に作成したユーザ名に設定します。このプロパティは、このカテゴリの「LDAP 資格情報のデータソース」プロパティと連動して機能します。

デフォルト値

asm_admin

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 資格情報のデータソース

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データソースを指定します。このカテゴリの「Unica に格納されている資格情報を使用」プロパティを true に設定した場合は、この値を設定します。

このプロパティの値は、LDAP 統合を構成したときに、IBM Unica Marketing ユーザ用に作成したデータソース名に設定します。このプロパティは、このカテゴリの「LDAP 資格情報の Unica ユーザ」プロパティと連動して機能します。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

ベース DN

説明

LDAP ディレクトリ構造のルートを指すベース識別名 (DN) を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

任意の有効な DN (RFC 1779、RFC 2253 を参照)

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されません。

LDAP 接続に SSL が必要

パス

説明

Marketing Platform でユーザーを認証するために LDAP サーバに接続するとき、SSL を使用するかどうかを指定します。値を true に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | Web アクセス制御

ユーザ名パターン

説明

Web アクセス制御ソフトウェアで、HTTP ヘッダ変数からユーザログインを抽出するために使用する Java 正規表現。正規表現の中に XML 文字があれば、それを XML エスケープする必要があることに注意してください。SiteMinder および Tivoli Access Manager に推奨される値は、`¥w*` です。

デフォルト値

未定義

有効な値

任意の Java 正規表現。

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェアと統合されるように構成されている場合にのみ使用されます。

Web アクセス制御ヘッダ変数

説明

Web アプリケーションサーバにサブミットされた Web アクセス制御ソフトウェアで構成された、HTTP ヘッダ変数を指定します。デフォルトでは、SiteMinder は `sm_user` を使用し、Tivoli Access Manager (TAM) は `iv-user` を使用します。TAM の場合は、この値を、IBM HTTP スtring でなく IBM 未加工 String のユーザ名コンポーネントに設定します。

デフォルト値

未定義

有効な値

任意のストリング

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェアと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期

LDAP 同期が有効

説明

LDAP または Active Directory 同期を有効にするには、true に設定します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 同期間隔

説明

Marketing Platform は、ここで秒単位で指定された定期的な間隔で、LDAP サーバまたは Active Directory サーバと同期化されます。値がゼロ以下の場合、Marketing Platform は同期化されません。値が正の整数の場合、新しい値は、再起動なしで 10 分以内に有効になります。それ以後の変更は、構成された間隔の時間内に有効になります。

デフォルト値

600 (10 分)

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 同期遅延

説明

これは、Marketing Platform が開始された後、LDAP サーバとの定期的な同期化が開始される時刻 (24 時間形式) です。例えば、「LDAP 同期遅延」が 23:00 で、「LDAP 同期間隔」が 600 の場合、これは Marketing Platform が開始されたとき、定期的な同期化の実行が午後 11:00 に開始され、それ以後、10 分 (600 秒) ごとに実行されることを意味します。

デフォルト値

23:00 (午後 11:00)

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 同期タイムアウト

説明

「LDAP 同期タイムアウト」プロパティは、同期化の開始後、Marketing Platform がプロセスの終了をマーク付けする前の最大時間を分単位で指定します。Platform では、一度に実行できる同期化プロセスは 1 つだけです。同期化が失敗した場合は、同期化が正常に完了したかどうかに関係なく、終了したものとしてマーク付けされます。

これは、クラスタ環境で最も役立ちます。例えば、Marketing Platform がクラスタ内に配置されている場合、クラスタ内の 1 つのサーバが LDAP 同期を開始し、そのプロセスに終了のマーク付けが行われる前にダウンする場合も考えられます。その場合、Marketing Platform は、このプロパティで指定された時間だけ待ってから、次にスケジュールされている同期化を開始します。

デフォルト値

600 (600 分、つまり 10 時間)

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 同期スコープ

説明

ユーザのセットを取り出す初期クエリのスコープを制御します。大部分の LDAP サーバと同期化するためには、SUBTREE のデフォルト値を保存してください。

デフォルト値

SUBTREE

有効な値

値は、標準的な LDAP 検索スコープの用語です。

- OBJECT - ベース DN でのみ項目を検索し、結果的にその項目だけを返します。
- ONE_LEVEL - ベース DN の 1 レベル下にあるすべての項目を検索しますが、ベース DN は含まれません。
- SUBTREE - 指定されたベース DN とその下のすべてのレベルにあるすべての項目を検索します。

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP プロバイダ URL

説明

ほとんどの実装の場合、以下のいずれかの書式で LDAP サーバまたは Active Directory サーバの LDAP URL に設定します。

- `ldap://IP_address:port_number`
- `ldap://machineName.domain.com:port_number`

LDAP サーバでは、一般に、ポート番号は 389 (SSL を使用する場合は 636) です。

IBM Unica Marketing が Active Directory サーバと統合されており、Active Directory の実装がサーバレスバインドを使用している場合は、次の書式を使用して、このプロパティの値を Active Directory サーバの URL に設定します。

```
ldap:///dc=example,dc=com
```

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 接続に SSL が必要

パス

説明

Marketing Platform でユーザを同期化するために LDAP サーバに接続するとき、SSL を使用するかどうかを指定します。値を `true` に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

`false`

有効な値

`true` | `false`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 設定 Unica グループデリミタ

説明

「Unica グループマップの LDAP 参照」カテゴリで、1 つの LDAP または Active Directory グループを複数の Marketing Platform グループにマップする場合は、ここで指定した区切り記号を使用します。これは、区切られる名前の中に出現しない任意の 1 文字とすることができます。

デフォルト値

; (セミコロン)

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 参照設定デリミタ

説明

LDAP または Active Directory 参照 (「Unica ユーザ作成のための LDAP 参照 (LDAP references for Unica user creation)」カテゴリで説明) を形成する、SEARCHBASE コンポーネントおよび FILTER コンポーネントを分離する区切り記号を指定します。

FILTER はオプションです。省略した場合、Marketing Platform サーバは LDAP ユーザ参照属性名の値に基づいて、動的にフィルタを作成します。

デフォルト値

; (セミコロン)

有効な値

区切られる名前の中に出現しない任意の 1 文字。

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP 資格情報の Unica ユーザ

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報を与えられている IBM Unica Marketing ユーザの名前を指定します。このカテゴリの「匿名バインドの使用」プロパティを false に設定した場合は、この値を設定します。

このプロパティの値は、LDAP 統合を構成したときに、IBM Unica Marketing ユーザ用に作成したユーザ名に設定します。このプロパティは、このカテゴリの「LDAP 資格情報のデータソース」プロパティと連動して機能します。このプロパティは、このカテゴリの「匿名バインドの使用」プロパティが true に設定されている場合には無視されることに注意してください。

デフォルト値

asm_admin

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されません。

LDAP 資格情報のデータソース

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データソースを指定します。このカテゴリの「匿名バインドの使用」プロパティを false に設定した場合は、この値を設定します。

このプロパティの値は、LDAP 統合を構成したときに、IBM Unica Marketing ユーザ用に作成したデータソース名に設定します。このプロパティは、このカテゴリの「LDAP 資格情報の Unica ユーザ」プロパティと連動して機能します。このプロパティは、このカテゴリの「匿名バインドの使用」プロパティが true に設定されている場合には無視されることに注意してください。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されません。

匿名バインドの使用

説明

Marketing Platform が (ログイン時の) ユーザ認証で LDAP サーバを検索するときに、Marketing Platform システムテーブルに保管されている資格情報を使用するかどうかを指定します。

値が true の場合、Marketing Platform は匿名アクセスを使用し、このカテゴリの「LDAP 資格情報の Unica ユーザ」プロパティと「LDAP 資格情報のデータソース」プロパティを無視します。

LDAP サーバが匿名アクセスを許可する場合は、この値を true に設定できます。この値を true に設定した場合は、このカテゴリの「LDAP 資格情報の Unica ユーザ」プロパティを false にする必要があり、そうでない場合はエラーが発生します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

LDAP ユーザ参照属性名

説明

LDAP サーバまたは Active Directory サーバがグループオブジェクト内のユーザ属性に使用する名前を指定します。一般に、この値は LDAP サーバでは `uniquemember` であり、Windows Active Directory サーバでは `member` です。

「AM ユーザ作成の LDAP 参照 (LDAP references for AM user creation)」セクションおよび「AM グループマップの LDAP 参照 (LDAP references to AM group map)」セクションで FILTER 参照を省略した場合、Marketing Platform サーバは、この値に基づいて動的にフィルタを作成します。このため、これを LDAP サーバまたは Active Directory サーバ上で確認する必要があります。

デフォルト値

`member`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

ユーザログイン

説明

IBM Unica Marketing ユーザのログインを、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。ユーザログインは、唯一の必須のマッピングです。一般に、この属性の値は、LDAP サーバでは `uid` であり、Windows Active Directory サーバでは `sAMAccountName` です。これは、LDAP サーバまたは Active Directory サーバ上で確認する必要があります。

デフォルト値

`uid`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

名

説明

Marketing Platform 内の「名」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

givenName

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されま
す。

姓

説明

Marketing Platform 内の「姓」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

sn

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されま
す。

ユーザの肩書き

説明

Marketing Platform 内の「肩書き」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

title

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されま
す。

部門

説明

Marketing Platform 内の「部門」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されま
す。

会社

説明

Marketing Platform 内の「会社」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

国

説明

Marketing Platform 内の「国」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

ユーザの電子メール

説明

Marketing Platform 内の「ユーザの電子メール」属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

mail

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

住所 1

説明

Marketing Platform 内の「アドレス」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

電話 (会社)

説明

Marketing Platform 内の「電話 (会社)」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

telephoneNumber

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

携帯電話

説明

Marketing Platform 内の「携帯電話」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

電話 (自宅)

説明

Marketing Platform 内の「電話 (自宅)」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

代替ログイン

説明

Marketing Platform 内の「代替ログイン」ユーザ属性を、LDAP サーバまたは Active Directory サーバでの同等のユーザ属性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | Unica ユーザ作成のための LDAP 参照 (LDAP references for Unica user creation)

LDAP 参照

説明

LDAP 参照の値の構文は、SEARCHBASE DELIMITER FILTER です。ただし、

- SEARCHBASE はオブジェクトの識別名 (DN) です。SEARCHBASE の値の取得方法については、Marketing Platform 管理者向けの資料を参照してください。
- DELIMITER は、LDAP 設定 Unica グループデリミタの値です。
- FILTER は、LDAP または Active Directory の属性フィルタです。FILTER はオプションです。省略した場合、Marketing Platform サーバは LDAP ユーザ参照属性名の値に基づいて、動的にフィルタを作成します。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

プラットフォーム | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | Unica グループマップの LDAP 参照

LDAP 参照マップ

説明

ここで指定された LDAP または Active Directory グループのメンバーであるユーザは、「Unica グループ」プロパティで指定された Marketing Platform グループにインポートされます。

このプロパティの値は、SEARCHBASE DELIMITER FILTER という構文を使用して設定します。ただし、

SEARCHBASE はオブジェクトの識別名 (DN) です。

DELIMITER は、「LDAP 構成 AM グループデリミタ (LDAP config AM group delimiter)」プロパティの値です。

FILTER は、LDAP または Active Directory の属性フィルタです。FILTER はオプションです。省略した場合、Marketing Platform サーバは「LDAP ユーザ参照属性名」プロパティの値に基づいて、動的にフィルタを作成します。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

Unica グループ

説明

「LDAP 参照グループ (LDAP reference group)」で指定された LDAP または Active Directory グループのメンバーであるユーザは、ここで指定された Marketing Platform グループにインポートされます。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory または他の LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみ使用されます。

レポート構成プロパティ

レポート用に、IBM Unica Marketing スイートはサードパーティのビジネスインテリジェンスアプリケーション、IBM Cognos 8 BI と統合します。Cognos 8 プロパティを使用して、IBM Unica インストール済み環境で使用する IBM Cognos システムを識別します。また、Campaign、eMessage、および Interact 用に、レポートスキーマのセットアップおよびカスタマイズに使用する追加の構成プロパティがあります。

レポート | 統合 | Cognos 8

このページに表示されるプロパティは、この IBM Unica システムによって使用される IBM Cognos 8 BI システムの URL と、その他のパラメータを指定します。

統合名

説明

読み取り専用。IBM Unica Marketing でレポートの表示に使用するサードパーティのレポートまたは分析ツールが、IBM Cognos 8 BI であることを指定します。

デフォルト値

Cognos 8

ベンダー

説明

読み取り専用。統合名プロパティによって指定されたアプリケーションを提供する会社の名前が、IBM Cognos であることを指定します。

デフォルト値

Cognos

バージョン

説明

読み取り専用。統合名プロパティで指定されたアプリケーションの製品バージョンを指定します。

デフォルト値

8.4

有効

説明

スイートに IBM Cognos 8 BI が有効であるかどうかを指定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

統合クラス名

説明

読み取り専用。統合インタフェースを作成する Java クラスの完全修飾名を指定します。このインタフェースは、統合名プロパティによって指定されたアプリケーションへの接続に使用されます。

デフォルト値

com.unica.report.integration.cognos.CognosIntegration

ドメイン

説明

Cognos サーバが稼働している完全修飾会社ドメイン名を指定します。例えば、myCompanyDomain.com などです。

会社でサブドメインを使用している場合は、このフィールドの値に、該当するサブドメインも含める必要があります。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

1024 文字以下のストリング。

ポータル URL

説明

IBM Cognos 接続ポータルの URL を指定します。ドメインプロパティで指定したドメイン名を (該当する場合はサブドメインも) 含む、完全修飾ホス

ト名を使用します。例えば、`http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com/cognos8/cgi-bin/cognos.cgi` のようにします。

この URL は、IBM Cognos Configuration の「**Local Configuration**」 > 「**Environment**」 で知ることができます。

デフォルト値

`http://[CHANGE ME]/cognos8/cgi-bin/cognos.cgi`

有効な値

正しい形式の URL。

ディスパッチ URL

説明

IBM Cognos Content Manager の URL を指定します。ドメインプロパティで指定したドメイン名を（該当する場合はサブドメインも）含む、完全修飾ホスト名を使用します。例えば、`http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com:9300/p2pd/servlet/dispatch` のようにします。

この URL は、Cognos Configuration の「**Local Configuration**」 > 「**Environment**」 で知ることができます。

デフォルト値

`http://[CHANGE ME]:9300/p2pd/servlet/dispatch`

9300 は、Cognos Content Manager のデフォルトのポート番号であることに注意してください。必ず、指定するポート番号が Cognos インストール済み環境で使用されているものに一致するようにしてください。

有効な値

正しい形式の URL。

認証モード

説明

IBM Cognos アプリケーションで IBM Unica Authentication Provider を使用しているかどうかを指定します。これは、認証について Marketing Platform に依存していることを意味します。

デフォルト値

`anonymous`

有効な値

- `anonymous`: 認証が無効であることを意味します。
- `authenticated`: IBM Unica システムと IBM Cognos システムの間の通信がマシンレベルで保護されていることを意味します。単一システムユーザを構成し、それを適切なアクセス権限を使用して構成します。慣例的に、このユーザには「`cognos_admin`」という名前が付きます。
- `authenticatedPerUser`: システムが個々のユーザの資格情報を評価することを意味します。

認証ネームスペース

説明

読み取り専用。IBM Unica Authentication Provider のネームスペース。

デフォルト値

Unica

認証ユーザ名

説明

レポートシステムユーザのログイン名を指定します。IBM Cognos 8 BI アプリケーションは、IBM Cognos 8 BI が vs Authentication Provider を使用するように構成されている場合、このユーザとしてログインします。このユーザは、IBM Unica Marketing にもアクセスできることに注意してください。

デフォルト値

cognos_admin

認証データソース名

説明

Cognos ログイン資格情報を保持しているレポートシステムユーザのデータソース名を指定します。

デフォルト値

Cognos

フォーム認証を有効にする

説明

フォームベース認証を有効にするかどうかを指定します。IBM Unica Marketing が IBM Cognos 8 BI アプリケーションと同じドメインにインストールされていない場合は、このプロパティを True に設定します。ただし、値が True の場合、Cognos Connection へのログインプロセスでログイン名とパスワードが平文で渡されるため、IBM Cognos 8 BI と IBM Unica Marketing が SSL 通信を使用するように構成されていないと、安全ではありません。

SSL を構成してある場合でも、表示されたレポートの「ソースを表示」すると、ユーザ名とパスワードが HTML ソースコード内に平文で現れます。この理由から、IBM Cognos と IBM Unica Marketing は同じドメイン内にインストールしてください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成 テーブル/ビュー名

説明

このレポートスキーマ用に生成する SQL スクリプトで作成される、ビューまたはテーブルの名前を指定します。ベストプラクティスとして、標準またはデフォルトのテーブル/ビュー名は、どれも変更しないでください。変更する場合は、IBM Cognos Framework Manager で Cognos モデル内のビューの名前も変更する必要があります。

新しいオーディエンスレベル用に新しいレポートスキーマを作成するときは、すべての新規レポートテーブル/ビューの名前を指定する必要があります。

デフォルト値

スキーマによって異なります。

有効な値

以下の制限があるストリング。

- 18 文字以下でなければなりません。
- すべて大文字を使用する必要があります。

次の命名規則を使用する必要があります。

- 名前は英字「UAR」で開始します。
- IBM Unica アプリケーションを表す 1 文字のコードを追加します。下記のコードのリストを参照してください。
- アンダースコアを追加します。
- オーディエンスレベルを示す 1 から 2 文字のコードも含め、テーブル名を追加します。
- アンダースコアで終了します。

SQL ジェネレータは、該当する場合、時間次元コードを付加します。下記のコードのリストを参照してください。

例: UARC_COPERF_DY は、日別の Campaign オファー実績のレポートビューまたはテーブルの名前です。

以下に、IBM Unica アプリケーションコードのリストを示します。

- Campaign: C
- eMessage: E
- Interact: I
- Distributed Marketing: X
- Marketing Operations: P
- Leads: L

以下に、ジェネレータによって追加される時間次元コードのリストを示します。

- 時間: HR
- 日: DY

- 週: WK
- 月: MO
- 四半期: QU
- 年: YR

レポート | スキーマ | キャンペーン 入力データソース (JNDI)

説明

Campaign データベース、特にシステムテーブルを識別する JNDI データソースの名前を指定します。SQL 生成ツールを使用して、レポートテーブルを作成するスクリプトを生成する場合は、このデータソースが存在する必要があります。SQL 生成ツールは、このデータソースがなくても、レポートビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはできません。

このデータソースのデータベースタイプは、Campaign ビューまたはレポートテーブル用の SQL スクリプトを生成したときに選択したデータベースタイプに一致する必要があります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

レポート | スキーマ | キャンペーン | オファー実績

オファー実績スキーマは、すべてのオファーについて、およびキャンペーン別のオファーについてのコンタクトおよびレスポンス履歴メトリックを生成します。デフォルトでは、スキーマは、すべての時間にわたっての「サマリ」ビュー (またはテーブル) を生成するように構成されます。

オーディエンスキー

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、オーディエンスキーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の間にはコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、詳細なコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_Dt1ContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマがサポートする「時間経過に伴う」レポートで使用するカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | キャンペーン | [スキーマ名] | カラム | [コンタクトメトリック]

このフォームを使用して、キャンペーン実績またはオファー実績のレポートスキーマにコンタクトメトリックを追加します。

カラム名

説明

「入力カラム名」フィールドで指定した列の、レポートビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

機能

説明

コンタクトメトリックを決定または計算する方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力カラム名

説明

このレポートスキーマに追加するコンタクトメトリックを提供する列の名前。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブル内の列の名前。

制御処理フラグ

説明

サンプルの IBM Cognos 8 レポートを使用するか、制御グループを含んでいる独自のレポートを作成する場合は、レポートスキーマ内でコンタクトメトリックごとに 2 つの列が必要です。1 つの列は制御グループのメトリックを表し、もう 1 つの列はターゲットグループのメトリックを表します。「**制御処理フラグ**」の値は、ビュー内の列が制御グループを表すか、それともターゲットグループを表すかを指定します。

レポートに制御グループが含まれていない場合は、制御グループの 2 番目の列は必要ありません。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: 列はターゲットグループを表します。
- 1: 列は制御グループを表します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | [スキーマ名] | カラム | [レスポンスメトリック]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいレスポンスメトリックをキャンペーン実績またはオファー実績のレポートスキーマに追加します。

カラム名

説明

「**入力カラム名**」フィールドで指定した列の、レポートビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

機能

説明

レスポンスメトリックを決定または計算する方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力カラム名

説明

このレポートスキーマに追加するレスポンスメトリックを提供する列の名前。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

レスポンス履歴テーブル内の列の名前。

制御処理フラグ

説明

標準の IBM Cognos 8 レポートを使用するか、制御グループを含んでいる独自のレポートを作成する場合は、レポートスキーマ内でレスポンスメトリックごとに 2 つの列が必要です。1 つの列は制御グループからのレスポンスを表し、もう 1 つの列はターゲットグループからのレスポンスを表します。「**制御処理フラグ**」の値は、ビュー内の列が制御グループを表すか、それともターゲットグループを表すかを指定します。

レポートに制御グループが含まれていない場合は、制御グループの 2 番目の列は必要ありません。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: 列はターゲットグループを表します。
- 1: 列は制御グループを表します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | パフォーマンス

キャンペーンパフォーマンススキーマは、キャンペーン、キャンペーンオファー、およびキャンペーンセルレベルでコンタクトおよびレスポンス履歴メトリックを生成します。

オーディエンスキー

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、オーディエンスキーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のstring値

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の上にコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、詳細なコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_Dt1ContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマがサポートする「時間経過に伴う」レポートで使用するカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | キャンペーン | オファーレスポンス内訳

このスキーマは、キャンペーンの詳細なレスポンスについて、レスポンスタイプ別およびオファーデータ別に内訳を示したレポートをサポートします。このスキーマテンプレートは、キャンペーンとキャンペーン別にグループ化されたオファーの各カスタムレスポンスタイプについて、さまざまなコンタクトカウントを提供します。

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

レポート | スキーマ | キャンペーン | オファーレスポンス内訳 | [レスポンスタイプ]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタムレスポンスタイプをレポートスキーマに追加します。

カラム名

説明

「レスポンスタイプコード」フィールドで指定した列の、レポートビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

レスポンスタイプコード

説明

指定されたレスポンスタイプのレスポンスタイプコード。これは、UA_UsrResponseType テーブルの ResponseTypeCode 列に保持される値です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

レスポンスタイプコードの例を以下に示します。

- EXP (参照)
- CON (考慮)
- CMT (コミット)
- FFL (実現)
- USE (使用)
- USB (購読解除)
- UKN (不明)

Campaign インストール済み環境によっては、追加のカスタムレスポンスタイプコードが存在する場合があります。

制御処理フラグ

説明

IBM Unica Reports Pack で提供される標準の IBM Cognos 8 レポートを使用するか、制御グループを含んでいるカスタムレポートを作成する場合は、レポートスキーマ内でレスポンスタイプごとに 2 つの列が必要です。1 つの列は制御グループからのレスポンスタイプを表し、もう 1 つの列はターゲットグループからのレスポンスタイプを表します。「**制御処理フラグ**」の値は、ビュー内の列が制御グループを表すか、それともターゲットグループを表すかを指定します。

レポートに制御グループが含まれていない場合は、制御グループの 2 番目の列は必要ありません。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: 列はターゲットグループを表します。
- 1: 列は制御グループを表します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーンオファ어의コンタクトステータスの内訳

このスキーマは、キャンペーンの詳細なコンタクトについて、コンタクトステータスタイプ別およびオファーデータ別に内訳を示したレポートをサポートします。このスキーマテンプレートは、キャンペーンとキャンペーン別にグループ化されたオファ어의各カスタムコンタクトステータスタイプについて、さまざまなコンタクトカウントを提供します。

デフォルトでは、このスキーマは Campaign のレポートの例では使用されません。

オーディエンスキー

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、オーディエンスキーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の上にコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、詳細なコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーンオファ어의 コンタクトステータスの内訳 | [コンタクトステータスコード]

カラム名

説明

「コンタクトステータス」フィールドで指定した列の、レポートビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

コンタクトステータス

説明

コンタクトステータスコードの名前。これは、UA_ContactStatus テーブルの ContactStatusCode 列に保持される値です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクトステータスタイプの例を以下に示します。

- CSD (キャンペーン送信)
- DLV (配信済み)
- UNDLV (未配信)
- CTR (制御)

Campaign インストール済み環境によっては、追加のカスタムコンタクトステータスタイプが存在する場合があります。

レポート | スキーマ | キャンペーン | カスタム属性 | カラム | [キャンペーンカスタムカラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタムキャンペーン属性をレポートスキーマに追加します。

カラム名

説明

「属性 ID」フィールドで識別した属性の、レポートビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_CampAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

キャンペーン属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このキャンペーン属性が通貨値を保持している場合は、NumberValue を選択します。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」が Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定されている場合は、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | カスタム属性 | カラム | [オファーカスタムカラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタムオファー属性をレポートスキーマに追加します。

カラム名

説明

「属性 ID」フィールドで識別した属性の、レポートビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_OfferAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

オファー属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このオファー属性が通貨値を保持している場合は、NumberValue を選択します。

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」が Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定されている場合は、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | カスタム属性 | カラム | [セルカスタムカラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタムセル属性をレポートスキーマに追加します。

カラム名

説明

「属性 ID」フィールドで識別した属性の、レポートビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_CellAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

セル属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

レポート | スキーマ | Interact

Interact レポートスキーマは、3 つの別々のデータベースを参照します。それらは設計時データベース、ランタイムデータベース、およびラーニングデータベースです。このページにあるプロパティを使用して、それらのデータベースのデータソースの JNDI 名を指定してください。

レポート SQL 生成ツールを使用して、レポートテーブルを作成するスクリプトを生成する場合は、このページで指定したデータソースが存在する必要があります。SQL 生成ツールは、これらのデータソースがなくても、レポートビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはできません。

これらのデータソースのデータベースタイプは、ビューまたはレポートテーブル用の SQL スクリプトを生成したときに選択したデータベースタイプに一致する必要があります。ことに注意してください。

Interact デザインデータソース (JNDI)

説明

Interact 設計時データベース (これは、Campaign システムテーブルでもありません) を識別する JNDI データソースの名前を指定します。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Interact ランタイムデータベース (JNDI)

説明

Interact ランタイムデータベースを識別する JNDI データソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractRTDS

Interact ラーニングデータベース (JNDI)

説明

Interact ラーニングデータベースを識別する JNDI データソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractLearningDS

レポート | スキーマ | Interact | 対話実績

対話実績スキーマは、チャンネル、チャンネルオファー、チャンネルセグメント、チャンネルインタラクションポイント、インタラクティブセル、インタラクティブセルオファー、インタラクティブセルインタラクションポイント、インタラクティブオファー、インタラクティブオファーセル、およびインタラクティブオファーインタラクションポイントの各レベルで、コンタクトおよびレスポンス履歴メトリックを生成します。

オーディエンスキー

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、オーディエンスキーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値。

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の上にコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、詳細なコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_Dt1ContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポートスキーマがサポートするオーディエンスレベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマがサポートする「時間経過に伴う」レポートで使用するカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

時間、日

有効な値

時間、日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | eMessage

eMessage トラッキングデータソース (JNDI)

説明

Campaign システムテーブル内に置かれている eMessage トラッキングテーブルを識別する JNDI データソースの名前を指定します。レポート SQL 生成ツールを使用して、レポートテーブルを作成するスクリプトを検証する場合は、このデータソースが存在する必要があります。SQL 生成ツールは、このデータソースがなくても、レポートビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはできません。

このデータソースのデータベースタイプは、ビューまたはレポートテーブル用の SQL スクリプトを生成したときに選択したデータベースタイプに一致する必要があります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Marketing Operations 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページの IBM Unica Marketing Operations 構成プロパティについて説明します。

注: Marketing Operations > about カテゴリのプロパティは、内部専用なので、これらの値は編集しないでください。

Marketing Operations supportedLocales

説明

IBM Unica Marketing Operations のインストール済み環境で使用できるロケールを指定します。実際に使用しているロケールだけをリストしてください。リストされた各ロケールは、サーバ上のメモリを指定します。使用されるメモリの量は、テンプレートのサイズと数によって異なります。

初期インストールまたはアップグレードの後にロケールを追加する場合は、アップグレードサブレットを再度実行する必要があります。詳しくは、アップグレード資料を参照してください。

この値を変更した場合、変更を有効にするには、Marketing Operations 配置をいったん停止して再起動する必要があります。

デフォルト値

en_US

defaultLocale

説明

IBM Unica Marketing Operationsで、すべてのユーザに対して表示する、サポートされているロケールを指定します。ただし、Marketing Operations 管理者によって、特定のユーザについて明示的にオーバーライドされている場合は除きます。

この値を変更した場合、変更を有効にするには、Marketing Operations 配置をいったん停止して再起動する必要があります。

デフォルト値

en_US

Marketing Operations | Navigation

welcomePageURI

説明

IBM Unica Marketing Operations 索引ページの Uniform Resource Identifier。この値は、IBM Unica Marketing アプリケーションによって内部で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

affiniumPlan.jsp?cat=projectlist

projectDetailpageURI

説明

IBM Unica Marketing Operations 詳細ページの Uniform Resource Identifier。この値は、IBM Unica Marketing アプリケーションによって内部で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

空白

seedName

説明

IBM Unica Marketing アプリケーションによって内部で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

Plan

type

説明

IBM Unica Marketing アプリケーションによって内部で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

Plan

httpPort

説明

アプリケーションサーバによって IBM Unica Marketing Operations アプリケーションへの接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

アプリケーションサーバによって IBM Unica Marketing Operations アプリケーションへのセキュア接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

IBM Unica Marketing Operations インストールの URL。

デフォルト値

`http:// servername:port /plan`

logoutURL

説明

内部で使用されます。この値は変更しないでください。

ユーザがスイート内のログアウトリンクをクリックすると、IBM Unica Marketing Platform は、この値を使用して、登録済みの各アプリケーションのログアウトハンドラを呼び出します。

デフォルト値

/uapsysservlet?cat=sysmodules&func=logout

displayName

説明

内部で使用されます。

デフォルト値

Plan

Marketing Operations | About

Marketing Operations>About 構成プロパティは、インストール済み環境に関する情報をリストします。これらのプロパティを編集することはできません。

displayName

説明

製品の表示名。

デフォルト値

IBM Unica Marketing Operations

releaseNumber

説明

現在インストールされているリリース。

デフォルト値

8.5.0.x.x

copyright

説明

著作権の年。

デフォルト値

2011

os

説明

IBM Unica Marketing Operations がインストールされているオペレーティングシステム。

デフォルト値

java

説明

java の現行バージョン。

デフォルト値

サポート

説明

<https://customercentral.unica.com> で資料を読み、サポートにお問い合わせください。

デフォルト値

<https://customercentral.unica.com>

appServer

説明

デフォルト値

空白

otherString

説明

デフォルト値

空白

Marketing Operations | umoConfiguration

serverType

説明

アプリケーションサーバのタイプ。カレンダーエクスポートに使用されません。

デフォルト値

WEBLOGIC

有効な値

WEBLOGIC または WEBSHERE

userManagerSyncTime

説明

スケジュールされた IBM Unica Marketing Platform との同期化の時間間隔を表すミリ秒数。

デフォルト値

10800000 ミリ秒 (3 時間)

firstMonthInFiscalYear

説明

アカウントの会計年度を開始する月に設定します。アカウントの「サマリ」タブには、表示専用テーブルが含まれており、このテーブルには予算情報がアカウントの会計年度の月別にリストされます。このテーブルの最初の月は、このパラメータによって決まります。

1 月は 0 によって表されます。会計年度を 4 月に開始するには、`firstMonthInFiscalYear` を 3 に設定します。

デフォルト値

0

有効な値

0 から 11 までの整数

maximumItemsToBeRetainedInRecentVisits

説明

最新リストに保存するアイテムの最大数。

デフォルト値

10

maxLimitForTitleString

説明

ページタイトルに表示する文字の最大数。指定した数よりタイトルが長い場合、IBM Unica Marketing Operations はタイトルを切り取ります。

デフォルト値

40

maximumLimitForBulkUploadItems

説明

同時にアップロードできる添付ファイルの最大数。

デフォルト値

5

workingDaysCalculation

説明

IBM Unica Marketing Operations で期間を計算する方法を制御します。

デフォルト値

すべて

有効な値

- 営業日のみ：営業日のみを含みます。週末と休日は含まれません。
- 営業日 + 週末：営業日と週末を含みます。休日は含まれません。
- 営業日 + 休日：すべての営業日と休日を含みます。週末は含まれません。
- すべて：カレンダーのすべての日を含みます。

validateAllWizardSteps

説明

ウィザードを使用してプログラム、プロジェクト、または要求を作成する場合、IBM Unica Marketing Operations は、現行ページの必須フィールドに値が入力されているかどうかを自動的に検証します。このパラメータは、ユーザが「完了 (Finish)」をクリックしたときに、すべてのページ (タブ) の必須フィールドを Marketing Operations で検証するかどうかを制御します。

デフォルト値

true

有効な値

- true : Marketing Operations は、ユーザが開かなかったページ (ワークフロー、トラッキング、および添付ファイルを除く) の必須フィールドを検査します。必須フィールドが空白の場合、ウィザードはそのページを開き、エラーメッセージを表示します。
- false : Marketing Operations は、ユーザが開かなかったページにある必須フィールドを検証しません。

enableRevisionHistoryPrompt

説明

ユーザがプロジェクト/要求または承認を保存するときに、変更コメントを追加するようプロンプトを出します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

useForecastDatesInTaskCalendar

説明

カレンダービューにタスクを表示するときに使用する、日付のタイプを指定します。

デフォルト値

false

有効な値

- true : 予測/実際の日付を使用してタスクを表示します。
- false : 目標の日付を使用してタスクを表示します。

copyRequestProjectCode

説明

プロジェクトコード (PID) を要求からプロジェクトに引き継ぐかどうかを制御します。このパラメータを false に設定した場合、プロジェクトと要求には異なるコードが使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

projectTemplateMonthlyView

説明

プロジェクトテンプレートのワークフローで、月次の表示を許可するかどうかを制御します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

disableAssignmentForUnassignedReviewers

説明

承認のために、作業が役割によってどのように割り当てられるかを指定します。パラメータ `disableAssignmentForUnassignedReviewers` は、ワークフローの承認における承認者の割り当てについて、「人物」タブに基づいて「ロールごとの業務の割り当て...」の動作を制御します。

デフォルト値

false

有効な値

- **true** : 「人物」タブで未割り当てのレビューアーは、新しいステップとして承認に追加されません。
 - 「追加 (Append)」オプション: 役割が割り当てられていない、承認者に割り当てられた既存の所有者は、変更されません。「人物」タブに役割が「未割り当て」のレビューアーが存在しても、新しい承認者ステップは追加されません。
 - 「置換」オプション: 役割のない、承認者に割り当てられた既存の所有者は、空白によって置き換えられます。人物タブに役割が「未割り当て」のレビューアーが存在しても、新しい承認者ステップは追加されません。
- **false** : 未割り当てのレビューアーは、承認に追加されます。
 - 「追加 (Append)」オプション: 承認に役割が定義されていない所有者割り当てステップがある場合、役割のないすべてのレビューアーは、承認にレビューアーとして追加されます。
 - 「置換」オプション: 承認の既存の承認者は、「人物」タブ内の未割り当て承認者によって置き換えられます。

enableApplicationLevelCaching

説明

アプリケーションレベルのキャッシュを有効にするかどうかを示します。最良の結果を得るには、キャッシュメッセージのマルチキャストが有効でない

クラスター化環境に IBM Unica Marketing Operations をインストールする場合、承認レベルのキャッシュをオフにすることを考慮してください。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

customAccessLevelEnabled

説明

IBM Unica Marketing Operations でカスタムアクセスレベル (プロジェクト役割) を使用するかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true : プロジェクトおよび要求に対するユーザアクセスは、オブジェクトアクセスレベルとカスタムアクセスレベル (プロジェクト役割) に従って評価され、カスタムタブのタブセキュリティは有効になります。
- false : プロジェクトおよび要求に対するユーザアクセスは、オブジェクトアクセスレベル (オブジェクトの暗黙の役割) のみに従って評価され、カスタムタブのタブセキュリティは無効になります。

enableUniqueldsAcrossTemplatizableObjects

説明

プログラム、プロジェクト、計画、請求書などのテンプレートから作成された複数のオブジェクトにまたがって、固有の内部 ID を使用するかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true を使用すると、テンプレートから作成されたすべてのオブジェクトにまたがって、固有な内部 ID が有効になります。このように、同じテーブルを 2 つの異なるオブジェクトタイプに使用して、クロスオブジェクトレポートを単純化することができます。
- false では、テンプレートから作成されたすべてのオブジェクトにまたがる固有な内部 ID が無効になります。

FMEnabled

説明

「アカウント」、「請求書」、および「予算」の各タブを製品内で表示するかどうかを決める、金融管理モジュールを有効または無効にします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

FMProjVendorEnabled

説明

プロジェクト明細項目のベンダー列の表示/非表示を指定するためのパラメータ。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

FMPrgmVendorEnabled

説明

プログラム明細項目のベンダー列の表示/非表示を指定するためのパラメータ。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Marketing Operations | umoConfiguration | templates

templatesDir

説明

これは、XML ファイルに保管されたすべてのプロジェクトテンプレート定義を入れておくディレクトリに設定します。

完全修飾パスを使用してください。

デフォルト値

templates

assetTemplatesFile

説明

資産のテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、templatesDir プロパティで指定したディレクトリに配置する必要があります。

デフォルト値

asset_templates.xml

planTemplatesFile

説明

計画のテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、`templatesDir` プロパティで指定したディレクトリに配置する必要があります。

デフォルト値

`plan_templates.xml`

programTemplatesFile

説明

プログラムのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、`templatesDir` プロパティで指定したディレクトリに配置する必要があります。

デフォルト値

`program_templates.xml`

projectTemplatesFile

説明

プロジェクトのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、`templatesDir` プロパティで指定したディレクトリに配置する必要があります。

デフォルト値

`project_templates.xml`

invoiceTemplatesFile

説明

請求書のテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、`templatesDir` プロパティで指定したディレクトリに配置する必要があります。

デフォルト値

`invoice_templates.xml`

componentTemplatesFile

説明

マーケティングオブジェクトテンプレートのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、`templatesDir` プロパティで指定したディレクトリに配置する必要があります。

デフォルト値

`component_templates.xml`

metricsTemplateFile

説明

メトリックのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、`templatesDir` プロパティで指定したディレクトリに配置する必要があります。

デフォルト値

`metric_definition.xml`

teamTemplatesFile

説明

チームのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、`templatesDir` プロパティで指定したディレクトリに配置する必要があります。

デフォルト値

`team_templates.xml`

offerTemplatesFile

説明

オファーのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、`templatesDir` プロパティで指定したディレクトリに配置する必要があります。

デフォルト値

`uap_sys_default_offer_comp_type_templates.xml`

Marketing Operations | umoConfiguration | attachmentFolders

uploadDir

説明

プロジェクトの添付ファイルを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

`projectattachments`

planUploadDir

説明

計画の添付ファイルを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

`planattachments`

programUploadDir

説明

プログラムの添付ファイルを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

`programattachments`

componentUploadDir

説明

マーケティングオブジェクトの添付ファイルを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

componentattachments

taskUploadDir

説明

タスクの添付ファイルを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

taskattachments

approvalUploadDir

説明

承認アイテムを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

approvalitems

assetUploadDir

説明

資産を保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

assets

accountUploadDir

説明

アカウントの添付ファイルを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

accountattachments

invoiceUploadDir

説明

請求書の添付ファイルを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

invoiceattachments

graphicalRefUploadDir

説明

属性イメージを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

graphicalrefimages

templateImageDir

説明

テンプレートイメージを保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

images

recentDataDir

説明

各ユーザの最新データ (直列化したもの) を保管する一時ディレクトリ。

デフォルト値

recentdata

workingAreaDir

説明

グリッドのインポート時にアップロードされた CSV ファイルを保管する一時ディレクトリ。

デフォルト値

umotemp

managedListDir

説明

管理対象リストの定義を保管するアップロードディレクトリ。

デフォルト値

managedList

Marketing Operations | umoConfiguration | email notifyEMailMonitorJavaMailHost

説明

電子メール通知メールサーバの DNS ホスト名か、そのドット形式の IP アドレスを指定するオプションのストリング。組織の SMTP サーバのマシン名または IP アドレスに設定してください。

IBM Unica Marketing Operationsに、上記のセッションパラメータを使用する既存の JavaMail セッションを指定しておらず、代理人に「完了」のマークが付いている場合は、このパラメータが必要です。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

notifyDefaultSenderEmailAddress

説明

有効な電子メールアドレスに設定します。システムは、通知電子メールを送信するために使用できる有効な電子メールアドレスがない場合、このアドレスを使用して電子メールを送信します。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

notifySenderAddressOverride

説明

このパラメータを使用して、通知の REPLY-TO および FROM 電子メールアドレスの標準値を指定します。デフォルトでは、これらのアドレスにはイベント所有者の電子メールアドレスが設定されます。

デフォルト値

空白

Marketing Operations | umoConfiguration | markup

IBM Unica Marketing Operations は、添付ファイルのコメントを作成するためのマークアップツールを備えています。Adobe Acrobat マークアップまたはネイティブの Marketing Operations マークアップを使用できます。このカテゴリのプロパティを使用して、使用するオプションを構成してください。

markupServerType

説明

使用するマークアップオプションを決定します。

デフォルト値

MCM

有効な値

- SOAP を使用すると、PDF 文書内のマークアップを編集および表示することができます。Adobe Acrobat Standard または Professional がマークアップに必要です。これを指定した場合、ユーザは Web ネイティブ Marketing Operations 方式によって Web ブラウザ内で作成されたマークアップを表示できません。

SOAP を指定した場合は、markupServerURL パラメータと useCustomMarkup パラメータも構成する必要があります。

- MCM を指定すると、Marketing Operations マークアップ方式が有効になり、ユーザは Web ブラウザ内でマークアップを編集および表示できます。これを指定した場合、ユーザは、以前に Adobe Acrobat を使用して PDF で作成されたマークアップを編集または表示できません。
- 空白の場合、マークアップ機能は無効になり、「**マークアップの表示/追加**」リンクは表示されません。

markupServerURL

説明

markupServerType = SOAP に依存します。

Web アプリケーションサーバがリッスンするポートの番号も含め、マークアップサーバをホストするコンピュータの URL に設定します。この URL には、完全修飾ホスト名が含まれている必要があります。

デフォルト値

http://[SERVER]:[PORT]/plan/services/collabService?wsdl

useCustomMarkup

説明

Windows ユーザが「**Acrobat 送受信コメント (Acrobat Send Receive Comments)**」ボタンを使用してマークアップコメントを送受信できるかどうかを決定します。

デフォルト値

True

有効な値

- true : Windows ユーザは、「**Acrobat 送受信コメント (Acrobat Send Receive Comments)**」ボタンを使用してのみ、マークアップコメントを送受信することができます。クライアントサイド Acrobat インストールの javascript フォルダに、sdkSOAPCollabSample.js ファイルが置かれている必要があります。

markupServerType = SOAP に依存します。

- false : Windows ユーザは、Marketing Operations のカスタムの「**コメントを送信 (Send Comments)**」ボタンを使用してのみ、マークアップコメントを送受信することができます。「Acrobat」ボタンを使用することはできず、IBM Unica Marketing Operations の「**コメント**」ツールバーが有効になるように Acrobat を構成する必要があります。詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations User's Guide*」で PDF の確認に関する説明を参照してください。

instantMarkupFileConversion

説明

true の場合、IBM Unica Marketing Operations は PDF 添付ファイルのイメージへの変換を、ユーザがアイテムをマークアップ用に初めて開いたときに行うのではなく、それらの添付ファイルがアップロードされると同時に行います。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Marketing Operations | umoConfigurations | grid

gridmaxrow

説明

グリッドに取り出す最大行数を定義するオプションの整数。デフォルトの -1 では、すべての行が取り出されます。

デフォルト値

-1

reloadRuleFile

説明

グリッド検証プラグインを再ロードする必要があるかどうかを示す、オプションのブール値パラメータ。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

gridDataValidationClass

説明

カスタムグリッドデータ検証クラスを指定するオプションパラメータ。指定しなかった場合は、グリッドデータの検証にデフォルトの組み込みプラグインが使用されます。

デフォルト値

空白

tvcDataImportFieldDelimiterCSV

説明

グリッドへのインポート中に、データの構文解析に使用する区切り記号。デフォルトはコンマ (,) です。

デフォルト値

, (コンマ)

maximumFileSizeToImportCSVFile

説明

TVC 用のコンマ区切りデータをインポートするときに、アップロードできる最大ファイルサイズを MB 単位で表します。

デフォルト値

0 (無制限)

maximumRowsToBeDisplayedPerPageInGridView

説明

グリッドビューで、1 ページに表示される行数を指定する整数パラメータ。

デフォルト値

100

有効な値

正の整数

griddatxsd

説明

グリッドデータ XSD ファイルの名前。

デフォルト値

griddataschema.xsd

gridpluginxsd

説明

グリッドプラグイン XSD ファイルの名前。

デフォルト値

gridplugin.xsd

gridrulesxsd

説明

グリッドルール XSD ファイルの名前。

デフォルト値

gridrules.xsd

Marketing Operations | umoConfiguration | workflow

hideDetailedDateTime

説明

タスクページの詳細な日時に関する、オプションの表示/非表示パラメータ。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

daysInPastRecentTask

説明

このパラメータは、タスクを「最新」のタスクと見なす期間を決定します。タスクが「アクティブ」であり、過去 X 日未満に開始されたか、タスクの「目標の終了日」が今日と過去の X 日との間である場合、そのタスクは最新のタスクとして表示されます。

デフォルト値

14

有効な値

正の整数

daysInFutureUpcomingTasks

説明

このパラメータは、次回タスクを検索する今後の日数を決定します。タスクが今後 `daysInFutureUpcomingTasks` 日以内に開始されるか、現在日付の前に終了しない場合、それは次回タスクです。

デフォルト値

14

有効な値

正の整数

beginningOfDay

説明

営業日の開始時間。このパラメータは、部分的な期間を使用してワークフロー内の日時を計算するために使用されます。

デフォルト値

9 (午前 9 時)

有効な値

0 から 12 までの整数

numberOfHoursPerDay

説明

1 日の時間数。このパラメータは、部分的な期間を使用してワークフロー内の日時を計算するために使用されます。

デフォルト値

8

有効な値

1 から 24 までの整数

mileStoneRowBGColor

説明

ワークフロータスクの背景色を定義します。値を指定するには、色を表す 6 文字の 16 進コードの前に # 文字を挿入します。例えば、#0099CC のようにします。

デフォルト値

#DDDDDD

Marketing Operations | umoConfiguration | integrationServices

enableIntegrationServices

説明

サードパーティユーザが Web サービスおよびトリガを使用して IBM Unica Marketing Operations 機能にアクセスするために使用できる、統合サービスモジュールを有効または無効にします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

integrationProcedureDefintionPath

説明

カスタムプロシージャ定義 XML ファイルへの、オプションの完全ファイルパス。

デフォルト値

[PLAN_HOME]/devkits/integration/examples/src/procedure/procedure-plugins.xml

integrationProcedureClasspathURL

説明

カスタムプロシージャのクラスパスへの URL。

デフォルト値

file://[PLAN_HOME]/devkits/integration/examples/classes/

Marketing Operations | umoConfiguration | campaignIntegration

defaultCampaignPartition

説明

IBM Unica Marketing Operations を IBM Unica Campaign と統合する場合、このパラメータはプロジェクトテンプレートで campaign-partition-id が定義されていない場合にデフォルトの Campaign パーティションを指定します。

デフォルト値

partition1

webServiceTimeoutInMilliseconds

説明

Web サービス統合 API 呼び出し用に追加されます。このパラメータは、Web サービス API 呼び出しのタイムアウトとして使用されます。

デフォルト値

1800000 ミリ秒 (30 分)

Marketing Operations | umoConfiguration | reports

reportsAnalysisSectionHome

説明

分析セクションレポートのホームディレクトリを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Plan']

reportsAnalysisTabHome

説明

分析タブレポートのホームディレクトリを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Plan - Object Specific Reports']

cacheListOfReports

説明

このパラメータは、オブジェクトインスタンスの分析ページで、レポートのリストのキャッシュを有効/無効にします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Marketing Operations | umoConfiguration | invoiceRollup

invoiceRollupMode

説明

ロールアップの発生方法を指定します。許容される値は、以下のとおりです。

デフォルト値

immediate

有効な値

- `immediate`: 請求書に PAID のマークが付くたびに、ロールアップが発生します。
- `schedule`: ロールアップはスケジュールベースで発生します。

このパラメータを `schedule` に設定した場合、システムは以下のパラメータを使用してロールアップの発生時点を決定します。

- `invoiceRollupScheduledStartTime`
- `invoiceRollupScheduledPollPeriod`

invoiceRollupScheduledStartTime

説明

`invoiceRollupMode` が `schedule` の場合、このパラメータはロールアップが発生するポーリング期間を秒単位で指定します。

`invoiceRollupMode` が `immediate` の場合、このパラメータは使用されません。

デフォルト値

3600 (1 時間)

invoiceRollupScheduledPollPeriod

説明

`invoiceRollupMode` が `schedule` の場合、このパラメータは以下のように使用されます。

- このパラメータに値 (例えば、11:00 pm) が入っている場合、これは、スケジュールが開始される開始時刻です。
- このパラメータが未定義の場合、ロールアップスケジュールはサーバの起動時に開始されます。

`invoiceRollupMode` が `immediate` の場合、このパラメータは使用されません。

デフォルト値

Marketing Operations | umoConfiguration | database

fileName

説明

JNDI 検索を使用してデータソースをロードするための、ファイルへのパス。

デフォルト値

`plan_datasources.xml`

sqlServerSchemaName

説明

使用するデータベーススキーマを指定します。このパラメータは、IBM Unica Marketing Operations データベースに SQL Server を使用している場合にのみ適用されます。

デフォルト値

dbo

thresholdForUseOfSubSelects

説明

ここで指定したレコード数を超えると、(リストページの) SQL の IN 節で、IN 節内の実際のエンティティ ID の代わりにサブクエリを使用する必要があります。このパラメータを設定すると、大量のアプリケーションデータがある IBM Unica Marketing Operations インストール済み環境のパフォーマンスが向上します。パフォーマンスの問題が発生した場合以外は、この値を変更しないことがベストプラクティスです。このパラメータがないかコメント化されている場合、データベースは、しきい値が非常に大きな値に設定された場合と同じように動作します。

デフォルト値

3000

commonDataAccessLayerFetchSize

説明

このパラメータは、パフォーマンスに依存する特定のクリティカルなクエリについて、resultset フェッチサイズを指定します。

デフォルト値

0

commonDataAccessLayerMaxResultSetSize

説明

このパラメータは、パフォーマンスに依存する特定のクリティカルなクエリについて、resultset の最大サイズを指定します。

デフォルト値

-1

useDBSortForAllList

説明

このパラメータは、すべての IBM Unica Marketing Operations リストハンドラを構成するときに使用されます。特定のリストのページング動作をオーバーライドするには、USE_DB_SORT_FOR_[MODULE]_LIST を使用します。

デフォルト値

true

有効な値

- true : データベースからリストデータを一度に 1 ページ取得します。

- false : すべてのリストデータをキャッシュします。

useDBSortForPlanList

説明

このパラメータは、計画リストハンドラを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true : データベースからリストデータを一度に 1 ページ取得します。
- false : すべてのリストデータをキャッシュします。

useDBSortForProjectList

説明

このパラメータは、プロジェクトリストハンドラを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true : データベースからリストデータを一度に 1 ページ取得します。
- false : すべてのリストデータをキャッシュします。

useDBSortForTaskList

説明

このパラメータは、タスクリストハンドラを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true : データベースからリストデータを一度に 1 ページ取得します。
- false : すべてのリストデータをキャッシュします。

useDBSortForProgramList

説明

このパラメータは、プログラムリストハンドラを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true : データベースからリストデータを一度に 1 ページ取得します。
- false : すべてのリストデータをキャッシュします。

useDBSortForApprovalList

説明

このパラメータは、承認リストハンドラを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true : データベースからリストデータを一度に 1 ページ取得します。
- false : すべてのリストデータをキャッシュします。

useDBSortForInvoiceList

説明

このパラメータは、請求書リストハンドラを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true : データベースからリストデータを一度に 1 ページ取得します。
- false : すべてのリストデータをキャッシュします。

useDBSortForAlerts

説明

このパラメータは、アラートリストハンドラを構成するために使用されま
す。

デフォルト値

true

有効な値

- true : データベースからリストデータを一度に 1 ページ取得します。
- false : すべてのリストデータをキャッシュします。

Marketing Operations | umoConfiguration | listingPages

listItemsPerPage

説明

1 つのリストページに表示するアイテム (行) の数を指定します。この値
は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

10

listPageGroupSize

説明

リストページでリストナビゲータに表示されるページ番号のサイズを指定します。例えば、ページ 1-5 は、1 つのページグループです。この値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

5

maximumItemsToBeDisplayedInCalendar

説明

システムがカレンダーに表示するオブジェクト (計画、プログラム、プロジェクト、またはタスク) の最大数。このパラメータを使用して、ユーザに対するカレンダーの表示を、特定のオブジェクト数だけに制限します。数値 0 は、制限がないことを示します。

デフォルト値

0

listDisplayShowAll

説明

リストページに「すべて表示」リンクを表示します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Marketing Operations | umoConfiguration | objectCodeLocking

enablePersistentObjectLock

説明

IBM Unica Marketing Operations をクラスター化環境に配置した場合は、enablePersistentObjectLock を true に設定する必要があります。このオブジェクトロック情報は、データベース内で持続されます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

lockProjectCode

説明

ユーザが「プロジェクトサマリの編集 (Project Summary Edit)」タブでプロジェクトコードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: ロックを使用可能にします
- false: ロックを使用不可にします

lockProgramCode

説明

ユーザが「プログラムサマリの編集 (Program Summary Edit)」タブでプログラムコードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: ロックを使用可能にします
- false: ロックを使用不可にします

lockPlanCode

説明

ユーザが「計画サマリの編集 (Plan Summary Edit)」タブで計画コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: ロックを使用可能にします
- false: ロックを使用不可にします

lockMarketingObjectCode

説明

ユーザが「マーケティングオブジェクトサマリの編集 (Marketing Object Summary Edit)」タブでマーケティングオブジェクトコードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: ロックを使用可能にします
- false: ロックを使用不可にします

lockAssetCode

説明

ユーザが「資産サマリの編集 (Asset Summary Edit)」タブで資産コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: ロックを使用可能にします
- false: ロックを使用不可にします

Marketing Operations | umoConfiguration | thumbnailGeneration

trueTypeFontDir

説明

True Type フォントが置かれているディレクトリを指定します。このパラメータは、Aspose を使用する非 Windows プラットフォームでサムネールを生成するために必要です。Windows インストール済み環境の場合、このパラメータはオプションです。

デフォルト値

空白

coreThreadPoolSize

説明

サムネールジェネレータスレッド用に、スレッドプール内に保持される永続スレッドの数を指定します。

デフォルト値

5

maxThreadPoolSize

説明

サムネールジェネレータスレッド用にスレッドプール内で許容される、スレッドの最大数を指定します。

デフォルト値

10

threadKeepAliveTime

説明

サムネールジェネレータスレッドのキープアライブ時間を構成するためのパラメータ。

デフォルト値

60

threadQueueSize

説明

サムネールジェネレータスレッドのスレッドキューサイズを構成するためのパラメータ。

デフォルト値

20

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications notifyPlanBaseURL

説明

ホスト名とポート番号を含む、IBM Unica Marketing Operations の配置の URL。Marketing Operations は、この URL を、Marketing Operations 内の他の情報へのリンクが入っている通知に組み込みます。

注: メールクライアントと IBM Unica Marketing Operations サーバを同じマシン上で実行している場合以外は、「localhost」をサーバ名として使用しないでください。

デフォルト値

`http://[SERVER]:[PORT]/plan/affiniumplan.jsp`

notifyDelegateClassName

説明

サービスによってインスタンス化される代理実装の完全修飾 Java クラス名。このクラスは、`com.unicapcorp.afc.service.IServiceImpl` インタフェースを実装する必要があります。指定しなかった場合は、デフォルトでローカル実装になります。

デフォルト値

空白

notifyIsDelegateComplete

説明

代理実装が完了したかどうかを示す、オプションのブール値ストリング。指定しなかった場合は、デフォルトで「true」になります。

デフォルト値

`true`

有効な値

`true | false`

notifyEventMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations製品が開始された後、通知モニタが初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは `11:45 PM` になります。

デフォルト値

Marketing Operations が開始された直後。

notifyEventMonitorPollPeriod

説明

イベントモニタがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。ポーリング期間とポーリング期間の間、イベントはイベントキューに累積されます。時間が短いほど通知の処理が早く行われますが、システムのオーバーヘッドが大きくなる場合があります。デフォルト値を消去して、値を空白のままにした場合、ポーリング期間はデフォルトのやや短めの時間 (通常では 1 分未満) になります。

デフォルト値

5

notifyEventMonitorRemoveSize

説明

キューから一度に削除するイベントの数を指定します。イベントモニタは、この値で指定された増分を単位として、イベントキューから何もなくなるまでイベントを削除し続けます。

注: この値を 1 以外に設定すると、イベント処理のパフォーマンスが向上する場合がありますが、削除されたすべてのイベントが処理される前にサービスホストがダウンした場合は、イベントを失うおそれがあります。

デフォルト値

10

alertCountRefreshPeriodInSeconds

説明

アラートカウンターの、システム全体のアラートカウント更新期間を秒単位で指定します。このカウンターは、ユーザのログイン後にナビゲーションバーの上部に表示されます。

注: マルチユーザ環境では、更新期間を変更してポーリングを高速にすると、パフォーマンスに影響が出る場合があります。

デフォルト値

180 (3 分)

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | email

notifyEMailMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations 製品が開始された後、電子メールモニタが初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 PM になります。

デフォルト値

IBM Unica Marketing Operations が開始された直後。

notifyEMailMonitorPollPeriod

説明

電子メールモニタがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

注: イベントと同様に、ポーリング期間とポーリング期間の間、電子メールはキューに累積されます。ポーリング時間が短いほど電子メールが早く送信されますが、システムのオーバーヘッドが大きくなる場合があります。

デフォルト値

60

notifyEMailMonitorJavaMailSession

説明

電子メール通知に使用する、既存の、初期化された JavaMail セッションの JNDI 名。指定しなかった場合、代理人に「完了」のマークが付いているときは、IBM Unica Marketing Operationsがセッションを作成できるよう、JavaMail ホストパラメータを指定する必要があります。

デフォルト値

空白

notifyEMailMonitorJavaMailProtocol

説明

電子メール通知に使用する、電子メールサーバのトランスポートプロトコルを指定します。

デフォルト値

smtp

notifyEMailMonitorRemoveSize

説明

キューから一度に削除する電子メールの数を指定します。電子メールモニタは、電子メールキューから何も残らなくなるまで、付加的に電子メールの削除を続行します。

注: 1 以外の値を設定すると、電子メールの処理パフォーマンスが向上する場合がありますが、削除されたすべての電子メールが処理される前にサービスホストがダウンした場合は、電子メールを失うおそれがあります。

デフォルト値

10

notifyEMailMonitorMaximumResends

説明

最初の送信の試みが失敗した電子メールメッセージについて、システムがそのメッセージの送信を試みる最大回数を指定します。送信に失敗した場合、電子メールは、既にこのパラメータで許容された最大試行回数に到達した場合を除いて、キューに書き戻されます。

例えば、電子メールモニタが 60 秒ごとにポーリングを行うように設定されている場合、maximumResend を 60 に設定すると、電子メールモニタは 1 分ごとに (1 回のポーリングで 1 回) 最大 1 時間、再試行します。値を 1440 (24x60) に設定すると、1 分ごとに最大 24 時間、再試行が行われます。

デフォルト値

1440

showUserNameInEmailNotificationTitle

説明

IBM Unica Marketing Operations の通知システムとアラートシステムで、電子メール通知の「送信者 (From)」フィールドにユーザ名を含めるかどうかを指定します。

注: この設定は、IBM Unica Marketing Operations の通知システムとアラートシステムによって送信される電子メールにのみ適用されます。

デフォルト値

false

有効な値

- true : Marketing Operations はユーザ名をメッセージのタイトルに付加し、両方を電子メールの「送信者 (From)」フィールドに表示します。
- false : Marketing Operations は「送信者 (From)」フィールドにメッセージのタイトルだけを表示します。

notifyEMailMonitorJavaMailDebug

説明

JavaMail デバッグモードを設定するかどうかを指定します。

デフォルト値

false

有効な値

- true : JavaMail デバッグを有効にします。
- false : デバッグトレースを無効にします。

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | project

notifyProjectAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations 製品が開始された後、プロジェクト警告モニタが初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは `11:59 PM` になります。デフォルト値を削除して、値を空白のままにした場合、モニタは作成された直後に開始されます。

デフォルト値

10:00 PM

notifyProjectAlarmMonitorPollPeriod

説明

プロジェクト警告モニタおよびプログラム警告モニタが、ポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

60

notifyProjectAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

プロジェクトの開始日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの開始通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が `-1` の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

notifyProjectAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

プロジェクトの終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの終了通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が `-1` の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledStartCondition

説明

タスクの開始日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの開始通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が `-1` の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledEndCondition

説明

タスクの終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの終了通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskLateCondition

説明

タスクの開始日の何日後に、タスクが開始されていないことについて、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの通知を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskOverdueCondition

説明

タスクの終了日の何日前に、タスクが終了していないことについて、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの通知を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledMilestoneCondition

説明

タスクマイルストーンの開始日の何日後に、IBM Unica Marketing Operations で通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | projectRequest

notifyRequestAlarmMonitorLateCondition

説明

要求が遅れていることについて、IBM Unica Marketing Operations で通知を送信するまでの日数を定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyRequestAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

要求の終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの終了通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | program

notifyProgramAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

プログラムの開始日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

notifyProgramAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

プログラムの終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの終了通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | marketingObject

notifyComponentAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

マーケティングオブジェクトの開始日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの通知の送信を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

notifyComponentAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

マーケティングオブジェクトの終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの終了通知の送信を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | approval

notifyApprovalAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations製品が開始された後、承認警告モニタが初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 PM になります。デフォルト値を削除して、この値を空白のままにした場合、モニタは作成された直後に開始されます。

注: 最良の結果を得るには、警告モニタがオフピーク時間に開始されるように開始時刻をずらして構成し、データ処理の負荷が分散されるようにしてください。

デフォルト値

9:00 PM

notifyApprovalAlarmMonitorPollPeriod

説明

承認警告モニタがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

60

notifyApprovalAlarmMonitorLateCondition

説明

承認の開始日の何日後に、承認が遅れていることについて、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの通知を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyApprovalAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

承認の終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザへの終了通知の送信を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | asset

notifyAssetAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations 製品が開始された後、資産警告モニタが初めて処理を開始する必要がある時点指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 PM になります。デフォルト値を削除して、この値を空白のままにした場合、モニタは作成された直後に開始されます。

注: 最良の結果を得るには、警告モニタがオフピーク時間に開始されるように開始時刻をずらして構成し、データ処理の負荷が分散されるようにしてください。

デフォルト値

11:00 PM

notifyAssetAlarmMonitorPollPeriod

説明

資産警告モニタがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になる時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

60

notifyAssetAlarmMonitorExpirationCondition

説明

IBM Unica Marketing Operations で、資産の有効期限が切れそうなことをユーザに通知する必要がある場合、資産の有効期限が切れるまでの日数を指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations は有効期限の確認を行いません。

デフォルト値

3

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | invoice

notifyInvoiceAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations 製品が開始された後、請求書警告モニタが初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 PM になります。デフォルト値を削除して、値を空白のままにした場合、モニタは作成された直後に開始されます。

注: 最良の結果を得るには、警告モニタがオフピーク時間に開始されるように開始時刻をずらして構成し、データ処理の負荷が分散されるようにしてください。

デフォルト値

9:00 PM

notifyInvoiceAlarmMonitorDueCondition

説明

IBM Unica Marketing Operations で、ユーザに対して請求書の支払い期限が近づいていることの通知を開始する日数を指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

5

Campaign 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページにある Campaign 構成プロパティについて説明します。

Campaign

これらの構成プロパティは、Campaign のインストール済み環境でサポートされるコンポーネントアプリケーションとロケールを指定します。

currencyLocale

説明

currencyLocale プロパティは、表示ロケールとは関係なく、Campaign Web アプリケーションでの通貨の表示方法を制御するグローバル設定です。

重要: 表示ロケールが変更された場合 (例えば、マルチロケール機能が実装されており、表示ロケールがユーザ固有のロケールに基づいて変更された場合)、Campaign は通貨変換を行いません。ロケールを切り替えた場合、例えば、米国英語で US\$10.00 である通貨の金額をフランス語ロケールに切り替えた場合、通貨記号はロケールと共に変更されても、通貨の金額は変更されない (10,00) ことを認識しておく必要があります。

デフォルト値

en_US

supportedLocales

説明

supportedLocales プロパティは、Campaign でサポートされるロケール、または言語とロケールのペアを指定します。このプロパティの値は、Campaign をインストールしたときに、インストーラによって設定されます。

デフォルト値

Campaign がローカライズされているすべての言語/ロケール。

defaultLocale

説明

defaultLocale プロパティは、supportedLocales プロパティで指定されたロケールのどれを Campaign のデフォルトの表示ロケールと見なすかを指定します。このプロパティの値は、Campaign をインストールしたときに、インストーラによって設定されます。

デフォルト値

en

acolnInstalled

パス

説明

acoInstalled プロパティは、Optimize がインストールされているかどうかを指定します。

Optimize がインストールされ、構成されている場合は、値を yes に設定します。これにより、Optimize プロセスがフローチャートに表示されます。値が true で Optimize がインストールされていないか構成されていない場合、プロセスは表示されますが無効になります (グレー化されます)。

デフォルト値

false

有効な値

false および true

collaborateInstalled

説明

collaborateInstalled プロパティは、Distributed Marketing がインストールされているかどうかを指定します。Distributed Marketing がインストールされ、構成されている場合は、値を true に設定します。これにより、Distributed Marketing の機能を Campaign ユーザインタフェースで使用できるようになります。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Campaign | Collaborate

このカテゴリのプロパティは、Distributed Marketing の構成に関するものです。

CollaborateIntegrationServicesURL

説明

CollaborateIntegrationServicesURL プロパティは、Distributed Marketing のサーバとポート番号を指定します。この URL は、ユーザがフローチャートを Distributed Marketing に公開したときに、Campaign によって使用されます。

デフォルト値

http://localhost:7001/collaborate/services/
CollaborateIntegrationServices/1.0

Campaign | navigation

このカテゴリの一部のプロパティは、内部で使用されるため、変更しないでください。

welcomePageURI

説明

welcomePageURI プロパティは、IBM アプリケーションによって内部で使用されます。これは Campaign 索引ページの Uniform Resource Identifier を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

seedName

説明

seedName プロパティは、IBM アプリケーションによって内部で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

Campaign > navigation > type プロパティは、IBM アプリケーションによって内部で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

httpPort

説明

このプロパティは、Campaign Web アプリケーションサーバによって使用されるポートを指定します。Campaign のインストール済み環境でデフォルトと異なるポートが使用されている場合は、このプロパティの値を編集する必要があります。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

SSL が構成されている場合、このプロパティは、Campaign Web アプリケーションサーバによってセキュア接続のために使用されるポートを指定します。Campaign のインストール済み環境でデフォルトと異なるセキュアポートが使用されている場合は、このプロパティの値を編集する必要があります。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

Campaign > navigation > serverURL プロパティは、Campaign によって使用される URL を指定します。Campaign のインストール済み環境の URL がデフォルトと異なる場合は、次のように値を編集してください。

`http://machine_name_or_IP_address:port_number/context-root`

デフォルト値

`http://localhost:7001/Campaign`

serverURLInternal

パス

説明

serverURLInternal プロパティは、SiteMinder が使用される場合、Campaign Web アプリケーションの URL を指定します。このプロパティが空の場合は、serverURL プロパティの値が使用されます。SiteMinder を使用する場合は、この値を次の形式で Campaign Web アプリケーションサーバの URL に設定する必要があります。

`http://machine_name_or_IP_address:port_number/context-root`

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

campaignDetailPageURI

説明

campaignDetailPageURI プロパティは、IBM アプリケーションによって内部で使用されます。これは、Campaign 詳細ページの Uniform Resource Identifier を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

`campaignDetails.do?id=`

flowchartDetailPageURI

説明

flowchartDetailPageURI プロパティは、特定のキャンペーンでフローチャートの詳細へ移動する URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

`flowchartDetails.do?campaignID=&id=`

offerDetailPageURI

説明

offerDetailPageURI プロパティは、特定のオファーの詳細へ移動する URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

offerDetails.do?id=

offerlistDetailPageURI

説明

offerlistDetailPageURI プロパティは、特定のオファーリストの詳細へ移動する URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

displayOfferList.do?offerListId=

displayName

説明

displayName プロパティは、各 IBM 製品の GUI に存在するドロップダウンメニュー内で、Campaign リンクに使用されるリンクテキストを指定します。

デフォルト値

Campaign

Campaign | caching

caching カテゴリのプロパティは、チャンネル、イニシアチブ、キャンペーン、セッション、およびオファー用のキャッシュされたデータが、保持される時間の長さを指定します。

offerTemplateDataTTLSeconds

説明

offerTemplateDataTTLSeconds プロパティは、システムがオファーテンプレートのキャッシュデータを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュデータが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

campaignDataTTLSeconds

説明

campaignDataTTLSeconds プロパティは、システムが Campaign のキャッシュデータを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュデータが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

sessionDataTTLSeconds

説明

`sessionDataTTLSeconds` プロパティは、システムがセッションのキャッシュデータを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュデータが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

folderTreeDataTTLSeconds

説明

`folderTreeDataTTLSeconds` プロパティは、システムがフォルダツリーのキャッシュデータを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュデータが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

attributeDataTTLSeconds

説明

`attributeDataTTLSeconds` プロパティは、システムがオファー属性のキャッシュデータを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュデータが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

initiativeDataTTLSeconds

説明

`initiativeDataTTLSeconds` プロパティは、システムがイニシアチブのキャッシュデータを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュデータが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

offerDataTTLSeconds

説明

`offerDataTTLSeconds` プロパティは、システムがオファーのキャッシュデータを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュデータが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

segmentDataTTLSeconds

説明

`segmentDataTTLSeconds` プロパティは、システムがセグメントのキャッシュデータを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュデータが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

Campaign | partitions

このカテゴリには、デフォルトパーティション (名前は `partition1`) を含むすべての Campaign パーティションを構成するために使用されるプロパティが含まれています。Campaign パーティションごとに、1 つのカテゴリを作成する必要があります。このセクションでは、`partition[n]` カテゴリのプロパティについて説明します。これらのプロパティは、Campaign 内に構成するすべてのパーティションに適用されます。

Campaign | partitions | partition[n] | eMessage

このカテゴリのプロパティを使用すると、受信者リストの特性を定義し、リストを IBM Unica Hosted Services にアップロードするリソースの場所を指定することができます。

eMessagePluginJarFile

説明

Recipient List Uploader (RLU) として動作するプラグインファイルの場所を示す、完全なパス。この Campaign へのプラグインは、OLT データとそれに関連するメタデータを、IBM によってホストされるリモートサービスにアップロードします。指定する場所は、Campaign Web アプリケーションサーバをホストするマシンのファイルシステム内にある、完全なローカルディレクトリパスでなければなりません。

IBM インストーラを実行すると、デフォルトパーティションについて、この設定のデータが自動的に設定されます。追加のパーティションについては、管理者が手動でこのプロパティを構成する必要があります。RLU は、eMessage のインストール済み環境ごとに 1 つしか存在しないため、すべてのパーティションが RLU に同じ場所を指定する必要があります。

この設定は、IBM から変更するよう指示された場合以外、変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

Campaign Web サーバをインストールしたマシンへの完全なローカルディレクトリパス。

defaultSeedInterval

説明

defaultSeedType が Distribute list である場合、シードメッセージ間のメッセージ数。

デフォルト値

1000

defaultSeedType

説明

eMessage が受信者リストにシードアドレスを挿入するために使用する、デフォルトの方式。

デフォルト値

Distribute IDS

有効な値

- **Distribute IDS** - 受信者リストのサイズと、使用可能なシードアドレスの数に基づいて、ID を均等に分散し、シードアドレスを受信者リスト全体に均等間隔で挿入します。
- **Distribute list** - すべての defaultSeedInterval ID のシードアドレスをメインリストに挿入します。使用可能なシードアドレスのリスト全体を、指定された間隔で受信者リスト全体に挿入します。挿入点間の間隔を指定する必要があります。

oltTableNamePrefix

説明

生成されたスキーマ内で、出力リストテーブルに使用されます。管理者は、このパラメータを定義する必要があります。

デフォルト値

OLT

有効な値

このプレフィックスは、8 文字以下の英数字またはアンダースコアを含むことができ、英字で始まる必要があります。

oltDimTableSupport

説明

この構成パラメータは、eMessage スキーマ内に作成された出力リストテーブル (OLT) にディメンションテーブルを追加できるかどうかを制御します。ディメンションテーブルは、電子メールに拡張スクリプトを使用して、電子メールメッセージ内にデータテーブルを作成するために必要です。

デフォルト設定は False です。マーケティング担当者が eMessage プロセスを使用して受信者リストを定義するときに、ディメンションテーブルを作成できるようにするには、このプロパティを True に設定する必要があります。データテーブルの作成と電子メールに拡張スクリプトを使用する方法については、「*eMessage User's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Campaign | partitions | partition[n] | reports

これらの構成プロパティは、レポートのフォルダを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析 (Analysis)」タブにリストされる、バーストされたオファーレポートの仕様が入っているフォルダの場所を指定します。このタブは、ナビゲーションペインの「分析 (Analysis)」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、セグメントの「分析 (Analysis)」タブにリストされるセグメントレポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
```

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、オファーの「分析 (Analysis)」タブにリストされるオファーレポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']
```

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーションペインの「分析 (Analysis)」リンクをクリックしたときに「分析 (Analysis)」タブにリストされる、バーストされたセグメントレポートの仕様が入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']
```

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティは、レポートの仕様が保管されているルートフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']
```

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析 (Analysis)」タブにリストされるキャンペーンレポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']
```

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーションペインの「分析 (Analysis)」リンクをクリックしたときに「分析 (Analysis)」タブにリストされる、バーストされたキャンペーンレポートの仕様が入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']
```

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析 (Analysis)」タブにリストされる eMessage レポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']
```

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポートサーバフォルダストリング。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']
```

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

インタラクティブチャンネル分析タブレポートのレポートサーバフォルダストリング。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']
```

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partition[n] | validation

Campaign に付属する Validation Plugin Development Kit (PDK) を使用すると、Campaign で使用するカスタム検証ロジックをサードパーティで開発することができます。 partition[n] > validation カテゴリのプロパティは、カスタム検証プログラムのクラスパスとクラス、およびオプションの構成ストリングを指定します。

validationClass

説明

validationClass プロパティは、Campaign で検証に使用するクラスの名前を指定します。クラスへのパスは、validationClasspath プロパティで指定されます。クラスは、そのパッケージ名で完全修飾されている必要があります。

次に例を示します。

```
com.unica.campaign.core.validation.samples.SimpleCampaignValidator
```

これは、サンプルコードからの SimpleCampaignValidator クラスを示します。

このプロパティは、デフォルトでは定義されておらず、その場合、Campaign はカスタム検証を実行しません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

validationConfigString

説明

validationConfigString プロパティは、検証プラグインが Campaign によってロードされたときに、そのプラグインに渡される構成ストリングを指定します。構成ストリングの使用は、使用されるプラグインによって異なる場合があります。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

validationClasspath

説明

validationClasspath プロパティは、Campaign でカスタム検証に使用されるクラスへのパスを指定します。

以下のようにパスを指定できます。

- 値は、完全なパスでも相対パスでもかまいません。パスが絶対パスでない場合、動作は Campaign を実行しているアプリケーションサーバによって異なります。WebLogic は、ドメイン作業ディレクトリへのパスを使用します。これは、デフォルトでは以下のとおりです。

```
c:%bea%user_projects%domains%mydomain
```

- パスがスラッシュ (UNIX ではスラッシュ /、Windows では円記号 ¥) で終わる場合、Campaign はそれを、使用する Java プラグインクラスが入っているディレクトリへのパスと見なします。パスがスラッシュで終わらない場合、Campaign はそれを、Java クラスが入っている jar ファイルの名前と見なします。例えば、値 /opt/affinium/campaign/pdk/lib/validation.jar は UNIX プラットフォーム上のパスで、それはプラグイン開発者キットに付属する出来合いの jar ファイルを指しています。

このプロパティはデフォルトでは定義されておらず、その場合、このプロパティは無視されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel

partition[n] > audienceLevels カテゴリには、サブカテゴリと、ユーザが Campaign でオーディエンスレベルを作成したときに作成されてデータが設定されるプロパティが含まれています。このカテゴリ内のプロパティを編集しないでください。

partition[n] > audienceLevels > audienceLevel カテゴリ内のプロパティは、オーディエンスレベル内のフィールドの数とオーディエンスレベルの名前を指定します。これらのプロパティは、ユーザが Campaign でオーディエンスレベルを作成したときにデータが設定されます。このカテゴリ内のプロパティを編集しないでください。

numFields

説明

このプロパティは、ユーザが Campaign の「管理 (Administration)」ページでオーディエンスレベルを作成するときにデータが設定されます。このプロパティを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

audienceName

説明

このプロパティは、ユーザが Campaign の「管理 (Administration)」ページでオーディエンスレベルを作成するときにデータが設定されます。このプロパティを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel | field[n]

このカテゴリのプロパティは、オーディエンスレベルフィールドを定義します。これらのプロパティは、ユーザが Campaign の「管理 (Administration)」ページでオーディエンスレベルを作成するときにデータが設定されます。このカテゴリのプロパティを編集しないでください。

type

説明

partition[n] > audienceLevels > audienceLevel > field[n] > type プロパティは、ユーザが Campaign の「管理 (Administration)」ページでオーディエンスレベルを作成するときにデータが設定されます。このプロパティを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

name

説明

partition[n] > audienceLevels > audienceLevel > field[n] > name プロパティは、ユーザが Campaign の「管理 (Administration)」ページでオーディエンスレベルを作成するときにデータが設定されます。このプロパティを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | Partitions | partition[n] | dataSources

このカテゴリのプロパティは、Campaign がそれ自体のシステムテーブルも含め、データベースと対話する方法を構成します。これらのプロパティは、Campaign でアクセスできるデータベースと、クエリの形式に関する多くの側面を指定します。

Campaign で追加する各データソースは、`partition[n] > dataSources > [DATA_SOURCE_NAME]` の下のカテゴリによって表されます。

注: 各パーティションの Campaign システムテーブルデータソースは、Marketing Platform 内で `UA_SYSTEM_TABLES` の名前が付いている必要があります、すべての Campaign パーティションの「構成」ページに `dataSources > UA_SYSTEM_TABLES` カテゴリが存在する必要があります。

AccessLibrary

説明

Campaign は、データソースタイプに応じて、そのデータソースアクセスライブラリを選択します。例えば、`libora4d.so` は Oracle 接続に使用され、`libdb24d.so` は DB2 接続に使用されます。ほとんどの場合、デフォルトの選択が適切です。しかし、使用する Campaign 環境でデフォルト値が正しくないと分かった場合は、AccessLibrary プロパティを変更できます。例えば、64 ビットの Campaign には 2 つの ODBC アクセスライブラリが用意されています。1 つは `unixODBC` の実装と互換性のある ODBC データソースに適しており (`libodb4d.so` — Campaign で、例えば Informix へのアクセスに使用されます)、もう 1 つは、DataDirect 実装と互換性があります (`libodb4dDD.so` — Campaign で、例えば Teradata へのアクセスに使用されます)。

AIX 用の追加ライブラリ

説明

Campaign には、ODBC Unicode API でなく ODBC ANSI API をサポートする AIX ODBC ドライバマネージャ用に、2 つの追加ライブラリが組み込まれています。

- `libodb4dAO.so` (32 ビットおよび 64 ビット) — `unixODBC` 互換の実装用の ANSI 専用ライブラリ
- `libodb4dDDAO.so` (64 ビット専用) — DataDirect 互換の実装用の ANSI 専用ライブラリ

デフォルトのアクセスライブラリをオーバーライドする必要がある場合 (例えば、DataDirect ドライバマネージャと Informix 用のドライバを購入する場合)、このパラメータを必要に応じて設定します (この例では、`libodb4dDD.so` に変更し、デフォルトの選択の `libodb4d.so` をオーバーライドします)。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

ASMSaveDBAuthentication

説明

ASMSaveDBAuthentication プロパティは、Campaign にログインし、前にログインしていないデータソース内の表をマップしたときに、Campaign でユーザ名とパスワードを IBM Unica Marketing に保存するかどうかを指定します。

このプロパティを TRUE に設定した場合、それ以降にこのデータソースにログインしたときに、Campaign はユーザ名とパスワードを入力するプロンプトを出しません。このプロパティを FALSE に設定した場合、このデータソースにログインするたびに、Campaign はユーザ名とパスワードを入力するプロンプトを出します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

ASMUserForDBCredentials

説明

ASMUserForDBCredentials プロパティは、Campaign システムユーザに割り当てられる IBM Unica Marketing ユーザ名を指定します (Campaign システムテーブルにアクセスするために必要)。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

AllowBaseJoinsInSelect

説明

Campaign が、選択プロセスで使用された (同じデータソースからの) 基本テーブルの SQL 結合を実行しようとするかどうかを決定します。実行しない場合は、Campaign サーバ上で同等の結合が実行されます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

AliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティは、ディメンションテーブルを使用して新規テーブルに書き込むときに Campaign で自動的に作成されるエイリアス名の Campaign での形成方法を指定します。

各データベースには、ID の長さに最大値があることに注意してください。使用しているデータベースの資料で、設定する値がデータベースの ID の最大長を超えないことを確認してください。

デフォルト値

A

AllowSegmentUsingSQLCase

説明

AllowSegmentUsingSQLCase プロパティは、特定の構成条件が満たされたときに、Campaign セグメントプロセスで複数の SQL ステートメントを単一の SQL ステートメントに統合するかどうかを指定します。

このプロパティを TRUE に設定すると、以下の条件がすべて満たされた場合にパフォーマンスが大幅に向上します。

- セグメントが相互排他的である。
- すべてのセグメントが単一のテーブルからのものである。
- 各セグメントの基準が IBM マクロ言語に基づいている。

この場合、Campaign はセグメントを実行するために単一の SQL CASE ステートメントを生成し、その直後に、Campaign アプリケーションサーバ上でフィールドによるセグメント処理が行われます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

AllowTempTables

説明

AllowTempTables プロパティは、Campaign でデータベース内に一時テーブルを作成するかどうかを指定します。一時テーブルを作成すると、キャンペーンのパフォーマンスが大幅に向上する可能性があります。値が TRUE の場合、一時テーブルが有効になります。

一時テーブルが有効な場合、データベースに対して (例えば、セグメントプロセスによって) クエリが発行されるたびに、結果の ID がデータベース内の一時テーブルに書き込まれます。追加のクエリが発行された場合、Campaign はその一時テーブルを使用して、データベースから行を取り出すことができます。

一時テーブルが有効でない場合、Campaign は選択された ID をサーバメモリ内に保持します。追加のクエリでは、データベースから ID が取り出され、サーバメモリ内の ID に突き合わされます。

一時テーブルの結合の制御については、MaxTempTableJoinPctSelectAll および MaxTempTableJoinPctWithCondition を参照してください。

一時テーブルを使用するには、データベースに書き込む適切な特権を持っている必要があります。これは、データベースに接続するときに提供するデータベースログインによって判別されます。

デフォルト値

TRUE

UseTempTablePool

説明

注: このプロパティは、Teradata データソースでのみサポートされます。それ以外のサポートされているすべてのデータベースでは、このオプションを FALSE に設定してください。

UseTempTablePool プロパティを TRUE に設定すると、一時テーブルはデータベースから除去されません。一時テーブルは部分的に切り捨てられ、Campaign によって保守されるテーブルのプールから再利用されます。FALSE に設定した場合、一時テーブルは除去され、フローチャートが実行されるたびに再作成されます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

TempTablePreTruncateRunScript

説明

注: このプロパティは、Teradata データソースでのみサポートされます。それ以外のサポートされているすべてのデータベースでは、このオプションを設定しないでください。

TempTablePreTruncateRunScript プロパティを使用して、一時テーブルを部分的に切り捨てる前に実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。指定するスクリプトを使用して、PostTempTableCreateRunScript プロパティで指定した SQL ステートメントの効果を否定できます。

例えば、PostTempTableCreateRunScript プロパティで次の SQL ステートメントを含んだスクリプトを指定して、索引を作成できます。

```
CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>
```

その後、次のステートメントを持つ別のスクリプトを

TempTablePreTruncateRunScript プロパティで指定して、索引を除去します。

```
DROP INDEX <TABLENAME>Idx_1 ON <TABLENAME>
```

デフォルト値

未定義

有効な値

シェルスクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

TempTablePreTruncateExecutionSQL

説明

注: このプロパティは、Teradata データソースでのみサポートされます。それ以外のサポートされているすべてのデータベースでは、このオプションを設定しないでください。

TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティを使用して、一時テーブルを部分的に切り捨てる前に実行する SQL クエリを指定します。指定するクエリを使用して、TempTablePostExecutionSQL プロパティで指定した SQL ステートメントの効果を否定できます。

例えば、TempTablePostExecutionSQL プロパティで次の SQL ステートメントを指定して、索引を作成できます。

```
CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>
```

その後、TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティで次のクエリを指定して、索引を除去します。

```
DROP INDEX <TABLENAME>Idx_1 ON <TABLENAME>
```

デフォルト値

未定義

有効な値

有効な SQL クエリ

BulkInsertBlockSize

説明

BulkInsertBlockSize プロパティは、Campaign でデータベースに一度に渡されるデータブロックの最大サイズを、レコード数単位で定義します。

デフォルト値

100

BulkInsertRequiresColumnType

説明

BulkInsertRequiresColumnType プロパティは、Data Direct ODBC データソースをサポートするためにのみ必要です。一括 (配列) 挿入を使用する場合は、Data Direct ODBC データソースについて、このプロパティを TRUE に設定します。他の大部分の ODBC ドライバと互換性を持たせるには、このプロパティを FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

BulkReaderBlockSize

説明

BulkReaderBlockSize プロパティは、Campaign でデータベースから一度に読み取るデータブロックのサイズを、レコード数単位で定義します。

デフォルト値

2500

ConditionalSQLCloseBracket

説明

ConditionalSQLCloseBracket プロパティは、未加工 SQL カスタムマクロ内で条件セグメントの終わりを示すために使用する括弧のタイプを指定します。条件化されたセグメントは、ConditionalSQLOpenBracket プロパティと ConditionalSQLCloseBracket プロパティによって指定された括弧に囲まれており、一時テーブルが存在する場合にのみ使用され、一時テーブルがない場合は無視されます。

デフォルト値

} (右中括弧)

ConditionalSQLOpenBracket

説明

ConditionalSQLOpenBracket プロパティは、未加工の SQL カスタムマクロ内で条件セグメントの始まりを示すために使用する括弧のタイプを指定します。条件化されたセグメントは、ConditionalSQLOpenBracket プロパティと ConditionalSQLCloseBracket プロパティによって指定された括弧に囲まれており、一時テーブルが存在する場合にのみ使用され、一時テーブルがない場合は無視されます。

デフォルト値

{ (左中括弧)

ConnectionCacheSize

説明

ConnectionCacheSize プロパティは、Campaign で各データソースのキャッシュ内に保守される接続の数を指定します。

デフォルト (N=0) では、Campaign は操作ごとにデータソースに対する新規接続を確立します。Campaign が接続のキャッシュを保守しており、接続の再利用が可能な場合、Campaign は新規接続を確立せずに、キャッシュにある接続を使用します。

設定値が 0 でない場合、ある接続を使用してプロセスが実行されると、Campaign は InactiveConnectionTimeout プロパティによって指定された時間だけ、指定された数までの接続を開いたまま保持します。その時間が満了すると、接続はキャッシュから削除され、閉じられます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DSN

説明

DSN プロパティを使用して、定義している Campaign データソース用の物理データソースを識別します。この値は、デフォルトでは定義されていません。

同じ物理データソースを参照する、複数の論理データソースを指定できます。例えば、2 つの Campaign データソースを作成し、一方を AllowTempTables = TRUE とし、もう一方を AllowTempTables = FALSE とすることができます。これらのデータソースは、Campaign 内でそれぞれ異なるデータソース名を持ちますが、同じ物理データソースを参照する場合は、同じ DSN 値を持ちます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

DSNUsingOSAuthentication

説明

DSNUsingOSAuthentication プロパティは、Campaign データソースが SQL Server である場合にのみ適用されます。DSN が Windows 認証モードを使用するよう構成されている場合は、この値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DateFormat

説明

Campaign は Campaign マクロ言語を使用する場合、または日付列からのデータを解釈する場合、DateFormat プロパティの値を使用して、date 形式内のデータの解析方法を判別します。

DateFormat プロパティの値は、Campaign がこのデータソースから日付を受け取るために予期する形式に設定してください。この値は、そのデータベースで選択された日付の表示に使用される形式に一致する必要があります。ほとんどのデータベースの場合、この設定は DateOutputFormatString プロパティの設定と同じです。

注: マルチロケール機能を使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (短縮された月名)、または %B (完全な月名) を含んでいる日付形式を使用しないでください。代わりに、月には数値を使用し、区切り文字で区切った形式か固定形式を使用してください。

データベースで使用されている日付形式を判別するには、以下で説明するようにデータベースから日付を選択します。

データベース別の日付の選択

データベース	正しい設定を判別するには ...
DB2	<p>Campaign サーバを実行しているマシンからデータベースに接続してください。Campaign¥bin ディレクトリにある db2test を使用して接続し、次のコマンドを発行します。</p> <pre>values current date</pre>
Informix	<p>Informix には、データベースへの書き込みおよび選択にさまざまな形式があります。Campaign サーバを実行しているマシンからデータベースに接続してください。Campaign¥bin ディレクトリにある odbctest を使用して接続し、次のコマンドを発行します。</p> <pre>select today from informix.systables where tabid=1;</pre>
Netezza	<p>Campaign サーバを実行しているマシンからデータベースに接続してください。Campaign¥bin ディレクトリにある odbctest を使用して接続し、次のコマンドを発行します。</p> <pre>CREATE TABLE date_test (f1 DATE); INSERT INTO date_test values (current_date); SELECT f1 FROM date_test;</pre> <p>日付形式を選択する別の方法は、次のコマンドを実行することです。</p> <pre>SELECT current_date FROM ANY_TABLE limit 1;</pre> <p>ここで、ANY_TABLE は既存のテーブルの名前です。</p>
Oracle	<p>Campaign サーバを実行しているマシンからデータベースにログインしてください。SQL *Plus を使用して接続し、次のコマンドを発行します。</p> <pre>SELECT sysdate FROM dual</pre> <p>現在日付が、そのクライアントの NLS_DATE_FORMAT に返されます。</p>
SQL Server	<p>Campaign リスナーを実行しているマシンからデータベースに接続してください。Campaign¥bin ディレクトリにある odbctest を使用して接続し、次のコマンドを発行します。</p> <pre>SELECT getdate()</pre>
Sybase	<p>Campaign サーバを実行しているマシンからデータベースに接続してください。Campaign¥bin ディレクトリにある odbctest を使用して接続し、次のコマンドを発行します。</p> <pre>select today(*) from sys.dummy;</pre>

追加の考慮事項

以下のデータベース固有の説明に注意してください。

Teradata

Teradata では、列ごとに日付形式を定義できます。dateFormat および dateOutputFormatString だけでなく、SuffixOnCreateDateField を設定する必要があります。ここでのシステムテーブル設定と整合させるためには、以下を使用します。

- SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'
- DateFormat = DELIM_Y_M_D
- DateOutputFormatString = %Y-%m-%d

SQL Server

ODBC データソース構成で「出力時の通貨、数値、日付、時刻の形式にはシステムの地域設定を使用する」オプションにチェックマークが付いていない場合は、日付形式を再設定できません。一般に、この設定にはチェックマークを付けずにおき、言語ごとに日付形式の構成が変更されないようにした方が簡単です。

デフォルト値

DELIM_Y_M_D

有効な値

DATE マクロ内で指定された任意の形式

DateOutputFormatString

説明

DateOutputFormatString プロパティは、例えばキャンペーンの開始日と終了日など、何らかの日付を Campaign がデータベースに書き込むときに使用する日付データ型の形式を指定します。DateOutputFormatString プロパティの値は、データソースがタイプ date の列に予期する形式に設定してください。ほとんどのデータベースの場合、この設定は [data_source_name] > DateFormat プロパティの設定と同じです。

DateOutputFormatString プロパティは、DATE_FORMAT マクロ内で format_str に指定した任意の形式に設定できます。DATE_FORMAT マクロは、2 つの異なる種類の形式を受け入れることに注意してください。1 つは ID (例えば、DELIM_M_D_Y、DDMMYYYY、DATE マクロが受け入れるものと同じ) で、もう 1 つは書式制御ストリングです。DateOutputFormatString プロパティの値は、書式制御ストリングでなければなりません。これは、DATE マクロ ID の 1 つであってはなりません。一般的には、区切り文字で区切られた形式の 1 つを使用します。

次の手順で説明するように、テーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入することにより、正しい形式を選択したかどうかを確認できます。

DateOutputFormatString を確認するには

1. 『データベース別の日付の選択』の表で説明したように、適切なツールを使用してデータベースに接続します。

日付がデータベースに正しく送信されているかどうかを確認する場合、データベースに付属するクエリツール (例えば、SQL Server の Query

Analyzer など) は使用しないでください。それらのクエリツールでは、日付形式が Campaign で実際にデータベースに送信されるのとは異なる形式に変換される場合があります。

2. テーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入します。例えば、%m/%d/%Y を選択した場合は、以下のようにします。

```
CREATE TABLE date_test (F1 DATE)
INSERT INTO date_test VALUES ('03/31/2004')
```

これで INSERT コマンドが正常に完了した場合は、このデータベースに正しい形式を選択したことになります。

デフォルト値

%Y/%m/%d

DateTimeFormat

説明

[data_source_name] > DateTimeFormat プロパティの値は、Campaign がデータベースから日時/タイムスタンプのデータを受け取る際に予期する形式を指定します。これは、そのデータベースで選択された日時/タイムスタンプの表示に使用される形式に一致する必要があります。ほとんどのデータベースの場合、この設定は DateTimeOutputFormatString の設定と同じです。

一般に、『データベース別の日付の選択』の表で説明したように DateFormat 値を判別した後、DateFormat 値の前に DT_ を付けることによって、DateTimeFormat を設定してください。

注: マルチロケール機能を使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (短縮された月名)、または %B (完全な月名) を含んでいる日付形式を使用しないでください。代わりに、月には数値を使用し、区切り文字で区切った形式が固定形式を使用してください。

デフォルト値

DT_DELIM_Y_M_D

有効な値

以下のように、区切り文字で区切った形式だけがサポートされます。

- DT_DELIM_M_D
- DT_DELIM_M_D_Y
- DT_DELIM_Y_M
- DT_DELIM_Y_M_D
- DT_DELIM_M_Y
- DT_DELIM_D_M
- DT_DELIM_D_M_Y

DateTimeOutputFormatString

説明

DateTimeOutputFormatString プロパティは、例えばキャンペーンの開始または終了の日時など、何らかの日時を Campaign がデータベースに書き込む

ときに使用する日時データ型の形式を指定します。

`DateTimeOutputFormatString` プロパティの値は、データソースがタイプ `datetime` の列に予期する形式に設定してください。ほとんどのデータベースの場合、この設定は、`[data_source_name] > DateTimeFormat` プロパティの設定と同じです。

選択した形式が正しいかどうかを確認する方法については、`DateOutputFormatString` を参照してください。

デフォルト値

`%Y/%m/%d %H:%M:%S`

DB2NotLoggedInitially

説明

`DB2NotLoggedInitially` プロパティは、DB2 で一時テーブルにデータを設定するとき、Campaign で `not logged initially` の SQL 構文を使用するかどうかを決定します。TRUE に設定した場合、このプロパティは一時テーブルへの挿入のログを無効にします。これにより、パフォーマンスが向上し、データベースリソースの消費が少なくなります。

使用する DB2 のバージョンが `not logged initially` 構文をサポートしていない場合は、このプロパティを FALSE に設定してください。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

DB2NotLoggedInitiallyUserTables

説明

`DB2NotLoggedInitiallyUserTables` プロパティは、Campaign で DB2 ユーザテーブルへの挿入に `not logged initially` の SQL 構文を使用するかどうかを決定します。TRUE に設定した場合、このプロパティはユーザテーブルへの挿入のログを無効にします。これにより、パフォーマンスが向上し、データベースリソースの消費が少なくなります。

注: TRUE に設定した場合、何らかの理由でユーザテーブルトランザクションが失敗すると、テーブルが壊れ、除去する必要があります。それ以前にそのテーブルに含まれていたすべてのデータは、失われます。

注: `DB2NotLoggedInitiallyUserTables` プロパティは、Campaign システムテーブルには使用されません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DefaultScale

説明

DefaultScale プロパティは、Campaign スナップショットプロセスで数値フィールドをテーブルにエクスポートするときの、浮動小数点精度を決定します。値が 0 (ゼロ) の場合、Campaign はエクスポートされるフィールドの浮動小数点精度を保存します。

このプロパティを変更することにより、浮動小数点精度を制限できます。例えば、値を 3 に設定すると、浮動小数点精度は 3 桁 (0.NNN) になります。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DeleteAsRecreate

説明

DeleteAsRecreate プロパティは、出力プロセスが REPLACE TABLE に設定されており、TRUNCATE がサポートされていない場合、Campaign でテーブルを除去して再作成するか、単にテーブルからの削除だけを行うかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルを除去し、再作成します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DeleteAsTruncate

説明

DeleteAsTruncate プロパティは、出力プロセスが REPLACE TABLE に構成されている場合、Campaign で TRUNCATE TABLE を使用するか、それともテーブルから削除するかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルからの TRUNCATE TABLE を実行します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

デフォルト値は、データベースタイプによって異なります。

デフォルト値

有効な値

TRUE | FALSE

DisallowTempTableDirectCreate

説明

DisallowTempTableDirectCreate プロパティは、Campaign で一時テーブルにデータを追加する方法を指定します。

FALSE に設定した場合、Campaign は、1 つのコマンドを使用して、直接作成してデータを設定する SQL 構文を実行します。例えば、以下のとおりです。CREATE TABLE <table_name> AS ... (Oracle および Netezza の場合)、および SELECT <field_names> INTO <table_name> ... (SQL Server の場合)。

TRUE に設定した場合、Campaign は一時テーブルを作成した後、別々のコマンドを使用してテーブルからテーブルに直接データを設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

EnableBaseDimSelfJoin

説明

EnableBaseDimSelfJoin プロパティは、Campaign データベース動作で、ベーステーブルとディメンションテーブルが同じ物理テーブルにマップされており、ディメンションがベーステーブルの ID フィールド (単数または複数) 上のベーステーブルに関連していない場合、自己結合を行うかどうかを指定します。

デフォルトでは、このプロパティは FALSE に設定され、ベーステーブルとディメンションテーブルが同じデータベーステーブルであり、関係フィールドが同じである (例えば、AcctID に対して AcctID) 場合、Campaign はユーザが結合を希望していないものと見なします。

デフォルト値

FALSE

EnableSelectDistinct

説明

EnableSelectDistinct プロパティは、Campaign の ID の内部リストが Campaign サーバまたはデータベースによって重複解消されるかどうかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースは重複解消を実行し、そのデータベースに対して生成される SQL クエリは次の書式になります (該当する場合)。

```
SELECT DISTINCT key FROM table
```

値が FALSE の場合、Campaign サーバは重複解消を実行し、データベースに対して生成される SQL クエリは次の書式になります。

```
SELECT key FROM table
```

以下の場合には、値を FALSE に設定します。

- ユニーク ID (ベーステーブルのプライマリキー) が既に重複解消されることを保証されるようにデータベースが構成されている場合。

- データベースのリソース消費/負荷を削減するために、Campaign アプリケーションサーバで重複解消を実行する場合。

このプロパティに指定する値に関係なく、Campaign では、必要な場合にキーが自動的に重複解消されることが保証されています。このプロパティは、単に (データベース上または Campaign サーバ上で) 重複解消を試みる場所を制御します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

EnableSelectOrderBy

説明

EnableSelectOrderBy プロパティは、Campaign の ID の内部リストを Campaign サーバとデータベースのどちらによってソートするかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースがソートを行い、データベースに対して生成される SQL クエリは次の書式になります。

```
SELECT <key> FROM <table> ORDER BY <key>
```

値が FALSE の場合、Campaign サーバがソートを行い、データベースに対して生成される SQL クエリは次の書式になります。

```
SELECT <key>FROM <table>
```

注: このプロパティは、使用されるオーディエンスレベルが英語以外のデータベース上のテキストストリングである場合にのみ、FALSE に設定します。それ以外のすべてのシナリオでは、デフォルトの TRUE を使用できます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

True | False

ExcludeFromTableDisplay

説明

ExcludeFromTableDisplay パラメータを使用すると、Campaign でのテーブルマッピングのときに表示されるデータベーステーブルを制限できます。データベースから取り出すテーブル名は削減されません。

指定したパターンに一致するテーブル名は表示されません。

例えば、このパラメータの値を `sys.*` に設定すると、名前が `sys.` で始まるテーブルは表示されません。このパラメータの値は、大文字と小文字が区別されることに注意してください。

デフォルト値

UAC_*。これは、ExtractTablePrefix プロパティの値がデフォルト値の場合、一時テーブルと書き込みテーブルを除外します。

ExtractTablePrefix

説明

ExtractTablePrefix プロパティは、Campaign 内のすべての書き込みテーブル名の前に自動的に付加するストリングを指定します。

デフォルト値

UAC_EX

ForceNumeric

説明

ForceNumeric プロパティは、Campaign ですべての数値をデータ型 double として取り出すかどうかを指定します。値を TRUE に設定した場合、Campaign はすべての数値をデータ型 double として取り出します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

InactiveConnectionTimeout

説明

InactiveConnectionTimeout プロパティは、非アクティブ状態で開かれたままになっている Campaign データベース接続を、閉じるまでの秒数を指定します。値を 0 に設定すると、タイムアウトが無効になり、接続は開かれたままになります。

デフォルト値

120

InsertLogSize

説明

InsertLogSize プロパティは、Campaign スナップショットプロセスの実行中に、ログファイルにいつ新しい項目を入力するかを指定します。スナップショットプロセスによって書き込まれたレコードの数が、InsertLogSize プロパティで指定された数の倍数に到達するたびに、ログ項目が書き込まれます。ログ項目は、実行中のスナップショットプロセスがどこまで進んだかを判別するのに役立つ場合があります。この値の設定が小さすぎると、非常に大きなログファイルが作成される場合があることに注意してください。

デフォルト値

100000 (10 万レコード)

有効な値

正の整数

JndiName

説明

JndiName プロパティは Campaign システムテーブルを構成する場合にのみ使用されます (それ以外の、例えば顧客テーブルなどのデータソースには使用されません)。この値は、アプリケーションサーバ (Websphere または WebLogic) で定義された Java Naming and Directory Interface (JNDI) データソースに設定します。

デフォルト値

campaignPartition1DS

LoaderCommand

説明

LoaderCommand プロパティは、Campaign でデータベースロードユーティリティを起動するために発行するコマンドを指定します。このパラメータを設定すると、Campaign は「データ置換」設定で使用された、スナップショットプロセスからのすべての出力ファイルに対して、データベースローダユーティリティモードに入ります。このパラメータは、Campaign が ID リストを一時テーブルにアップロードするときにも、データベースローダユーティリティモードを起動します。

このプロパティに有効な値は、データベースロードユーティリティの実行可能ファイルかデータベースロードユーティリティを起動するスクリプトを指す、任意のフルパス名です。スクリプトを使用すると、ロードユーティリティを起動する前に、追加のセットアップ (例えば、ファイルを最初にデータベースサーバに移動したり、Sybase IQ でロードコマンドを使用するために ISQL を呼び出すなど) を行うことができます。

大部分のデータベースロードユーティリティでは、正常に起動するためにいくつかの引数が必要です。それらの引数には、ロード元のデータファイルと制御ファイルの指定、およびロード先のデータベースとテーブルが含まれることがあります。Campaign は、以下のトークンをサポートしています。これらは、コマンドが実行されるときに、指定されたエレメントに置き換わります。データベースロードユーティリティを起動するときに使用する正しい構文については、データベースロードユーティリティの資料を参照してください。

このパラメータは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderCommand で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連付けられている IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、フローチャートに関連付けられているキャンペーンのコードに置き換わります。

トークン	説明
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連付けられているキャンペーンの名前に置き換わります。
<CONTROLFILE>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメータで指定されたテンプレートに従って Campaign が生成した一時制御ファイルの、フルパスおよびファイル名に置き換わります。
<DATABASE>	このトークンは、Campaign がデータをロードするデータソースの名前に置き換わります。これは、そのデータソースのカテゴリ名の中で使用されているデータソース名と同じものです。
<DATAFILE>	このトークンは、ロードプロセスで Campaign によって作成された一時データファイルのフルパスおよびファイル名に置き換わります。このファイルは、Campaign 一時ディレクトリ UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<DBUSER>	このトークンは、データベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<DSN>	このトークンは、DSN プロパティの値に置き換わります。DSN プロパティが設定されていない場合、<DSN> トークンは、このデータソースのカテゴリ名の中で使用されているデータソース名に置き換わります (<DATABASE> トークンの置換に使用されるのと同じ値)。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートの名前に置き換わります。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル内のフィールド数に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースパスワードに置き換わります。
<TABLE>	このトークンは廃止されましたが、後方互換性を維持するためにサポートされています。バージョン 4.6.3 から <TABLE> に代わって使用されている <TABLENAME> を参照してください。
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign がデータのロード先にするデータベーステーブル名に置き換わります。これは、スナップショットプロセスからのターゲットテーブル、または、Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<USER>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースユーザに置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

データベースロードユーティリティの実行可能ファイルかデータベースロードユーティリティを起動するスクリプトを指す、任意のフルパス名

LoaderCommandForAppend

説明

LoaderCommandForAppend パラメータは、Campaign 内のデータベーステーブルにレコードを付加する目的で、データベースロードユーティリティを起動するために発行するコマンドを指定します。このパラメータを設定すると、Campaign は「レコードの追加」設定で使用されたスナップショットプロセスからのすべての出力ファイルに対して、データベースローダユーティリティモードに入ります。

このパラメータは、データベースロードユーティリティの実行可能ファイルかデータベースロードユーティリティを起動するスクリプトを指す、フルパス名として指定されます。スクリプトを使用すると、ロードユーティリティを起動する前に、追加のセットアップ (例えば、ファイルを最初にデータベースサーバに移動したり、Sybase IQ でロードコマンドを使用するために ISQL を呼び出すなど) を行うことができます。

大部分のデータベースロードユーティリティでは、正常に起動するためにいくつかの引数が必要です。それらの引数には、ロード元のデータファイルと制御ファイルの指定、およびロード先のデータベースとテーブルが含まれることがあります。トークンは、コマンドの実行時に、指定されたエレメントに置き換わります。

データベースロードユーティリティを起動するとき使用する正しい構文については、データベースロードユーティリティの資料を参照してください。

このパラメータは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderCommandForAppend で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連付けられている IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連付けられているキャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連付けられているキャンペーンの名前に置き換わります。

トークン	説明
<CONTROLFILE>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメータで指定されたテンプレートに従って Campaign が生成した一時制御ファイルの、フルパスおよびファイル名に置き換わります。
<DATABASE>	このトークンは、Campaign がデータをロードするデータソースの名前に置き換わります。これは、そのデータソースのカテゴリ名の中で使用されているデータソース名と同じものです。
<DATAFILE>	このトークンは、ロードプロセスで Campaign によって作成された一時データファイルのフルパスおよびファイル名に置き換わります。このファイルは、Campaign 一時ディレクトリ UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<DSN>	このトークンは、DSN プロパティの値に置き換わります。DSN プロパティが設定されていない場合、<DSN> トークンは、このデータソースのカテゴリ名の中で使用されているデータソース名に置き換わります (<DATABASE> トークンの置換に使用されるのと同じ値)。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル内のフィールド数に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースパスワードに置き換わります。
<TABLE>	このトークンは廃止されましたが、後方互換性を維持するためにサポートされています。バージョン 4.6.3 から <TABLE> に代わって使用されている <TABLENAME> を参照してください。
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign がデータのロード先にするデータベーステーブル名に置き換わります。これは、スナップショットプロセスからのターゲットテーブル、または、Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<USER>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースユーザに置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderControlFileTemplate

説明

LoaderControlFileTemplate プロパティは、以前に Campaign で構成された制御ファイルテンプレートを指すフルパスおよびファイル名を指定します。このパラメータを設定すると、Campaign はここで使用されたテンプレートに基づいて、一時制御ファイルを動的に構築します。この一時制御ファイルのパスと名前は、LoaderCommand パラメータで使用可能な <CONTROLFILE> トークンに使用できます。

Campaign をデータベースローダユーティリティモードで使用する前に、このパラメータによって指定される制御ファイルテンプレートを構成する必要があります。制御ファイルテンプレートは、以下のトークンをサポートしています。これらは、Campaign によって一時制御ファイルが作成されるときに、動的に置き換わります。

制御ファイルに必要な正しい構文については、使用するデータベースローダユーティリティの資料を参照してください。

このパラメータは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderControlFileTemplate で使用できるトークンは、LoaderCommand プロパティについて説明したトークンと同じですが、そのほかに、以下の特殊なトークンも使用できます。これらのトークンは、アウトバウンドテーブル内のフィールドごとに 1 回ずつ繰り返されます。

トークン	説明
<DBCOLUMNNUMBER>	このトークンは、データベース内の列の序数に置き換わります。
<FIELDLENGTH>	このトークンは、データベース内にロードされるフィールドの長さに置き換わります。
<FIELDNAME>	このトークンは、データベース内にロードされるフィールドの名前に置き換わります。
<FIELDNUMBER>	このトークンは、データベース内にロードされるフィールドの番号に置き換わります。
<FIELDTYPE>	このトークンは、リテラル「CHAR()」に置き換わります。このフィールドの長さは、() の間で指定されます。使用するデータベースがフィールドタイプ CHAR を認識できない場合は、フィールドタイプに適したテキストを手動で指定して、<FIELDLENGTH> トークンを使用できます。例えば、SQLSVR および SQL2000 の場合は、「SQLCHAR(<FIELDLENGTH>)」を使用します。
<NATIVETYPE>	このトークンは、このフィールドのロード先になる実際のデータベースタイプに置き換わります。

トークン	説明
<xyz>	このトークンは、データベースにロードされるすべてのフィールド (ただし、最後は除きます) に、指定された文字 (単数または複数) を配置します。よく使用されるのは <, > で、これは、最後を除くすべてのフィールドにコンマを繰り返します。
<~xyz>	このトークンは、指定された文字を、繰り返しの最後の行にのみ配置します。
<!xyz>	このトークンは、指定された文字 (単数または複数) を、不等号括弧 < > も含めて、すべての行に配置します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderControlFileTemplateForAppend

説明

LoaderControlFileTemplateForAppend プロパティは、以前に Campaign で構成された制御ファイルテンプレートを指すフルパスおよびファイル名を指定します。このパラメータを設定すると、Campaign はここで指定されたテンプレートに基づいて、一時制御ファイルを動的に構築します。この一時制御ファイルのパスと名前は、LoaderCommandForAppend プロパティで使用可能な <CONTROLFILE> トークンに使用できます。

Campaign をデータベースローダユーティリティモードで使用する前に、このパラメータによって指定される制御ファイルテンプレートを構成する必要があります。制御ファイルテンプレートは、以下のトークンをサポートしています。これらは、Campaign によって一時制御ファイルが作成されるときに、動的に置き換わります。

制御ファイルに必要な正しい構文については、使用するデータベースローダユーティリティの資料を参照してください。制御ファイルテンプレートで使用できるトークンは、LoaderControlFileTemplate プロパティのトークンと同じです。

このパラメータは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderDelimiter

説明

LoaderDelimiter プロパティは、一時データファイルが固定幅のフラットファイルであるか、それとも区切り文字で区切られたフラットファイルであるかを指定し、区切り文字で区切られている場合は、Campaign が区切り文字として使用する文字を指定します。

値が未定義の場合、Campaign は一時データファイルを固定幅のフラットファイルとして作成します。

値を指定した場合は、空であることが分かっているテーブルにデータを設定するためにローダが起動されたときに、その値が使用されます。Campaign は、このプロパティの値を区切り文字として区切ったフラットファイルとして、一時データファイルを作成します。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

文字。必要であれば、二重引用符で囲むことができます。

LoaderDelimiterAtEnd

説明

一部の外部ロードユーティリティでは、データファイルを区切り文字で区切った形式にして、各行を区切り文字で終わる必要があります (例えば、外部テーブルを使用した Informix の dbaccess)。この要件に対処するには、LoaderDelimiterAtEnd 値を TRUE に設定し、空であることが分かっているテーブルにデータを設定するためにローダが起動されたときに、Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

FALSE

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

LoaderDelimiterAtEndForAppend

説明

一部の外部ロードユーティリティでは、データファイルを区切り文字で区切った形式にして、各行を区切り文字で終わる必要があります (例えば、外部テーブルを使用した Informix の dbaccess)。この要件に対処するには、LoaderDelimiterAtEndForAppend 値を TRUE に設定し、空であることが分かっているテーブルにデータを設定するためにローダが起動されたときに、Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

LoaderDelimiterForAppend

説明

`LoaderDelimiterForAppend` プロパティは、Campaign 一時データファイルが固定幅のフラットファイルであるか、それとも区切り文字で区切られたフラットファイルであるかを指定し、区切り文字で区切られている場合は、区切り文字として使用する文字または文字セットを指定します。

値が未定義の場合、Campaign は一時データファイルを固定幅のフラットファイルとして作成します。

値を指定した場合は、空であることが分かっていないテーブルにデータを設定するためにローダが起動されたときに、その値が使用されます。Campaign は、このプロパティの値を区切り文字として区切ったフラットファイルとして、一時データファイルを作成します。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

文字。必要であれば、二重引用符で囲むことができます。

LoaderUseLocaleDP

説明

`LoaderUseLocaleDP` プロパティは、Campaign がデータベースロードユーティリティによってロードされるファイルに数値を書き込むとき、小数点にロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。

ピリオド (.) を小数点として使用するよう指定するには、この値を `FALSE` に設定します。

ロケールに適した小数点記号を使用するよう指定するには、この値を `TRUE` に設定します。

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

`TRUE` | `FALSE`

MaxItemsInList

説明

Campaign で SQL の単一のリスト (例えば、`WHERE` 節で `IN` 演算子に続く値のリスト) に組み込むことが許されるアイテムの最大数を指定します。

デフォルト値

1000 (Oracle のみ)、それ以外のすべてのデータベースでは 0 (無制限)

有効な値

整数

MaxQueryThreads

説明

MaxQueryThreads プロパティは、単一の Campaign フローチャートから各データベースソースに対して同時に実行できるクエリの数の上限を指定します。

Campaign は独立したスレッドを使用して、データベースクエリを実行します。Campaign プロセスは並行して実行されるので、単一のデータソースに対して複数のクエリを同時に実行することがよくあります。並行して実行するクエリの数がこのプロパティで指定された値を超えた場合、Campaign サーバは自動的に、同時クエリ数をこの値までに制限します。

最大値は無制限です。maxReuseThreads プロパティは、ゼロ以外の値に設定する場合、MaxQueryThreads の値以上にすることが必要であることに注意してください。

デフォルト値

データベースによって異なる

MaxRowFetchRecords

説明

選択された ID の数が MaxRowFetchRecords プロパティで指定された値より小さい場合、Campaign は ID を一度に 1 つずつ、別々の SQL クエリーでデータベースに渡します。この処理には、非常に時間がかかる可能性があります。選択された ID の数がこのパラメータによって指定された値より大きい場合、Campaign は一時テーブルを使用するか (データベースソースに対して許可される場合)、不要な値を除くすべての値をテーブルから取り出します。

パフォーマンス上の理由により、この数値は小さくしておくことをお勧めします。

デフォルト値

100

MaxTempTableJoinPctSelectAll

説明

クエリを発行すると、Campaign はクエリの結果として、ID の正確なリストが入っているデータベース上に一時テーブルを作成します。

MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティは、すべてのレコードを選択する追加クエリがデータベースに対して発行されたときに、一時テーブルとの結合を実行するかどうかを指定します。

一時テーブルの相対的なサイズ (パーセンテージとして指定されます) が MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティの値より大きい場合、結合は実行されません。最初にすべてのレコードが選択され、その後、不要なレコードが破棄されます。

一時テーブルの相対的なサイズ (パーセンテージとして指定されたもの) が MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティの値以下の場合、最初に一時テーブルとの結合が実行され、その後、結果の ID がサーバに取り出されます。

このプロパティは、AllowTempTables プロパティの値が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。useInDbOptimization プロパティが YES に設定されている場合、このプロパティは無視されます。

デフォルト値

90

有効な値

0-100 の間の整数。値 0 は、一時テーブルの結合が決して使用されないことを意味します。値 100 は、一時テーブルのサイズに関係なく、常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

例

MaxTempTableJoinPctSelectAll が 90 に設定されているとします。最初に、データベーステーブル (Customer) から、勘定残高 (Accnt_balance) が \$1,000 を超えるお客様 (CustID) を選択するとよいかもしれません。

選択プロセスによって生成される、対応する SQL 式は、次のようになります。

```
SELECT CustID FROM Customer
WHERE Accnt_balance > 1000
```

選択プロセスでは、1,000,000 ID の合計テーブルサイズから、10% にあたる 100,000 ID を取り出すことができます。一時テーブルが許可されている場合、Campaign は選択された ID (TempID) をデータベース内の一時テーブル (Temp_table) に書き込みます。

その後、選択された ID (CustID) のスナップショットを実際の残高 (Accnt_balance) と一緒に取っておくとよいでしょう。一時テーブル (Temp_table) の相対サイズは 90 パーセント

(MaxTempTableJoinPctSelectAll) 未満なので、最初に一時テーブルとの結合が行われます。スナップショットプロセスによって生成される SQL 式は、次のようになります。

```
SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer, Temp_table WHERE CustID = TempID
```

選択プロセスで 90 パーセントを超えて取り出された場合、後続のスナップショットプロセスはすべてのレコードを取り出し、それらを最初の ID セットと突き合わせ、不要なものを破棄します。

スナップショットプロセスによって生成される SQL 式は、次のようになります。

```
SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer
```

MaxTempTableJoinPctWithCondition

説明

クエリを発行すると、Campaign はクエリの結果として、ID の正確なリストが入っているデータベース上に一時テーブルを作成します。制限条件を使用してレコードを選択する追加のクエリがデータベースに対して発行された場合、MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティは一時テーブルとの結合を実行するかどうかを指定します。

一時テーブルの相対サイズ (パーセンテージとして指定されます) が `MaxTempTableJoinPctWithCondition` の値より大きい場合、結合は行われません。これにより、データベース内のオーバーヘッドは、それが不要な場所では回避されます。この場合、データベースに対してクエリが発行され、結果の ID リストが取得された後、サーバメモリ内のリストと突き合わされ、不要なレコードは破棄されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセンテージ) が `MaxTempTableJoinPctWithCondition` の値以下の場合、最初に一時テーブルとの結合が実行され、その後、結果の ID がサーバに取り出されます。

このプロパティは、`AllowTempTables` プロパティの値が `TRUE` に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

20

有効な値

0-100 の間の整数。値 0 は一時テーブルの結合が決して使用されないことを意味します。値 100 は、一時テーブルのサイズに関係なく、常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

MinReqForLoaderCommand

説明

このプロパティを使用して、バルクローダを使用するためのしきい値を設定します。`Campaign` は、入力セル内のユニーク ID の数がここで定義された値を超えた場合、`LoaderCommand` パラメータに割り当てられたスクリプトを実行します。このプロパティの値は、書き出されるレコードの数を表していません。

このプロパティを構成しなかった場合、`Campaign` は値がデフォルト値 (ゼロ) であると見なします。このプロパティが構成されていても、値として負または非整数の値が設定されている場合、`Campaign` はその値をゼロと見なします。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

整数

MinReqForLoaderCommandForAppend

説明

このプロパティを使用して、バルクローダを使用するためのしきい値を設定します。`Campaign` は、入力セル内のユニーク ID の数がここで定義された値を超えた場合、`LoaderCommandForAppend` パラメータに割り当てられたスクリプトを実行します。このプロパティの値は、書き出されるレコードの数を表していません。

このプロパティを構成しなかった場合、Campaign は値がデフォルト値 (ゼロ) であると見なします。このプロパティが構成されていても、値として負または非整数の値が設定されている場合、Campaign はその値をゼロと見なします。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

正の整数

NumberOfRetries

説明

NumberOfRetries プロパティは、Campaign が障害発生時にデータベース操作を自動的に再試行する回数を指定します。Campaign は、データベースエラーまたは障害を報告する前に、自動的にこの回数だけデータベースに対してクエリーを再送信します。

デフォルト値

0 (ゼロ)

ODBCTableTypes

説明

ODBCTableTypes プロパティは、Sybase IQ/ASE データソースをサポートするためにのみ必要です。Campaign でテーブルマッピングウィンドウにテーブルのリストを表示するためには、このプロパティを設定する必要があります。Sybase IQ/ASE データソースのマッピングを有効にするには、このプロパティに以下の値を追加します。

「TABLE」、「VIEW」、「SYNONYM」、「ALIAS」

このプロパティはデフォルトでは空になっています。これは、Sybase IQ/ASE 以外のデータソースに適しています。

デフォルト値

未定義

有効な値

「TABLE」、「VIEW」、「SYNONYM」、「ALIAS」

ODBCUnicode

説明

ODBCUnicode プロパティは、Campaign ODBC 呼び出しで使用されるエンコードのタイプを指定します。これは ODBC データソースにのみ使用され、Oracle または DB2 ネイティブ接続に使用した場合は無視されます。

重要: このプロパティを UTF-8 または UCS-2 に設定した場合は、データソースの StringEncoding 値を UTF-8 または WIDEUTF-8 に設定する必要があります。そうしなかった場合、ODBCUnicode プロパティの設定は無視されます。

デフォルト値

disabled

有効な値

このプロパティに指定できる値は、以下のとおりです。

- Disabled - Campaign は ANSI ODBC 呼び出しを使用します。
- UTF-8 - Campaign は Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR を 1 バイトと見なします。これは、DataDirect ODBC ドライバと互換性があります。
- UCS-2 - Campaign は Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR を 2 バイトと見なします。これは、Windows ドライバおよび unixODBC ODBC ドライバと互換性があります。

ODBCv2

説明

ODBCv2 プロパティを使用して、Campaign でデータソースに使用する ODBC API 仕様を指定します。

デフォルト値の FALSE を使用すると、Campaign は v3 API 仕様を使用し、TRUE を設定すると、Campaign は v2 API 仕様を指定します。ODBC v3 API 仕様をサポートしていないデータソースには、ODBCv2 プロパティを TRUE に設定してください。

ODBCv2 プロパティを TRUE に設定した場合、Campaign は ODBC Unicode API をサポートせず、disabled 以外の ODBCUnicode プロパティの値は認識されません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

OwnerForTableDisplay

説明

OwnerForTableDisplay プロパティを使用すると、Campaign でのテーブルマッピングの表示を、指定されたユーザーによって所有されているテーブルだけ、または指定されたユーザー (単数または複数) によって所有されているテーブルの 1 つ以上のセットだけに制限できます。

1 人以上のユーザーによって所有されているテーブルだけを表示するには、コンマ区切りリストを使用して、複数のデータベースユーザー ID を指定します。次に例を示します。

```
<property name="OwnerForTableDisplay">user1,user2,user3</property>
```

ユーザー名に加えてテーブル名パターンを指定するには、ユーザー ID にパターンを付加します。例えば、次の設定は、テーブルの表示を user1 の ABC で始まるテーブルと user2 の XYZ で始まるテーブルだけに制限します。

```
OwnerForTableDisplay=user1.ABC%,user2.XYZ%
```

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

PostSegmentTableCreateRunScript

説明

セグメント一時テーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign で実行する、スクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostSegmentTableCreateRunScript で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースパスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostSnapshotTableCreateRunScript

説明

PostSnapshotTableCreateRunScript プロパティを使用して、スナップショットテーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign で実行する、スクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostSnapshotTableCreateRunScript で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<AMUSER>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショットテーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースパスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショットテーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

シェルスクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostExtractTableCreateRunScript

説明

PostExtractTableCreateRunScript プロパティを使用して、書き込みテーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign で実行する、スクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostExtractTableCreateRunScript で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、書き込みテーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースパスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、書き込みテーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

シェルスクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PadTextWithSpaces

説明

PadTextWithSpaces プロパティを TRUE に設定した場合、Campaign はストリングがデータベースフィールドと同じ幅になるまで、テキスト値にスペースを埋め込みます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

PostTempTableCreateRunScript

説明

PostTempTableCreateRunScript プロパティを使用すると、ユーザデータソースまたはシステムテーブルのデータベース内に一時テーブルが作成されてデータが設定された後に、Campaign で実行する、スクリプトまたは実行可能ファイルを指定できます。

PostTempTableCreateRunScript で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースパスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

PostUserTableCreateRunScript

説明

ユーザテーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign で実行する、スクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostUserTableCreateRunScript で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、ユーザテーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<AMUSER>	このトークンは、ユーザテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。

トークン	説明
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、ユーザテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、ユーザテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、ユーザテーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースパスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、ユーザテーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PrefixOnSelectSQL

説明

PrefixOnSelectSQL プロパティを使用して、Campaign によって生成されたすべての SELECT SQL 式の前に自動的に付加されるストリングを指定します。

このプロパティは、Campaign によって生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティは、構文の確認なしに自動的に SELECT SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

PrefixOnSelectSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。

トークン	説明
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

QueryThreadSleep

説明

QueryThreadSleep プロパティは、Campaign サーバプロセス (UNICA_ACSVR) の CPU 使用率に影響します。値が TRUE の場合、Campaign サーバプロセスでクエリが完了したかどうかを確認するために使用されるスレッドは、確認と確認の間、スリープ状態になります。値が FALSE の場合、Campaign サーバプロセスは絶えずクエリが完了したかどうかを確認します。

デフォルト値

TRUE

ReaderLogSize

説明

ReaderLogSize パラメータは、Campaign でデータベースからデータを読み取るとき、どの時点でログファイルに新しい項目を作成するかを定義します。データベースから読み取られたレコードの数が、このパラメータで定義された数の倍数に到達するたびに、ログ項目がログファイルに書き込まれます。

このパラメータは、プロセスの実行がどこまで進んだかを判別するのに役立つ場合があります。この値の設定が小さすぎると、非常に大きなログファイルが作成される場合があります。

デフォルト値

1000000 (100 万レコード)

有効な値

整数

SegmentTempTablePrefix

説明

このデータソース内で CreateSeg プロセスによって作成されるセグメントテーブルのプレフィックスを設定します。

デフォルト値

UACS

SQLOnConnect

説明

SQLOnConnect プロパティは、Campaign が各データベース接続の直後に実行する完全な SQL ステートメントを定義します。

このプロパティによって生成された SQL ステートメントは、構文の確認なしに自動的にデータベースに渡されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

SQLOnConnect で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

UOSQLOnConnect

説明

SQLOnConnect プロパティは、Campaign が各データベース接続の直後に実行する完全な SQL ステートメントを定義します。UOSQLOnConnect プロパティは、それによく似ていますが、特に Optimize に適用されます。

このプロパティによって生成された SQL ステートメントは、構文の確認なしに自動的にデータベースに渡されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

UOSQLOnConnect で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

ShareConnection

説明

ShareConnection プロパティは、Campaign でデータベース操作に使用する接続の数を制御します。値が FALSE の場合、それぞれのデータベース操作は新しい接続上で実行されます。値が TRUE の場合、単一の接続を使用して、すべてのデータベース操作が実行されます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

StringEncoding

説明

`StringEncoding` プロパティは、データベースの文字エンコードを指定します。`Campaign` がデータベースからデータを取り出すとき、データは指定されたエンコードから `Campaign` の内部エンコード (UTF-8) にトランスコーディングされます。同様に、`Campaign` からデータベースにクエリーを送信するとき、文字データは `Campaign` の内部エンコードから `StringEncoding` プロパティで指定されたエンコードにトランスコーディングされます。

このプロパティの値は、データベースクライアント上で使用されているエンコードに一致する必要があります。

この値は、デフォルトでは未定義ですが、空白のままにしないでください。ASCII データを使用する場合は、この値を UTF-8 に設定します。

注: データベースクライアントのエンコードが UTF-8 に設定されている場合、この値に推奨される設定値は WIDEUTF-8 です。WIDE-UTF-8 の設定は、データベースクライアントが UTF-8 に設定されている場合にのみ機能します。

重要: `partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > ODBCUnicode` プロパティを使用する場合、このプロパティは UTF-8 または WIDEUTF-8 に設定され、そうでない場合、`ODBCUnicode` プロパティの設定は無視されます。

サポートされているエンコードのリストについては、「IBM Unica Campaign Administrator's Guide」の『Appendix D, Internationalization and Encodings』を参照してください。

重要な例外とその他の考慮事項については、以下のセクションを参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

データベース固有の考慮事項

DB2、または SQL Server の場合は、`iconv` エンコードでなくコードページを使用してください。Teradata の場合は、一部のデフォルト動作をオーバーライドしてください。このセクションでは、これらのデータベースでの `StringEncoding` プロパティの正しい値の設定について説明します。

DB2

DB2 データベースでの `StringEncoding` プロパティの正しい値を判別するには、`Campaign` サーバのオペレーティングシステムの地域設定に対応するコードページを参照してください。

DB2 データベースでの `StringEncoding` プロパティの値を設定するには、次のコマンドを `Campaign` サーバ開始スクリプトに追加します。

```
db2set DB2CODEPAGE=CPIBM_code_page
```

例えば、UTF-8 を使用するには、次のようにします。

```
db2set DB2CODEPAGE=1208
```

これは、すべての DB2 データソースに影響し、他の実行中のプログラムにも影響する場合があります。

SQL Server

SQL Server データベースでの正しい `StringEncoding` プロパティ値を判別するには、サーバのオペレーティングシステムの地域設定に対応するコードページを参照してください。

例えば、コードページ 932 (日本語 Shift-JIS) を使用するには、次のようにします。

```
StringEncoding=CP932
```

Teradata

Teradata は、Campaign がデータごとのソースエンコードのみをサポートするのに対し、列ごとの文字エンコードをサポートします。Teradata ODBC ドライバのバグのため、UTF-8 を Campaign で使用することはできません。Teradata では、ログインごとにデフォルトの文字エンコードが設定されます。これは、Windows 上で ODBC データソース構成内のパラメータ、または UNIX プラットフォーム上で `odbc.ini` のパラメータを使用してオーバーライドできます。

```
CharacterSet=UTF8
```

Teradata テーブルのデフォルトエンコードは、LATIN です。Teradata では、標準装備のエンコードが非常に少数ですが、ユーザー定義エンコードがサポートされています。

`StringEncoding` プロパティのデフォルト値は ASCII です。

重要: UTF-8 データベースが関与する多数のシチュエーションでは、WIDEUTF-8 のセクションで説明されている WIDEUTF-8 疑似エンコードを使用することをお勧めします。

WIDEUTF-8

通常、Campaign は、その内部エンコード (UTF-8) とデータベースのエンコードとの間のトランスコーディングに責任を負います。データベースが UTF-8 でエンコードされている場合、UTF-8 を `StringEncoding` に指定でき (SQLServer を除く)、トランスコーディングは必要になりません。従来から、これらは Campaign でデータベース内の非英語データにアクセスするために実行可能な唯一のモデルでした。

Campaign のバージョン 7.0 で、`StringEncoding` プロパティの有効な値として、WIDEUTF-8 と呼ばれる新しいデータベースエンコードが導入されました。このエンコードを使用することにより、Campaign は依然として UTF-8 を使用してデータベースクライアントと通信しますが、クライアントは、UTF-8 と実際のデータベースのエンコードの間のトランスコーディングタス

クを実行できます。この拡張バージョンの UTF-8 は、テーブル列マッピングの幅を、トランスコーディングされたテキストに十分な幅になるよう変更するために必要です。

注: WIDEUTF-8 疑似エンコードは、データベース構成の中でのみ使用できます。それ以外の目的では使用しないでください。

注: Oracle は、クライアントを介したトランスコーディングをサポートしていません。

SuffixOnAllOtherSQL

説明

SuffixOnAllOtherSQL プロパティは、Campaign によって生成された、SuffixOnInsertSQL、SuffixOnSelectSQL、SuffixOnTempTableCreation、SuffixOnUserTableCreation、または SuffixOnUserBaseTableCreation プロパティの対象とならないすべての SQL 式に、自動的に付加されるストリングを指定します。

このプロパティは、Campaign によって生成された SQL にはのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

SuffixOnAllOtherSQL は、Campaign によって生成された、以下の式のタイプに使用されます。

```
TRUNCATE TABLE table
DROP TABLE table
DELETE FROM table [WHERE ...]
UPDATE table SET ...
```

このプロパティは、構文の確認なしに自動的に SQL 式に追加されます。このパラメータを使用する場合は、それが正しい式であることを確認してください。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnAllOtherSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnCreateDateField

説明

SuffixOnCreateDateField プロパティは、Campaign が CREATE TABLE SQL ステートメントのすべての DATE フィールドに自動的に付加するストリングを指定します。

例えば、このプロパティを以下のように設定できます。

```
SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'
```

このプロパティが未定義 (デフォルト) の場合、CREATE TABLE コマンドは変更されません。

注: DateFormat プロパティの説明の表を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnInsertSQL

説明

SuffixOnInsertSQL プロパティは、Campaign によって生成されたすべての INSERT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティは、Campaign によって生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

SuffixOnInsertSQL は、Campaign によって生成された、以下の式のタイプに使用されます。

```
INSERT INTO table ...
```

このプロパティは、構文の確認なしに自動的に SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnInsertSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnSelectSQL

説明

SuffixOnSelectSQL プロパティは、Campaign によって生成されたすべての SELECT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティは、Campaign によって生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティは、構文の確認なしに自動的に SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnSelectSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。

トークン	説明
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnTempTableCreation

説明

SuffixOnTempTableCreation プロパティを使用して、一時テーブルの作成時に、Campaign によって生成された SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティは、Campaign によって生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。このプロパティを使用するには、AllowTempTables プロパティが TRUE に設定されている必要があります。

この SQL ステートメント内で、テーブル名と列名の代わりにトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することもできます (それらはキャンペーンの実行中に動的に生成されるため)。

このプロパティは、構文の確認なしに自動的に SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

注: Oracle データベースの場合、構成パラメータは一時テーブル作成 SQL 式のテーブル名の後に付加されます。

SuffixOnTempTableCreation で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnSegmentTableCreation

説明

セグメント一時テーブルの作成時に、Campaign によって生成された SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。

SuffixOnSegmentTableCreation で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。

トークン	説明
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、セグメント一時テーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

有効な SQL

SuffixOnSnapshotTableCreation

説明

SuffixOnSnapshotTableCreation プロパティを使用して、スナップショットテーブルの作成時に、Campaign によって生成された SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。

SuffixOnSnapshotTableCreation で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショットテーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショットテーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、スナップショットテーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

有効な SQL

SuffixOnExtractTableCreation

説明

SuffixOnExtractTableCreation プロパティを使用して、書き込みテーブルの作成時に、Campaignによって生成された SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。

SuffixOnExtractTableCreation で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。

トークン	説明
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、書き込みテーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、書き込みテーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、書き込みテーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

有効な SQL

SuffixOnUserBaseTableCreation

説明

SuffixOnUserBaseTableCreation プロパティを使用して、ユーザが (例えば、抽出プロセスで) ベーステーブルを作成するときに、Campaign が生成した SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティは、Campaign によって生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

この SQL ステートメント内で、テーブル名と列名の代わりにトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することもできます (それらはキャンペーンの実行中に動的に生成されるため)。

このプロパティは、構文の確認なしに自動的に SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnUserBaseTableCreation で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。

トークン	説明
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnUserTableCreation

説明

SuffixOnUserTableCreation プロパティを使用して、ユーザが (例えば、スナップショットプロセスで) その他のテーブルを作成するとき、Campaign が生成した SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティは、Campaign によって生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティは、構文の確認なしに自動的に SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnUserTableCreation で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。

トークン	説明
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SystemTableSchema

説明

Campaign システムテーブルに使用されたスキーマを指定します。

デフォルト値は空白です。このパラメータは UA_SYSTEM_TABLES データソースにのみ関連します。

この値は、UA_SYSTEM_TABLES データソースに複数のスキーマが含まれている場合 (例えば、複数のグループによって使用される Oracle データベース) を除いて、空白のままにしてください。(このコンテキストで、「スキーマ」は、書式 X.Y (例えば、dbo.UA_Folder) の「修飾された」テーブル名の最初の部分を示しています。この書式で、X はスキーマで、Y は修飾されていないテーブル名です。この構文のこの用語は、Campaign によってサポートされるさまざまなデータベースシステム間で異なります。)

システムテーブルデータベースに複数のスキーマが存在する場合は、この値を Campaign システムテーブルが作成されたスキーマの名前に設定してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

TempTablePostExecutionSQL

説明

TempTablePostExecutionSQL プロパティを使用して、ユーザデータソースまたはシステムテーブルのデータベース内に一時テーブルが作成された直後に Campaign で実行する、完全な SQL ステートメントを指定します。データソース内での一時テーブルの作成を有効にするには、AllowTempTables プロパティを TRUE に設定する必要があります。

この SQL ステートメント内で、テーブル名と列名の代わりにトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することもできます (それらはキャンペーンの実行中に動的に生成されるため)。

このプロパティは、構文の確認なしに自動的に SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

TempTablePostExecutionSQL プロパティは、複数の SQL ステートメントを実行するために、セミコロンを区切り文字として扱います。1 つのステートメントとして実行したい SQL ステートメントにセミコロンが含まれている場合は、セミコロンの前に円記号をエスケープ文字として使用します。

注: TempTablePostExecutionSQL プロパティを持つストアードプロシージャを使用する場合は、必ず、使用するデータベースに合った正しい構文を使用してください。次の Oracle 用の例では、ストアードプロシージャを呼び出し、円記号を使用してセミコロンをエスケープしています。begin dbms_stats.collect_table_stats()%; end%;

TempTablePostExecutionSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

UserTablePostExecutionSQL

説明

UserTablePostExecutionSQL プロパティを使用して、ユーザデータソースまたはシステムテーブルのデータベース内にユーザテーブルが作成された直後に Campaign で実行する、完全な SQL ステートメントを指定します。

この SQL ステートメント内で、テーブル名と列名の代わりにトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することもできます (それらはキャンペーンの実行中に動的に生成されるため)。

このプロパティは、構文の確認なしに自動的に SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、それが正しい式であることを確認します。ストリングは、引用符で囲んでも構いませんが、引用符は必須ではありません。

UserTablePostExecutionSQL プロパティは、複数の SQL ステートメントを実行するために、セミコロンを区切り文字として扱います。1 つのステートメントとして実行したい SQL ステートメントにセミコロンが含まれている場合は、セミコロンの前に円記号をエスケープ文字として使用します。

注: UserTablePostExecutionSQL プロパティを持つストアードプロシージャを使用する場合は必ず、使用するデータベースに合った正しい構文を使用してください。次の Oracle 用の例では、ストアードプロシージャを呼び出し、円記号を使用してセミコロンをエスケープしています。begin dbms_stats.collect_table_stats()¥; end¥;

UserTablePostExecutionSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、ユーザテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、ユーザテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、ユーザテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、ユーザテーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、ユーザテーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、ユーザテーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。

トークン	説明
<TABLENAME>	このトークンは、ユーザテーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SegmentTablePostExecutionSQL

説明

SegmentTablePostExecutionSQL プロパティを使用して、セグメント一時テーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign で実行する、完全な SQL ステートメントを指定します。

SegmentTablePostExecutionSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、セグメント一時テーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

有効な SQL ステートメント

SnapshotTablePostExecutionSQL

説明

SnapshotTablePostExecutionSQL プロパティを使用して、スナップショットテーブルが作成されてデータが設定された直後に実行する、1 つ以上の完全な SQL ステートメントを指定します。

SnapshotTablePostExecutionSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、スナップショットテーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショットテーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショットテーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、スナップショットテーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

有効な SQL ステートメント

ExtractTablePostExecutionSQL

説明

ExtractTablePostExecutionSQL プロパティを使用して、書き込みテーブルが作成されてデータが設定された直後に実行する、1 つ以上の完全な SQL ステートメントを指定します。

ExtractTablePostExecutionSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、書き込みテーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、書き込みテーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、書き込みテーブルの列名 (単数または複数) に置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、書き込みテーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

デフォルト値

未定義

有効な値

有効な SQL ステートメント

TempTablePrefix

説明

TempTablePrefix パラメータは、Campaign によって作成されたすべての一時テーブルの名前の前に自動的に付加するストリングを指定します。この

パラメータは、一時テーブルの識別と管理に役立つように使用してください。また、このプロパティを使用して、特定の場所に一時テーブルを作成することもできます。

例えば、ユーザトークンがスキーマに対応する場合、次のように設定できます。

```
TempTablePrefix="<USER>"
```

また、すべての一時テーブルは、データソースに接続したユーザのスキーマ内に作成されます。

TempTablePrefix で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、IBM Unica Marketing ユーザ名に置き換わります。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンのコードに置き換わります。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連付けられた、キャンペーンの名前に置き換わります。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースユーザ名に置き換わります。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成に関連付けられた、フローチャートの名前に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザの Campaign ユーザ名に置き換わります。

注: 必ず、トークンを解決した後の最終的な一時テーブル名が、データベース固有の名前の長さの制限を超えないようにしてください。

注: TempTablePrefix に使用されるトークン内で、データベーステーブル名に有効でない文字は、すべて削除されます。トークンが解決された後、結果の一時テーブルプレフィックスは英字で始まる必要があります。英数字またはアンダースコアのみを含んでいる必要があります。無効な文字は、暗黙のうちに削除されます。結果の一時テーブルプレフィックスが英字で始まらない場合、Campaign はプレフィックスの前に英字「U」を付加します。

デフォルト値

UAC

TeradataDeleteBeforeDrop

説明

TeradataDeleteBeforeDrop パラメータは、Teradata データソースにのみ適用されます。これは、テーブルを削除する前に、レコードを削除するかどうかを指定します。

テーブルを削除する前に、テーブルからすべてのレコードを削除するには、この値を TRUE に設定します。

注: 何らかの理由で Campaign がレコードを削除できない場合、テーブルは削除されません。

最初にすべてのレコードを削除せずにテーブルを削除するには、この値を FALSE に設定します。

デフォルト値

TRUE

TruncateSQL

説明

TruncateSQL プロパティは、DB2 データソースに使用でき、テーブルの切り捨て用の代替 SQL を指定できます。このプロパティは DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合にのみ、適用されます。DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合、このプロパティ内のカスタム SQL を使用して、テーブルの切り捨てが行われます。このプロパティが設定されていない場合、Campaign は TRUNCATE TABLE <TABLENAME> 構文を使用します。

このパラメータは、デフォルトでは定義されていません。

TruncateSQL で使用可能なトークンについて、以下で説明します。

トークン	説明
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign で切り捨てられるデータベーステーブル名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Type

説明

partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > type
プロパティは、このデータソースのデータベースタイプを指定します。

デフォルト値

デフォルト値は、データソース構成を作成するために使用されたデータベーステンプレートによって異なります。

有効な値

システムテーブルに有効な値は、以下のとおりです。

- SQLServer

- DB2
- DB2ODBC
- ORACLE
- ORACLE8
- ORACLE9

顧客テーブルに有効な値には、以下も含まれます。

- SYBASE
- INFORMIX7
- INFORMIX8
- INFORMIX9
- TERADATA
- NETEZZA
- SAS
- SASDB

UseExceptForMerge

説明

Campaign は、マージプロセスまたはセグメントプロセスで除外を行うとき、デフォルトで次のような「NOT EXISTS」構文を使用します。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS
(SELECT * FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)
```

UseExceptForMerge が有効である (値が YES に設定されている) 場合、しかも、「NOT IN」を (UseNotInForMerge が無効に設定されているため、またはオーディエンスレベルが複数のフィールドから構成されていてデータソースが Oracle でないために) 使用できない場合、構文は次のように変更されます。

Oracle

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable
MINUS (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

その他

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable
EXCEPT (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

デフォルト値

NO

有効な値

YES | NO

UseMergeForTrack

説明

トラックプロセスのパフォーマンスを向上させるために、SQL MERGE 構文を実装します。DB2、Oracle、SQL Server 2008、Teradata 12 では、

UseMergeForTrack プロパティを TRUE に設定できます。また、これは SQL MERGE ステートメントをサポートするその他のデータベースにも使用できます。

デフォルト値

TRUE (DB2 および Oracle) | FALSE (それ以外のすべて)

有効な値

TRUE | FALSE

UseNonANSIJoin

説明

UseNonANSIJoin プロパティは、このデータソースが非 ANSI 結合構文を使用するかどうかを指定します (例えば、バージョン 8 より前のバージョンの Oracle、および Informix8 の場合)。

- データソースタイプが Informix8 に設定されている場合、UseNonANSIJoin は無視され、Informix8 に適した非 ANSI 結合構文が常に使用されます。
- データソースタイプが Oracle7 または Oracle8 に設定されており、UseNonANSIJoin が TRUE に設定された場合、データソースは Oracle に適した非 ANSI 結合構文を使用します。
- データソースタイプが Sybase に設定されており、UseNonANSIJoin の値が TRUE に設定された場合、データソースは Sybase に適した非 ANSI 結合構文を使用します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UseNotInForMerge

説明

Campaign は、マージプロセスまたはセグメントプロセスで除外を行うとき、デフォルトで次のような「NOT EXISTS」構文を使用します。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS (SELECT *  
FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)
```

UseNotInForMerge が有効である (値が YES に設定されている) 場合、しかも、(1) オーディエンスレベルが単一の ID フィールドから構成されているか、(2) データソースが Oracle である場合、構文は次のように変更されません。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE IncludeTable.ID NOT IN  
(SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

デフォルト値

NO

有効な値

YES | NO

UseSQLToProfile

説明

UseSQLToProfile プロパティを使用すると、レコードをフェッチせずに、(「SELECT *field*, count(*) FROM *table* GROUP BY *field*」を使用して) データベースに SQL クエリ GROUP BY を送信してプロファイルを計算するよう Campaign を構成できます。

- 値が FALSE (デフォルト) の場合、Campaign はテーブル内のすべてのレコードについてフィールドの値を取り出し、個別の値の件数を追跡することにより、フィールドのプロファイルを作成します。
- 値が TRUE の場合、Campaign は次のようなクエリを発行することにより、フィールドのプロファイルを作成します。

```
SELECT field, COUNT(*) FROM table GROUP BY field
```

これは、データベースに負荷を押し付けます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | partitions | partition[n] | systemTableMapping

systemTableMapping カテゴリのプロパティには、システムテーブルを再マップするか、コンタクト履歴テーブルまたはレスポンス履歴テーブルをマップすると、自動的にデータが設定されます。このカテゴリ内のプロパティを編集しないでください。

Campaign | partitions | partition[n] | server | systemCodes

このカテゴリのプロパティは、Campaign の場合、可変長のコードが許容されるかどうか、キャンペーンとセルコードの形式とジェネレータ、オファーコードを表示するかどうか、およびオファーコードの区切り文字を指定します。

offerCodeDelimiter

説明

offerCodeDelimiter プロパティは、複数のコード部分を連結するために (例えば、Campaign 定義項目の OfferCode フィールドを出力するために) 内部で使用されます。また、Campaign レスポンスプロセスでオファーコードを複数の部分に分割するために、入力オファーコードにも使用されます。値は単一の文字でなければなりません。

このバージョンの Campaign には、NumberOfOfferCodesToUse パラメータがもはや存在しないことに注意してください。この値は、現在ではオファーテンプレートから取得されます (すべてのオファーテンプレートは、異なる数のオファーコードを持つ可能性があります)。

デフォルト値

allowVariableLengthCodes

説明

allowVariableLengthCodes プロパティは、Campaign で可変長コードを許容するかどうかを指定します。

値が yes で、コード形式の末尾部分が x の場合、コードの長さは可変になります。例えば、コード形式が nnnnxxxx の場合は、コードを 4 文字から 8 文字の長さにできます。これは、キャンペーン、オファー、バージョン、トラッキング、およびセルの各コードに適用されます。

値が no の場合、可変長コードは許容されません。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

displayOfferCodes

説明

displayOfferCodes プロパティは、Campaign GUI でオファーコードを名前と一緒に表示するかどうかを指定します。

値が yes の場合、オファーコードは表示されます。

値が no の場合、オファーコードは表示されません。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

cellCodeFormat

説明

cellCodeFormat プロパティは、キャンペーンコードジェネレータによって使用され、デフォルトのセルコードジェネレータによって自動的に作成されるセルコードの形式を定義します。

有効な値のリストについては、campCodeFormat を参照してください。

デフォルト値

Annnnnnnnn

campCodeFormat

説明

campCodeFormat プロパティは、キャンペーンコードジェネレータによって使用され、キャンペーンを作成するときにデフォルトのキャンペーンコードジェネレータによって自動的に生成されるキャンペーンコードの形式を定義します。

デフォルト値

Cnnnnnnnnn

有効な値

可能な値は、以下のとおりです。

- A-Z または任意の記号 - 定数として扱われます。
- a - ランダムな英字 A-Z (大文字のみ)
- c - ランダムな英字 A-Z または数字 0-9
- n - ランダムな数字 0-9
- x - 0-9 または A-Z からの任意の単一 ASCII 文字。生成されたキャンペーンコードを編集して、Campaign が x の置換に使用した ASCII 文字を、任意の ASCII 文字に置き換えることができます。その場合、Campaign はその文字を代わりに使用します。

cellCodeGenProgFile

説明

cellCodeGenProgFile プロパティは、セルコードジェネレータの名前を指定し、そのジェネレータが Campaign によって提供されたデフォルトのジェネレータである場合は、サポートされているオプションを指定します。生成されるコードの形式を制御するプロパティは、cellCodeFormat プロパティで設定されることに注意してください。サポートされているオプションのリストについては、campCodeGenProgFile を参照してください。

独自のセルコードジェネレータを作成した場合は、デフォルト値をカスタムプログラムの絶対パスに置き換えてください。これには、ファイル名と拡張子、および UNIX でのスラッシュ (/) と Windows での円記号 (¥) の使用も含まれます。

デフォルト値

uaccampcodegen (Campaign によって提供されるコードジェネレータ)

campCodeGenProgFile

説明

campCodeGenProgFile プロパティは、キャンペーンコードジェネレータの名前を指定し、そのジェネレータが Campaign によって提供されたデフォルトのジェネレータである場合は、サポートされているオプションを指定します。

生成されるコードの形式を制御するプロパティは、campCodeFormat プロパティで設定されることに注意してください。

独自のキャンペーンコードジェネレータを作成した場合は、デフォルト値をカスタムプログラムの絶対パスに置き換えてください。これには、ファイル名と拡張子、および UNIX でのスラッシュ (/) と Windows での円記号 (¥) の使用も含まれます。

デフォルトのキャンペーンコードジェネレータは、以下のオプションを使用して呼び出すことができます。

- -y: 年 (整数 4 桁)
- -m : 月 (1 桁または 2 桁の整数で値は 12 以下)
- -d : 日 (1 桁または 2 桁の整数で値は 31 以下)
- -n : キャンペーン名 (任意のストリングで 64 文字以下)
- -o: キャンペーンの所有者 (任意のストリングで 64 文字以下)
- -u : キャンペーンコード (任意の整数)。アプリケーションに自動的に生成させずに、正確なキャンペーン ID を指定できます。
- -f: デフォルトをオーバーライドする場合は、コード形式。
campCodeFormat で指定された値をとります。
- -i: その他の整数。
- -s : その他のストリング。

デフォルト値

uaccampcodegen (Campaign によって提供されるコードジェネレータ)

Campaign | partitions | partition[n] | server | encoding

このカテゴリのプロパティは、非英語データをサポートするために、ファイルに書き込まれる値のテキストエンコーディングを指定します。

stringEncoding

説明

partition[n] > server > encoding > stringEncoding プロパティは、Campaign によるフラットファイルの読み取り方法と書き込み方法を指定します。これは、すべてのフラットファイルに使用されるエンコーディングに一致する必要があります。他の場所で構成されていない場合は、これがフラットファイルエンコーディングのデフォルト設定です。

注: この設定に WIDEUTF-8 はサポートされません。

デフォルトでは、値は指定されず、出力されるテキストファイルは、Campaign のデフォルトエンコーディングである UTF-8 としてエンコードされます。

ベストプラクティスは、この値を、たとえそれが暗黙のデフォルトと同じ UTF-8 であっても、システムに適したエンコーディングに明示的に設定することです。

注: dataSources カテゴリ内のデータソースに StringEncoding プロパティの値を設定しなかった場合は、この stringEncoding プロパティの値がデフ

ォルト値として使用されます。これは、無用な混乱を起こす場合があるため、常に `dataSources` カテゴリ内で `StringEncoding` プロパティを明示的に設定してください。

サポートされているエンコーディングのリストについては、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

forceDCTOneBytePerChar

説明

`forceDCTOneBytePerChar` プロパティは、UTF-8 へのトランスコーディング用に十分なスペースを許容されるよう潜在的な拡張幅が予約されている場合でも、Campaign で出力ファイルに元のフィールド幅を使用するかどうかを指定します。

テキスト値は、それを表すために使用するエンコーディングによって長さが異なる場合があります。`stringEncoding` プロパティが ASCII でも UTF-8 でもないデータソースからのテキスト値の場合、Campaign は UTF-8 へのトランスコーディング用に十分なスペースを確保するために、3 倍のフィールド幅を予約します。例えば、`stringEncoding` プロパティが LATIN1 に設定されており、データベース内のフィールドが VARCHAR(25) として定義されている場合、Campaign はトランスコーディングされた UTF-8 値を保持するために、75 バイトを予約します。元のフィールド幅を使用する場合は、`forceDCTOneBytePerChar` プロパティを TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | partitions | partition[n] | server | timeout

このカテゴリのプロパティは、ユーザが接続を切断し、すべての実行が完了した後、Campaign フローチャートが終了するまでの待ち時間と、Campaign サーバプロセスがエラーを報告する前に外部サーバからレスポンスを待つ時間を秒数で指定します。

waitForGracefulDisconnect

説明

`waitForGracefulDisconnect` プロパティは、Campaign サーバプロセスの実行を、ユーザが正常に接続を切断するまで継続するか、それともユーザが切断を意図していたかどうかに関係なく終了するかを指定します。

値が `yes` (デフォルト) の場合、サーバプロセスはユーザが終了を希望しているかどうかを判別できるまで、実行を継続します。このオプションは、変更が失われるのを防止しますが、サーバプロセスが累積する結果を招く場合があります。

値 no の場合、サーバプロセスはシャットダウンされ、サーバプロセスの累積は防止されますが、ネットワークの中断が発生した場合、または正常に終了するために推奨される操作手順に従わなかった場合、作業内容が失われる可能性があります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

urlRequestTimeout

説明

urlRequestTimeout プロパティは、Campaign サーバプロセスが外部サーバからのレスポンスを待つ秒数を指定します。現時点では、これは Campaign と連動する、IBM Unica Marketing サーバおよび eMessage コンポーネントに対する要求に適用されます。

Campaign サーバプロセスがこの期間内にレスポンスを受信しなかった場合は、通信タイムアウトエラーが報告されます。

デフォルト値

60

delayExitTimeout

説明

delayExitTimeout プロパティは、ユーザが接続を切断し、すべての実行が完了した後、Campaign フローチャートが終了する前に待つ秒数を指定します。

このプロパティを 0 以外の値に設定した場合、後続の Campaign フローチャートで新規インスタンスを開始せずに、既存のインスタンスを利用できます。

デフォルト値

10

Campaign | partitions | partition[n] | server | collaborate

collaborateInactivityTimeout

説明

collaborateInactivityTimeout プロパティは、unica_acsvr プロセスが Distributed Marketing 要求へのサービスを完了した後、終了する前に待つ時間の秒数を指定します。この待機期間中、Distributed Marketing がフローチャートの実行前に一連の要求を行う一般的なシナリオでは、プロセスを使用可能な状態のまま残すことができます。

最小値は 1 です。このプロパティを 0 に設定すると、デフォルトの 60 になります。

デフォルト値

60

Campaign | partitions | partition[n] | server | permissions

このカテゴリのプロパティは、Campaign によって作成されたフォルダに設定される権限と、**profile** ディレクトリに含まれているファイルに対して設定される UNIX グループと権限を指定します。

userFileGroup (UNIX のみ)

説明

userFileGroup プロパティは、ユーザが生成した Campaign ファイルに関連付けられるグループを指定します。グループは、ユーザが指定されたグループのメンバーである場合にのみ設定されます。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

catalogFolderPermissions

説明

catalogFolderPermissions プロパティは、「テーブルカタログ」>「フォルダ作成」ウィンドウで Campaign によって作成されたディレクトリの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者は、読み取り/書き込み/実行権限を持ち、グループと全ユーザは実行/読み取り権限を持ちます。)

templateFolderPermissions

説明

templateFolderPermissions プロパティは、「テンプレート」>「フォルダの作成 (Create Folder)」ウィンドウで Campaign によって作成されたテンプレートディレクトリの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者は、読み取り/書き込み/実行権限を持ち、グループと全ユーザは読み取り/実行権限を持ちます。)

adminFilePermissions (UNIX のみ)

説明

adminFilePermissions プロパティは、profile ディレクトリに含まれているファイルの許可ビットマスクを指定します。

デフォルト値

660 (所有者とグループは、読み取り/書き込み権限だけを持ちます。)

userFilePermissions (UNIX のみ)

説明

userFilePermissions プロパティは、ユーザが生成した Campaign ファイル (例えば、ログファイル、サマリファイル、エクスポートされたフラットファイルなど) の許可ビットマスクを指定します。

デフォルト値

666 (サーバ内で Campaign によって作成されたファイルを全ユーザが読み書きできます。)

adminFileGroup (UNIX のみ)

説明

adminFileGroup プロパティは、profile ディレクトリに含まれているファイルに関連付けられる UNIX 管理者グループを指定します。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartConfig

このカテゴリのプロパティは、Campaign 定義項目の動作 (セルコードの重複を許可するかどうか、および「コンタクト履歴に記録 (Log to Contact History)」オプションをデフォルトで有効にするかどうか) を指定します。

allowDuplicateCellcodes

説明

allowDuplicateCellcodes プロパティは、Campaign スナップショットプロセスでセルコードが重複する値を持つことができるかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign サーバは一意のセルコードを強制します。

値が yes の場合、Campaign サーバは一意のセルコードを強制しません。

デフォルト値

yes

allowResponseNDaysAfterExpiration

説明

allowResponseNDaysAfterExpiration プロパティは、すべてのオファーの有効期限の後、レスポンスを追跡できる最大日数を指定します。これらの遅いレスポンスは、パフォーマンスレポートに含めることができます。

デフォルト値

90

agfProcessnameOutput

説明

agfProcessnameOutput プロパティは、リスト、最適化、レスポンス、スナップショットの各プロセスでの Campaign 定義項目 (UCGF) の出力動作を指定します。

値が PREVIOUS の場合、USGF は入力セルに関連するプロセス名を含みます。

値が CURRENT の場合、UCGF はそれが使用されているプロセスのプロセス名を保持します。

デフォルト値

PREVIOUS

有効な値

PREVIOUS | CURRENT

logToHistoryDefault

説明

logToHistoryDefault プロパティは、Campaign コンタクトプロセスの「ログ」タブの「コンタクト履歴テーブルおよび追跡テーブルに記録 (Log to Contact History and Tracking Tables)」オプションをデフォルトで有効にするかどうかを指定します。

値が yes の場合、このオプションは有効になります。

値が no の場合、このオプションは新規に作成されるすべてのコンタクトプロセスで無効になります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

defaultBehaviorWhenOutputToFile

説明

ファイルに出力する場合の、Campaign でのコンタクトプロセスの動作を指定します。このプロパティは、現行パーティション内でのみ適用されます。このデフォルト動作 (設定された場合) がプロセスに適用されるのは、それらのプロセスがフローチャートに新規に追加される場合だけです。プロセスがフローチャートに追加された後は、プロセス構成で出力動作を変更できません。

デフォルト値

データ追記

有効な値

- データ追記
- 新規ファイル作成

- データ置換

defaultBehaviorWhenOutputToDB

説明

データベーステーブルに出力する場合の、Campaign でのコンタクトプロセスの動作を指定します。このプロパティは、現行パーティション内でのみ適用されます。このデフォルト動作 (設定された場合) がプロセスに適用されるのは、それらのプロセスがフローチャートに新規に追加される場合だけです。プロセスがフローチャートに追加された後は、プロセス構成で出力動作を変更できます。

デフォルト値

データ追記

有効な値

- データ追記
- データ置換

replaceEmbeddedNames

説明

replaceEmbeddedNames プロパティが TRUE に設定されている場合、Campaign はクエリテキストに組み込まれているユーザ変数名と UCGF 名を実際の値に置き換えます。ただし、それらの名前は英数字以外の文字、例えばアンダースコアなどによって区切られている必要があります (例えば、ABCUserVar.v1 は置換されませんが、ABC_UserVar.v1 は置換されます)。Campaign 7.2 以前との後方互換性を維持するには、このプロパティを TRUE に設定します。

FALSE に設定した場合、Campaign は異なるユーザ変数名と UCGF 名だけを (Unica と未加工 SQL の両方の式で) 実際の値に置き換えます。Campaign 7.3 以上との後方互換性を維持するには、このプロパティを FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartSave

このカテゴリのプロパティは、新規 Campaign フローチャートの自動保存プロパティとチェックポイントプロパティのデフォルト設定を指定します。

checkpointFrequency

説明

checkpointFrequency プロパティは、新規 Campaign フローチャートのチェックポイントプロパティ (クライアントサイドの「詳細設定」ウィンドウでフローチャートごとに構成できます) のデフォルト設定を (分単位で) 指定

します。チェックポイント機能を使用すると、実行中のフローチャートのスナップショットを、リカバリの目的で取り込むことができます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

任意の整数

autosaveFrequency

説明

autosaveFrequency プロパティは、新規 Campaign フローチャートの自動保存プロパティ (クライアントサイドの「詳細設定」ウィンドウでフローチャートごとに構成できます) のデフォルト設定を (分単位で) 指定します。自動保存機能は、編集時および構成時に、フローチャートの強制的な保存を行います。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

任意の整数

Campaign | partitions | partition[n] | server | dataProcessing

このカテゴリのプロパティは、Campaign によるフラットファイルでのストリング比較と空のフィールドの処理方法、およびマクロ STRING_CONCAT の動作を指定します。

longNumericIdsAsText

説明

longNumericIdsAsText プロパティは、Campaign マクロ言語で 15 桁を超える数値 ID をテキストとして扱うかどうかを指定します。

15 桁を超える数値 ID をテキストとして扱うには、値を yes に設定します。

15 桁を超える数値 ID を数値として扱う (したがって、切り捨てや丸めを行った場合は精度または固有性が失われる可能性がある) ことを指定するには、値を no に設定します。

注: この設定は、partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > ForceNumeric プロパティが、このデータソースからのフィールドについて TRUE に設定されている場合は無視されます。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

stringConcatWithNullsNull

説明

stringConcatWithNullsNull プロパティは、Campaign マクロ STRING_CONCAT の動作を制御します。

値が yes の場合、STRING_CONCAT はいずれかの入力がある場合、NULL を返します。

値が no の場合、STRING_CONCAT は非 NULL のすべてのプロパティを連結したものを返します。この場合、STRING_CONCAT が NULL を返すのは、すべての入力がある場合だけです。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

performCaseInsensitiveComparisonAs

説明

performCaseInsensitiveComparisonAs プロパティは、compareCaseSensitive プロパティが no に設定されているとき (つまり、大文字と小文字を区別しない比較のとき)、Campaign でデータ値をどのように比較するかを指定します。このプロパティは、compareCaseSensitive が yes の場合は無視されません。

値が UPPER の場合、Campaign は、比較の前にすべてのデータを大文字に変換します。

値が LOWER の場合、Campaign は、比較の前にすべてのデータを小文字に変換します。

デフォルト値

LOWER

有効な値

UPPER | LOWER

upperAllowsDate

説明

upperAllowsDate プロパティは、UPPER データベース関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されるかどうか、したがって、操作をデータベース内で実行できるか、それとも Campaign サーバによって実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle である場合は、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されます。

データベースが DB2、Teradata、Sybase、または Informix である場合は、値を no に設定します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されません。

これは、グローバルの設定であり、データソース単位の設定ではないことに注意してください。使用中のいずれかのデータソースで no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用中のすべてのデータソースで yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

compareCaseSensitive

説明

compareCaseSensitive プロパティは、Campaign のデータ比較で、英字の大小 (UPPER と lower) を区別するかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign はデータ値を比較するときに大/小文字の違いを無視し、テキストデータをバイナリの、大文字と小文字を区別しない方法でソートします。英語のデータを使用する場合は、この設定を強くお勧めします。

値が yes の場合、Campaign は大/小文字の違いに基づいてデータ値を区別し、各文字の真のバイナリ値比較を行います。英語でないデータを使用する場合は、この設定を強くお勧めします。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

lowerAllowsDate

説明

lowerAllowsDate プロパティは、LOWER データベース関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されるかどうか、したがって、操作をデータベース内で実行できるか、それとも Campaign サーバによって実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle である場合は、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されます。

データベースが DB2、Teradata、Sybase、または Informix である場合は、値を no に設定します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されません。

これは、グローバルの設定であり、データソース単位の設定ではないことに注意してください。使用中のいずれかのデータソースで no の値が推奨され

ている場合は、値を `no` に設定します。使用中のすべてのデータソースで `yes` の値が推奨されている場合は、値を `yes` に設定します。一般に、顧客のサイトで使用されるデータベースタイプは 1 つだけですが、複数のデータベースタイプが使用されるインストール済み環境もあります。

デフォルト値

`yes`

有効な値

`yes` | `no`

substrAllowsDate

説明

`substrAllowsDate` プロパティは、`SUBSTR/SUBSTRING` データベース関数で `DATE/DATETIME` パラメータが許容されるかどうか、したがって、操作をデータベース内で実行できるか、それとも Campaign サーバによって実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが Oracle または Teradata である場合は、値を `yes` に設定します。これらのデータベースでは、`SUBSTR/SUBSTRING` 関数で `DATE/DATETIME` パラメータが許容されます。

データベースが SQL Server、DB2、Sybase、または Informix である場合は、値を `no` に設定します。SQL Server、DB2、および Sybase では、`SUBSTR/SUBSTRING` 関数で `DATE/DATETIME` パラメータは許容されません。Informix の `SUBSTR` では、`DATE` パラメータは受け入れられますが、`DATE` は最初にテキストに変換され、その変換によってフォーマットが変更されます。したがって、`SUBSTR` は、Campaign サーバと比較した場合、データベース内に異なる結果を返すので、データベースが Informix であるときのベストプラクティスは `substrAllowsDate` を `no` に設定することです。

これは、グローバルの設定であり、データソース単位の設定ではないことに注意してください。使用中のいずれかのデータソースで `no` の値が推奨されている場合は、値を `no` に設定します。使用中のすべてのデータソースで `yes` の値が推奨されている場合は、値を `yes` に設定します。

デフォルト値

`yes`

有効な値

`yes` | `no`

ltrimAllowsDate

説明

`ltrimAllowsDate` プロパティは、`LTRIM` データベース関数で `DATE/DATETIME` パラメータが許容されるかどうか、したがって、操作をデータベース内で実行できるか、それとも Campaign サーバによって実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが SQL Server、Oracle、または Teradata である場合は、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されます。

データベースが DB2、Sybase、または Informix である場合は、値を no に設定します。これらのデータベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されません。

これは、グローバルの設定であり、データソース単位の設定ではないことに注意してください。使用中のいずれかのデータソースで no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用中のすべてのデータソースで yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。一般に、顧客のサイトで使用されるデータベースタイプは 1 つだけですが、複数のデータベースタイプが使用されるインストール済み環境もあります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

rtrimAllowsDate

説明

rtrimAllowsDate プロパティは、RTRIM データベース関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されるかどうか、したがって、操作をデータベース内で実行できるか、それとも Campaign サーバによって実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが SQL Server、Oracle、または Teradata である場合は、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、RTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されます。

データベースが DB2、Sybase、または Informix である場合は、値を no に設定します。これらのデータベースでは、RTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されません。

これは、グローバルの設定であり、データソース単位の設定ではないことに注意してください。使用中のいずれかのデータソースで no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用中のすべてのデータソースで yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

likeAllowsDate

説明

likeAllowsDate プロパティは、LIKE データベース関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されるかどうか、したがって、操作をデータベース内で実行できるか、それとも Campaign サーバによって実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle である場合は、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、LIKE 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されます。

データベースが DB2、Teradata、Sybase、または Informix である場合は、値を no に設定します。これらのデータベースでは、LIKE 関数で DATE/DATETIME パラメータが許容されません。

注: これは、グローバルの設定であり、データソース単位の設定ではありません。使用中のいずれかのデータソースで no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用中のすべてのデータソースで yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

fileAllSpacesIsNull

説明

fileAllSpacesIsNull プロパティは、フラットファイル内のすべてがスペースであるフィールドを NULL 値と見なすかどうかを指定することにより、マップされたフラットファイル内の空のフィールドを Campaign でどのように解釈するかを指定します。

値が yes の場合、すべてがスペースである値は NULL 値と見なされます。Campaign は <field> is null などのクエリには対応しますが、<field> = "" などのクエリには失敗します。

値が no の場合、すべてがスペースである値は、非 NULL の空のストリングとして扱われます。Campaign は <field> = "" などのクエリには対応しますが、<field> is null は失敗します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

Campaign | partitions | partition[n] | server | optimization

このカテゴリのプロパティは、Campaign で再利用のためにキャッシュされるオペレーティングシステムスレッドの数、新規フローチャートの仮想メモリ使用プロパティのデフォルト設定のほか、データベース内最適化を有効にするかどうかを指定します。

注: このパラメータのカテゴリは、Optimize とは関係ありません。

maxVirtualMemory

説明

maxVirtualMemory プロパティは、新規 Campaign フローチャートの Affinium 仮想メモリ使用プロパティ (クライアントサイドの「詳細設定」ウィンドウでフローチャートごとに構成できます) のデフォルト設定を指定します。単位はメガバイトです。

デフォルト値

128

useInDbOptimization

説明

useInDbOptimization プロパティは、Campaign が、Campaign サーバの代わりにデータベース内でできるだけ多くの操作を実行しようと試みるかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign は ID のリストを常に Campaign 内に維持します。

値が yes の場合、Campaign は、可能であれば ID リストのプルを回避します。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

maxReuseThreads

説明

maxReuseThreads プロパティは、再利用のためにサーバプロセス (unica_acsvr) によってキャッシュされる、オペレーティングシステムスレッドの数を指定します。デフォルトでは、このプロパティは 0 に設定されるため、キャッシュは無効になります。

スレッド割り振りのオーバーヘッドを削減したい場合、またはアプリケーションがスレッドの解放を要求したときに、それができないことを示す可能性があるオペレーティングシステムでは、キャッシュを使用するのがベストプラクティスです。

maxReuseThreads プロパティは、ゼロ以外の値に設定する場合、MaxQueryThreads の値以上にする必要があるので注意してください。

デフォルト値

0 (ゼロ)。これはキャッシュを無効にします。

tempTableDataSourcesForSegments

説明

tempTableDataSourcesForSegments プロパティは、セグメントの作成プロセスで永続セグメント一時テーブルを作成する必要のあるデータソースのリストを定義します。このリストは、コンマ区切りリストです。

デフォルトでは、このプロパティは空白です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

doNotCreateServerBinFile

説明

このオプションを TRUE に設定した場合、戦略セグメントは Campaign サーバ上にバイナリファイルを作成しません。その代わりに、戦略セグメントはセグメント一時テーブルをデータソース内に作成します。値を TRUE に設定した場合は、セグメントの作成プロセスの構成で少なくとも 1 つのデータソースを指定する必要があります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | partitions | partition[n] | server | logging

このカテゴリのプロパティは、Campaign サーバについて、標準および Windows のイベントログを有効にするかどうか、ログレベルとカテゴリ、およびその他のログ動作を指定します。

enableWindowsEventLogging

説明

enableWindowsEventLogging プロパティを使用すると、Windows イベントログへの Campaign サーバのログを有効または無効にすることができます。

値が yes の場合、Windows イベントログへの記録は有効になります。

値が no の場合、Windows イベントログへの記録は無効になります。無効にした場合、windowsEventLoggingLevel および windowsEventLoggingCategory の設定は無視されます。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

logFileBufferSize

説明

logFileBufferSize プロパティは、keepFlowchartLogOpen プロパティの値が yes のときに使用されます。これはログメッセージの数に上限を設定し、この上限に到達後、メッセージはファイルに書き込まれます。

値が 1 の場合、すべてのログメッセージは即時にファイルに書き込まれ、バッファリングは事実上無効になりますが、パフォーマンスがいくらか悪くなります。

このプロパティは、keepFlowchartLogOpen の値が no に設定されている場合は無視されます。

デフォルト値

5

keepFlowchartLogOpen

説明

keepFlowchartLogOpen プロパティは、ログファイルに行が書き込まれるたびに、Campaign でフローチャートログファイルのオープンとクローズを行うかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign はフローチャートログファイルのオープンとクローズを行います。

値が yes の場合、Campaign はフローチャートログファイルを 1 回だけオープンし、フローチャートのサーバプロセスが終了したときにのみ、フローチャートログファイルをクローズします。値を yes にすると、リアルタイムフローチャートのパフォーマンスが向上する場合があります。yes の設定を使用したときの副次作用は、最近ログに記録されたメッセージが、即時にログファイル内で可視にならない場合があることです。これは、Campaign でログメッセージがファイルにフラッシュされるのは、内部バッファが満杯になったときか、ログに記録されたメッセージの数が logFileBufferSize プロパティの値に等しいときに限られるためです。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

logProcessId

説明

logProcessId プロパティは、Campaign サーバプロセスのプロセス ID (pid) をログファイルに記録するかどうかを制御します。

値が yes の場合、プロセス ID はログに記録されます。

値が no の場合、プロセス ID はログに記録されません。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

logMaxBackupIndex

説明

logMaxBackupIndex プロパティは、保持されるバックアップ Campaign サーバログファイルの数を指定し、この数を超えると、最も古いファイルが消去されます。

値が 0 (ゼロ) の場合、バックアップファイルは作成されず、ログファイルは、logFileMaxSize プロパティで指定されたサイズに到達すると切り捨てられます。

値が n (ただし、n はゼロより大きい値です)、ファイル {File.1, ..., File.n-1} は {File.2, ..., File.n} に名前変更されます。また、File は File.1 に名前変更され、クローズされます。新しい File が、それ以降のログ出力を受け取るために作成されます。

デフォルト値

1 (1 つのバックアップログファイルを作成)

loggingCategories

説明

loggingCategories プロパティは、Campaign サーバログファイルに書き込むメッセージのカテゴリを指定します。これは、(選択されたすべてのカテゴリの) 重大度に基づいてログに記録するメッセージを判別する loggingLevels と連動します。複数のカテゴリをコンマ区切りリストで指定できます。特殊なカテゴリ all を使用すると、すべてのログカテゴリを簡単に指定できます。

デフォルト値

ALL

有効な値

以下のカテゴリがサポートされます。

- ALL
- BAD_ORDER
- CELL_ACCESS
- CONFIG
- DATA_ERRORS
- DBLOAD
- FILE_ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT

- SYSQUERY
- TABLE_ACCESS
- TABLE_MAPPING
- TABLE_IO
- WEBPROC

loggingLevels

説明

loggingLevels プロパティは、Campaign サーバログファイルに書き込む詳細の量を、重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は最小の詳細 (最も重大なエラーのみ) を表し、ALL はトレースメッセージを含み、主に診断を目的としています。これらの設定は、フローチャート内から「ツール」>「ログオプション」メニューによって調整できます。

注: 構成とテストのときは、診断の目的で Campaign からのログ出力を最大にするために、loggingLevels プロパティを ALL に設定するとよいでしょう。この設定では大量のデータが生成されるため、実動操作にはお勧めできない場合があります。

windowsEventLoggingCategories

説明

windowsEventLoggingCategories プロパティは、Campaign サーバの Windows イベントログに書き込むメッセージのカテゴリを指定します。これは、(選択されたすべてのカテゴリの) 重大度に基づいてログに記録するメッセージを判別する windowsEventLoggingLevels と連動します。

複数のカテゴリをコンマ区切りリストで指定できます。特殊なカテゴリ all を使用すると、すべてのログカテゴリを簡単に指定できます。

デフォルト値

ALL

有効な値

- ALL
- BAD_ORDER
- CELL_ACCESS
- CONFIG
- DATA_ERRORS

- DBLOAD
- FILE_ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT
- SYSQUERY
- TABLE_ACCESS
- TABLE_MAPPING
- TABLE_IO
- WEBPROC

logFileMaxSize

説明

logFileMaxSize プロパティは、Campaign サーバログファイルに許容される最大サイズをバイト単位で指定します。このサイズに到達すると、ログファイルはバックアップファイルへロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

説明

windowsEventLoggingLevels プロパティは、Campaign サーバの Windows イベントログに書き込む詳細の量を、重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は最小の詳細 (最も重大なエラーのみ) を表し、ALL はトレースメッセージを含み、主に診断を目的としています。

enableLogging

説明

enableLogging プロパティは、Campaign サーバログをセッション開始時にオンにするかどうかを指定します。

値が yes の場合、ログはオンになります。

値が no の場合、ログはオフになります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartRun

このカテゴリのプロパティは、Campaign スナップショットエクスポートで許容されるエラーの数、フローチャートの保存時に保存されるファイル、およびテスト実行での各トップレベルプロセスの最大 ID 数を指定します。

maxDataErrorsAllowed

説明

maxDataErrorsAllowed プロパティは、1 回の Campaign スナップショットエクスポートで許容されるデータ変換エラーの最大数を指定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)。これは、エラーを許容しません。

saveRunResults

説明

saveRunResults プロパティは、Campaign フローチャートを保存したときに、どのファイルが保存されるかを指定します。

値が yes の場合、「アンダースコア」ファイルが保存され、useInDbOptimization の値が yes ならば、データベース一時テーブルが継続します。

値が no の場合は、.ses ファイルだけが保存され、フローチャートを再ロードしても、中間結果を表示できません。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

testRunDefaultSize

説明

testRunDefaultSize プロパティは、Campaign テスト実行における各トップレベルプロセスのデフォルトの最大 ID 数を指定します。0 (ゼロ) の値を設定すると、ID 数の制限が除去されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

Campaign | partitions | partition[n] | server | profile

このカテゴリのプロパティは、Campaign で数値およびテキスト値のプロファイリング時に作成されるカテゴリの最大数を指定します。

profileMaxTextCategories

説明

profileMaxTextCategories プロパティおよび profileMaxNumberCategories プロパティはそれぞれ、テキスト値と数値のプロファイリング時に Campaign で作成されるカテゴリの最大数を指定します。

これらの値は、ユーザに対して表示される階級数の設定 (これはユーザインタフェースを通じて変更できます) とは異なります。

デフォルト値

1048576

profileMaxNumberCategories

説明

profileMaxNumberCategories プロパティおよび profileMaxTextCategories プロパティはそれぞれ、数値とテキスト値のプロファイリング時に Campaign で作成されるカテゴリの最大数を指定します。

これらの値は、ユーザに対して表示される階級数の設定 (これはユーザインタフェースを通じて変更できます) とは異なります。

デフォルト値

1024

Campaign | partitions | partition[n] | server | internal

このカテゴリのプロパティは、Campaign の内部 ID の上限と下限を指定します。

internalIdLowerLimit

説明

internalIdUpperLimit および internalIdLowerLimit プロパティは、Campaign 内部 ID が指定された範囲内に収まるよう制約します。これらの値は、その値も含むことに注意してください。つまり、Campaign は上限値と下限値をどちらも使用できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

internalIdUpperLimit

説明

internalIdUpperLimit および internalIdLowerLimit プロパティは、Campaign 内部 ID が指定された範囲内に収まるよう制約します。これらの値は、その値も含むことに注意してください。つまり、Campaign は上限値と下限値をどちらも使用できます。

デフォルト値

4294967295

eMessageInstalled

説明

eMessage がインストールされていることを示します。yes を選択すると、Campaign インタフェース内で eMessage 機能を使用できます。

IBM インストーラは、eMessage インストール済み環境内のデフォルトパーティションに対し、このプロパティを yes に設定します。eMessage をインストールした追加のパーティションについては、管理者が手動でこのプロパティを構成する必要があります。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

interactInstalled

説明

Interact 設計環境をインストールした後、この構成プロパティを yes に設定して、Campaign 内で Interact 設計環境を有効にする必要があります。

Interact をインストールしていない場合は、no に設定します。このプロパティを no に設定しても、Interact のメニューとオプションはユーザインタフェースから削除されません。メニューとオプションを削除するには、configTool ユーティリティを使用して、手動で Interact を登録解除する必要があります。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

MO_UC_integration

説明

Marketing Operations との統合を有効にします。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Legacy_campaigns

説明

MO_UC_integration プロパティを **Yes** に設定した場合、Legacy_campaigns プロパティは、統合を有効にする前に作成されたキャンペーンにアクセスできるようにします。これには、Campaign 7.x で作成され、Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーンも含まれます。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Campaign | partitions | partition[n] | server | fileDialog

このカテゴリのプロパティは、Campaign の入出力データファイルのデフォルトディレクトリを指定します。

defaultOutputDirectory

説明

defaultOutputDirectory プロパティは、Campaign ファイル選択ダイアログを初期化するために使用するパスを指定します。defaultOutputDirectory プロパティは、出力データファイルが Campaign にマップされている場合に使用されます。値を指定しなかった場合は、環境変数 UNICA_ACDFDIR からパスが読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

defaultInputDirectory

説明

defaultInputDirectory プロパティは、Campaign ファイル選択ダイアログを初期化するために使用されるパスを指定します。defaultInputDirectory プロパティは、入力データファイルが Campaign にマップされている場合に使用されます。値を指定しなかった場合は、環境変数 UNICA_ACDFDIR からパスが読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | server | offerCodeGenerator

このカテゴリのプロパティは、オファーコードジェネレータと、コンタクトプロセスをターゲットセルスプレッドシートに割り当てるために使用されるセルコードジェネレータの、クラス、クラスパス、および構成ストリングを指定します。

offerCodeGeneratorClass

説明

`offerCodeGeneratorClass` プロパティは、`Campaign` でオファーコードジェネレータとして使用するクラスの名前を指定します。クラスは、そのパッケージ名で完全修飾されている必要があります。

デフォルト値

印刷用に改行が使用されていることに注意してください。

```
com.unica.campaign.core.codegenerator.samples.  
ExecutableCodeGenerator
```

offerCodeGeneratorConfigString

説明

`offerCodeGeneratorConfigString` プロパティは、オファーコードジェネレータプラグインが `Campaign` によってロードされたときに、そのプラグインに渡される文字列を指定します。デフォルトでは、(`Campaign` に添付されている) `ExecutableCodeGenerator` は、このプロパティを使用して、実行する実行可能ファイルにパス (`Campaign` アプリケーションのホームディレクトリを基準にした相対パス) を指示します。

デフォルト値

```
./bin
```

defaultGenerator

説明

`defaultGenerator` プロパティは、セルコードのジェネレータを指定します。それらのセルコードは、コンタクトスタイルのプロセスボックスに表示されるほか、ターゲットコントロールスプレッドシートのセルにセルを割り当てるために使用されます。ターゲットコントロールスプレッドシートは、キャンペーンとフローチャートのセルマッピングとオファーマッピングを管理します。

デフォルト値

```
uacoffercodegen.exe
```

offerCodeGeneratorClasspath

説明

`offerCodeGeneratorClasspath` プロパティは、`Campaign` でオファーコードジェネレータとして使用するクラスのパスを指定します。これは、完全なパスでも相対パスでもかまいません。

パスがスラッシュ (UNIX ではスラッシュ /、Windows では円記号 ¥) で終わる場合、`Campaign` はそれを、使用する Java プラグインクラスが入っているディレクトリへのパスと見なします。パスがスラッシュで終わらない場合、`Campaign` はそれを、Java クラスが入っている jar ファイルの名前と見なします。

パスが相対パスである場合、Campaign はそれを、Campaign アプリケーションのホームディレクトリを基準にした相対パスと見なします。

デフォルト値

codeGenerator.jar (Campaign.war ファイルにパッケージ化されたもの)

Campaign | monitoring

このカテゴリのプロパティは、Operational Monitoring 機能を有効にするかどうか、Operational Monitoring サーバの URL、およびキャッシュ動作を指定します。Operational Monitoring では、アクティブなフローチャートが表示され、それらを制御できます。

cacheCleanupInterval

説明

cacheCleanupInterval プロパティは、フローチャートステータスキャッシュの自動クリーンアップの間隔を秒単位で指定します。

このプロパティは、Campaign の 7.0 より前のバージョンでは使用できません。

デフォルト値

600 (10 分)

cacheRunCompleteTime

説明

cacheRunCompleteTime プロパティは、完了した実行がキャッシュに入れられ、「監視」ページに表示される時間を分単位で指定します。

このプロパティは、Campaign の 7.0 より前のバージョンでは使用できません。

デフォルト値

4320

monitorEnabled

説明

monitorEnabled プロパティは、モニタをオンにするかどうかを指定します。

このプロパティは、Campaign の 7.0 より前のバージョンでは使用できません。

デフォルト値

yes

serverURL

説明

Campaign > monitoring > serverURL プロパティは、Operational Monitoring サーバの URL を指定します。これは、必須の設定です。Operational Monitoring サーバ URL がデフォルトでない場合は、値を変更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されている場合は、Operational Monitoring URL を https で始める必要があります、ポートを 443 に設定する必要があります。次に例を示します。

```
https://localhost:443/Campaign/OperationMonitor
```

デフォルト値

```
http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor
```

monitorEnabledForInteract

説明

yes に設定された場合、Campaign JMX コネクタサーバが Interact に有効になります。Campaign には JMX セキュリティがありません。

no に設定した場合は、Campaign JMX コネクタサーバに接続できません。

この JMX モニタリングは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュール専用です。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

protocol

説明

monitorEnabledForInteract が yes に設定されている場合は、Campaign JMX コネクタサーバのリスニングプロトコル。

この JMX モニタリングは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュール専用です。

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

port

説明

monitorEnabledForInteract が yes に設定されている場合は、Campaign JMX コネクタサーバのリスニングポート。

この JMX モニタリングは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュール専用です。

デフォルト値

2004

有効な値

1025 から 65535 までの整数。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | ProductReindex

オファーの作成者は、そのオファーに関連付けられる製品を指定できます。オファーとの関連付けに使用できる製品のリストが変更された場合は、オファーと製品の関連付けを更新する必要があります。Campaign > ProductReindex カテゴリのプロパティは、それらの更新の頻度と、最初の更新が実行される時刻を指定します。

startTime

説明

startTime プロパティは、オファーと製品の関連付けが初めて更新される時刻を指定します。最初の更新は、Campaign サーバが起動された翌日に発生し、それ以降の更新は、interval パラメータで指定された間隔で発生します。フォーマットは HH:mm:ss で、24 時間クロックを使用します。

Campaign が初めて起動されたときは、次のルールに従って startTime プロパティが使用されることに注意してください。

- startTime で指定された時刻が将来の時刻である場合、オファーと製品の関連付けの最初の更新は、当日の startTime に発生します。
- startTime が当日の過去の時刻である場合、最初の更新は、翌日の startTime か、現在の時刻から interval 分後のどちらか早い方の時刻に発生します。

デフォルト値

12:00:00 (正午)

interval

説明

interval プロパティは、オファーと製品の関連付けの更新間隔を分単位の時間で指定します。更新が初めて発生するのは、Campaign が起動された翌日の、startTime パラメータで指定された時刻です。

デフォルト値

3600 (60 時間)

Campaign IunicaACLListener

このカテゴリのプロパティは、ログレベル、特定のアクセス特権、言語エンコーディング、オペレーティングシステムのスレッドの数、および Campaign リスナのポート、ホスト、およびポートを指定します。これらのプロパティは、Campaign の 1 つのインスタンスにつき 1 回だけ設定する必要があります。すべてのパーティションについて設定する必要はありません。

enableWindowsImpersonation

説明

enableWindowsImpersonation プロパティは、Campaign Windows で Windows の偽装を有効にするかどうかを指定します。Campaign での Windows の偽装については、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

Windows の偽装を使用するには、値を TRUE に設定します。

Windows の偽装を使用しない場合は、値を FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

enableWindowsEventLogging

説明

Campaign > unicaACLlistener > enableWindowsEventLogging プロパティは、Windows イベントログへのログの記録を制御します。Windows イベントログにログを記録するには、このプロパティを TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

serverHost

説明

serverHost プロパティは、Campaign リスナがインストールされているマシンの名前または IP アドレスを指定します。IBM Unica Marketing がインストールされているマシンと同じマシンに Campaign リスナがインストールされていない場合は、値を Campaign リスナがインストールされているマシンのマシン名または IP アドレスに変更してください。

デフォルト値

localhost

logMaxBackupIndex

説明

logMaxBackupIndex プロパティは、最も古いバックアップファイルが削除されるまでに存在できる、バックアップファイルの数を指定します。このプロパティを 0 (ゼロ) に設定した場合、Campaign はバックアップファイルを作成せず、ログファイルは、logMaxFileSize プロパティで指定したサイズに到達した時点で記録が停止されます。

このプロパティに数値 N) を指定した場合、ログファイル (File) が logMaxFileSize プロパティで指定されたサイズに到達すると、Campaign は既存のバックアップファイル (File.1 ... File.N-1) を File.2 ... File.N に名前変更し、現行ログファイル File.1 をクローズし、File という名前の新規ログファイルを開始します。

デフォルト値

1 (1 つのバックアップファイルを作成)

logStringEncoding

説明

logStringEncoding プロパティは、すべてのログファイルに使用されるエンコーディングを制御します。この値は、オペレーティングシステム上で使用されるエンコーディングに一致させてください。マルチロケール環境では、UTF-8 が優先設定です。

この値を変更する場合は、単一のファイルに複数のエンコーディングが書き込まれないよう、影響を受けるすべてのログファイルを空にするか削除してください。

注: この設定に WIDEUTF-8 はサポートされません。

デフォルト値

native

有効な値

サポートされているエンコーディングのリストについては、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

systemStringEncoding

説明

systemStringEncoding プロパティは、オペレーティングシステムから Campaign に着信する値 (例えば、ファイルシステムパスやファイル名など) の解釈に使用するエンコーディング (単数または複数) と、逆に Campaign からオペレーティングシステムに提示される値のエンコーディングを指定します。この値は、一般的には native に設定します。マルチロケール環境では、UTF-8 が優先設定です。

値には、次の例のように、複数のエンコーディングをコンマで区切って組み込むことができます。

UTF-8,ISO-8859,CP950

注: この設定に WIDEUTF-8 はサポートされません。

デフォルト値

native

有効な値

サポートされているエンコーディングのリストについては、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

loggingLevels

説明

Campaign > unicaACLlistener > loggingLevels プロパティは、ログファイルに書き込む詳細の量を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH

maxReuseThreads

説明

Campaign > unicaACLlistener > maxReuseThreads プロパティは、再利用のために Campaign リスナプロセス (unica_aclsnr) によってキャッシュされるオペレーティングシステムスレッドの数を設定します。

スレッド割り振りのオーバーヘッドを削減したい場合、またはアプリケーションがスレッドの解放を要求したときに、それができないことを示す可能性があるオペレーティングシステムでは、キャッシュを使用するのがベストプラクティスです。

デフォルト値

0 (ゼロ)。これはキャッシュを無効にします。

logMaxFileSize

説明

logMaxFileSize プロパティは、ログファイルに許容される最大サイズをバイト単位で指定します。このサイズに到達すると、ログファイルはバックアップファイルへロールインされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

説明

windowsEventLoggingLevels プロパティは、Windows イベントログファイルに書き込む詳細の量を、重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

ALL レベルには、診断目的のトレースメッセージが含まれます。

serverPort

説明

serverPort プロパティは、Campaign リスナがインストールされているポートを指定します。

デフォルト値

4664

useSSL

説明

useSSL プロパティは、Campaign リスナと Campaign Web アプリケーションとの間の通信に Secure Sockets Layer を使用するかどうかを指定します。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

keepalive

説明

keepalive プロパティを使用すると、それ以外では非アクティブなソケット接続上で、Campaign Web アプリケーションサーバから Campaign リスナへキープアライブメッセージを送信する頻度を秒単位で指定できます。

keepalive 構成パラメータを使用すると、Web アプリケーションとリスナ (例えば、ファイアウォール) の間の非アクティブな接続を閉じるように構成されている環境で、アプリケーションが非アクティブでも、時間を延長してソケット接続を開いたまま残すことができます。

ソケット上でアクティビティがある場合、キープアライブ期間は自動的にリセットされます。Web アプリケーションサーバでの DEBUG ログレベルでは、campaignweb.log はキープアライブメッセージがリスナへ送信された証拠を示します。

デフォルト値

0。これはキープアライブ機能を無効にします。

有効な値

正の整数

Campaign | server

このカテゴリのプロパティは、内部で使用される URL を指定し、変更する必要はありません。

fullContextPath

説明

fullContextPath プロパティは内部で使用され、値の指定は任意です。これは、ActiveX コントロールがアプリケーションサーバのリスナのプロキシと通信するために使用する URL を指定します。

このプロキシはデフォルトでは定義されておらず、その場合、システムは動的に URL を決定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | logging

このカテゴリのプロパティは、Campaign ログプロパティファイルの場所を指定します。

log4jConfig

説明

log4jConfig プロパティは、Campaign ログプロパティファイル、campaign_log4j.properties の場所を指定します。Campaign ホームディレクトリを基準にした相対パスを、ファイル名も含めて指定します。UNIX ではスラッシュ (/)、Windows では円記号 (¥) を使用してください。

デフォルト値

./conf/campaign_log4j.properties

eMessage 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページにある eMessage 構成プロパティについて説明します。

eMessage | serverComponentsAndLocations | hostedServices

このページのプロパティは、IBM Unica Hosted Services に接続するための URL を指定します。eMessage では、受信者リストおよび受信者リストを記述したメタデータのアップロードと、ホスト対象の環境へ送信する一般的な通信に別々の接続が使用されます。

IBM が英国に設立したデータセンターを通じて IBM Unica Hosted Services に接続する場合は、デフォルト値を変更する必要があります。接続先のデータセンターを判別するには、IBM にお問い合わせください。

uiHostName

説明

受信者リストとそれに関連するメタデータのアップロードを除いて、eMessage が IBM Unica Hosted Services へのすべての通信に使用するアドレス。

デフォルト値

em.unicaondemand.com

IBM の英国のデータセンターに接続する場合は、この値を em-eu.unicaondemand.com に変更してください。

dataHostName

説明

受信者リストに関連するメタデータを IBM Unica Hosted Services にアップロードするために、eMessage が使用するアドレス。

デフォルト値

em.unicaondemand.com

IBM の英国のデータセンターに接続する場合は、この値を em-eu.unicaondemand.com に変更してください。

ftpHostName

説明

受信者リストのデータ (リストのメタデータを除く) を IBM Unica Hosted Services にアップロードするために、eMessage が使用するアドレス。

デフォルト値

ftp-em.unicaondemand.com

IBM の英国のデータセンターに接続する場合は、この値を ftp-em-eu.unicaondemand.com に変更してください。

eMessage | partitions | partition[n] | hostedAccountInfo

このカテゴリのプロパティを使用すると、IBM Unica Hosted Services へのアクセスに必要なアカウント情報を保管するデータベースにアクセスするために必要な、ユーザ資格情報を定義できます。ここで指定する値は、Marketing Platform 内でユーザ設定として定義されている必要があります。

amUserForAcctCredentials

説明

このプロパティを使用して、IBM Unica Hosted Services へのアクセスに必要なアカウントアクセス資格情報を指定する Marketing Platform データソースを含んでいる Marketing Platform ユーザを指定します。

デフォルト値

asm_admin

有効な値

任意の Marketing Platform ユーザ。

amDataSourceForAcctCredentials

説明

このプロパティを使用して、IBM Unica Hosted Services のログイン資格情報を定義している Marketing Platform データソースを指定します。

デフォルト値

UNICA_HOSTED_SERVICES

有効な値

amUserForAcctCredentials で指定するユーザに関連付けられているデータソース。

eMessage | partitions | partition[n] | dataSources | systemTables

このカテゴリには、ネットワーク環境内の eMessage システムテーブルを含んでいるデータベースについて、そのスキーマ、接続設定、およびログイン資格情報を定義するプロパティが含まれています。

type

説明

eMessage システムテーブルをホストするデータベースのタイプ。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティを定義する必要があります。

有効な値

- SQLSERVER
- ORACLE9
- ORACLE10 (Oracle 11 データベースを示すためにも使用される)
- DB2

schemaName

説明

eMessage システムテーブルのデータベーススキーマの名前。これは、Campaign システムテーブルのスキーマ名と同じです。

スクリプト内でシステムテーブルを参照するときは、このスキーマ名を含める必要があります。

デフォルト値

dbo

jdbcBatchSize

説明

JDBC がデータベース上で一度に実行する実行要求の数。

デフォルト値

10

有効な値

ゼロより大きい整数。

jdbcClassName

説明

Campaign Web サーバで定義されている、システムテーブルの JDBC ドライバ。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティを定義する必要があります。

jdbcURI

説明

Campaign Web サーバで定義されている、システムテーブルの JDBC 接続 URI。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティを定義する必要があります。

asmUserForDBCredentials

説明

このプロパティを使用して、eMessage システムテーブルへのアクセスを許可される IBM Unica Marketing ユーザを指定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティを定義する必要があります。

有効な値

Marketing Platform で定義されている任意のユーザ。一般に、これは Campaign のシステムユーザの名前にします。

amDataSourceForDBCredentials

説明

このプロパティを使用して、eMessage システムテーブルを含んでいるデータベースのログイン資格情報を定義しているデータソースを指定します。これは、Campaign システムテーブルのデータソースと同じものにすることができます。

デフォルト値

UA_SYSTEM_TABLES

有効な値

asmUserForDBCredentials で指定する IBM Unica Marketing ユーザに関連付けられている Marketing Platform データソース。

このデータソースは、eMessage システムテーブルへのアクセスに使用されるデータベースユーザおよび資格情報を指定します。データベースユーザのデフォルトスキーマが、システムテーブルを含んでいるスキーマでない場合は、システムテーブルへのアクセスに使用する JDBC 接続の中で、システムテーブルスキーマを指定する必要があります。

poolAcquireIncrement

説明

データベース接続プールの接続を使い尽くしたときに、eMessage がシステムテーブル用に作成する新規接続の数。eMessage は、poolMaxSize で指定された数を最大値として、新規接続を作成します。

デフォルト値

1

有効な値

ゼロより大きい整数。

poolIdleTestPeriod

説明

eMessage で、eMessage システムテーブルへのアイドル接続のアクティビティの有無をテストする間の待ち時間 (秒数)。

デフォルト値

100

有効な値

ゼロより大きい整数。

poolMaxSize

説明

eMessage がシステムテーブルに対して作成する接続の最大数。ゼロ (0) の値は、最大値がないことを示します。

デフォルト値

100

有効な値

ゼロ以上の整数。

poolMinSize

説明

eMessage がシステムテーブルに対して作成する接続の最小数。

デフォルト値

10

有効な値

ゼロ以上の整数。

poolMaxStatements

説明

eMessage で PrepareStatement キャッシュに保管される、システムテーブルへの接続 1 つあたりの最大ステートメント数。poolMaxStatements をゼロ (0) に設定すると、ステートメントのキャッシュが無効になります。

デフォルト値

0

有効な値

0 以上の整数。

timeout

説明

eMessage で、アイドル状態のデータベース接続が除去されるまでに維持される秒数。

poolIdleTestPeriod が 0 より大きい場合、eMessage はプール内にあるチェックアウトされていないすべてのアイドル接続を、timeout 秒ごとにテストします。

poolIdleTestPeriod が timeout より大きい場合、アイドル接続は除去されません。

デフォルト値

100

有効な値

0 以上の整数。

eMessage | partitions | partition[n] | recipientListUploader

この構成カテゴリには、Recipient List Uploader のアクションまたはステータスに応じてアクションを実行する、ユーザ定義スクリプトの場所に関するオプションのプロパティが含まれています。

pathToTriggerScript

説明

IBM Unica Hosted Services への受信者リストのアップロードに対して、アクションをトリガするスクリプトを作成できます。例えば、リストデザイナーに対して、リストのアップロードが正常に完了したときに電子メールのアラートを送信するスクリプトを作成できます。

このプロパティの値を定義した場合、eMessage は Recipient List Uploader に関するステータス情報を、指定された場所に渡します。このプロパティを空白のままにした場合、eMessage は何もアクションを実行しません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

任意の有効なネットワークパス。

eMessage | partitions | partition[n] | responseContactTracker

このカテゴリのプロパティは、Response and Contact Tracker (RCT) の動作を指定します。RCT は、電子メールコンタクト、電子メール配信、および受信者のレスポンス (例えば、リンクのクリックとオープンなど) に関するデータを取り出し、処理します。

pauseCustomerPremisesTracking

説明

eMessage は、コンタクトとレスポンスのデータを IBM Unica Hosted Services 内のキューに保管します。このプロパティを使用すると、RCT に IBM Unica Hosted Services からのデータの取得を一時的に停止するよう指示できます。トラッキングを再開すると、RCT は累積されたデータをダウンロードします。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

waitTimeToCheckForDataAvailability

説明

RCT は、電子メールコンタクトまたは受信者レスポンスに関して、新規データの有無を定期的に検査します。このプロパティを使用すると、RCT が IBM Unica Hosted Services 内の新規データの有無を検査する頻度を秒単位で指定できます。デフォルト値は 300 秒、つまり 5 分ごとです。

デフォルト値

300

有効な値

1 より大きい任意の整数。

perfLogInterval

説明

このプロパティを使用すると、パフォーマンス統計を RCT によってログファイルに記録する頻度を指定できます。入力した値によって、ログ項目間のバッチの数が決まります。

デフォルト値

10

有効な値

ゼロより大きい整数。

enableSeparatePartialResponseDataTracking

説明

このプロパティは、eMessage で、部分的な電子メールレスポンスデータをローカル eMessage インストール済み環境内のトラッキングテーブルに転送するかどうかを決定します。

eMessage で電子メールレスポンスを正しく属性付けするには、メール配信インスタンス ID とメッセージシーケンス番号が必要です。

enableSeparatePartialResponseDataTracking を True に設定すると、eMessage は不完全なレスポンスを別個のローカルトラッキングテーブルに入れます。このテーブルで、それらのレスポンスを確認するか追加の処理を行うことができます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページにある Interact 構成プロパティについて説明します。

Interact ランタイム環境構成プロパティ

このセクションでは、Interact ランタイム環境のすべての構成プロパティについて説明します。

Interact | general

これらの構成プロパティは、デフォルトログレベルとロケール設定も含め、ランタイム環境の一般的な設定を定義します。

log4jConfig

説明

log4j プロパティが入っているファイルの場所。このパスは、INTERACT_HOME 環境変数を基準にした相対パスでなければなりません。INTERACT_HOME は、Interact インストールディレクトリの場所です。

デフォルト値

./conf/interact_log4j.properties

asmUserForDefaultLocale

説明

asmUserForDefaultLocale プロパティは、Interact のロケール設定の派生元となる IBM Unica Marketing ユーザを定義します。

ロケール設定は、設計時に表示される言語と、Interact API からの通知メッセージの言語を定義します。ロケール設定がマシンのオペレーティングシステムの設定に一致しない場合でも、Interact は機能します。ただし、設計時の表示と通知メッセージは異なる言語で表示される可能性があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | learningTablesDataSource

これらの構成プロパティは、組み込み学習テーブルのデータソース設定を定義します。Interact 組み込みの学習を使用している場合は、このデータソースを定義する必要があります。

学習 API を使用して独自の学習実装を作成する場合は、ILearningConfig インタフェースを使用して、これらの値を読み取るためのカスタム学習実装を構成できます。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用して、アプリケーションサーバ (Websphere または WebLogic) 内で、Interact ランタイムサーバがアクセスする学習テーブル用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データソースを識別します。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだけではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

Interact ランタイムサーバがアクセスする学習テーブルによって使用される、データソースのデータベースタイプ。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだけではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、学習テーブルについて失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだけではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、学習テーブルへの接続に失敗した後、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだけではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

schema

説明

組み込み学習モジュール用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | prodUserDataSource

これらの構成プロパティは、実動プロファイルテーブルのデータソース設定を定義します。管理者は、このデータソースを定義する必要があります。これは、ランタイム環境で、配置後のインタラクティブフローチャートを実行するときに参照されるデータソースです。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用して、アプリケーションサーバ (Websphere または WebLogic) 内で、Interact ランタイムサーバがアクセスする顧客テーブル用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データソースを識別します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

Interact ランタイムサーバによってアクセスされる顧客テーブルのデータベースタイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

aliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティは、ディメンションテーブルを使用して、Interact ランタイムサーバがアクセスする顧客テーブル内の新規テーブルに書き込むときに Interact で自動的に作成されるエイリアス名の Interact での形成方法を指定します。

各データベースには、ID の長さに最大値があることに注意してください。使用しているデータベースの資料で、設定する値がデータベースの ID の最大長を超えないことを確認してください。

デフォルト値

A

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、ランタイム顧客テーブルについて失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、Interact ランタイム顧客テーブルへの接続が失敗した後に、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

デフォルト値

-1

schema

説明

プロファイルデータテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | systemTablesDataSource

これらの構成プロパティは、ランタイム環境用のシステムテーブルのデータソース設定を定義します。管理者は、このデータソースを定義する必要があります。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用して、アプリケーションサーバ (Websphere または WebLogic) 内でランタイム環境テーブル用に定義される、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データソースを識別します。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベ

ースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

ランタイム環境システムテーブルのデータベースタイプ。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、ランタイムシステムテーブルについて失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、Interact ランタイムシステムテーブルへの接続が失敗した後に、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

schema

説明

ランタイム環境用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | systemTablesDataSource | loaderProperties

これらの構成プロパティは、ランタイム環境用のシステムテーブルのデータベースロードユーティリティの設定を定義します。これらのプロパティを定義する必要があるのは、データベースロードユーティリティを使用している場合だけです。

databaseName

説明

データベースローダが接続するデータベースの名前。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderCommandForAppend

説明

LoaderCommandForAppend パラメータは、Interact 内のコンタクト履歴とレスポンス履歴のステージングデータベーステーブルにレコードを付加する目的で、データベースロードユーティリティを起動するために発行するコマンドを指定します。コンタクト履歴とレスポンス履歴のデータ用にデータベースロードユーティリティを有効にするには、このパラメータを設定する必要があります。

このパラメータは、データベースロードユーティリティの実行可能ファイルかデータベースロードユーティリティを起動するスクリプトを指す、フルパス名として指定されます。スクリプトを使用すると、ロードユーティリティを起動する前に、追加のセットアップを行うことができます。

大部分のデータベースロードユーティリティでは、正常に起動するためにいくつかの引数が必要です。それらの引数には、ロード元のデータファイルと制御ファイルの指定、およびロード先のデータベースとテーブルが含まれることがあります。トークンは、コマンドの実行時に、指定されたエレメントに置き換わります。

データベースロードユーティリティを起動するとき使用する正しい構文については、データベースロードユーティリティの資料を参照してください。

このパラメータは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderCommandForAppend で使用可能なトークンについて、次の表で説明します。

トークン	説明
<CONTROLFILE>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメータで指定されたテンプレートに従って Interact が生成した一時制御ファイルの、フルパスおよびファイル名に置き換わります。
<DATABASE>	このトークンは、Interact がデータをロードするデータソースの名前に置き換わります。これは、そのデータソースのカテゴリ名の中で使用されているデータソース名と同じものです。
<DATAFILE>	このトークンは、ロードプロセスで Interact によって作成された一時データファイルのフルパスおよびファイル名に置き換わります。このファイルは、Interact 一時ディレクトリ UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<DBCOLUMNNUMBER>	このトークンは、データベース内の列の序号に置き換わります。
<FIELDLENGTH>	このトークンは、データベース内にロードされるフィールドの長さに置き換わります。
<FIELDNAME>	このトークンは、データベース内にロードされるフィールドの名前に置き換わります。
<FIELDNUMBER>	このトークンは、データベース内にロードされるフィールドの番号に置き換わります。
<FIELDTYPE>	このトークンは、リテラル「CHAR()」に置き換わります。このフィールドの長さは、()の間で指定されます。使用するデータベースがフィールドタイプ CHAR を認識できない場合は、フィールドタイプに適したテキストを手動で指定して、<FIELDLENGTH> トークンを使用できます。例えば、SQLSVR および SQL2000 の場合は、「SQLCHAR(<FIELDLENGTH>)」を使用します。

トークン	説明
<NATIVETYPE>	このトークンは、このフィールドのロード先になるデータベースのタイプに置き換わります。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル内のフィールド数に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースパスワードに置き換わります。
<TABLENAME>	このトークンは、Interact がデータのロード先にするデータベーステーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、データソースへの現在のフローチャート接続からの、データベースユーザに置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderControlFileTemplateForAppend

説明

LoaderControlFileTemplateForAppend プロパティは、以前に Interact で構成された制御ファイルテンプレートを指すフルパスおよびファイル名を指定します。このパラメータを設定すると、Interact はここで指定されたテンプレートに基づいて、一時制御ファイルを動的に構築します。この一時制御ファイルのパスと名前は、LoaderCommandForAppend プロパティで使用可能な <CONTROLFILE> トークンに使用できます。

Interact をデータベースローダユーティリティモードで使用する前に、このパラメータによって指定される制御ファイルテンプレートを構成する必要があります。制御ファイルテンプレートは、以下のトークンをサポートしています。これらは、Interact によって一時制御ファイルが作成されるときに、動的に置き換わります。

制御ファイルに必要な正しい構文については、使用するデータベースローダユーティリティの資料を参照してください。制御ファイルテンプレートで使用できるトークンは、LoaderControlFileTemplate プロパティのトークンと同じです。

このパラメータは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderDelimiterForAppend

説明

LoaderDelimiterForAppend プロパティは、Interact 一時データファイルが固定幅のフラットファイルであるか、それとも区切り文字で区切られたフラットファイルであるかを指定し、区切り文字で区切られている場合は、区切り文字として使用する文字または文字セットを指定します。

値が未定義の場合、Interact は一時データファイルを固定幅のフラットファイルとして作成します。

値を指定した場合は、空であることが分かっていないテーブルにデータを設定するためにローダが起動されたときに、その値が使用されます。Interact は、このプロパティの値を区切り文字として区切ったフラットファイルとして、一時データファイルを作成します。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

有効な値

文字。必要であれば、二重引用符で囲むことができます。

LoaderDelimiterAtEndForAppend

説明

一部の外部ロードユーティリティでは、データファイルを区切り文字で区切った形式にして、各行を区切り文字で終わる必要があります。この要件に対処するには、LoaderDelimiterAtEndForAppend 値を TRUE に設定し、空であることが分かっていないテーブルにデータを設定するためにローダが起動されたときに、Interact が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

LoaderUseLocaleDP

説明

LoaderUseLocaleDP プロパティは、Interact がデータベースロードユーティリティによってロードされるファイルに数値を書き込むとき、小数点にロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。

ピリオド (.) を小数点として使用するよう指定するには、この値を FALSE に設定します。

ロケールに適した小数点記号を使用するよう指定するには、この値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Interact | general | testRunDataSource

これらの構成プロパティは、Interact 設計環境用のテスト実行テーブルのデータソース設定を定義します。このデータソースは、少なくとも 1 つのランタイム環境について定義する必要があります。これらは、インタラクティブフローチャートのテストを実行するときに使用されるテーブルです。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用して、アプリケーションサーバ (Websphere または WebLogic) 内で、インタラクティブフローチャートのテスト実行のときに設計環境がアクセスする顧客テーブル用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データソースを識別します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

インタラクティブフローチャートのテスト実行のときに、設計環境によってアクセスされる顧客テーブルのデータベースタイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

aliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティは、ディメンションテーブルを使用して、インタラクティブフローチャートのテスト実行時に設計環境がアクセスする顧客テーブル用の新規テーブルに書き込むときに、Interact で自動的に作成されるエイリアス名の Interact での形成方法を指定します。

各データベースには、ID の長さに最大値があることに注意してください。使用しているデータベースの資料で、設定する値がデータベースの ID の最大長を超えないことを確認してください。

デフォルト値

A

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、テスト実行テーブルについて失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位で

指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、テスト実行テーブルへの接続に失敗した後、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

デフォルト値

-1

schema

説明

インタラクティブフローチャートのテスト実行用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | idsByType

これらの構成プロパティは、コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールによって使用される ID 番号の設定を定義します。

initialValue

説明

UACI_IDsByType テーブルを使用して ID を生成するときに使用される、初期 ID 値。

デフォルト値

1

有効な値

0 より大きい任意の値。

retries

説明

UACL_IDsByType テーブルを使用して ID を生成する場合の、例外を生成するまでの再試行の回数。

デフォルト値

20

有効な値

0 より大きい任意の整数。

Interact | general | contactAndResponseHistoryDataSource

これらの構成プロパティは、Interact クロスセッションレスポンストラッキングに必要なコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータソースの接続設定を定義します。

これらの設定は、コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールには関係ありません。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用して、アプリケーションサーバ (WebSphere または WebLogic) 内で Interact クロスセッションレスポンストラッキングに必要なコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータソース用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データソースを識別します。

デフォルト値

type

説明

Interact クロスセッションレスポンストラッキングに必要なコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータソースによって使用される、データソースのデータベースタイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、Interact クロスセッションレスポンストラッキングが失敗したときに、Interact が自動的にデータベース接続要求を再試行する時間を秒単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、Interact クロスセッションレスポンストラッキングが失敗した後に、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

デフォルト値

-1

schema

説明

Interact クロスセッションレスポンストラッキング用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | flowchart

このセクションでは、インタラクティブフローチャートの構成設定を定義します。

defaultDateFormat

説明

Interact で日付からストリング、およびストリングから日付への変換に使用する、デフォルトの日付形式。

デフォルト値

MM/dd/yy

idleFlowchartThreadTimeoutInMinutes

説明

Interact で、インタラクティブフローチャート専用のスレッドが、解放される前にアイドル状態であることが許容される分数。

デフォルト値

5

idleProcessBoxThreadTimeoutInMinutes

説明

Interact で、インタラクティブフローチャートプロセス専用のスレッドが、解放される前にアイドル状態であることが許容される分数。

デフォルト値

5

maxSizeOfFlowchartEngineInboundQueue

説明

Interact でキューに保持されるフローチャート実行要求の最大数。この要求数に到達した場合、Interact は要求の取得を停止します。

デフォルト値

1000

maxNumberOfFlowchartThreads

説明

インタラクティブフローチャート要求専用のスレッドの最大数。

デフォルト値

25

maxNumberOfProcessBoxThreads

説明

インタラクティブフローチャートプロセス専用のスレッドの最大数。

デフォルト値

50

maxNumberOfProcessBoxThreadsPerFlowchart

説明

フローチャートインスタンス 1 つあたりの、インタラクティブフローチャートプロセス専用のスレッドの最大数。

デフォルト値

3

minNumberOfFlowchartThreads

説明

インタラクティブフローチャート要求専用のスレッドの最小数。

デフォルト値

10

minNumberOfProcessBoxThreads

説明

インタラクティブフローチャートプロセス専用のスレッドの最小数。

デフォルト値

20

sessionVarPrefix

説明

セッション変数のプレフィックス。

デフォルト値

SessionVar

Interact | flowchart | ExternalCallouts | [ExternalCalloutName]

このセクションでは、外部コールアウト API を使用して作成したカスタム外部コールアウトのクラス設定を定義します。

class

説明

この外部コールアウトによって表される Java クラスの名前。

これは、IBM Unica マクロ EXTERNALCALLOUT でアクセスできる Java クラスです。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

classpath

説明

この外部コールアウトによって表される Java クラスのクラスパス。このクラスパスは、ランタイム環境サーバ上の jar ファイルを参照している必要があります。サーバグループを使用しており、すべてのランタイムサーバが同じ Marketing Platform を使用している場合は、すべてのサーバが同じ場所に jar ファイルのコピーを持っている必要があります。クラスパスは、jar ファイルの絶対位置からなり、ランタイム環境サーバのオペレーティングシステムのパス区切り文字、例えば、Windows ではセミコロン (;)、UNIX システムではコロン (:) で分離されている必要があります。クラスファイルを含んでいるディレクトリは、受け入れられません。例えば、UNIX システムでは、/path1/file1.jar:/path2/file2.jar のようにします。

このクラスパスは、1024 文字未満でなければなりません。jar ファイルの中でマニフェストファイルを使用して、他の .jar ファイルを指定できるため、クラスパス内に出現する .jar ファイルは、1 つだけにする必要があります。

これは、IBM Unica マクロ EXTERNALCALLOUT でアクセスできる Java クラスです。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | flowchart | ExternalCallouts | [ExternalCalloutName] | Parameter Data | [parameterName]

このセクションでは、外部コールアウト API を使用して作成したカスタム外部コールアウトのパラメータ設定を定義します。

value

説明

外部コールアウトのクラスに必要な、いずれかのパラメータの値。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

外部コールアウトに外部サーバのホスト名が必要な場合は、`host` という名前のパラメータカテゴリを作成し、`value` プロパティをサーバ名として定義します。

Interact | monitoring

この構成プロパティセットを使用すると、JMX 監視設定を定義できます。これらのプロパティを構成する必要があるのは、JMX 監視を使用している場合だけです。

Interact 設計環境の構成プロパティの中に、コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールについて定義する別の JMX 監視プロパティがあります。

protocol

説明

Interact メッセージングサービスのプロトコルを定義します。

JMXMP を選択した場合は、以下の JAR ファイルをこの順序でクラスパスに組み込む必要があります。

```
Interact/lib/InteractJMX.jar;Interact/lib/jmxremote_optional.jar
```

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

port

説明

メッセージングサービスのポート番号。

デフォルト値

9998

enableSecurity

説明

JMXMP メッセージングサービスのセキュリティを有効または無効にするブール値。true に設定した場合は、Interact JMX サービスにアクセスするためのユーザ名とパスワードを指定する必要があります。このユーザ資格情報は、ランタイムサーバ用の Marketing Platform によって認証されます。Jconsole では、空のパスワードのログインは許容されません。

プロトコルが RMI の場合、このプロパティは効果がありません。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | profile

この構成プロパティセットは、オファー非表示とスコアオーバーライドも含め、オプションのオファー配信機能のいくつかを制御します。

enableScoreOverrideLookup

説明

True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、scoreOverrideTable からスコアオーバーライドデータをロードします。False の場合、Interact はセッションの作成時に、マーケティングスコアオーバーライドデータをロードしません。

true の場合は、Unica > Interact > profile > Audience Levels > (Audience Level) > scoreOverrideTable プロパティも構成する必要があります。scoreOverrideTable プロパティは、必要なオーディエンスレベルについてのみ定義する必要があります。あるオーディエンスレベルについて、scoreOverrideTable を空白のままにすると、そのオーディエンスレベルのスコアオーバーライドテーブルは無効になります。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

enableOfferSuppressionLookup

説明

True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、offerSuppressionTable からオファー非表示データをロードします。False の場合、Interact はセッションの作成時に、オファー非表示データをロードしません。

true の場合は、Unica > Interact > profile > Audience Levels > (Audience Level) > offerSuppressionTable プロパティも構成する必要があります。enableOfferSuppressionLookup プロパティは、必要なオーディエンスレベルについてのみ定義する必要があります。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

enableProfileLookup

説明

Interact の新しいインストール済み環境では、このプロパティは推奨されません。Interact のアップグレードされたインストール済み環境では、このプロパティは最初の配置までの間、有効です。

インタラクティブフローチャート内で使用され、インタラクティブチャンネル内でマップされていないテーブルのロード動作。True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、profileTable からプロファイルデータをロードします。

true の場合は、Unica > Interact > profile > Audience Levels > (Audience Level) > profileTable プロパティも構成する必要があります。

インタラクティブチャンネルテーブルマッピングウィザードの「訪問セッションの開始時にこのデータをメモリに読み込む」の設定は、この構成プロパティをオーバーライドします。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

defaultOfferUpdatePollPeriod

説明

システムが、キャッシュ内のデフォルトオファーをデフォルトオファーテーブルから更新する前に待つ秒数。-1 に設定した場合、システムはランタイムサーバの開始時に初期リストがキャッシュ内にロードされた後、キャッシュ内のデフォルトオファーを更新しません。

デフォルト値

-1

Interact | profile | Audience Levels | [AudienceLevelName]

この構成プロパティセットを使用すると、追加の Interact 機能に必要なテーブル名を定義できます。関連する機能を使用している場合は、テーブル名を定義するだけで済みます。

scoreOverrideTable

説明

このオーディエンスレベルのスコアオーバーライド情報が入っているテーブルの名前。このプロパティは、enableScoreOverrideLookup を true に設定

してある場合に適用できます。このプロパティは、スコアオーバーライドテーブルを有効にしたいオーディエンスレベルに対して定義する必要があります。このオーディエンスレベルに対するスコアオーバーライドテーブルがない場合は、たとえば `enableScoreOverrideLookup` が `true` に設定されている場合でも、このプロパティを未定義のまま残してかまいません。

`Interact` は、このテーブルを、`Interact` ランタイムサーバによってアクセスされ、`prodUserDataSource` プロパティによって定義された顧客テーブル内で探します。

このデータソースに `schema` プロパティを定義してある場合、`Interact` は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば `schema.UACI_ScoreOverride` のようにします。完全修飾名 (例えば、`mySchema.UACI_ScoreOverride`) を入力した場合には、`Interact` はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

`UACI_ScoreOverride`

offerSuppressionTable

説明

このオーディエンスレベルのオファー非表示情報が入っているテーブルの名前。このプロパティは、オファー非表示テーブルを有効にしたいオーディエンスレベルに対して定義する必要があります。このオーディエンスレベルに対するオファー非表示テーブルがない場合は、たとえば `enableOfferSuppressionLookup` が `true` に設定されている場合でも、このプロパティを未定義のまま残してかまいません。

`Interact` は、このテーブルを、ランタイムサーバによってアクセスされ、`prodUserDataSource` プロパティによって定義された顧客テーブル内で探します。

デフォルト値

`UACI_BlackList`

profileTable

説明

`Interact` の新しいインストール済み環境では、このプロパティは推奨されません。`Interact` のアップグレードされたインストール済み環境では、このプロパティは最初の配置までの間、有効です。

このオーディエンスレベルのプロファイルデータが入っているテーブルの名前。

`Interact` は、このテーブルを、ランタイムサーバによってアクセスされ、`prodUserDataSource` プロパティによって定義された顧客テーブル内で探します。

このデータソースに `schema` プロパティを定義してある場合、`Interact` は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば `schema.UACI_usrProd` のようにします。完全修飾名 (例えば、`mySchema.UACI_usrProd`) を入力した場合には、`Interact` はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

contactHistoryTable

説明

このオーディエンスレベルのコンタクト履歴データが入っているステージングテーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に保管されます。

このデータソースに schema プロパティを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば schema.UACI_CHStaging のようにします。完全修飾名 (例えば、mySchema.UACI_CHStaging) を入力した場合には、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_CHStaging

chOfferAttribTable

説明

このオーディエンスレベルのコンタクト履歴オファー属性テーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に保管されます。

このデータソースに schema プロパティを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば schema.UACI_CHOfferAttrib のようにします。完全修飾名 (例えば、mySchema.UACI_CHOfferAttrib) を入力した場合には、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_CHOfferAttrib

responseHistoryTable

説明

このオーディエンスレベルのレスポンス履歴ステージングテーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に保管されます。

このデータソースに schema プロパティを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば schema.UACI_RHStaging のようにします。完全修飾名 (例えば、mySchema.UACI_RHStaging) を入力した場合には、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_RHStaging

crossSessionResponseTable

説明

レスポンストラッキング機能用にアクセス可能なコンタクトおよびレスポンス履歴テーブル内にある、クロスセッションレスポンストラッキングに必要な、このオーディエンスレベルのテーブルの名前。

このデータソースに schema プロパティを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば schema.UACI_XSessResponse のようにします。完全修飾名 (例えば、mySchema.UACI_XSessResponse) を入力した場合には、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_XSessResponse

Interact | offerserving

これらの構成プロパティは、汎用の学習構成プロパティを定義します。

組み込みの学習を使用している場合、学習の実装をチューニングするには、設計環境用の構成プロパティを使用します。

optimizationType

説明

optimizationType プロパティは、オファー割り当てを支援するために、Interact で学習エンジンを使用するかどうかを定義します。NoLearning に設定した場合、Interact は学習を使用しません。BuiltInLearning に設定した場合、Interact は Interact で作成された baysean 学習エンジンを使用します。ExternalLearning に設定した場合、Interact は提供された学習エンジンを使用します。ExternalLearning を選択した場合は、externalLearningClass プロパティと externalLearningClassPath プロパティを定義する必要があります。

デフォルト値

NoLearning

有効な値

NoLearning | BuiltInLearning | ExternalLearning

segmentationMaxWaitTimeInMS

説明

ランタイムサーバが、オファーを取得する前にインタラクティブフローチャートが完了するのを待つ最大ミリ秒数。

デフォルト値

5000

treatmentCodePrefix

説明

処理コードの前に付くプレフィックス。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | offerserving | Built-in Learning Config

これらの構成プロパティは、組み込み学習用のデータベース書き込み設定を定義します。

学習の実装をチューニングするには、設計環境用の構成プロパティを使用します。

insertRawStatsIntervallInMinutes

説明

学習ステージングテーブルにさらに行を挿入するまでの、Interact 学習モジュールの待ち時間を表す分数。環境内で学習モジュールが処理しているデータの量に基づいて、この時間を変更することが必要になる場合もあります。

デフォルト値

5

aggregateStatsIntervallInMinutes

説明

学習ステージングテーブル内のデータを集約してから次に集約するまでに、Interact 学習モジュールが待つ分数。環境内で学習モジュールが処理しているデータの量に基づいて、この時間を変更することが必要になる場合もあります。

デフォルト値

15

有効な値

ゼロより大きい整数。

Interact | offerserving | External Learning Config

これらの構成プロパティは、学習 API を使用して作成した外部学習モジュールのクラス設定を定義します。

class

説明

optimizationType を ExternalLearning に設定した場合は、externalLearningClass を外部学習エンジンのクラス名に設定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、`optimizationType` が `ExternalLearning` に設定されている場合にのみ適用されます。

classPath

説明

`optimizationType` を `ExternalLearning` に設定した場合は、`externalLearningClass` を外部学習エンジンのクラスパスに設定します。

このクラスパスは、ランタイム環境サーバ上の `jar` ファイルを参照している必要があります。サーバグループを使用しており、すべてのランタイムサーバが同じ `Marketing Platform` を使用している場合は、すべてのサーバが同じ場所に `jar` ファイルのコピーを持っている必要があります。クラスパスは、`jar` ファイルの絶対位置からなり、ランタイム環境サーバのオペレーティングシステムのパス区切り文字、例えば、`Windows` ではセミコロン (`;`)、`UNIX` システムではコロン (`:`) で分離されている必要があります。クラスファイルを含んでいるディレクトリは、受け入れられません。例えば、`UNIX` システムでは、`/path1/file1.jar:/path2/file2.jar` のようにします。

このクラスパスは、1024 文字未満でなければなりません。`jar` ファイルの中でマニフェストファイルを使用して、他の `jar` ファイルを指定できるため、クラスパス内に出現する `jar` ファイルは、1 つだけにする必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、`optimizationType` が `ExternalLearning` に設定されている場合にのみ適用されます。

Interact | offerserving | External Learning Config | Parameter Data | [parameterName]

これらの構成プロパティは、外部学習モジュールのパラメータを定義します。

value

説明

外部学習モジュールのクラスに必要なパラメータの値。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

外部学習モジュールにアルゴリズムソルバアプリケーションへのパスが必要な場合は、`solverPath` というパラメータカテゴリを作成し、`value` プロパティを、そのアプリケーションへのパスとして定義します。

Interact | services

このカテゴリの構成プロパティは、コンタクト履歴とレスポンス履歴のデータと統計をレポート用に収集し、ランタイム環境システムテーブルに書き込む操作を管理する、すべてのサービスの設定を定義します。

externalLoaderStagingDirectory

説明

このプロパティは、データベースロードユーティリティのステージングディレクトリの場所を定義します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

ステージングディレクトリへの絶対パス、または Interact インストールディレクトリを基準にした相対パス。

データベースロードユーティリティを有効にした場合は、contactHist カテゴリおよび responstHist カテゴリの cacheType プロパティを External Loader File に設定する必要があります。

Interact | services | contactHist

このカテゴリの構成プロパティは、コンタクト履歴ステージングテーブル用のデータを収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、コンタクト履歴データを記録するためにデータを収集するサービスが有効になります。false の場合、データは収集されません。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

cacheType

説明

コンタクト履歴用に収集されたデータを、メモリ内に保持するか (Memory Cache)、それともファイル内に保持するか (External Loader File) を定義します。External Loader File を使用できるのは、データベースローダユーティリティを使用するように Interact を構成してある場合だけです。

Memory Cache を選択した場合は、cache カテゴリ設定を使用します。External Loader File を選択した場合は、fileCache カテゴリ設定を使用します。

デフォルト値

Memory Cache

有効な値

Memory Cache | External Loader File

Interact | services | contactHist | cache

このカテゴリの構成プロパティは、コンタクト履歴ステー징テーブル用のデータを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたコンタクト履歴データが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | contactHist | fileCache

このカテゴリの構成プロパティは、データベースローダユーティリティを使用している場合に、コンタクト履歴データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたコンタクト履歴データが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | defaultedStats

このカテゴリの構成プロパティは、インタラクションポイントのデフォルトストリングが使用された回数に関して、統計を収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、インタラクションポイントのデフォルトストリングが使用された回数に関して、UACI_DefaultedStat テーブルに統計を収集するサービスが有効になります。false の場合、デフォルトストリング統計は収集されません。

IBM レポートを使用していない場合は、データの収集が必要でないため、このプロパティを false に設定できます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | defaultedStats | cache

このカテゴリの構成プロパティは、インタラクションポイントのデフォルトストリングが使用された回数に関して統計を収集するサービスの、キャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたデフォルトストリング統計が flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | eligOpsStats

このカテゴリの構成プロパティは、対象となるオファーの統計を書き込むサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、対象となるオファ어의統計を収集するサービスが有効になります。false の場合、対象となるオファ어의統計は収集されません。

IBM レポートを使用していない場合は、データの収集が必要でないため、このプロパティを false に設定できます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | eligOpsStats | cache

このカテゴリの構成プロパティは、対象となるオファ어의統計を収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集された、対象となるオファ어의統計が flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | eventActivity

このカテゴリの構成プロパティは、イベントアクティビティ統計を収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、イベントアクティビティ統計を収集するサービスが有効になります。false の場合、イベント統計は収集されません。

IBM レポートを使用していない場合は、データの収集が必要でないため、このプロパティを false に設定できます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | eventActivity | cache

このカテゴリの構成プロパティは、イベントアクティビティ統計を収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたイベントアクティビティ統計が flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | customLogger

このカテゴリの構成プロパティは、テーブルに書き込むカスタムデータ (UACICustomLoggerTableName イベントパラメータを使用するイベント) を収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合は、テーブルへのカスタムログ機能が有効になります。false の場合、UACICustomLoggerTableName イベントパラメータは効果がありません。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | customLogger | cache

このカテゴリの構成プロパティは、カスタムデータ (UACICustomLoggerTableName イベントパラメータを使用するイベント) をテーブルに収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたカスタムデータが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | responseHist

このカテゴリの構成プロパティは、レスポンス履歴ステージングテーブルに書き込むサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、レスポンス履歴ステージングテーブルに書き込むサービスが有効になります。false の場合、レスポンス履歴ステージングテーブルにデータは書き込まれません。

レスポンス履歴ステージングテーブルは、オーディエンスレベルの responseHistoryTable プロパティによって定義されます。デフォルトは UACI_RHStaging です。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

cacheType

説明

キャッシュをメモリとファイルのどちらに保持するかを定義します。External Loader File を使用できるのは、データベースローダユーティリティを使用するように Interact を構成してある場合だけです。

Memory Cache を選択した場合は、cache カテゴリ設定を使用します。External Loader File を選択した場合は、fileCache カテゴリ設定を使用します。

デフォルト値

Memory Cache

有効な値

Memory Cache | External Loader File

Interact | services | responseHist | cache

このカテゴリの構成プロパティは、レスポンス履歴データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたレスポンス履歴データが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | responseHist | fileCache

このカテゴリの構成プロパティは、データベースローダユーティリティを使用している場合に、レスポンス履歴データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

Interact によってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

responseHist - オーディエンスレベルの responseHistoryTable プロパティによって定義されたテーブル。デフォルトは、UACI_RHStaging です。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | crossSessionResponse

このカテゴリの構成プロパティは、crossSessionResponse サービスと xsession プロセスの一般設定を定義します。Interact クロスセッションレスポンストラッキングを使用している場合は、これらの設定を構成するだけで済みます。

enableLog

説明

true の場合、crossSessionResponse サービスが有効になり、Interact は、クロスセッションレスポンストラッキングのステージングテーブルにデータを書き込みます。false の場合は、crossSessionResponse サービスが無効になります。

デフォルト値

False

xsessionProcessIntervallnSecs

説明

xsession プロセスの実行間隔を示す秒数。このプロセスは、クロスセッションレスポンストラッキングのステージングテーブルからレスポンス履歴ステージングテーブルおよび組み込み学習モジュールにデータを移動します。

デフォルト値

180

有効な値

ゼロより大きい整数

purgeOrphanResponseThresholdInMinutes

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴テーブル内のコンタクトに一致しないレスポンスに、crossSessionResponse サービスがマーク付けするまでの待ち時間(分数)。

レスポンスに一致するものがコンタクトおよびレスポンス履歴テーブルにない場合、Interact は purgeOrphanResponseThresholdInMinutes 分後に、xSessResponse ステージングテーブルの Mark 列の値を -1 に設定して、そのレスポンスにマーク付けします。その後、これらのレスポンスを手動で突き合わせるか削除することができます。

デフォルト値

180

Interact | services | crossSessionResponse | cache

このカテゴリの構成プロパティは、クロスセッションレスポンスデータを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたクロスセッションレスポンスデータが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

XsessResponse テーブルへの強制書き込みの間隔を表す秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byTreatmentCode

このセクションのプロパティは、クロスセッションレスポンストラッキングで処理コードとコンタクトおよびレスポンス履歴とを突き合わせる方法を定義します。

SQL

説明

このプロパティは、Interact がシステム生成 SQL を使用するか、それとも OverrideSQL プロパティで定義されたカスタム SQL を使用するかを定義します。

デフォルト値

Use System Generated SQL

有効な値

Use System Generated SQL | Override SQL

OverrideSQL

説明

処理コードとコンタクトおよびレスポンス履歴との突き合わせにデフォルトの SQL コマンドを使用しない場合は、ここに SQL またはストアードプロシージャを入力します。

SQL を Use System Generated SQL に設定した場合、この値は無視されません。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定した場合、OverrideSQL は、処理コードとコンタクトおよびレスポンス履歴を突き合わせるストアードプロシージャへの参照を含んでいる必要があります。

false に設定した場合、OverrideSQL は (使用する場合) SQL クエリでなければなりません。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Type

説明

ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。UACI_TrackingType テーブルを変更した場合を除き、Type は 1 でなければなりません。

デフォルト値

1

有効な値

UACI_TrackingType テーブル内で定義されている整数。

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byOfferCode

このセクションのプロパティは、クロスセッションレスポンストラッキングでオファーコードとコンタクトおよびレスポンス履歴とを突き合わせる方法を定義します。

SQL

説明

このプロパティは、Interact がシステム生成 SQL を使用するか、それとも OverrideSQL プロパティで定義されたカスタム SQL を使用するかを定義します。

デフォルト値

Use System Generated SQL

有効な値

Use System Generated SQL | Override SQL

OverrideSQL

説明

オファーコードとコンタクトおよびレスポンス履歴との突き合わせにデフォルトの SQL コマンドを使用しない場合は、ここに SQL またはストアードプロシージャを入力します。

SQL を Use System Generated SQL に設定した場合、この値は無視されません。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定した場合、OverrideSQL は、オファーコードとコンタクトおよびレスポンス履歴を突き合わせるストアードプロシージャへの参照を含んでいる必要があります。

false に設定した場合、OverrideSQL は (使用する場合) SQL クエリでなければなりません。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Type

説明

ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。UACI_TrackingType テーブルを変更した場合を除き、Type は 2 でなければなりません。

デフォルト値

2

有効な値

UACI_TrackingType テーブル内で定義されている整数。

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byAlternateCode

このセクションのプロパティは、クロスセッションレスポンストラッキングでユーザ定義代替コードとコンタクトおよびレスポンス履歴とを突き合わせる方法を定義します。

Name

説明

このプロパティは、代替コードの名前を定義します。これは、ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルにある「名前」値に一致する必要があります。

デフォルト値

OverrideSQL

説明

代替コードとコンタクトおよびレスポンス履歴を、オファーコードまたは処理コードによって突き合わせるための SQL コマンドまたはストアードプロシージャ。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定した場合、OverrideSQL は、代替コードとコンタクトおよびレスポンス履歴を突き合わせるストアードプロシージャへの参照を含んでいる必要があります。

false に設定した場合、OverrideSQL は (使用する場合) SQL クエリでなければなりません。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Type

説明

ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。

デフォルト値

3

有効な値

UACI_TrackingType テーブル内で定義されている整数。

Interact | services | threadManagement | contactAndResponseHist

このカテゴリの構成プロパティは、コンタクトおよびレスポンス履歴ステージングテーブル用のデータを収集するサービスの、スレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、プール内に (たとえアイドル状態であっても) 保持するスレッドの数。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

これは、スレッドの数がコアより大きい場合に、コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、超過したアイドルスレッドが終了する前に新規タスクを待つ最大時間です。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、スレッドプールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

これは、ランタイムサーバのシャットダウン時に、サービススレッドがコンタクトおよびレスポンス履歴データの収集を完了するのを待つ秒数です。

デフォルト値

5

Interact | services | threadManagement | allOtherServices

このカテゴリの構成プロパティは、オファー資格統計、イベントアクティビティ統計、デフォルトストリング使用統計、およびテーブルへのカスタムログデータを収集するサービスのスレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

オファー資格統計、イベントアクティビティ統計、デフォルトストリング使用統計、およびテーブルへのカスタムログデータを収集するサービス用に、プール内に (たとえアイドル状態であっても) 保持するスレッドの数。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

オファー資格統計、イベントアクティビティ統計、デフォルトストリング使用統計、およびテーブルへのカスタムログデータを収集するサービス用に、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

keepAliveTimeSecs**説明**

これは、スレッドの数がコアより大きい場合、超過したアイドルスレッドが終了する前に、オファー資格統計、イベントアクティビティ統計、デフォルトストリング使用統計、およびテーブルへのカスタムログデータを収集するサービス用の新規タスクを待つ最大時間です。

デフォルト値

5

queueCapacity**説明**

オファー資格統計、イベントアクティビティ統計、デフォルトストリング使用統計、およびテーブルへのカスタムログデータを収集するサービス用に、スレッドプールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs**説明**

これは、ランタイムサーバのシャットダウン時に、オファー資格統計、イベントアクティビティ統計、デフォルトストリング使用統計、およびテーブルへのカスタムログデータを収集するサービスについて、サービススレッドの処理が完了するのを待つ秒数です。

デフォルト値

5

Interact | services | threadManagement | flushCacheToDB

このカテゴリの構成プロパティは、キャッシュ内に収集したデータをランタイム環境データベーステーブルに書き込むスレッドの、スレッド管理設定を定義します。

corePoolSize**説明**

キャッシュされたデータをデータストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、プール内に保持するスレッドの数。

デフォルト値

5

maxPoolSize**説明**

キャッシュされたデータをデータストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

これは、スレッドの数がコアより大きい場合に、キャッシュされたデータをデータストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、超過したアイドルスレッドが終了する前に新規タスクを待つ最大時間です。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

キャッシュされたデータをデータストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、スレッドプールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

これは、ランタイムサーバのシャットダウン時に、キャッシュされたデータをデータストアに書き込むスケジュール済みのスレッドについて、サービススレッドの処理が完了するのを待つ秒数です。

デフォルト値

5

Interact | sessionManagement

この構成プロパティセットは、ランタイムセッションの設定を定義します。

cacheType

説明

ランタイムサーバのキャッシュ方法のタイプを定義します。

デフォルト値

Local

有効な値

Distributed | Local

maxNumberOfSessions

説明

キャッシュ内に一度に保持されるランタイムセッションの最大数。キャッシュがこの最大値に到達した後に、新しいランタイムセッションを追加する要求が発生した場合は、アクティブでない最も古いランタイムセッションが削除されます。

デフォルト値

999999999

有効な値

ゼロより大きい整数。

multicastIPAddress

説明

cacheType が Distributed の場合は、分散キャッシュによって使用された IP アドレスを入力します。また、multicastPort も定義する必要があります。

cacheType が Local の場合は、multicastIPAddress を未定義のまま残してかまいません。

デフォルト値

230.0.0.1

有効な値

任意の有効な IP アドレス

multicastPort

説明

cacheType が Distributed の場合は、分散キャッシュによって使用されたポート番号を入力する必要があります。また、multicastIPAddress も定義する必要があります。

cacheType が Local の場合は、multicastPort を未定義のまま残してかまいません。

デフォルト値

6363

有効な値

1024 – 49151

sessionTimeoutInSecs

説明

セッションを非アクティブのまま残すことができる時間 (秒単位)。
sessionTimeout 秒が経過すると、Interact はセッションを終了します。

デフォルト値

300

有効な値

1 以上の任意の整数。

Interact 設計環境構成プロパティ

このセクションでは、Interact 設計環境のすべての構成プロパティについて説明します。

Campaign | partitions | partition[n] | reports

これらの構成プロパティは、レポートのフォルダを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析 (Analysis)」タブにリストされる、バーストされたオファーレポートの仕様が入っているフォルダの場所を指定します。このタブは、ナビゲーションペインの「分析 (Analysis)」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、セグメントの「分析 (Analysis)」タブにリストされるセグメントレポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
```

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、オファーの「分析 (Analysis)」タブにリストされるオファーレポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']
```

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーションペインの「分析 (Analysis)」リンクをクリックしたときに「分析 (Analysis)」タブに

リストされる、バーストされたセグメントレポートの仕様が入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']
```

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティは、レポートの仕様が保管されているルートフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']
```

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析 (Analysis)」タブにリストされるキャンペーンレポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']
```

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーションペインの「分析 (Analysis)」リンクをクリックしたときに「分析 (Analysis)」タブにリストされる、バーストされたキャンペーンレポートの仕様が入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']
```

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析 (Analysis)」タブにリストされる eMessage レポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']
```

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポートサーバフォルダストリング。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

インタラクティブチャネル分析タブレポートのレポートサーバフォルダストリング。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking

これらの構成プロパティは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールの設定を定義します。

isEnabled

説明

yes に設定された場合、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが有効になります。このモジュールは、Interact のコンタクト履歴とレスポンス履歴を、Interact ランタイム内のステージングテーブルから Campaign のコンタクト履歴とレスポンス履歴のテーブルにコピーします。プロパティ interactInstalled も、yes に設定されている必要があります。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

runOnceADay

説明

コンタクト履歴とレスポンス履歴の ETL を 1 日 1 回実行するかどうかを指定します。このプロパティを Yes に設定した場合、ETL は preferredStartTime および preferredEndTime で指定されたスケジュール間隔の間に実行されます。

ETL の実行に要する時間が 24 時間を超える場合、しかも、そのために翌日の開始時刻を失した場合、ETL はその日をスキップし、次の日のスケジュールされた時刻に実行されます。例えば、ETL が午前 1 時から午前 3 時までの間に実行されるように構成されており、その処理が月曜日の午前 1 時に開始され、火曜日の午前 2 時に完了した場合、本来は火曜日の午前 1 時にスケジュールされていた次の実行はスキップされ、次の ETL は水曜日の午前 1 時に開始されます。

ETL スケジューリングでは、夏時間調整の時間変更は考慮されません。例えば、午前 1 時と午前 3 時の間に実行するようスケジュールされた ETL は、DST 変更が発生すると午前 (深夜) 12 時または午前 2 時に実行される場合があります。

デフォルト値

No

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

processSleepIntervallnMinutes

説明

Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが、Interact ランタイムのステージングテーブルから Campaign コンタクトおよびレスポンス履歴テーブルへのデータのコピーの間で待つ時間を表す分数。

デフォルト値

60

有効な値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

preferredStartTime

説明

日次の ETL プロセスを開始する優先時刻。このプロパティは、preferredEndTime プロパティと一緒に使用された場合、ETL を実行する優先時間間隔をセットアップします。ETL は、指定された時間間隔の間に開

始され、maxJDBCFetchBatchSize を使用して指定されたレコード数を最大限度として処理します。フォーマットは、HH:mm:ss AM または PM で、12 時間クロックを使用します。

デフォルト値

12:00:00 AM

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

preferredEndTime

説明

日次の ETL プロセスを完了する優先時刻。このプロパティは、preferredStartTime プロパティと一緒に使用された場合、ETL を実行する優先時間間隔をセットアップします。ETL は、指定された時間間隔の間に開始され、maxJDBCFetchBatchSize を使用して指定されたレコード数を最大限度として処理します。フォーマットは、HH:mm:ss AM または PM で、12 時間クロックを使用します。

デフォルト値

2:00:00 AM

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

purgeOrphanResponseThresholdInMinutes

説明

Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが、対応するコンタクトのないレスポンスをバージするまでの待ち時間を表す分数。これにより、コンタクトをログに記録せずにレスポンスがログに記録されるのが防止されます。

デフォルト値

180

有効な値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

maxJDBCInsertBatchSize

説明

クエリがコミットされるまでの JDBC バッチの最大レコード数。これは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが 1 回のイテレーションで処理する最大レコード数ではありません。各イテレーションで、Interact

コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールは、ステージングテーブルにあるすべてのレコードを処理します。ただし、それらすべてのレコードは、maxJDBCInsertSize 個のチャンクに分割されます。

デフォルト値

1000

有効な値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

maxJDBCFetchBatchSize

説明

ステージングデータベースからフェッチする JDBC バッチの最大レコード数。コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールのパフォーマンスをチューニングするために、この値を大きくすることが必要な場合もあります。

例えば、1 日に 250 万個のコンタクト履歴レコードを処理するには、1 日のすべてのレコードが処理されるよう、maxJDBCFetchBatchSize を 2.5M より大きい数値に設定する必要があります。

その後、maxJDBCFetchChunkSize および maxJDBCInsertBatchSize の値をより小さい値 (この例では、それぞれ 50,000 と 10,000 など) に設定できます。次の日のレコードも一部が処理される場合がありますが、それらは次の日まで保持されます。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい任意の整数

maxJDBCFetchChunkSize

説明

ETL (抽出、トランスフォーム、ロード) のときに読み取られるデータの JDBC チャンクサイズの最大数。場合によっては、チャンクサイズを挿入サイズより大きくすると、ETL プロセスの速度が向上することがあります。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい任意の整数

deleteProcessedRecords

説明

コンタクト履歴とレスポンス履歴のレコードを、処理後に保存するかどうかを指定します。

デフォルト値

Yes

completionNotificationScript

説明

ETL の完了時に実行するスクリプトへの絶対パスを指定します。スクリプトを指定すると、4 つの引数 (開始時刻、終了時刻、処理された CH レコードの合計数、および処理された RH レコードの合計数) が完了通知スクリプトに渡されます。開始時刻と終了時刻は 1970 年以降に経過したミリ秒数を表す数値です。

デフォルト値

なし

fetchSize

説明

ステージングテーブルからレコードを取り出すときの JDBC fetchSize を設定できます。

特に Oracle データベースでは、JDBC が 1 回のネットワークの往復で取り出すレコード数に合わせて、この設定を調整してください。100 K 以上の大きなバッチの場合は、10000 に設定してみます。ここでは、あまり大きな値を使用しないように注意してください。値が大きすぎるとメモリの使用状況に影響が出て、不利益にはならないにしても、利得はごくわずかになります。

デフォルト値

なし

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | runtimeDataSources | [runtimeDataSource]

これらの構成プロパティは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールのデータソースを定義します。

jndiName

説明

systemTablesDataSource プロパティを使用して、アプリケーションサーバ (Websphere または WebLogic) 内で Interact ランタイムテーブル用に定義される、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データソースを識別します。

Interact ランタイムデータベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベ

ースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルおよび UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

databaseType

説明

Interact ランタイムデータソースのデータベースタイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | Oracle | DB2

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

schemaName

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールのステージングテーブルを含んでいるスキーマの名前。これは、ランタイム環境テーブルと同じものにしてください。

スキーマは定義する必要はありません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | contactTypeMappings

これらの構成プロパティは、レポートまたは学習の目的で「コンタクト」にマップされる、キャンペーンからのコンタクトタイプを定義します。

contacted

説明

オファーコンタクトの Campaign システムテーブル内で、UA_DtlContactHist テーブルの ContactStatusID 列に割り当てられる値。値は、UA_ContactStatus テーブル内の有効な項目でなければなりません。コンタクトタイプの追加について詳しくは、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

2

有効な値

ゼロより大きい整数。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | responseTypeMappings

これらの構成プロパティは、レポートおよび学習の承認または拒否のレスポンスを定義します。

accept

説明

承認されたオファーについて、Campaign システムテーブル内の UA_ResponseHistory テーブルの ResponseTypeID 列に割り当てられる値。値は、UA_UsrResponseType テーブル内の有効な項目でなければなりません。CountsAsResponse 列には、値 1、レスポンスを割り当ててください。レスポンスタイプの追加について詳しくは、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

3

有効な値

ゼロより大きい整数。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

reject

説明

拒否されたオファーについて、Campaign システムテーブル内の UA_ResponseHistory テーブルの ResponseTypeID 列に割り当てられる値。値は、UA_UsrResponseType テーブル内の有効な項目でなければなりません。CountsAsResponse 列には、値 2、拒否を割り当ててください。レスポンスタイプの追加について詳しくは、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

8

有効な値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | report

これらの構成プロパティは、Cognos 8 と統合するときに、レポート名を定義します。

interactiveCellPerformanceByOfferReportName

説明

「オファー別のインタラクティブセルパフォーマンス」レポートの名前。この名前は、Cognos 8 サーバ上のこのレポートの名前に一致する必要があります。

デフォルト値

オファー別のインタラクティブセルパフォーマンス

treatmentRuleInventoryReportName

説明

「処理ルールインベントリ」レポートの名前。この名前は、Cognos 8 サーバ上のこのレポートの名前に一致する必要があります。

デフォルト値

チャンネル処理ルールインベントリ

deploymentHistoryReportName

説明

「配置履歴レポート」のレポート名。この名前は、Cognos 8 サーバ上のこのレポートの名前に一致する必要があります。

デフォルト値

チャンネル配置履歴

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | learning

これらの構成プロパティを使用すると、組み込みの学習モジュールをチューニングできます。

confidenceLevel

説明

学習ユーティリティを参照から活用へ切り替える前に、どれくらい信頼できるものにするかを示すパーセンテージ。値 0 は、調査を事実上シャットオフします。

このプロパティは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

有効な値

0 から 95 までの間の 5 で割り切れる整数、または 99。

enableLearning**説明**

Yes に設定した場合は、Interact 設計時に学習が有効であることが予想されます。enableLearning を yes に設定する場合は、Interact > offerserving > optimizationType を BuiltInLearning または ExternalLearning に構成する必要があります。

No に設定した場合は、Interact 設計時に学習が無効であることが予想されます。enableLearning を no に設定する場合は、Interact > offerserving > optimizationType を NoLearning に構成する必要があります。

デフォルト値

No

maxAttributeNames**説明**

Interact 学習ユーティリティが監視する学習属性の最大数。

このプロパティは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

10

有効な値

任意の整数。

maxAttributeValues**説明**

Interact 学習モジュールが学習属性ごとに追跡する値の最大数。

このプロパティは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

5

otherAttributeValue**説明**

maxAttributeValues を超えたすべての属性値を表すために使用される属性値のデフォルト名。

このプロパティは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

Other

有効な値

ストリングまたは数値。

例

maxAttributeValues を 3 に設定し、otherAttributeValue を other に設定した場合、学習モジュールは最初の 3 つの値を追跡します。それ以外のすべての値は、other カテゴリに割り当てられます。例えば、ビジタ属性の髪の色を追跡する場合、最初の 5 人のビジタの髪の色が黒、茶、ブロンド、赤、およびグレイであれば、学習ユーティリティは黒、茶、およびブロンドの髪の色を追跡します。赤とグレイの髪の色は、otherAttributeValue、other の下にグループ化されます。

percentRandomSelection

説明

学習モジュールがランダムオファーを提示する頻度のパーセント。例えば、percentRandomSelection を 5 に設定することは、学習モジュールによるランダムオファーの提示頻度が 5% (100 件の推奨ごとに 5 件) であることを意味します。

デフォルト値

5

有効な値

0 から 100 までの任意の整数。

recencyWeightingFactor

説明

recencyWeightingPeriod によって定義されたデータ集合のパーセンテージの 10 進表記。例えば、デフォルト値の 0.15 は、学習ユーティリティによって使用されるデータの 15% が recencyWeightingPeriod からのものであることを意味します。

このプロパティは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

0.15

有効な値

1 より小さい 10 進値。

recencyWeightingPeriod

説明

学習モジュールによって重みの `recencyWeightingFactor` パーセンテージを付与される、データのサイズを時間数で表したもの。例えば、デフォルト値の 120 は、学習モジュールによって使用されるデータの `recencyWeightingFactor` が、過去 120 時間からのものであることを意味します。

このプロパティは、`optimizationType` が `builtInLearning` に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

120

minPresentCountThreshold

説明

データが計算に使用され、学習モジュールが参照モードに入る前に、オファァーが提示されなければならない最小回数。

デフォルト値

0

有効な値

ゼロ以上の整数。

enablePruning

説明

Yes に設定した場合、Interact 学習モジュールは、学習属性 (標準または動的) に予測性がない時点を実アルゴリズムによって判別します。学習属性に予測性がない場合、学習モジュールはオファァーの重みを判別するときに、その属性を考慮しません。これは、学習モジュールが学習データを集約するまで続行されます。

No に設定した場合、学習モジュールは常にすべての学習属性を使用します。予測性のない属性のプルーニングを行わなかった場合、学習モジュールの本来の正確さが十分に発揮されない可能性があります。

デフォルト値

Yes

有効な値

Yes | No

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | learning | learningAttributes | [learningAttribute]

これらの構成プロパティは、学習属性を定義します。

attributeName

説明

各 attributeName は、学習モジュールに監視させるビジタ属性の名前です。これは、セッションデータ内の、名前と値のペアの名前に一致する必要があります。

このプロパティは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | deployment

これらの構成プロパティは、配置の設定を定義します。

chunkSize

説明

各 Interact 配置パッケージのフラグメントの最大サイズ (KB 単位)。

デフォルト値

500

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | serverGroups | [serverGroup]

これらの構成プロパティは、サーバグループの設定を定義します。

serverGroupName

説明

Interact ランタイムサーバグループの名前。これは、「インタラクティブチャンネルのサマリ」タブに表示される名前です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | serverGroups | [serverGroup] | instanceURLs | [instanceURL]

これらの構成プロパティは、Interact ランタイムサーバを定義します。

instanceURL

説明

Interact ランタイムサーバの URL。1 つのサーバグループに複数の Interact ランタイムサーバを含めることができます。ただし、各サーバを新しいカテゴリの下に作成する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

```
http://server:port/interact
```

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | flowchart

これらの構成プロパティは、インタラクティブフローチャートのテスト実行に使用される Interact ランタイム環境を定義します。

serverGroup

説明

Campaign がテスト実行に使用する Interact サーバグループの名前。この名前は、serverGroups の下に作成したカテゴリ名に一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

dataSource

説明

dataSource プロパティを使用して、Campaign でインタラクティブフローチャートのテスト実行を行うときに使用する物理データソースを識別します。このプロパティは、Interact 設計時に定義されたテスト実行データソースの Campaign > partitions > partitionN > dataSources プロパティで定義されたデータソースに一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | whiteList | [AudienceLevel] | DefaultOffers

これらの構成プロパティは、デフォルトオファーテーブルのデフォルトセルコードを定義します。これらのプロパティを構成する必要があるのは、グローバルオファー割り当てを定義する場合だけです。

DefaultCellCode

説明

デフォルトオファーテーブル内でセルコードを定義しなかった場合に、Interact で使用されるデフォルトセルコード。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

Campaign で定義されたセルコード形式に一致するストリング

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | whiteList | [AudienceLevel] | ScoreOverride

これらの構成プロパティは、スコアオーバーライドテーブルのデフォルトセルコードを定義します。これらのプロパティを構成する必要があるのは、個々のオファー割り当てを定義する場合だけです。

DefaultCellCode

説明

スコアオーバーライドテーブルで、セルコードを定義しなかった場合に、Interact で使用されるデフォルトセルコード。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

Campaign で定義されたセルコード形式に一致するストリング

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | server | internal

このカテゴリのプロパティは、Campaign の内部 ID の上限と下限を指定します。

internalIdLowerLimit

説明

`internalIdUpperLimit` および `internalIdLowerLimit` プロパティは、Campaign 内部 ID が指定された範囲内に収まるよう制約します。これらの値は、その値も含むことに注意してください。つまり、Campaign は上限値と下限値をどちらも使用できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

internalIdUpperLimit

説明

`internalIdUpperLimit` および `internalIdLowerLimit` プロパティは、Campaign 内部 ID が指定された範囲内に収まるよう制約します。これらの値は、その値も含むことに注意してください。つまり、Campaign は上限値と下限値をどちらも使用できます。

デフォルト値

4294967295

eMessageInstalled

説明

eMessage がインストールされていることを示します。yes を選択すると、Campaign インタフェース内で eMessage 機能を使用できます。

IBM インストーラは、eMessage インストール済み環境内のデフォルトパーティションに対し、このプロパティを yes に設定します。eMessage をインストールした追加のパーティションについては、管理者が手動でこのプロパティを構成する必要があります。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

interactInstalled

説明

Interact 設計環境をインストールした後、この構成プロパティを yes に設定して、Campaign 内で Interact 設計環境を有効にする必要があります。

Interact をインストールしていない場合は、no に設定します。このプロパティを no に設定しても、Interact のメニューとオプションはユーザインタフェースから削除されません。メニューとオプションを削除するには、configTool ユーティリティを使用して、手動で Interact を登録解除する必要があります。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

MO_UC_integration

説明

Marketing Operations との統合を有効にします。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Legacy_campaigns

説明

MO_UC_integration プロパティを **Yes** に設定した場合、Legacy_campaigns プロパティは、統合を有効にする前に作成されたキャンペーンにアクセスできるようにします。これには、Campaign 7.x で作成され、Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーンも含まれます。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Campaign | monitoring

このカテゴリのプロパティは、Operational Monitoring 機能を有効にするかどうか、Operational Monitoring サーバの URL、およびキャッシュ動作を指定します。Operational Monitoring では、アクティブなフローチャートが表示され、それらを制御できます。

cacheCleanupInterval

説明

cacheCleanupInterval プロパティは、フローチャートステータスキャッシュの自動クリーンアップの間隔を秒単位で指定します。

このプロパティは、Campaign の 7.0 より前のバージョンでは使用できません。

デフォルト値

600 (10 分)

cacheRunCompleteTime

説明

cacheRunCompleteTime プロパティは、完了した実行がキャッシュに入れられ、「監視」ページに表示される時間を分単位で指定します。

このプロパティは、Campaign の 7.0 より前のバージョンでは使用できません。

デフォルト値

4320

monitorEnabled

説明

monitorEnabled プロパティは、モニタをオンにするかどうかを指定します。

このプロパティは、Campaign の 7.0 より前のバージョンでは使用できません。

デフォルト値

yes

serverURL

説明

Campaign > monitoring > serverURL プロパティは、Operational Monitoring サーバの URL を指定します。これは、必須の設定です。Operational Monitoring サーバ URL がデフォルトでない場合は、値を変更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されている場合は、Operational Monitoring URL を https で始める必要があります、ポートを 443 に設定する必要があります。次に例を示します。

```
https://localhost:443/Campaign/OperationMonitor
```

デフォルト値

```
http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor
```

monitorEnabledForInteract

説明

yes に設定された場合、Campaign JMX コネクタサーバが Interact に有効になります。Campaign には JMX セキュリティがありません。

no に設定した場合は、Campaign JMX コネクタサーバに接続できません。

この JMX モニタリングは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュール専用です。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

protocol

説明

monitorEnabledForInteract が yes に設定されている場合は、Campaign JMX コネクタサーバのリスニングプロトコル。

この JMX モニタリングは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュール専用です。

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

port

説明

monitorEnabledForInteract が yes に設定されている場合は、Campaign JMX コネクタサーバのリスニングポート。

この JMX モニタリングは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュール専用です。

デフォルト値

2004

有効な値

1025 から 65535 までの整数。

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

Optimize 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページにある Optimize 構成プロパティについて説明します。

Campaign | unicaACOListener

これらの構成プロパティは、Optimize リスナの設定用です。

serverHost

説明

Optimize インストール済み環境のホストマシン名に設定します。

デフォルト値

localhost

serverPort

説明

これは、Optimize インストール済み環境のホストマシンポートに設定します。

デフォルト値

なし

useSSL

説明

SSL を使用して Marketing Platform マシンに接続するには、True に設定します。それ以外の場合は、False に設定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

keepalive

説明

Campaign Web アプリケーションで、接続をアクティブにしておくために ACOListener へのメッセージの送信間で待つ秒数。keepalive を使用すると、非アクティブな接続を閉じるようにネットワークが構成されている場合に、接続が開いたままになります。

0 に設定した場合、Web アプリケーションは何もメッセージを送信しません。

この keepalive プロパティは、JAVA ソケットの keepAlive とは別のものです。

デフォルト値

0

有効な値

正の整数

logProcessId

説明

Optimize リスナプロセスの ID を Optimize リスナログ (*Optimize_installation_directory/logs/unica_acolsnr.log*) に記録するには、yes に設定します。そうでない場合は、no に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

loggingLevels

説明

ログに記録する Optimize リスナのデータの詳細を設定できます。

この設定は、*Optimize_installation_directory/logs/unica_acolsnr.log* ファイルに影響を及ぼします。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

logMaxFileSize

説明

この整数は、ログファイルの最大サイズ (バイト単位) に設定します。

Optimize は、ログファイルがこのサイズに到達すると、新規ファイルを作成します。この設定は、*Optimize_installation_directory/logs/unica_acolsnr.log* に影響を及ぼします。

デフォルト値

20485760

enableLogging

説明

ログへの記録を有効にするには、True に設定します。そうでない場合は、False に設定します。この設定は、*Optimize_installation_directory/logs/unica_acolsnr.log* に影響を及ぼします。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

logMaxBackupIndex

説明

この整数は、保管するバックアップファイルの数に設定します。この設定は、*Optimize_installation_directory/logs/unica_acolsnr.log* に影響を及ぼします。

デフォルト値

5

loggingCategories

説明

ログに記録するデータのカテゴリを、コンマ区切りリストとして指定できます。この設定は、*Optimize_installation_directory/logs/unica_acolsnr.log* に影響を及ぼします。

デフォルト値

all

有効な値

all | bad_order | cell_access | commands | config | data_errors | dbload | file_access | general | memory | procrun | query | sort | sysquery | table_access | table_io | table_mapping | webproc

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | sessionRunMonitor

progressFetchDelay

説明

この整数は、Web アプリケーションがリスナからの進捗情報を入手する前に待つミリ秒数に設定します。

デフォルト値

250

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | MemoryTuning

MaxRamUsage

説明

コンタクト履歴をキャッシュに入れるために使用する最大メモリを、MB 単位で定義します。この値は、少なくとも 1 つのコンタクト履歴レコードと同じ大きさでなければなりません。

デフォルト値

128

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | userTemplateTables

このプロパティは、PCT および OCT によって使用されるテンプレートテーブルを定義します。

tablenames

説明

テーブル名のコンマ区切りリストを入力します。これらのテーブルは、提案コンタクトテーブル (PCT) または最適化されたコンタクトテーブル (OCT) にユーザ固有のフィールドを追加するために使用できます。

デフォルト値

UACO_UserTable

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | AlgorithmTuning

これらの構成プロパティは、最適化のチューニングに使用できる設定を定義します。

MaxAlternativesPerCustomerEvaluated

説明

顧客に最適の選択肢を見つけるために、提案されたトランザクションまたは選択肢の組み合わせを Optimize でテストする最大回数。

例えば、以下が真である場合:

- 提案コンタクトテーブル (PCT) で顧客に関連付けられているオファーが A、B、C、D であり、これらのオファーのスコアが A=8、B=4、C=2、D=1 である
- MaxAlternativesPerCustomerEvaluated プロパティが 5 である
- 最大オファー数 =3 のルールが存在する

この場合、試行される選択肢は、以下のようになります。

- ABC スコア = 14
- ABD スコア = 13
- AB スコア = 12
- ACD スコア = 11
- AC スコア = 10

テストする選択肢の数が非常に多くなる場合があるため、この値を使用して、Optimize が PCT 内の次の顧客に移動する前に、コアアルゴリズムが 1 人の顧客に対して費やす作業量を制限することができます。

デフォルト値

1000

CustomerSampleSize

説明

最適化する対象の顧客の数が CustomerSampleSize を超える場合、Optimize は CustomerSampleSize を超えないグループに顧客を分割し、それぞれのサンプルグループを別々に最適化します。それでも、グループ間にまたがるルール、例えばカスタムキャパシティルールなどは遵守されます。この数を大きくすると、最適性は向上してもパフォーマンスを損なう場合があります。

最大限に最適な CustomerSampleSize は、顧客の数と同じです。しかし、大きなデータ集合の処理には、多大な時間を要する場合があります。Optimize で一度に処理するために、顧客をより小さなグループに分割することにより、最適性の損失を最小にしてパフォーマンスを向上させることができます。

デフォルト値

1000

有効な値

正の整数

CustomerRandomSeed

説明

ランダムシードは、CustomerSampleSize によって定義されたサンプルグループにデータを設定する前に、Optimize でレコードのランダムな選択に使用される開始点を表します。顧客の数が CustomerSampleSize より少ない場合、このプロパティは最適化に効果はありません。

現行のランダムサンプルで生成される結果に大きな偏りがあると思われる場合は、ランダムシードを変更できます。

デフォルト値

1928374656

有効な値

正の整数

MaxIterationsPerCustomerSample

説明

Optimize が 1 つの顧客グループに対して処理するイテレーションの最大数。Optimize は、最適性が達成されるか、イテレーションが MaxIterationsPerCustomerSample と同じになるまで、1 つの顧客グループを処理します。

セッションログ内の次の情報から、MaxIterationsPerCustomerSample の設定変更の効果を観察できます。

- 1 顧客チャンクあたりの最大、最小、および平均イテレーション回数
- 作成された、1 顧客あたりの最大、最小、および平均選択肢数
- 試行された、1 顧客あたりの最大、最小、および平均選択肢数
- イテレーションの標準偏差

デフォルト値

1000

有効な値

正の整数

MaxCustomerSampleProcessingThreads

説明

Optimize で最適化アルゴリズムの処理に使用するスレッドの最大数。一般に、MaxCustomerSampleProcessingThreads を大きく設定するほど、パフォーマンスを向上させることができます。ただし、パフォーマンスの向上は、使用する最適化ルールのタイプと数、使用するハードウェアなど、いくつかの要因によって制限されます。Optimize の実装のチューニングに関する詳しい手順については、IBM Unica 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効な値

正の整数

ProcessingThreadQueueSize

説明

Optimize で PCT から顧客サンプルを読み取るときに使用できるスレッドの数。スレッドの数を増やすと、Optimize セッションのパフォーマンスが向上する場合があります。Optimize の実装のチューニングに関する詳しい手順については、IBM Unica 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効な値

正の整数

PostProcessingThreadQueueSize

説明

OCT のステージングテーブルに顧客サンプルを書き込むときに、Optimize で使用できるスレッドの数。スレッドの数を増やすと、Optimize セッションのパフォーマンスが向上する場合があります。Optimize の実装のチューニングに関する詳しい手順については、IBM Unica 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効な値

正の整数

EnableMultithreading

説明

true の場合、Optimize は最適化アルゴリズムを処理するときに複数のスレッドの使用を試みます。スレッドの数は、MaxCustomerSampleProcessingThreads、ProcessingThreadQueueSize、および PostProcessingThreadQueueSize 構成パラメータで構成できます。false の場合、Optimize は最適化アルゴリズムを処理するときに単一のスレッドを使用します。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

EnableBufferingHistoryTransactions

説明

true の場合、Optimize はコンタクト履歴トランザクションを、Optimize セッションの実行のときに読み取るために、ファイルに書き込みます。false の場合、Optimize は Campaign システムテーブル内の UA_ContactHistory テーブルから読み取ります。

false の場合、Optimize は Optimize セッションの間、UA_ContactHistory テーブルに対して読み取りロックを作成します。これにより、データベースロードユーティリティを使用している場合に、テーブルへの書き込みが失敗することもあります。true の場合、Optimize はクエリをファイルに書き込むために要する時間の間だけ、テーブルに対する読み取りロックを作成します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

MinImprovementPercent

説明

この構成プロパティを使用すると、最適化の割合が指定されたレベルに到達した時点で、顧客のグループの処理を停止できます。

MinImprovementPercent プロパティを使用すると、イテレーションを続行するための、スコアの向上の割合 (パーセンテージとして測定) を設定できます。デフォルト値はゼロで、これは可能なイテレーションの数に制限がないことを意味します。

デフォルト値

0.0

UseFutureContacts

説明

どの最適化ルールの中でも時間枠を使用していない場合は、パフォーマンス向上のための **Optimize** によるコンタクト履歴テーブルに対するクエリを防止できます。この動作は、**UseFutureContacts** 構成プロパティを使用して制御できます。

UseFutureContacts を **false** に設定した場合、しかも **Optimize** セッションの最適化ルールで時間枠を使用していなければ、**Optimize** はコンタクト履歴テーブルに対するクエリを行いません。これにより、**Optimize** セッションを実行するために必要な時間が改善されます。ただし、**Optimize** セッションで時間枠を使用する場合は、コンタクト履歴テーブルに対するクエリが行われます。

潜在的な将来のコンタクトをコンタクト履歴に記録する場合は、**UseFutureContacts** を **true** に設定する必要があります。例えば、次の週に特定の顧客に特別なプロモーションに関する電子メール通信を送信することが分かっている場合は、それらのコンタクトをあらかじめプレースホルダとしてコンタクト履歴テーブルに入れておくことができます。その場合は、**UseFutureContacts** を **true** に設定すると、**Optimize** は常にコンタクト履歴テーブルに対してクエリを行います。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | Debug

このプロパティは、PCT を処理するためのデバッグレベルを定義します。

ExtraVerbose

説明

提案コンタクトテーブル内で処理された行に関する詳細なログを得るには、この値を **yes** に設定します。デフォルトでは、この値を **yes** に設定すると、すべての行がログに記録されます。

提案コンタクトテーブルの処理された行をログに記録しない場合は、この値を **no** に設定します。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | logging

このプロパティは、**Optimize** のログ設定を定義します。

enableBailoutLogging

説明

True に設定すると、Optimize が MaxAlternativesPerCustomerEvaluated で設定された限度を超え、顧客に有効な選択肢がない場合、Optimizeはその顧客についてのログを (限度を超えた顧客をカウントする通常のログに加えて) 生成します。

True に設定した場合も、Optimize で処理できなかった顧客の詳細が含まれている別個のファイルが得られます。これは、コンマ区切り値 (CSV) ファイルです。1 行が 1 人の顧客に対応します。最初の列は顧客 ID で、2 番目の列は Optimize がその顧客を処理できなかった理由です。このファイルは unprocessables_sessionID.csv という名前で、*OptimizeInstallationDirectory*/partitions/partition[n]/logs ディレクトリに置かれます。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

logProcessId

説明

Optimize サーバプロセスの ID を Optimize サーバログ (*Optimize_installation_directory*/partitions/partition[n]/logs/unica_acosvr_SESSIONID.log) に記録する場合は、True に設定します。そうでない場合は、False に設定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

loggingLevels

説明

ログに記録するサーバデータの詳細を設定できます。

これは、Optimize サーバログ (*Optimize_installation_directory*/partitions/partition[n]/logs/unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

logMaxFileSize

説明

この整数は、ログファイルの最大サイズを表すバイト数に設定します。Optimize は、ログファイルがこのサイズに到達すると、新規ファイルを作成します。これは、Optimize サーバログ (*Optimize_installation_directory*/partitions/partition[n]/logs/unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

10485760

enableLogging

説明

ログを有効にする場合は、True に設定します。そうでない場合は、False に設定します。これは、Optimize サーバログ (*Optimize_installation_directory*/partitions/partition[n]/logs/unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

logMaxBackupIndex

説明

この整数は、保管するバックアップファイルの数に設定します。これは、Optimize サーバログ (*Optimize_installation_directory*/partitions/partition[n]/logs/unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

5

loggingCategories

説明

ログに記録するデータのカテゴリを、コンマ区切りリストとして指定できます。これは、Optimize サーバログ (*Optimize_installation_directory*/partitions/partition[n]/logs/unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

all

有効な値

all | bad_order | cell_access | commands | config | data_errors | dbload | file_access | general | memory | procrun | query | sort | sysquery | table_access | table_io | table_mapping | webproc

Campaign | unicaACOOptAdmin

これらの構成プロパティは、unicaACOOptAdmin ツールの設定を定義します。

getProgressCmd

説明

内部で使用される値を指定します。変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_optimizeSessionProgress.do

有効な値

optimize/ext_optimizeSessionProgress.do

runSessionCmd

説明

内部で使用される値を指定します。変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_runOptimizeSession.do

有効な値

optimize/ext_runOptimizeSession.do

loggingLevels

説明

loggingLevels プロパティは、Optimize コマンドラインツールのログファイルに書き込む詳細の量を、重大度に基づいて制御します。選択可能なレベルは、LOW、MEDIUM、HIGH、および ALL で、LOW が最小の詳細を提供します (つまり、最も重大なメッセージだけが書き込まれます)。ALL レベルはトレースメッセージを含み、主に診断を目的としています。

デフォルト値

HIGH

有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

cancelSessionCmd

説明

内部で使用される値を指定します。変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do

有効な値

optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do

logoutCmd

説明

内部で使用される値を指定します。変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_doLogout.do

有効な値

optimize/ext_doLogout.do

getProgressWaitMS

説明

この値は、進行状況に関する情報を取得するための、Web アプリケーションに対する 2 回の連続したポーリングの間のミリ秒数 (整数) に設定します。この値は、getProgressCmd を設定しない場合は使用されません。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい整数

付録 B. Cognos 8 BI レポートのスタイルガイド

IBM Cognos レポート統合コンポーネントには、グローバルレポートスタイルシート (GlobalReportStyles.css) が含まれています。ご使用の IBM Unica アプリケーション用の新規 IBM Cognos レポートを作成する場合、レポートでは、追加の手動書式設定をいくつか指定して、この css ファイルからスタイルを使用する必要があります。そうすれば、新規レポートのスタイルが IBM Unica レポートパッケージで提供されているレポートで使用されるものと一致します。

この付録では、さまざまな種類のレポート (リスト、チャートなど) に関する次の情報を提供します。

-

GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル。

-

スタイルシートでは提供できないスタイルがいくつかあるため、レポートを作成する場合、スタイルの書式設定の一部は手動で行う必要があります。

グローバルレポートのスタイル

項目	CSS クラス名	スタイル
一般フォントファミリー	pg、pp	font-family: Arial, ...
レポートタイトル	ta	font-size: 10pt;
ページ - ヘッダー	ph	padding-bottom:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;
ページ - フッター	pf	padding-top:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;
フィールドセットラベル	fs	font-size:8pt;
テーブル	tb	border-collapse:collapse

項目	CSS クラス名	スタイル
テーブル - リスト列のタイトルセル	lt	text-align:left; background-color:#F2F2F2; /* ライトグレイ*/ font-weight:bold; border-top:1px solid silver; border-left:1px solid silver; border-bottom:1.5pt solid black; border-right:1px solid silver; padding-top: 13px;
テーブル - リスト列のボディセル	lc、lm	border:1px solid silver;
テーブル - 外部ヘッダー	oh	background-color:#FFFFCC; /* ライトイエロー*/
テーブル - リストフッター	of、os	border-top:1.5pt solid black;
クロス集計	xt	border-collapse:collapse;
クロス集計 - デフォルト測定セル	xm	border-top:1px solid silver; border-left:1px solid silver; border-bottom:1.5pt solid black; border-right:1.5pt solid black;
クロス集計 - メンバーラベルセル	ml	background-color: transparent; border:1px solid silver;
クロス集計 - 外部レベルの合計	ol	background-color:#F7F7F7; /* オフホワイト*/
クロス集計 - スペース	xs	background-color: transparent; font-weight: bold;
チャート	ch	border:1pt solid #E4E4E4;
チャート - タイトル	ct	font-size:10pt; font-weight:bold;
グラフ - 軸ラベル	al	font-size:10pt;
チャート - 軸線	at	color:#939393;

項目	CSS クラス名	スタイル
チャート - グラデーション	XML レポート仕様の場合	XML レポート仕様のチャートタグ (</combinationChart>)を閉じる前に、以下を貼り付けます。 <fillEffects> <chartGradient direction="up" fromColor="#F2F2F2" toColor="#FFFFFF"/> </fillEffects>

項目	CSS クラス名	スタイル
チャート - チャートパレット ト	XML レポート仕様の場合	XML レポート仕様のチャートタグ (</combinationChart>) を閉じる前に、以下を貼り付けます。 <pre> <chartPalette> <chartColor value="#00508A"/> <chartColor value="#376C37"/> <chartColor value="#FB9A4D"/> <chartColor value="#B8351F"/> <chartColor value="#69817B"/> <chartColor value="#473E9A"/> <chartColor value="#5384AE"/> <chartColor value="#61C2A3"/> <chartColor value="#FF5656"/> <chartColor value="#A583BB"/> <chartColor value="#506079"/> <chartColor value="#A0A080"/> <chartColor value="#F1EDC1"/> <chartColor value="#A6A6A6"/> <chartColor value="#818181"/> </chartPalette> </pre>

レポートのページスタイル

項目	スタイル
テキスト	Arial フォント
レポートタイトルテキスト	Arial 10 ポイント
ページフッターテキスト	Arial 8 ポイント
フィールドセットラベル	Arial 8 ポイント

リストレポートスタイル

リストレポートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

項目	スタイル
セル	1 px のシルバーの境界線 (特に注記がない場合)
列ヘッダー	ライトグレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テーブルの残りの部分から列ヘッダーを分離させるためのもの)
サマリヘッダー行 (リストヘッダー)	ライトイエローの背景
下部の合計行	ダークグレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テーブルの残りの部分から行を分離させるためのもの)

さらに新規リストレポートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のレポートと一致させてください。

- リストヘッダー (リストフッターではなく) を使用して、集計をオブジェクトレベルで表示します。
- リストヘッダーに表示されている数字を手動で右寄せにします。リストフッターとは異なり、リストヘッダーは、外部コンポーネントとサマリコンポーネントに分離されることはありません (両コンポーネントではデフォルトで右寄せのスタイルが使用されます)。そのため、リストヘッダーに情報を集計する場合は、この追加ステップを実行して、値を右揃えにする必要があります。
- 必要に応じて、グループ列に 1.5 pt の黒の実線で境界線を追加します。

以下は、グローバルスタイルを使用しないリストレポートです。

Example List Report

Campaign Name	Offer Name	Number of Offers Given	Unique Recipients	Response Transactions	Unique Responders
Mortgage Multi-Channel Acquisition Campaign	Low Cost Refinance DM	3,973	3,973	1,239	1,117
	Low Cost Refinance TM	2,696	2,696	875	787
Multi - Wave Campaign		18,611	18,243	312	67
Multi - Wave Campaign	15 Pct Off \$75 Direct Mail	300	300		
	Buy One Get One 50 Pct Off Direct Mail	300	300		
	Money Market Savings	18,011	18,011	312	67
Multi-Channel Category Cross-Sell		19,672	19,672	4,825	2,541
Multi-Channel Category Cross-Sell	Bath Dmail	1,552	1,552	1,013	417
	Bath Email	2,260	2,260	1,281	528
	Clearance Dmail	145	145	26	16
	Clearance Email	200	200	33	22
	Electronics Dmail	207	207	47	30
	Electronics Email	270	270	59	39
	Home Care Dmail	71	71	20	12
	Home Care Email	92	92	22	13
	Home Decor Dmail	4,190	4,190	676	446
	Home Decor Email	6,250	6,250	931	605
	Juniors Dmail	11	11		
	Juniors Email	8	8		
	Kitchen Dmail	62	62	9	6
	Kitchen Email	86	86	15	11

以下は、グローバルスタイルを使用するリストレポートです。

Campaign Name	Offer Name	Number of Offers Given	Unique Recipients	Response Transactions	Unique Responders
1. Retention for High Value Customer - eMail		12,756	12,756	3,376	3,130
1. Retention for High Value Customer - eMail	Phone Credit \$20 (English)	1,592	1,592	420	391
	Phone Credit \$20 (Spanish)	1,596	1,596	420	396
	PPV - 5 Free (English)	4,803	4,803	1,262	1,174
	PPV - 5 Free (Spanish)	4,763	4,763	1,266	1,170
2. Targeted Acquisition		5,000	5,000	1,601	1,606
2. Targeted Acquisition	Free Webcam High Speed Internet	2,500	2,500	432	426
	Gift Certificate Offer	2,500	2,500	1,169	653
3. Direct Mail Multi-Wave		8,337	8,337	1,929	1,834
3. Direct Mail Multi-Wave	New Phone Existing Cable - Inital	8,337	8,337	1,929	1,834
Association Campaigns		150	150	9	3
Association Campaigns	DM-20 pct off Books	25	25		
	DM-20 pct off Education	25	25	3	1
	DM-Pharma Donation Match	25	25		
	EM-20 pct off Books	25	25		
	EM-20 pct off Education	25	25	6	2
	EM-Pharma Donation Match	25	25		
Casino Marketing Campaign C000007023		886	886	10,423	1,894
Casino Marketing Campaign C000007023	Free Buffet Dinner Offer	443	443	47	37
	Free Gas Card Offer	443	443	10,376	1,879
Credit Card Acquisition		364	364	44	16
Credit Card Acquisition	Credit Card Offer	364	364	44	16
Customer Winback		3,856	3,856	396	149
Customer Winback	15 Pct Off On Purchase \$100+ DM	2,361	2,361	396	149
	20 Percent Off Any Single Item Offer	895	895		
Gaming Re-Activation C000007021		2,456	2,456	1,812	353
Gaming Re-Activation C000007021	Play Multipliers Offer	2,456	2,456	1,812	353
Home Equity Cross Sell		6,941	6,937	746	268
Home Equity Cross Sell	Fee based Home Equity Line of Credit	692	692	6	6

クロス集計レポートのスタイル

クロス集計レポートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

項目	スタイル
セル	透明背景: 1 px のシルバーの境界線
測定セル (左上)	1.5 pt の黒い線 (クロス集計の残りの部分からセルを分離するためのもの)
外部レベルの合計	グレイ/オフホワイトの背景

さらに新規リストレポートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のレポートと一致させてください。

- 1.5 pt の黒の境界線を使用して、測定値から集計を分離
- 1.5 の黒の境界線を使用して、論理列グループをグループ化
- 一般ガイドライン: 同じレポート内で列と行の両方を集計しないようにしてください。

以下は、グローバルスタイルを使用しないクロス集計レポートです。

Example Crosstab Report

	1		2		3		4		7		9	
	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients
	1,263	1,263	6,941	6,637	8,404	7,157	8,337	8,337				
Cross Sell	19,940	19,806	24,324	24,324					9,563	9,563		
Loyalty	3,856	3,856			4,414	4,414						
Retention		150			12,756	12,756						23,114
Acquisition					13,339	13,339	5,000	5,000				

以下は、グローバルスタイルを使用するクロス集計レポートで、列のグループを示すために 1.5 ピクセルの境界線が適用されています。

Example Crosstab Report														
	1		2		3		4		7		9		Total(Monthly)	
	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients
	1,263	1,263	6,941	6,637	8,404	7,157	8,337	8,337					44,442	42,622
Cross Sell	19,940	19,806	24,324	24,324					9,563	9,563			51,827	51,682
Loyalty	3,856	3,856			4,414	4,414					2,458	2,458	48,728	49,728
Retention		150			12,756	12,756			23,114	23,114			38,829	38,829
Acquisition					13,339	13,339	5,000	5,000			384	384	64,793	64,793

チャートのスタイル

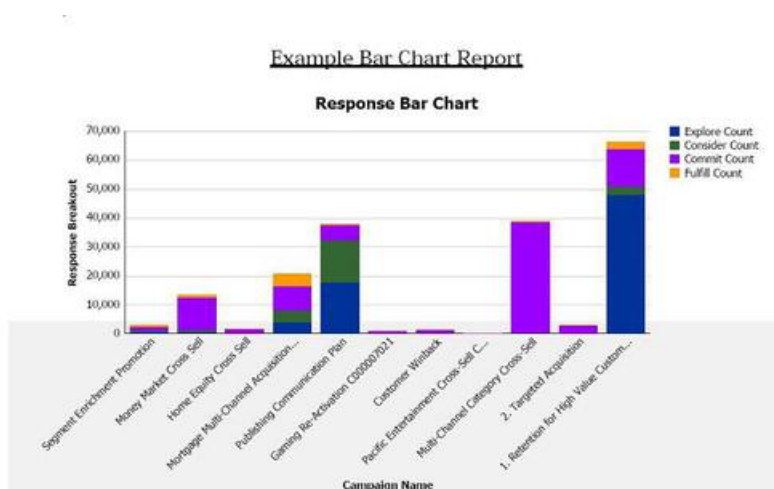
チャートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

項目	スタイル
チャート	1 pt のライトグレーの境界線
タイトルとラベル	10 ポイントの太字フォント

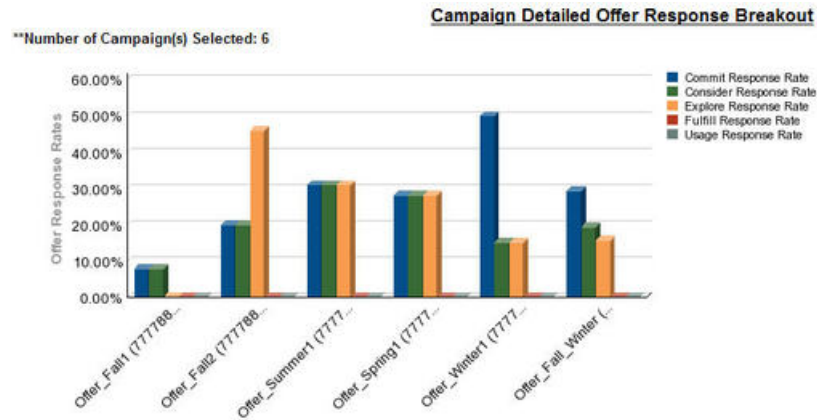
さらに新規チャートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のチャートレポートに一致させてください。

- レポートに複数のチャートがない限り、デフォルトの幅を使用します。単一のレポートに複数のチャートを組み込む場合は、チャート幅を 750px に設定します。
- グラデーションやカラーパレットを使用するには、485 ページの『グローバルレポートのスタイル』のテーブルからストリングをコピーして、XML レポート仕様に貼り付けます。
- 一般ガイドライン: 返されると予想されるデータに基づいてチャートタイプを選択します。
 - レポートが連続的なデータを取得すると保証できる場合にのみ、チャートタイプとして折れ線グラフを使用してください。
 - 複数の系列がある場合は、積み重ね棒グラフは、非積み重ね棒グラフより効果的です。
 - ベストプラクティスとして、パーセント合計が 100% に等しい場合にのみ、パーセントを使用してください。値が 100% に達していない場合、円グラフではユーザを混乱させる場合があります。
- チャートにある系列が 2 つだけであり、Y1 軸と Y2 軸の両方を表示する場合には、ベストプラクティスとして、色を軸ラベルの最初の 2 つのパレットの色に一致させる必要があります。

以下は、グローバルスタイルを使用しないチャートです。



以下は、グローバルスタイルを使用するチャートで、追加の書式設定が適用されています。



ダッシュボードレポートのスタイル

ダッシュボードレポートでは、手動書式設定をいくつか備えたグローバルスタイルを使用します。必ず、ダッシュボードポートレットに正しく収まるように、以下のガイドラインに従って、ダッシュボードに表示される形式のレポートにしてください。

項目	スタイル
背景色	背景色は常にグレイ (16 進値 F2F2F2) に設定してください。
サイズ	できる限り、パーセントを使用してサイズを指定します。パーセントのサイズ指定を使用できない場合は、サイズを幅 323 ピクセル、高さ 175 ピクセルに設定してください。
サブタイトル	左側にサブタイトルを置きます。
日付	右側に日付を置きます。
凡例	チャートの下の中央の凡例です。
線グラフの線	横線のみを表示します。縦線は表示しないでください。
軸線の色	軸線は常に黒に設定します。
グリッド線の色	グリッド線は常にグレイ (16 進値 D9D9D9) に設定します。
リスト (テーブル)	最大で 10 行を表示します。

付録 C. レポートおよびレポートスキーマ

次の方法で、Campaign レポートパッケージのレポートスキーマをカスタマイズすることができます。

- コンタクトまたはレスポンスメトリックを追加する
- カスタムのキャンペーン、オファー、またはセル属性を追加する
- レスポンスタイプを追加する
- パフォーマンスレポートのオーディエンスレベルを構成する
- 追加オーディエンスレベル用のレポートスキーマを作成する

以下の表では、Campaign レポートパッケージで提供されている個々の IBM Cognos 8 BI レポートを、それらをサポートするレポートスキーマにマップしています。

	キャン ペーン ビュー スキーマ	キャン ペーン カスタム 属性 スキーマ	キャン ペーン 実績 スキーマ	オファー 実績 スキーマ	キャン ペーン オファーの レスポンス の内訳	オファーの コンタクト ステータス の内訳
仮定オファー収支サマリレポート	X	X		X		
キャンペーン詳細オファーレスポンスの内訳	X		X		X	
オファーレスポンス内訳 (ダッシュボード版)	X		X		X	
オファー別キャンペーン収支サマリ (実績)	X	X	X			
キャンペーン投資収益率の比較	X	X	X			
月別キャンペーンオファー実績	X		X			
キャンペーン実績の比較	X		X			
キャンペーンレスポンス率の比較	X		X			

	キャン ペーン ビュー スキーマ	キャン ペーン カスタム 属性 スキーマ	キャン ペーン 実績 スキーマ	オファー 実績 スキーマ	キャン ペーン オファーの レスポンス の内訳	オファーの コンタクト ステータス の内訳
収益を伴う キャンペーン 実績の比較	X		X			
イニシアチ ブ別のキャン ペーン実績 の比較	X		X			
セル別のキャン ペーン 実績サマリ	X		X			
収益を伴う セル別キャン ペーン実績 サマリ	X		X			
セル別およ びイニシア チブ別のキャン ペーン 実績サマリ	X		X			
オファー別 のキャン ペーン実績サ マリ	X		X			
収益を伴う オファー別 キャンペーン 実績サマリ	X		X			
オファー別 キャンペーン 収益の比較	X		X			
キャン ペーンサマリ	X					
オファー キャン ペーン リスト	X					
オファー 実績メ トリック	X			X		
日別 オ ファー 実績	X			X		

	キャン ペーン ビュー スキーマ	キャン ペーン カスタム 属性 スキーマ	キャン ペーン 実績 スキーマ	オファー 実績 スキーマ	キャン ペーン オファーの レスポンス の内訳	オファーの コンタクト ステータス の内訳
過去 7 日 間のオファ ーレスポ ンス	X			X		
オファー実 績の比較	X			X		
オファーレ スポンス率 の比較	X			X		
キャンペー ン別のオファ ー実績サマ リ	X		X	X		

次のレポートでは、Campaign で提供されるカスタムのコンタクトおよびレスポンスメトリック属性の標準セットを使用します。

- 仮定オファー収支サマリ
- キャンペーン詳細オファーのレスポンスの内訳
- オファー別キャンペーン収支サマリ (実績)
- 収益を伴うキャンペーン実績の比較
- 収益を伴うセル別キャンペーン実績サマリ
- 収益を伴うオファー別キャンペーン実績サマリ

eMessageレポートおよびレポートスキーマ

eMessage レポートパッケージのレポートスキーマをカスタマイズすることはできません。

以下の表では、eMessage レポートパッケージで提供されている個々の IBM Cognos 8 BI レポートを、それらをサポートする Unica レポートスキーマにマップしています。

	メール配信パフォーマンススキーマ
メッセージ概要レポート	X
詳細リンクレポート	X
セル別詳細リンクレポート	X
詳細バウンスレポート	X

Interact レポートおよびレポートスキーマ

次の方法で、Interact レポートパッケージのレポートスキーマをカスタマイズすることができます。

- パフォーマンスレポートのカレンダーの時間枠を指定する
- パフォーマンスレポートのオーディエンスレベルを構成する
- 追加オーディエンスレベルの追加パフォーマンスレポートスキーマを作成する

以下の表では、Interact レポートパッケージで提供されている個々の IBM Cognos 8 BI レポートを、それらをサポートする IBM Unica レポートスキーマにマップしています。

	インタラクティブビュースキーマ	Interact パフォーマンスビュースキーマ	インタラクティブチャンネル / キャンペーン配置履歴	Interact ランタイムビュースキーマ	Interact ラーニングビュースキーマ
キャンペーン - インタラクティブチャンネル配置履歴	X		X		
キャンペーン - インタラクティブセルパフォーマンス	X	X		X	
キャンペーン - オファー別インタラクティブセルパフォーマンス	X	X		X	
キャンペーン - インタラクティブオファーパフォーマンス	X	X		X	
キャンペーン - セル別インタラクティブオファー実績	X	X		X	
キャンペーン - インタラクティブオファー学習の詳細	X				X
インタラクティブセルリフト分析	X	X		X	X

	インタラクティブビュースキーマ	Interact パフォーマンスビュースキーマ	インタラクティブチャンネル / キャンペーン配置履歴	Interact ランタイムビュースキーマ	Interact ラーニングビュースキーマ
インタラクティブチャンネル - チャンネル配置履歴	X		X		
インタラクティブチャンネル - チャンネルイベントアクティビティのサマリレポート	X			X	
インタラクティブチャンネル - チャンネル対話点パフォーマンスサマリ	X	X		X	
インタラクティブチャンネル - チャンネル処理ルールイベントリ	X				
インタラクティブセグメントリフト分析	X	X		X	
対話点パフォーマンス	X	X		X	

付録 D. IBM Unica フレームセットの再ブランド設定

IBM Unica HTML フレームセットにはほとんどの IBM Unica Marketing 製品ページが表示されますが、このフレームセットの外観をカスタマイズできます。カスタマーディングスタイルシートを編集して、独自のグラフィックスを指定することによって、ユーザインターフェースのイメージ、フォント、および色の多くは変更できます。IBM のロゴと配色を会社のロゴと配色でオーバーライドできるため、これは、再ブランド設定とよばれることがあります。

Marketing Platform のスタイルシートについて

IBM Unica HTML フレームセットは、unica.war ファイルの中の css ディレクトリの中にある多数のカスタマーディングスタイルシートによってフォーマットされます。これらのスタイルシートのいくつかは、css%theme ディレクトリの中の corporatetheme.css というスタイルシートをインポートします。デフォルトでは、この corporatetheme.css ファイルはブランクです。このブランクファイルを独自の色とイメージを使用するファイルと置き換えると、フレームセットの外観が変わります。

IBM Unica では、unica.war ファイルの css%theme%DEFAULT ディレクトリの中に、例となる corporatetheme.css ファイルも用意されています。このスタイルシート例には、カスタマイズ可能な指定がすべて含まれ、各指定がフレームセットのどの領域に影響を及ぼすのかを説明するコメントも含まれています。このセクションで説明されている方法で、このファイルを独自の変更を加えるためのテンプレートとして使用することができます。

イメージについて

使用できるイメージは、PNG、GIF、または JPEG のいずれかです。

ロゴイメージのサイズは、幅 473px、高さ 88px 以下にする必要があります。IBM Unica ロゴはこの寸法で、ナビゲーションペインで背景に重なる半透明の領域が含まれていますが、ユーザ独自のロゴはもっと小さくすることができます。サイズの異なるロゴイメージを使用する場合、background-position property をスタイルシートのロゴ指定 (body.navpane #header .inner) に追加することが必要な場合があります。

IBM Unica は、一部のボタンとアイコンにスプライトを使用しています。スプライトの使用により、サーバに送られる HTTP 要求の数が減り、フリッカーが発生する可能性も減らすことができます。IBM Unica がスプライトを使用する個所では、イメージの名前に _sprites が含まれています。これらのイメージを置き換える場合は、同じ寸法のスプライトを使用してください。それが、スタイルシートへの変更が最も少なく済むからです。スプライトについてあまり経験がない場合は、インターネットの情報を参照してください。

企業テーマを準備するには

1. Marketing Platform をインストール済みの場合、unica.war ファイルが含まれた EAR ファイルを作成してあるか、単純に unica.war ファイルをインストールしてある可能性があります。いずれの場合も、必要に応じてインストール済みファイルを解凍して、unica.war ファイルに含まれているファイルおよびディレクトリにアクセスします。
2. `css¥theme¥DEFAULT` ディレクトリの下位にある `corporatetheme.css` ファイルを見つけます。
3. 各スタイルシート指定が影響を及ぼすフレームワークの領域について詳しくは、`corporatetheme.css` ファイルの中のコメントを参照してください。
4. 独自のイメージを作成する際のガイドとして、`css¥theme¥img` ディレクトリ内のイメージを参照してください。
5. テーマを好みのグラフィックスプログラムで作成し、イメージ名、フォント、およびフォントと背景色の 16 進数指定をメモします。
6. `corporatetheme.css` ファイルを編集して、独自のフォント、色、およびイメージを使用できるようにします。

企業テーマを適用するには

1. 使用したいイメージ (例えば独自のロゴ、ボタン、アイコン) を、Marketing Platform がインストールされているマシンからアクセス可能なディレクトリに入れます。イメージをどこに配置するかを決定する際は、『企業テーマを準備するには』で説明されている方法で作成した、変更済みの `corporatetheme.css` ファイルを参照してください。
2. Marketing Platform が配置されている場合は、配置解除してください。
3. Marketing Platform をインストール済みの場合、unica.war ファイルが含まれた EAR ファイルを作成してあるか、unica.war ファイルをインストールしてある可能性があります。いずれの場合も、以下のようにしてください。
 - 」WAR ファイルまたは EAR ファイルのバックアップを作成し、そのバックアップを別の名前 (例えば `original_unica.war`) で保存します。こうすることで、必要な場合には変更をロールバックすることができます。
 - インストール済みのファイルを必要に応じて解凍して、unica.war に含まれているファイルおよびディレクトリにアクセスします。
4. 『企業テーマを準備するには』で説明されている方法で作成した変更済みの `corporatetheme.css` ファイルを、`css¥theme` ディレクトリに入れます。

これにより、すでにそこに入っているブランクの `corporatetheme.css` ファイルが上書きされます。
5. unica.war ファイル、および必要な場合にはそのファイルが含まれている EAR ファイルを再作成します。
6. WAR ファイルまたは EAR ファイルを配置します。
7. ブラウザのキャッシュを消去して、IBM Unica Marketing にログインします。

新規テーマが IBM フレームセットに表示されるはずですが。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒242-8502
神奈川県大和市下鶴間 1623 番 14 号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml の Copyright and trademark information をご覧ください。



Printed in Japan